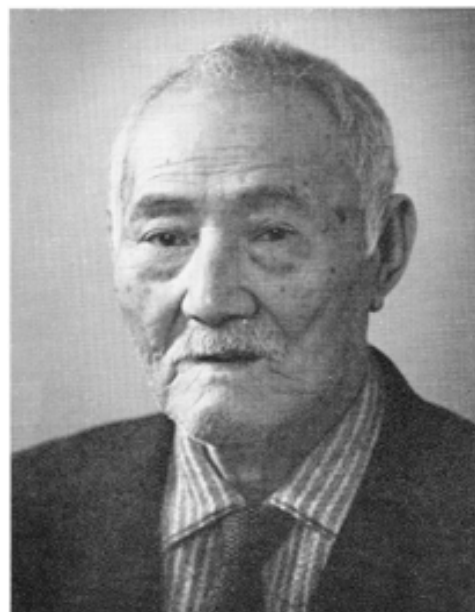


伯国日本移民の草分

鈴木貞次郎





目次

移民の見本	5
日本公館の人々	13
聖州巡礼	24
聖市滞留	52
珈琲園生活	59
移民収容所時代	289

裏表紙

序

『伯国日本移民の草分』再版について

『伯国日本移民の草分』は私がブラジルに上陸した一九〇六年三月末から翌々年五人の通訳が到着した迄のことを、一九三二年日本を訪問した時に書いたものである。最早二十六年も過ぎ去った時のことは云うが如く容易なものでなかった。しかし、私は色々な精神的な困難を征服して書いた。

例えば対水野竜観の如き百パーセントの転換をしていたが、渡伯当時の童心になって書いた如きである。

珈琲の生産はブラジル経済の基本である。然るに私の知る限りにおいて珈琲園の状態を書いた文献がない。こういう点から見ても『伯国日本移民の草分』はブラジルにおける日本人の歴史であると同時に聖州における珈琲園黄金時代を描写した唯一の文献ということも、あながち我田引水とけなす訳には行かないであろう。私の描写の不充分や文章の拙劣は見のがしてもらいたい。

山形県郷友会の人達が私のこの著書をよんで、再版すべきであるとその計画をすすめていた折、日本の永田力行会長から佐藤常蔵氏に『鈴木の手記』ブラジルの文献を出版されたい』とその助力を求めて来た。この二つの動きが合

体して、有志家の協力によって『伯国日本移民の草分』が再び日の目を見ることになったわけである。私は心からこれらの人達に感謝の意を表する。

終りに一言したいことは、私は著書に自分の肖像を入れること初版出版の序文の如く無意義であると思う。然るに郷友会の阿部弥門氏は『是非入れよ』といつてきかない。私の無用論は『根性曲りだ』という。止むなく私の写真を入れることにした。しかしこの場合は私の根性を曲げたのは阿部弥門氏である。私は私の根性通り写真を入れたくなかった。

一九六九年十月

鈴木南樹

日本移民の草分

鈴木貞次郎 著

移民の見本

一

ヴェノス・アイレスを出帆したロイド・ブラジレイロのS号がリオ・デ・ジャネイロ港に這入ったのは一九〇五年四月上旬の或る晴れ渡った日であった。[（注・〇六年か）](#)

天柱の様にそそり立ったポン・デ・アスーカルから烏帽子の形をして斜めに落ちかかった様なコルコバード山、それを背景としたボタ・フォーゴからゴベルナドル島に引いた一線は絵にもあらわし得ないと思わるるリオ港独特の自然美である。

ダーヴィンの旅行記を読んで見ると、コルコバート山頂には何時も雲影が漂流して森林も山形も、はっきりと視界につかむことは困難である。と云って雲とコルコバート山の配合に限りなき美を発見して居るが、今日は心ゆくばかり晴れてダーヴィンの感懐と違った朗らかな美しさを見せている。

眼を右舷に転ずれば鋸山を更に大きく一起伏を鋭突にした山脈が、美しい小さな市街ニテロイを前景として、奥へと高い波を打って準えている。その最も絶妙を極めたのはドラゴン山である。

ドラゴン！ それは竜と云う意味で、最も能く形と気分とをシンボルしたものである。あの巨大なる空想の産物たる竜がドラゴン山の寄峰が空を摩する天辺から雲霧を巻き起して、その奇怪なる爪と顔面とを現わしていると云つても何人も誇大な形容であると云うものがなからう。（ドラゴン山はオルゴン山の事、旅行中の一伯人の話に依る）見よ、今しも濃淡さまざまの墨を流した様な雲が溪谷から、渦巻いてドラゴン山は刻一刻にかくされてしまう。

感激し易い青年は

『まあ！何んと言う雄大な景色だろう、あの群青色に塗られた壁に、黄と線とを配したお寺のドーム、その前に並んで立つて居るのはパームだろう。パーム！パームだ！』

黒寂びた花崗岩とパームの緑との鮮明な影を落した静波の上には白帆を挙げた快走船も見えた。S号の甲板を心そはそはと往来しながら展望さるゝグアナバラ湾内の光景は全くこれ青年の心を捕捉し陶醉のまぼろしに引き入れる大きな魅力であつた。

『伯国に来てよかった』

心ひそかにかく叫んだ私の目には嬉しなみだがにじんでいた。

X

X

X

私の取った旅券は南米チリー行であった。横浜に智利総領事館が出来てから裏書を取ったのは私がイの一番であったと云うことで、既に日暮れ近くなっていたのに、総領事は病軀を押してビザをして呉れた。

勿論、私の胸には白雪を頂いたアンデス連峰をバックとした晴爽なチリーの大氣にあこがれの心で一ぱいであったが、それよりも只何となく地理書で読んで印象づけられた清澄なチチカカ湖畔があった。

茫々千里パンパの草原があった。洋々たるアマゾン河畔があつた。当時青年の心に冒険的夢想があつても確実な経済的打算がどうしてあり得よう、一言にして言えば詩的なそうした空想的なアドベンチュアがあつたというのが真相である。

横浜を出帆して、ペルーのカリヤオに直行するグレンファーク号は色々の意味に於て戦勝日本が海外に送り出すサムシングであつた、同乗者には東洋汽船の伊藤法学士がいた。北海道の山県農場を代表した北米帰りの青年がいた。西語科出の秀才の田中君がいた。

その中にブラジル移民契約の使命を帯びて行く水野竜氏の居った事が私の運命をして今日あらしむる機縁となつた

のである。水野さんと知り合いになったのはホノルルが見える筈だと言って退屈な船客達が望遠鏡を眼に当て、外洋の雲影を注視する頃であつた。

水野さんの頭髮はその頃から白かつた。短刈りの円い頭にまばらな白髪がまじっていたのは老成な或る重味を見せ、バラバラな胡麻塩の髭をちびりちびりと抜き取り乍らや、うつむき加減な顔をして、何事か一大事に逢着しながらも悠揚せまらずといった風な応対振りはある特色のある口辺の微笑と相待って、単純な青年の心を魅惑するに充分なるものがあつた。

二

TEE・タイムには、三等客であつたが私と田中君はいつも一等客の甲板に押しかけて行つてお茶の御馳走になつた。その日は夕立の降り去つた涼風を浴びつつ一等客は、皆その白い輕装を椅子の上に投げていた。

水野さんは、私をその傍近く呼んで、

『まあ、読んでごらん、氣に入ったらブラジルに行こうじゃないか』

例の有名な杉村公使のブラジル移民に関する報告書を渡してくれた。

『そうですね。私は必ずしもチリーと限つた訳でもあり

ませんから一つそれを読んで考えさせてもらいましょう』
『それがよい、君、チリーも悪いとは云わぬが、ブラジル
に行つて移民の先駆となるのも面白いじゃないか』

移民の先駆！ それは私に取つて一種の魅惑であつた。
私は船室に戻つてから一氣にこれを読破した。コーヒ樹と
云うものはどんなものであらう！ 絵にも写真にも見たこ
とのない私はしきりに夢想した。忽ち可愛らしい人間位な
丈の、草とも木ともつかない形に作り上げてしまった。所
謂その夢想の珈琲海にはバラの如き南欧の美人が働いて居
る。その内にはカルメンの様な女性がまじつて居ないとも
限るまい。清澄な水流にはありとあらゆる魚族が遊泳して
居る。紺碧な空に翻るパームの葉風、そこに鳴きしきる美
妙なる小鳥の群、緑や真紅な翼を持ったオーム族は昔話の
様に飛んでいよう。私に取つてそれ等の総ては一大絵画で
あり、一大詩篇でもあつた。

私の心は訳もなしに動いた。同室の田中君が、しきりに
移民屋に利用さるることの危険を説いても、耳を傾くるに
は私の熱は余りに高かつた。寧ろ田中君が伯国に行こうと
する私を阻止するのは嫉妬するのではあるまいかとさえ
思つた。

私が杉村公使の報告書を手にして水野さんの前に立った
のは、その翌くる日であつた。

『ここに書いてある半分の事実があつたとしても、珈琲園労

働は愉快ですなあ。私は貴方と一緒にブラジルへ参りましょう』

『それは君、公使の報告書だからね、うそはないよ』

水野さんは特有な微笑をして、口髭をぐっと一本ぬくと私の顔をまともに注視した。興奮した私の顔は火の様に燃えた。

『どうぞ連れて行って下さい』

軽く頭を下げた。

『実は私も一人の青年を同伴するつもりであったが、時日がないので残念なことをしたと思っていたのだが、君が行ってくれるならこの上のないことだ』

水野さんは自分の膝頭を二つ三つ軽く叩いて、

『それがよい、それがよい』

こう独言の様につぶやいた。

水野さんの腹を割って見れば、チリ迄の切符を持って居るこの青年を連れて行くのは、日本より種々な手当をして連れて行くよりは第一経済であり、何んだかこの青年は真面目で、馬鹿正直らしくも見える。体格も日本人としては十人並を下らない。労働者を同伴することは、伯国に着いた時、杉村公使の好感を買うことゝもなり、果してサンパウロ政府が公使の報告通り日本人にも旅費の補給をするか否やを此の青年に依って実験出来ると云う、四方八方甘いことづくめの期待を持っていたことで、実は私が果して智

利に留った方が幸福か、伯国に行った方が利益であるかと云う様なことは、てんで問題でなかったのである。

果然船内で私のブラジル行きに対し、

『鈴木は移民のサンプルになるんだ。』

と云う噂が高くなった。この噂の裏には、可愛そうに鈴木は移民屋の犠牲になるんだと云う意味がふくまれて居る。移民の見本！人間を物品扱いにする所に味がある。そうだ。俺は移民のサンプルになるんだ。移民会社の色々な暗い歴史が頭に浮かんで来る。一時恐怖の念がむらむらと拡がらないでもなかったが、水野さんの顔を見ると私の心はすぐ晴々しくなつて来る。水野さんは日蓮宗だ。慈悲善根を基調とする宗教家にそんなことはあり得べき筈がない。あの落着き払った態度から、ぼつりぼつりと話し出す言葉にうそはあるまい。こんな弁解が、何所からとなく湧いて来る。私は寧ろ憧れの国ブラジルに連れて行ってくれる水野さんを此の上もなく徳とし、若し聖州政府が七ポンドの旅費を支給するならば、先ず第一に水野さんに上げよう、尚不足あれば働いて返金すればよい。私は水野さんの奴隷ではないとひたすらに純心な心で明るい方面のみを見た。実際私は疑うよりも信ずることの心安さを感じたのである。

こうした二人は愈々目的の地を踏んで立ったのである。言語の不通は二人を意外な困難に逢着せしめた。荷物の関係から税関の所在を聞かなければならなかったが、二人共アルファンデイガと云うブラジル語を知っていない。私はカバンを開いて荷物を取り出し、是れを検査する、それから金を払うと云う様な手真似をして、

『カスタムハウス。カスタムハウス』

と叫んで、四辺の人に聞いても只げんな顔をするばかりで誰一人この東洋の旅人のコミックな仕様を理解するものがなかった。仕様ことなしに二人は埠頭からアベニード・セントラル（現今のアベニード・リオ・ブランコ）の方歩いて行った。その頃のアベニードは建設最中で、工事場のほこりと音響とは、末だ植えて間もない街路樹のパウ・ブラジルの細葉を慄ひ戦かして居た。路行く黒奴、店頭の果物、濃厚な色で塗った建物、気を遠くする様なむし暑さにも好奇心をそそる何物かがひそんでいた。とある四ツ角の両替屋らしい所で漸くロイド・ブラジレイロの事務所を聞き出し、そこで荷物は明日税関に出頭の上受取るべきことがやっと判明した。

かくて二人はペトロポリスの日本公使館を訪問する為、ニテロイ市行の船に乗った。

白い鷗はすいすいと海から船舷へ、船舷から空へ舞上がった。空の白い雲からは強烈な太陽の光線が放射されて

総てのものを如何にもトロピカルらしく見えた。

刻々に見えくる山よ椰子の木よ船は

汽笛を高く挙げたり

青あらしコルコバードを吹き落ちて

やがて小舟の白帆をはらむ

椰子の木に一点の星輝けば彼の山よ

水よ皆詩の国

日本公使館の人々

一

リオ・デ・ジャネイロの炎暑を体験した人には、ペトロポリスの溪谷は意外に涼しかった。

深緑に蔽われた山々は近く眉に迫って、曲折した溪谷には清流が潔よい音をたてゝ走って居た。日本公使館は公園から少し右へ這入って、山を後ろに余り見栄えのしない、旧式な建物であった。

杉村公使は決して新らしい型の外交官ではなかった。体格からして、角力取りなら十両取位いな値打の充分にふめる太った肉付で、身長もそれに応じて高かった。余り物数

はいわない。何処かに陰気な影のほめきながらどつしりと落付いて如何にも長者らしい風格があつた。無論外国語も堪能でなかつたろうし、外交官のなかに打ちまじつて折衝するが如きは、頗る不手得であつたらしいが、黙々として行わんとする所は生死を眼中に置かなかつた態度は、その象の様な柔和な眼に鋭く閃めいて居た。暫時対座して居るうちにも、流石に三浦公使の下に朝鮮王妃を葬つたあの劇的シーンが思い浮べられて、誰れにも『杉村さんは志士だわい』とうなずかれる所があつた。

公使夫人も能く肥満した方で、如何にも古い家庭に人となつたらしい面影を多量に持つて居た。こうした保守的な気分は令夫人の心にとありありとレフクソ(注・ママ)されて居た。モダンな堀口令夫人と余り反が合わなかつたのも無理のないことである。

館員としては只一人三浦荒次郎が居つた。三浦氏は日本人として申分のない、丈の高い人で、杉村公使にも負けな位に肥え太つて居た。平面な大きい顔には心持ち細い眼が光つて、くるつと巻いた余り多くもない髯は例え様なない愛嬌があつた。スペインに遊学した最初の人であつたという程、西語が得意で、フランス語に対する造詣も外務省中一二の指を屈する程であつたと仄聞して居る。而も非常に開放的な書生肌の人であつた。スペイン人を妻の様に愛して居つた位だから、寄席などへ這入つた時、カस्ता

ニョーラの踊りにつれて唄う。あの南国的な情緒に満ちた
艶な小唄などを聞くと、あれはこう、あゝという風に能く
説明してくれた、それ程ある方面の文芸的趣味も豊富らし
く見えた。

生れは埼玉であつたと思う。石川という杉村公使が朝鮮
時代の部下であつた役人の遺児で、其死に臨んで後見を託
されたという様なことを聞いた。二十二か三位の青年が家
庭労働をして居た。能く白い服を着ている顔の長い、才気
の勝つた青年であつた。早く父を失つた此不幸な人は何事
にも僻なしにはいられなかつたらしく、色々な不平は口癖
になつて居た。

お梅さんという体格のよい、色白な女中が居た。訳もな
し、下町風な感じのする女で、早く性的に目ざめたこの女
に、何所となしコケテルな魅惑を持つて居た。

館員ではないが、大平善太郎という海外練習生が寄宿し
て居た。丈のすらりとした美男子で杉村公使令夫人第一の
御氣に入りを鼻にかけている風は、如何にも高慢らしく、
きざな感じを与えた。

十二、三歳と、七、八歳位に見える公使令嬢が居た。姉
さんの方は才ばしつた方で、妹さんはまだほんの無邪氣一
方であつた。

もう一人秋葉という爺さんが居た。ハワイから英国船に乗ってサントスに上陸し、転々として遂にペトロポリスに來た。つい先頃迄公使館の料理人をして居たのであるが、その頃は頭の上にお菓子箱を載せて、チャルメラのような音をたてる笛を吹きながら、大道を売って歩いて居た。丈の低い頑健なこの爺さんは一日も女なしには居られない、而も若いほど夢中になるというのだから面白い。この秋葉さんと軽業師の万治さんが伯国に於ける日本人の先祖である。

秋葉さんははつきりと自分の歳も知らないし、伯国に何年居るかも知って居らない、此点は軽業師の万治さんも似て居る。藤崎商店が聖市に開業した翌年であつたが、万治さんがひよっこり店に這入って来て、如何にも苦しいような、たどたどしい口振りで、

『テンノウヘイカはまだ生きておいでですか？』

と訊ていた。それは何か遠い大昔のことでも思い出す様な風であつた。けれども万治さんも流石に日本人である。何よりも先ず天皇陛下の御安否を聞く所に争われない血がある。伊太利人を妻としたこの人は、もう現世には居ない。今田舎廻りをして歩く「シルコ・インペリアル」の「Manje Irmaes」と云うのは其の子供達である。話は一寸わき道へそれたが、これも在留民最初の頁に無くてならぬ一人である。(注・Manji か?)

秋葉さんは働いて貯めた金はいつの間にか若い女に何の執着もなくつぎ込んでしまう。生れ故郷の千葉県は相当な家で、其子は陸軍佐官であると云う様なことで、しきりに帰国をうながして来るが、

「日本に戻ったら、こんなにして若い女と遊んで居れんかな』

と云って笑った。実際秋葉さんの総ては『若い女』に尽きていた。若い女のご惑的な熱い血のうちにのみ、人間としての世界があつた。それが彼の故郷でもあり、妻子でもあり、彼自身でもあつた。そこに何の悔恨もなければ、哀愁もなかった。移植民の歴史は輝いた方面よりも寧ろこうした陰惨な暗い側に、人間的情味の捨て難い深さとみじめさがある。

是等の人々が当時の伯国日本公使館員であり、在留民の総てでもあつた。即ち男六人、女四人合計十人という数になる。

X

X

X

其頃は最早ブラジルには在留していなかったが、日本の対伯文化事蹟の上から忘るゝことの出来ない人がある。それは葡和、和葡両辞典の著者大武和三郎氏である。

大武さんの渡伯したのは恐らく軽業師の万治さんの次で、或は秋葉爺さんより早かつたのではないかと思う、何れにせよ此三人は渡伯先駆者の三尊である。

大武さんの生家は横浜で船舶に関係する商売をして居たので、海外への念をそゝる汽笛の音に早くから少なからず憧れを持っていた。明治二十三年ブラジル国軍艦アルミラント・バローゾ号がドン・アウグスト殿下を載せて横浜に入港した時、大武さんは英語に通達しているというので、しばしばアウグスト殿下の通弁として随伴した結果、ブラジル行を勧誘されたのである。今でこそ大武さんの頭は白くなっているが、童顔にして漆黒な頭髮にインテリな眼を輝かしていた十八才の青年は何んで、この絶好な機会を逸しよう。直ちに渡伯の決心をしたが、近親者の猛烈な反対にあつて、遂に果たさず、アルミラント・バローゾ号は錨を挙げて長崎へ出帆してしまつたのである。

しかしながら運命は君のために必ずしも絶望ではなかつた。熱心なる願望はついに両親の許す所となり、長崎に急行して漸くバローゾ艦上の人となることが出来た。

印度洋の航海も漸く終つてから、バタビヤ、アデン間に於て一大暴風に遭遇し、アデン島に難を避けたが、茲でブラジルに革命が起つて勝利を得たという飛電を受取つた。伯国が共和国の宣言をしたのは千八百八十九年十一月十五日の暁明であつたから、大武さん達のアデン港に着いたのは恐らく十二月前後であつた事が推定される。ドン・アウグスト殿下は当然亡命しなければならなかつた。船艦はクストーゾ・メロ將軍に依つて司令さるゝ事になつたが、ド

ン・アウグスト殿下と離別を余儀なくされた大武さんは尚ブラジルに行く意志を捨てなかった。

若し千八百八十九年の革命がなく、フラジル王国に平和な日がつづいたとせば、大武さんの運命にも自ら違った展開があり、日伯関係に余程興味ある将来が期待されたであらうと思う。

リオ・デ・ジャネイロ市に着いてから、英語が役立って大武さんはシップ・チャンドレをしていたメンデス商会（今日も実在）に這入って働いた。大変重宝がられて相当収入もあったが、何時迄そんなことをして居っても仕様がなかろうと、メーロ將軍始め同航海の青年士官達にすゝめられて海軍兵学校生徒となった。しかし数奇な運命は茲にも君を待ち受けていた。

それは君の保護者であった、クストーズ・デ・メーロ將軍に依って海軍のレボルソン（革命）が企てられた為で、大武さんも他の多くの海軍兵学校生徒と共に軍艦に收容されて、大砲の洗礼を受けなければならなかったからである。

しかしながら遂に海軍側に恵まれず、勝利の見込が全然なくなつて、陸地から包囲攻撃を受けた時、大武さんは、『君は日本人だから逃げてくれ、我々と一緒に苦難を受けさすのは気の毒だ。』

と同僚や先輩から口説かれて、余儀なく暗夜に乘じ船艦を脱して再びメンデス商会に舞い戻った。それから船会社

に入り機関手となったが、後にすゝめられて矢張りメンデス商会関係のサン・パウロ州リベロン・プレット市近くのシュンブー（駅名は大武氏の直話なるも、現在の何駅に当るや判明せず）の珈琲園に働いた。仕事はベネフィツシオ・デ・カフェ（珈琲精撰工場）の機関部を担当したのであったが、いること半年日清戦争勃発の報に接し、急に帰心を起こし、遂に英国荷物船のボーイとなり濠州に去ったのは千八百九十四年であつた。

爾来大武さんは日本の対伯関係のあらゆる運動に蔭の人として活躍している。

三

公使館に着いて、暫時休憩すると、水野さんはホテルへ案内された。私へは、ホテルなどに宿って、無用の入費をかけるなど言つて、公使は館の裏家の一室に寢床を作らしてくれた。世馴れない私は、仕様事なしに事務室の掃除など手伝った。杉村公使は黙々として石像の如く見えた。三浦通訳官はさす様な口調で、時々伯国の事情など話してくれた。私は妙に気になる口髯を見つめながら、

『親切な人だな』

と思つた。石川君はコッペイロの外に令嬢達に家庭教師らしい任務を負担していた。

『日本から来る時は、家庭教師と云う約束だったんだが』
とこぼしながら声を落して

『鈴木君、あの生意気な大平が悪いんだよ、彼奴が善いこと、悪いこと、何んでも告口を仕やがるんだナ、彼奴が来てから段々私の立場が悪くなったんだ。君も彼奴に気をつけないととんだ眼に会うぜ』

石川君は如何にも口惜しそうに拳を握って力んだ。しかし石川君は何と云っても一個の傭人にしか過ぎない。これに反して大平君は令夫人を笠に着る御客人である。石川君に勝味がない丈、腹癒せは散々な蔭口となった。暗闘はその見る眼にも随分はげしかった。

公使令夫人は親切な人であった。私の様な青年にさへ、只一人で御案内のそぞろ歩きの労をいとわなかった程思いやりのよいお方であった。況んや御氣に入りの大平君には、可成り親切な世話をしていた。その親切が一種の誤解を招く様な事がなかったとも限らない。いやな噂話は誰の口からとなしに洩れた。妙な暗いアトモスフーラが公使館内に醸されていた。

四

日本語の解らない外人コックの眼より外ない公使館の家庭は石川君のお梅さんとのロマンスの晴やかな舞台であつ

た。突然飛び込んだ私の内気なおぼこ心を見抜いた石川君は、別に遠慮もなしにふざけて見せた。時には秋葉爺さんもからんだ三角関係は、紅葉の『夏木立』などにもられたユーモアな劇的場面もあった。令嬢達の遊び相手に飼われていた白い山羊が、時折り、

『ウメー、ウメー』

屯狂な声をふり上げて、何んだか、ものを諷刺でもする様な興味をそゝった。

気取った青年大平君と私とが令嬢達の希望とあつて、一人一脚(ママ)の競走などあつて、あわただしいペトロポリスの十日間は過ぎ去った。三浦通訳官の先導で愈々サン・パウロ州に出発する日が来た。

お別れのお茶には、私の好きなパンデローが、山の様に出ていた。

『お菓子なら、鈴木君はいくらでも食べるよ』

水野さんは私にたべさせた 老婆心か、そんなことを云って笑った。それでも私の遠慮勝な性質は、思うまゝに其パンデローを頬張る勇気が出なかった。私はそつと杉村公使を見上げた。私には是非公使に云つて置きたいことがある筈だ。

『公使』

私は自分の声の小さいのに驚いた。

『私は御承知の通りペルーから水野さんの金で、こちら

に来ましたが、若し出来ることならば三浦さんの御骨折でサンパウロ州から七ポンドの補助金を受取って、それを水野さんに上げたいと思っています』

やゝ慄ひを帯びた、私の声が終りもしない内に、杉村公使はアハ、、と高笑した。

『君そんな心配は無用じゃ。移民会社は君に対して、日本からの旅費も手当も出すのが正当だぞ。一移民を聖州に送ったといって、其の旅費を請求する様な、そんなけちな考えで移民契約が出来るものじゃない』

私は充分不服であつたが、杉村公使の嚴然たる声は、重石の様に私の心を圧したので、だまつてしまった。

公使はわざわざ玄関口迄送つて来た、三浦さんと何か打ち合せらしい会話をしていたが、私へは、

『日本移民のため、しっかりやってくれ』

命令するものゝ様な、重い響きがあつた。私はだまつて頭を下げた。

馬車に乗らんとして、一寸後ろをふり向くと、公使は端然として、まだもとの位置に立っていた。私の眼には一種の感激の涙があふれ出た。

『公使、御安心なさって下さい、私は私の最善をつくします』

私の心のどこやらで、こんな叫びを發するのを聞いた。

大なる山黒々と聳えつゝ万象の灯谷
々にみつ
コパカバナ波打つ際をそゞろ行く月
夜の吾にも女あれかし
ガービアの山の狭霧の晴るゝまゝ椰
子の並木に来鳴く鳥あり

聖州巡視

一

千九百六年頃のサン・パウロ市は人口漸く三十万を突破した位で、市街の至る所にポルトガル人の無理想を暴露していた。ラルゴ・デ・ミゼルコルジアからキンチーノ・ボカユバに出る所（現今マタラゾ会社の所在地裏）はうす暗い長屋建の果物店がならんでいた。ラルゴ・ダ・セのカテドラルの周囲は総て、コロニア時代の面影が、あの古ぼけた一階建のせゝこましい家屋のうちに溢れていた。クー・ダ・マイ（注・お袋の尻）とか、プータ・ケ・パレオなんというグロテスクな仮名を持った夜明しの酒場があつて、そこには能くトロバドルなどを唄う伊太利人の酔狂者などがあつた。現今のラルゴ・ド・コレオには小さな市場が

あつて、その前に聖市第一の劇場――トタン張りの木造の――ポリテアマ座があつた。

三階建は十指を屈するに足らなかつたろう。市第一のホテルは、ロテツセリー・スボルトマンといつて、現今のポルサ（サン・ベント街）の建物になっている所で、裏の方にまだ球突場として残っているのが、当時華麗を誇る食堂であつた。

私共の宿つた『グランデ・ホテル』は、サン・ベント街からリベロ・バダロ街に出るトラベツサの角にあつた。横町に向いた私の室からは赤い火がちらちらして、顔を白く塗つた女の艶な微笑が見えた。この一区画は、そうした雰囲気の漂ふ街路らしかった。水野さんと三浦さんはある夜何かこそこそと打ちひそめて出て行つたが、窓に寄りそつて、深い霧にほのめく、うす青いガス燈を物珍らし氣に見ていた私の眼前を横切る二人の影があつた。私は見てならないものを見た様な氣がして、窓を閉めた。何故かまだドンゼーラ（童貞）であつた私の胸はドツドツと波打つていた。私は顔を赤くして、じゅつとくすぐつたい様な甘い考えにふけた。

しばらくして戻つて来た物音を聞いた私は、飛び立つ様に水野さんの室をノックした。好奇心そのものゝ様な私の眼を見た水野さんは、

『ハ、君、あゝして置かないとね』

何か独合点したらしいことを云ってあのまばらな白髪頭をつるりと撫でながら笑った。善悪は兎もあれ老成ぶった日蓮信者の水野さんにも暖い血が流れていた。

『役人なんて君、あれで三浦君もなかなかむずかしい所があるんだぜ』

申訳らしい、こんなことも云った。私は只まじまじと水野さんの顔を見ていた。

X

X

X

水野さんの移民契約に対する運動は、順調に進展しつつあるらしかった。

ジョルジ・チビリツサが州長官で、カルロス・ボテーリヨが州農務長官であつた。丁度移民問題で、伊太利が伯国行契約移民の渡航を禁止したるに對し、剛腹なボテーリヨはこれに応戦して、地中海沿岸から移民を招致したが失敗に歸し、苦い経験をなめつゝある時であつた。

聖州珈琲園の労働問題は、奴隷解放以来休止なき問題であつた。十九世紀末に於て燃え上つた珈琲黄金時代は、聖州の珈琲園を驚く程拡大してしまつた。是れを耕転するに要する労力を支那にさへ求め様とした。日本移民問題も大越公使以来の懸案で、若し総明な意見が、大越公使にあつたとせば、あんな杜撰な報告を外務省に送って、日本移民を阻止する様な愚挙に出でなかつたであらう。

移民契約の当事者として、先づカルロス・ポテーリヨの

義弟ドクトル・ベント・ヴェノ氏（カルロス・カンポス州統領時代の司法長官）とする事となった。その後ろには、之も義兄弟のドクトル・ヒルミヤノ・ピント氏の居ったことは勿論である。何にしるボテーリョ家は、コンデ・ド・ピニャールと云ってサン・カルロス市の開拓者であり、リオ・クラーク鉄道（現在のパウリスタ）の如き資本の大部分は実にピニャール家の出資に依って、布設せられたのである。リベロン・プレット地方の開拓者たるジュンケーラ家はどっちかと云へば田舎者の成り上りであるが、ピニャール家は錚々たる王党に属する名族である。

二

州政府側では日本移民契約に対する協議の時間を要し、水野氏側は珈琲園の实地視察なかるべからずと云うことで、当時移民収容所のコレトール・オフィシアルであった、あのお人好しのエルクラノ氏を案内者として内奥地へ向って出発した。

ジュンジャイ市迄は山のうねりの急激な、雑草の茫々たる途谷を辿って行くがカンビーナス市に近づくに従ってゆるやかな傾斜した丘陵の起伏となって来る。赤炉瓦を露出したままの停車場の建物も、田舎の都会にふさわしい落付があつてよい。ところどころにそゝり立ったパルメーラ・

レアールに風が見えて、カトリック寺の鐘の音がまだ晴れきらぬ霧のなかから流れて来る。カンビーナス市ほど豊かに聖州田園の美しさを持った所は少ない。

モジアナ線へ乗り換えを待つ間停車場構内のバーに入って珈琲を飲んだ。エルクラノ氏が

『どうぞ何んでも御遠慮なしに御取り下さい』

サンドウィッチや御菓子などをすゝめてくれた。

『君、遠慮はいらんよ。皆政府持ちだからね。』

三浦さんは笑って私の顔を見た。

列車は砂利を敷いて居ないモジアナ線を砂煙りを揚げて走った。車窓から始めて見る珈琲園は赤、黄、青など色さまざまの玉をつゞって珍しいものの限りであった。枯れかかった唐黍畑や牛馬の放牧されて居る広い牧場などにパイネーラの花がさくらの様に咲いて居た。

サンタ・ヴィルヂアナ駅（現今のバルデアソン駅）に着いたのは午後二時過ぎであった。プラド一家のヴィルヂアナ未亡人の所有で聖州有数の珈琲園の一つである。駅名と同じ名の農場から支配人が迎へに来て居た。私共は所謂テーラ・ロツシヤの道を馬車に乗って走らした。

農場主の住宅にはユーカリ樹が高く聳えて、庭にはプリマヴェーラがさつき色に咲きはこつていた。

平坦な広々とした珈琲乾燥場が邸宅の前面に展開されて居た。其端れに近く、鐘を釣った監督の家につづいて移民小屋は幾十となく一線を引いて並んで居た。

馬車で運んで来た珈琲はセメントを塗った溜め池に袋からぞろぞろと投げ入れられて美しい色彩を水の上に漂はした。デスプロパドール（脱皮場）は間断なくこれを巻き上げて、表皮のむけた白い色の粒実が乾燥場に流し出された。

乾燥場には脱皮した珈琲の実と皮のまゝの黒い珈琲実とが区別されて、その広々とした幾十となく区画された煉瓦作りの平面の上に広げられた。労働者は珈琲実の上を長さ一尺三寸巾六寸位の板に長い棒を通したものを胸の所へ当て、押しならして居た。それが規則正しい一種の畝をなして波のうねりの様に見えた。

眼まぐるしい珈琲園視察の第一日はまたたく間に過ぎた。

『あれ位の労働なら、おれにも出来る、ナーニ負けはしない』

こんな自問自答の夢もあった。鐘の音がゆるやかに起つた。

『朝にふさわしい音だな』

と思うまもなく、調子が段々迫って来て火事場の様な乱打になった。私はむつくと起きて乾燥場に走り出た。ほの暗いなかを人影が動いて、咳払いの音がする。冷やかな東風が吹いて満天の朝星が落ちんばかりにまたたいて居た。

『もう朝の仕事が始まったんだ』

私は感慨無量の思ひで立って居た。朝の光りは夢の様に広がって、刻一刻と乾燥場を明るくして来た。

X

X

X

朝のミーストで出発することになったので、支配人は私共を珈琲園内の線路に案内した。そこで立話をしていると轟々と汽車の音がしてきた。支配人は汽車を遠見に手を高くさし上げた。汽車は忽ち停車場でもない珈琲園のたぐなかに停車した。汽車に乗った私共は誰からともなし、

『手を挙げると汽車が何んでもない所に止まるなんて、まるで信じられない話ですな』

『聖州はファゼンデール万能だからさ』

『とにかくえらいもんだ』

こんな会話があのがたびしがたびしと動揺する汽車のなかで、限らない興味を以って談られた。

四

チビリツサ駅に着くと、そこにはヒルミアノ・ピント氏

が支配人メネゴニ氏を従へて待つて居たトレンジンニヨ（軽鉄）に乗った私共は枝もたわわに豊熟した珈琲樹の間をすれすれに走った。

農場の中心地をシュンボラズと云つて、規模の大なることサンタ・ヴィルジャナの比でなかった。

ポニヤール家の遺産を継承した子供達の合資組織になつて居てドクトル・ヒルミヤノ氏は実にそのプレシデンテであつた。珈琲樹数は二百万本、乾燥場、機械工場、珈琲精選場など相連なつて、絶間なき機械の音響と立ち登る煙突の煙とは、如何にも農場の大きさを語つて居た。

朝飯を終まふと、私共は再び用意された小汽車に乗つて農場をかけ廻つた。シュンボラズ部落の珈琲を摘んで居る場所は丁度軽便鉄道線路に間近くあつたので、そこにも案内された。

始めて手にふれて見る珈琲樹、つやつやと黒味を帯んだ緑、珊瑚にも勝る真紅色をした実、秋天五月の清澄な太陽を一杯に浴びて枝折れそうになっている樹姿、それが傾斜した地面に見る限りはるばると展開されて居る。

梯子の上に登つて実をこき下ろす男があれば、地につく枝をしだく子供もある。美しき更紗布で頭を包んで居るのは若い娘であろう。南国らしい唄がどこからとなし流れて来る。

『鈴木君、きれいなのが居るぞ。』

三浦さんは笑ひながら私を招いた。そこにはヒルミヤノ氏が立って居た。伊太利人の大家族と会話しながら、自ら珈琲の枝をしごいて見せて

『この通りですから、訳はありません。』

とても云って居るらしかった。水野さんも二枝三枝摘み落して

『成程これは訳ない。日本人はこんな小手先の仕事なら伊太利人なんどに負けやしない』

手に一杯の珈琲のつぶらな赤い実を見つめながら。

『第一此きれいなこと、まるでお姫様の仕事にもありそうだ。』

『これ丈実って居るなら、おれだって一日三俵や四俵は摘んで見せる。』

三浦さんはこんな合槌を打った。私共の満足気な様子を見ると、ヒルミヤノ氏も其眼尻に特有な皺をよせて喜んだ。

五

事務所は乾燥場につゞいた高台にあった。煉瓦を敷きつめた前庭から、シユンボラーズの盆地がはるばると遠く扇を開いて居る様に展開されて居た。

ランプが灯される頃になると私共一行に主人ヒルミヤノ

氏もくつろいだ夕飯後の軽い気分で此前庭に立った。簿記係、書記支配人メネゴニ氏なども打揃って賑やかな会話が始まった。葡語の解らない私は、独りやゝ離れて、しんみりと点々とした移民家屋の燈火のまたゝきを見つめながら当然自分の前に落ちて来る労働生活を思い浮べた。そこには何かしら輝いた希望があつた。恐怖に似たたよりなさもあつた。

まもなく馬のいなゝきや蹄の音がして各部落から監督達が集まつて来た。

それは其の日に収穫した各家族の珈琲俵数を報告するのと、翌日に対する仕事の命令を支配人から受取る為めである。

簿記係が珈琲の記帳を始めると、ヒルミヤノ氏は私共一行を事務室に招いた。監督の珈琲受取記入帳に依つて其の日其の日の各家族の珈琲収穫数を實際に示してくれた。三浦さんはヒルミヤノ氏や監督達の云うことを丁寧に通訳してくれた。

うなずき顔に合点々々して居た水野さんは監督の記帳を手にして、或家族の一日の珈琲収穫数が三十八俵と云うのを発見すると、

『ほう！ これはたいしたもんですな！』

『一俵一ミル五百レースの収穫手数料として五十七ミルレースだから収穫を終った時には素晴らしい計算になりま

すね』

三浦さんは私共にこう云ひながら、ヒルミヤノ氏をふり向いて、何か耳にささやいた。すると簿記係が数冊の移民の通帳（カデルネータ）を持って来て昨年度の総勘定の数字を示してくれた。少なきは一コント位から多きは五コント位迄の差引残高が明白に水野さんに挙示（ママ）された。『そうすると三浦さん日本金にしていくら位になりますかな』

『一コントと云うと日本金に換算して七百元、五コントスならざっと三千四百円を少しきれますね』

『三千四百円ですか？』

水野さんは低い声でこう云って眼をみはった。

『外に唐黍だ、豆だ、と云う様な間作物、豚、鶏などの売却に依る副収入があると云って居りますよ』

三浦さんはこんなことも云った。

六

水野さんは只管に満足した面持で、どうしてこんな労働の天国が今日迄日本人に忘れられて居たのだろうか？ ハワイだ、ペルーだ、南洋だ、満州だと云って、ブラジルある事を知らなかった事は一種の奇蹟である。ブラジル移民によって日本の人口過剰と米の問題が始めて解決される。水

野竜氏は伯国出発に当って、この二問題と移民とを結びつけたパンフレットを配布して来たのである、と云う様なことを例の重々しい口調で語った。

此の場合、水野さんは其のカデルネツタの持主が幾人より構成されて居る家族であろう？ とか、此の農場に於ける幾百家族中の最も裕福な二、三例に過ぎないのではあるまい？ と云う様な余計な詮索をする必要を認めなかったであろう。三浦さんの前で余りに深く追求して珈琲移民の前途に傷をつける様な愚を好まなかったので、そこは万事左様御尤もお茶を濁したのではないかと云う様な疑ひはちと穿ち過ぎた話である。水野さんと云う人の頭は、左様に計算的でなく法華宗だと自称する丈、只太鼓をドンドンと叩くに適した人で、又この太鼓が甘く当ってブラジルに於ける日本移民の今日をなしたのである。成るべく好い所丈を見て悪い所は知らん顔をする位の覚悟がなければ、移民事業などは出来るものではない。実際水野さんの珈琲園視察は、あぶないものに障るまい障るまいとする様なほんの外觀ばかりの一瞥に過ぎなかった。あの移民小屋を形容して病院の如しと云ったのは必らずしも水野さんはウソを云ったのではなく、たまたま白く塗られた移民小屋を外面から恐る恐る覗いて、そう思った事を卒直に云った迄であらう。これを軽率だと云うことは出来るかも知れないが、水野さんは移民を謀かる様な考へのなかったことは、

私の信じて疑わない所である。

『移民の収入』についてやや確信を得た水野さんの顔はのんびりして見えた。前夜に支配人メネゴニ氏と打ち合せして居た監督達は

『ボーア・ノイテ』

『アテ・アマニヤン』

口々に私共にも丁寧に挨拶して下りて行った。頑丈な髭のこい男、半黒の丈の高い男などが特に私の眼についた。何れも腰にはピストルを携げて居た。その或者はファコン（山刀）を帯んで居たのは如何にも物々しい感じを起さした。

『鈴木君、君もあんなになるんだぜ』

水野さんは後ろから声を掛けた。私はだまって監督達の馬に乗るのを、ほの暗い星の光りに透して見た。

七

チビリツサ駅からリベロン・プレット市迄の沿線は、杉村公使の所謂珈琲海の連続であった。うねうねと何所迄も珈琲を植えた小丘が起伏して地平線の彼方に、一抹の白雲が悠々と流れて居る光景は水彩画そのものにも見られない爽清な趣きがあった。クラビンニヨス駅から汽車はやゝ低地を走って、ヴェノポリス農場のマンガ樹の並木は始めて

見る旅人の好奇心をそゝった。

珈琲産地のメッカ、リベロン・プレット駅前の広場には、蜜柑、バナナ、パイナップル等を売る大道商人が居って何となし熱帯らしい気分があふれて居た。物見高い市民は、電報で露国に勝った倭小なジャボネースの一行が通ると云うことを知って、停車場は勿論、私共の通る道々に集まって来て、進んで言葉をかけるものもあれば、数人づゝ停立しつゝ何かしら黄色をした醜いこの東洋の旅人の噂話しをして居るらしく見えた。

塵埃によごれた汽車がリベロン・プレートを出発して間もなくであつた。

『あれが珈琲王の農場です』

エルクラノ氏の声に水野さんも車窓を開けて展望した。小さな流れを越えて小丘を背景とした、大きな建物は名も知らない樹木の間に見えた。乾燥場、珈琲園、あれが裸一貫から叩き上げたキング・オブ・コッヒーの農場であるかと思うと、私の心は躍る様に波打った。若し運命の神が幸ひするならば私だつて第二のシュミットになれない事もあるまいと云う様な考へが、どこからとなし芽を吹いて来る。

珈琲王フランシスコ・シュミット氏は一八五〇年レーノの左岸ロストロヘンに生れ、八歳にして父と共に渡伯し、最初に働いたのがサンカルロスのルイス・アントニオ・

ソーザ・バーロスの珈琲園で後にピラスヌンガへ転じ茲で結婚した。それからデスカルバードに移り小商を始め千八百八十六年始めて農場をかう位の資本を得た。リベイロン・プレットに来て現在のモンテ・アレグレ農場を買ったのは一八九〇年で、これには幾多のローマンチックなエピソードがある。

珈琲王の最も盛んな時は其所有樹数一千六百万本、精選珈琲実に二十七万袋に及んだと云うことである。

八

こんな話をエルクラノから聞いて居る内に汽車はゾーモン農場に着いた。秋らしい太陽が夕焼けて、中天に迄真紅な色を染めていた。停車場から竹叢の並木道を登って総支配人とも会社長とも云うべき英人ダビ氏の邸宅の前に出た時の快感を今でも覚えている。

ゾーモン農場は聖州第一の広大な珈琲園で、樹数四百万と称していた。(其实三百万本) 珈琲樹を植えている面積をざっと計算すると日本の町歩にして六千六百六十五町歩となる。一段歩や一畝歩を単位としていた日本人の頭に、一寸胆玉をドキンとさせたものがある。

この農場はあの飛行機発明で有名なサントス・ゾーモンの父に当るエンリケ・ゾーモンに依って開拓されたもので

ある。

ジュンケーラ家の祖父達が、狩人としてピーラ・ボンフィンの奥の森林地帯にアンタやケシャードや鹿を打つ片手間に盆大(ママ)の畠を開いて珈琲を植え付け、マルチンニョ・プラードが、モジー・グワスー河畔の蛮煙瘴雨と戦ってサンマルチンニョ、グアタパラ等の農場の経営に苦心したと同じ頃、マルチンニョ・プラードとはパルト河を境し、ジュンケーラ一族とは山頂を隣りして、鬱然たる森林に斧を入れ始めたのである。

あの十九世紀の珈琲黄金時代の波に眩惑された、カンピナス、リオ・クラード、デスカルバードなどの地方から『リベロン・プレート！ リベロン・プレート！』

燃ゆる様な眼で北方の雲影を仰望したアドベンツラの群れの内には珈琲王フランシスコ・シュミットなどもあった。然しこの時には既に早くリベロン・プレットのパイオニア達は十頭二十頭と云うブーロを並べたトロップーロ、鈴の音や、キーキーと如何にも優長な原始的な音響を起す牛車の群れを追うて鉄道の終点へ終点へと、プレシオーゾな彼の所謂「Ouron Brasileiro」を運搬しつゝあつたのである。

九

停車場のあるゾーモン農場の中央部には雑貨店、薬店、

料理屋など軒を並べて、宛然小さな町をなしていた。

農場総支配人は如何にも英人らしい鈍重な足取りで、私共一行に乾燥場、器械工場などを見せてから日本移民が来た場合に收容すべき予定のコロニアに案内した。

そこは乾燥場から少し奥へユーカリ樹などの植付けている道を行きつくした所にあつた。珈琲を受持つている移民も住んでいたが、工場に働いた居る人達なども雑居していた。窓枠を台にして、ブリキ罐に植えたアベンカ（日本のしのぶの一種）や羊齒属の植物などの緑のうちに鳳仙花の紅深く咲いているのが眼に立った。南欧人らしい色の白い女達は皆戸口に出て私達を物珍らしそうに眺めていた。

『ポン・ジョルノ』

『プエノス・デアス』

走り出てこんな挨拶をする子供などもあつた。総支配人は数人の大工、佐官などが、建て増し工事や修繕などに働いている所に来ると

『ここです。これを皆新しくして收容したいと思つています』

成程この辺はゾーモン農場でも一番能く設備が行き届いている様に見えた。

長屋建の小屋には方四メートルス位の室が二箇に煮焚きに使用するコジンニヤ（台所）が附属されてそこからキンタール（裏の空地）へ出る様になっている。こう言う様式

の室を持った二家族分を一軒とした長屋が列をなして何十となく並んでいるのが、所謂珈琲農場のコロニア（移民小屋）なるものである。飲料水は水道式になって十家族に向って一箇位の割合で共同水管が設備されているが、何所にも便所というものが見当らない。『そうすると、三浦さん、ちときたない話だが移民は何処に大小便をする事になるんですか』

水野さんは如何にも他聞をはぐかる様な様子をしながらけぐんな顔をした。三浦さんは総支配人と二三語話し会うとカラカラと大笑しながら、

『それはね、皆裏の草叢のなかにするんだそう。穴を掘ってもよいがそれよりも野糞の方が衛生的だといっていますよ』

『なぜですか、それは一寸困りましたな』

『野糞すると、其後から豚がやって来て皆食べてしまうから、糞壺にためるよりキレイになって衛生的だというんだよ』

こういうと三浦さんは又笑った

『つまり豚が消毒役をつとめる訳ですな』

水野さんも笑った。

『若い女などが失敬している所へ豚がウーウーやって来るなどは、一寸滑稽な移民情緒ですな』

私もこんなことをいって笑った。総支配人もエルクラノ

氏も私共の会話を想像して笑った。しばらくは皆笑った。

十

ゾーモンからサン・マルチンニヨ農場迄は馬車に乗った。それは『トロリ』といって馭者台の後ろに乗客の台があるのは普通の馬車に変わりはないが、無蓋で腰掛けの手摺はほんの一尺位より外ない。木の株にでも衝突仕様ものなら天外に跳ね飛ばされる様な粗末千万な構造なのである。自動車の発達した今日でも、まだあんな馬車が聖州の何所かの片すみに動いているかも知れない。

パルド河の水は秋の冷たさにも、混濁した気味悪い色を湛へていた。伐り残された木立のなかにこんもりと繁ったパイネラの大木が初期の美術院派の絵そのものを見る様にヌーボー式な樹勢が面白かった。風もないのに其うす桃色の大きな花片がはらはらとパルド河の淀みの水泡の上に散ってくるくと艶な色彩の渦を巻いた。

河添の森は余り長くなかった。馬車は左右に限りなく開けた野をかたびしと屯狂な音を立てて走った女の髪の毛を線にした様な細長いバルバ・デ・ボーデという草のなびきに風の渡るのが見える。余り離れない所から美しい鳥の鳴声がして来る。

『あれは何という鳥ですか？』

頗る怪しい葡語で聞くと、

『ペルジーデスです』

エルクラノ氏はこういつて、大きな声を立てた。突然タバたと雉子のとぶ様な音を立てて鶏位な鳥が球を投げた様な形をして其重たい身体を草の上一丈ばかりの高さをとんで行った。

『やあ！、三浦さんペルジーデスとはなんのことですか？』

こういう内にも私は眼を草の上はるかに放った。

『それは日本の鶉のことよ』

『あれがウズラ？ 余り大き過ぎる様ですね』

川浦さんはエルクラノ氏と其巧妙なスペイン語でしばらく話していたが、ブラジルの鶉は三種類あつて日本にいる種類よりはペルジーデスもコドルニースも大きいこと、只エンニャンブという種類丈が小さいということである。尚この草原には首の長いエンマもいるという様なことを話してくれた。

エンマや鹿は動物園にいるものより外見たことのない私は、そうした動物の野放しになっているのを何とかして見たいものだど、注視を怠らなかったが、道はいつしか黄色な花をつけた灌木の森の中へ這入った。

サン・マルチニョ農場は先頃他界したコンセレイロ・アントニオ・プラド氏の兄弟であるマルチニョ・プラド・ジュニオール氏に依って開拓された農場である。マルチンニョ氏はアントニオ氏とは思想的にも、公生涯にも全然違った傾向のもとに生きた人である。

アントニオ氏は後では民主党総裁になった程であったが、壮年時代は保守的なグルーホのなかに活動した人である。千八百六十五年州保守党からデプタードに選出されたのを振り出しにセアラ州統領、聖市々長、農務大臣、外務大臣等に歴任し帝政時代の寵児たりしこともあったに反し、マルチニョ氏は大学時代から自由思想の宣伝者で一度代議士になったこともあったが、彼のはなやかなペーヂは寧ろ開拓者としての其つきざるエネルギーであった。彼は三十三歳にしてアララスに於ける父シルバ・プラードの三農場の経営に専念した。ノーブレなバンデランテの血を多量に受けついだ彼はアララスに於けるモノトノな農場生活に安んずることが出来なかった。

「マレタの父さん」といわれるモジ―・グワス―河の濁流が、時には群青色や黄色な花も咲く水草の叢生したパンタノと、うす暗い樹木のカポンとのなかに原始的なムージッ

クを奏していた。マレタの母さんと称するパルド河は水浴にのそりのそりと下りて来るアンタやカピバラの巣窟として茫々とした広野の後に印度人の唄う様な幽寂なささやきをもらしていた。こうした一帯の地面の片隅にアリノ氏が感嘆の詩を作った、ジュキチバは天を摩して立っていた。ペロバはその巨幹をほしのままにしていた。春が来るとイペの鮮明な紫色、秋が立つと、パイネーラのうす桃の花が、異性を知らない此大処女林の美しい帽子ともなり、華やかなサイヤ（スカート）ともなった。こうした長い長いうたた寝の平和な夢は幾千年、幾万年過ぎた事であろう。エドワルド・プラード氏がパリの華奢な生活に浸り乍ら「A Cidade e as Serras」にセルトンを描写している時にマルチニョ・プラード氏はこのマレタの父母と唱へらるゝモジー・グワスーとパルドとの両流域に狭まる地積に開拓の斧を揮っていた。そうしてかの所謂『リベロン・プレートへ、リベロン・プレートへ』という。パイオニアの無韻の讚美歌は実に彼等に依って富を追求するアベンツレーロの口より口へ伝へ広められたものである。

十二

サンマルチーニョ農場の土質は聖州人の誇りとする其のテーラ・ロッシャ (Terra Roxa) であつたどこ迄掘つて

も掘つても底知れない様な深さに紫黒色をふくんだ赤色の地層が、あの断崖や道路の掘り割に露出されていた。

農場本部の前面には形のよい小丘のうねりが一線を引いて珈琲を植えた正しい列が遠くから眺められた。

馬に乗った総支配人ドクトル・パツセラル氏はトロリに乗った私共一行を新珈琲園に案内してくれたそれは今迄見たことのない珈琲の若木の間に植付けられている農作物を
実見したい一行の希望を容れてくれたのであった。

サンマルチーニヨ農場の珈琲は今日迄巡視した何れの珈琲園よりも豊作らしく見えた。トロリは赤玉黄玉、青玉が累々として玉をつづったなかを通った。時として車輪が珈琲樹の枝垂枝にすれ合うと一と握り位の実はパラパラと飛んで来た。それは如何にも快よい悪戯者の様な興味を与へて車上の人の心を軽ろくした。

新珈琲園のある所はマニソバと呼んでいた。(マニソバと云うのは大戟科の植物の名である)樹数は二十五万本と
いうのであるから、日本の町歩にして凡そ三百二十町に渡る面積が二千八百町歩の古い珈琲園につづいて展開されていた。

高さ二、三尺の大小の伐木の簇々として立っている間に、恰も鰐魚の潜伏する様な形に、或ものは枝を横ざまに、或ものは大地に伏して伐り倒された樹木が横わっていた。こうした戦場の様ななかに珈琲はコーバといって長

さ、巾何れも七、八寸、深さ六寸位に掘った穴の底に、三本か四本の苗（リベロン・プレート地方のテーラ・ロッシヤ地帯は苗木植が多い）を植え、その穴の四辺に手頃に割った薪を一尺前後の高さに組み上げて新珈琲樹の霜害、或は乾燥時等に対する予防に供へるのである。横に六十本縦に五十本即ち三千本を植えた畠（農場に依って本数は一定せず）を一区画として、是れを「*salha*」といひ其中間に道を通じて運搬に便ずるのをカレガドールと称している。二十五万本の新コーヒ樹であるから一区画三千本の畠が丁度八十四並んでゐる訳である。間作物の唐黍は大方に倒されていたが、その大きな太い実が一行の目を引いた。千本のコーヒー樹のなかから五、六台馬車の収穫はある。その価格一台三十ミルレースより五十ミルレース位なそうである。豆はもう収穫後で其打殻の積み重なっているのが所々に見当った。この収入も少なくなないので、乾燥した秋のほしいままなる太陽の放射を浴びながら、トロリから下り立った水野さんは、もう日本移民がこの豊かな農作物を自らのものとしてよろこぶ様な気分で、この人が至極満足した時にのみあらわす妙にとがらした口辺には柔かな微笑が湛えられていた。

十三

翌朝まだ霧の晴れない間に例のトロリに乗った私共はサ

ンマルチンニヨ農場の事務所から停車場へ向って走らした。

日本里にして一里少し越えた位であろう、平坦な道が一直線に走っていた。カチンゲーロ・ロツシヨという牧草の紫がかった微小な花に白露の玉を結んだのが、うそ寒い旅人の心をそそった。停車場に着くと早くも、太陽が濃霧を通して金粉をふり蒔いたような光線を見せた。川が近いのであろう。水鳥の音がして来る。

プラット・ホームに下り立って立話をしていた水野さんは、落付かない様な風で、しきりにポケットを探していたが、『やあ！これはしまった。財布を忘れて来たよ。何んでも昨夜寝る時に枕の下に置いたのだが、取り残して来たらしい。どうしましようかナ、三浦君』

『さあ、それは困ったね』

髭をひねりながら立っていた三浦さんもびつくりしたが、それを聞いたエルクラノ氏も眼をみはったまだトロリが戻っていないければ都合がよいがとエルクラノ氏は探がし廻わったが、もう影も見当らなかった。而も発車時間迄には十分の時より外なかった。

困った。真実に困った。

『鈴木君、御苦労だが一走り農場迄馳つけてくれんかね。そこで、もうとてもこの汽車には間に合うまいから、財布が見つかっても、見つからなくても君は此の次の汽車で

ビスコンデ・ド・ピニャール駅迄来る様にしたまへ。』

三浦さんも、それより外にないというので、私はすぐ停車場から野道へ走り出た。言葉も解らず、金も持たず、一行と離れたならどんなになるかということも考へずに私は只一散に走った。霧は一しきり流るる様に押した。

ト見る前面から何物か右手に高くさし上げながら馬を走らして来る人がいる。驚いて立ち止まった私の眼は異常に輝いた。

それは馬上の人の手に水野さんの財布を発見したからである。馬はつゞけざまに走り去った。私も身を返して後からつづいた。

五分―十分、私は時を知る余裕などあるべき筈がない。息せききって停車場に戻って来ると、もう汽車がプラットフォームに横着けになっていた。汽関車からは、朝寒の空にしゅうしゅうと白い湯気を吐いていた。水野さん達の招くままに私は大急ぎで汽車に乗った。

『よかった、よかった。』

水野さんは真実にうれしそうに微笑した。

『君、君のため特に五分間発車を後らしたんだぜ、えらいもんだろう。』

三浦さんも満足そうな面持ちで私を見た。財布を枕の下に敷いて寝るといふ日本式な、人を疑う様な点のあるのは厭やな気を起こさしたが、それを発見してかくさなかった

傭人の清廉な心は見上げたものであった。

仮令エルクラノ氏という州政府の案内者が付いているにせよ、急行列車を五分間も時間外停止させるというのは日本人に対して、すばらしい好意の発現であるという様なことを三浦さんは話した。君はこの次の汽車で来る様に駅長に話していた所であつたと水野さんは言った。賑やかな話がこの財布一件に付いてそれからそれと暫くは止なかつた。

十四

ビスコンデ・ド・ピニヤール駅（現在はイバテと改称）はピニヤール家の名を表象したものである。

ドクトル・モラエス・バーロス氏（現民主党員と同名異人）のパルミタル農場は殆んど停車場とつゞいていた。

ゆるやかな小丘の半腹に、牧場を前にし、伐り残された森林をバックとして、近代式な邸宅が建っていた。明るい鶏卵色に塗られた壁には日が一杯にさして、冬というのに、ヴェランダに這わしたバラの蔓には黄と淡紅のバラの花が点々と咲いて如何にも気持よい配合を見せていた。

一行はもう珈琲園見物につかれていた。紅塵万丈という支那式の形容詞は真実聖州のテーラ・ロッシヤ地帯にふさわしい形容詞である。砂利を敷いていなかった当時の鉄道

の土ホコリ、それは余り目出度くない名物の一つであった。汽車が疾走してくると其車輪の音響を聞き取る前に、既に早く合図として濛々とした紅塵のうず巻を高く空中に見せた。

ホテルに着いた旅人は先ずやれやれとハンカチを絞って土くさい鼻をかむと、パットに染め出された赤い血の様な気味悪い色にはつとする。顔を洗うと洗面器の底に沈澱する砂塵の分量はその濁った洗水の色よりも厭やな感じを与へた。一行は毎日毎日こうした獐猛な士ほこりの襲撃に對して、口癖の様に

『どうだ、この砂塵が！』

『肌に迄しみ込んでしまうぞ！』

私語き合いながら刷毛をかける。シャツを取り換へる。あわたぎしいこうした一ト時のいやな気分を味うことは堪えられない苦痛となつて来た。珈琲園見学も、もう大体の見当が付いた様な氣が先き立つて何人も一日も早い帰聖が待ち望まれた。

それでも主人がほこり顔に案内してくれる乾燥場、ベネフィシオの見物につき合わない訳には行かなかつた。地続きのセーラ農場にはヒルミヤノ・ピント氏がチビリサ農場から先行して一行を待っていたので、そこにも顔を出した。

明日はサンパウロ市に引き上げるというので、夕飯の卓

はにぎやかな声にあふれた。苦いかほり高いコーヒーの出した後に令夫人はピアノを奏した。落付きのある音声は静かな夜の空気に波打って、例へ様のない感情の世界に導いた。弾奏が終ると人々は皆拍手した。誠に珈琲園巡視の最終にふさわしい夜であった。

聖市滞留

一

聖市に戻って来た一行は休養する暇もなかった。水野さん達は午後二時頃からフロックコートに着換えて州農商務局に日参した。

珈琲の大打落は州財政に可成りの打撃を与えていた。十キロ三ミル内外の精選コーヒーの価格は千本の珈琲取扱手数料百ミルレース内外の安い賃銀も支払うことが出来ず、至る所に農場主とコロノとの間に紛争を起こした。引いて伊太利政府が聖州政府にコロノの賃金支払ひの保証を求むる様なこととなり両政府の間に可成り深刻な渠溝を生ずるに至った。

従つてジョルジ・チビリツサ州統領の内閣に取つては珈琲調節と移民招致は二大中心政策たらざるを得なかつた。面も当時の州財政は今日の如く豊富でないので、積極的政策を立つることが出来ず、一九〇二年、前州統領ベルナルジノ・デ・カンポスの時代に発令した新珈琲樹の栽培禁止を厳に励行すると同時に、伊太利以外の色々な白人種を珈琲園契約移民として輸入をした。

スペイン人が聖州移民として目立って増加をしたのは、この時分からで、地中海沿岸から黒海沿岸の住民に迄移民の範囲を拡大したが、当時のリベロン・プレートに是等の聖州に取つて未知の国民が珈琲園労働に堪え得ず、老若の数十人が群をなして野宿をなし、市民にあわれみを乞うに至るが如き悲惨なる光景を現出するに至つた。若し伊太利移民を招致することが出来ず、他の南欧白人種の移民に失敗した聖州政府の当局者は勿論、農場主に取つてもアジア移民輸入問題の胸中に往来すべきことは余りに当然過ぎる帰着である。最も早くこの点に着眼したのはプラド一家である。既に人を北米加州、ペルー方面に派遣して日本移民の研究をなさしめているということを知った。

移民問題の果実はこういう風に成熟し、醗酵しきつていた。

二

しかしながら、一度二百人ばかりの支那移民を中央線鉄

道工事に輸入して、余り面白い結果を来たさなかったこと、北米加州に於ける日本移民問題の紛争は、移民を求むる必要が急迫しているにも係らず容易に決することが出来なかった。

度重なるドクトル・ベント・ブエノ氏との往復も、具体的立案に入ると、何時も明日（アマニヤン）明日という風で長引いた。私はこの間を利用して、聖市を何の当てもなく隅から隅迄歩るき廻った。

ドン・ペドロ公園になっている、商業区とブラスとの間はじめじめした湿地であった。タマンドワテイ河に沿うた長堤にはユーカリ樹の並木がつゞいて、ともすると驟馬のうろうろして草を食んでいるのが見えた。

カンタレーラ行きの小汽車は時折り、けたゝましい音をたてて、カルタなどを弄んでいるバガブンドの群を驚した。

うすぎたない生魚のメルカードに接して、果物類のメルカードがあった。累々たる蜜柑の山、バナナの房など其美しい色彩が眼についた。瓜の様なマモンの値などを片言雜りに聞いて見たりした。

何んだか化物小屋の様な感じのするこのメルカードの片隅にパパガイオや、色彩濃厚な羽根を持つ中小鳥類を見ては、これから労働する山林の風物のエキゾチックな光景を喜んだ。

鼠？ それは白い眉毛を持った黒い小さな可愛らしいサグイン (Sagum) という猿であつた。焦茶色をしたひよろ長い猿はシェーロといって、サグインにも劣らない小さなものであつた。鎧の様な甲羅も着たタツ、恐ろしく尻尾の毛の長く沢山あるタマンヅア・バンデーラ (蟻食獣) それは単に毛皮と甲羅とだけに過ぎなかったが、早くもそうした珍獣の間に生活する自分を予想して一とかどの探検家らしい気分にはひたつた。

三

聖市のセントラルは昔も今と変わりになく彼の所謂 Celere Triangulo 即ちキンゼ、サンベント、ジレイタの三角街を結びつけた三角の街区であつた。

当時の目ぼしい建物といつてはプラサ・アントニオのつい先頃迄電気会社の事務所 (目下ニューヨーク・シティー・バンクの建物として改装中) になつていたパラセテ・マルチニヨと、コレオ・パウリスタノのある建物とが、如何にも堂々として目をそばだたした。プラサの真中に植えられた二列の落葉したプラタノの下には物好きな人が群れて新聞売子が高い声で走り廻つていた。

現在建築中のパラセテ・マルチネリのサンベント街の角にはカフェ・ブランドンがあつて天井の低いうす暗いサー

ラにはいつも電気が灯っていた。サンジョン坂の両側には物を押し売りする田舎者相手の小さな店が並んでいた。リベロ・バダローは敷石の不揃な挨立った街路であった。一階建の小さな屋並の窓には赤や緑のカーテンが垂れて人々とも思わぬ様な勇敢な其白い人形達が晴々たる言葉を惜気もなく道行く人々に浴びせかけた。この辺から貧弱ではあるが、十五燭光位のイルミネーションをしたポリテアマ座へかけて聖市に於ける夜のアトラクションの中心であった。私は是等の夜の世界を逍遙するに、恰も探険家がアフリカの奥地に入る様な勇気を揮ひ起こした。それでも、

『ハポネース！』

『ジャバニース！』

『チーナ！』

などの声を聞くと、何かしら冷たいものにふれた様な気がして足早に暗い方へ行った。青白いガス燈の蔭はよいかくれ場であった。二十七歳になって、まだ女の肌を知らない私は情ない程気が小さかった。逃げる様にしてホテルに帰った私の顔はぽっぽつとほてっていた。水野さんは『どうかね？』

など、総てを見抜いた様な顔をして微笑した。

x

x

x

オンゼ・デ・アゴスト街の現在のサンタ・エレナ座の裏

口の辺りに日本の名誉領事が住んでいた。姓名は忘れてしまったがスペイン人で余り丈の高くない黒い髭のある爺さんぶった男であった。真実のことは知らないが余り香んばしくない人物の様に聞いたが、とにかくこのスペイン人が当事のサンパウロ州に於ける唯一人の日本人に関係ある人物であった。

時々この名誉領事はホテルに顔を出した。私には解らないが何か移民契約の相談に与っているらしく見えた。州議会の協賛を得なければならぬということは、日本移民契約の一大難関らしく見えた。水野さん達はとうとう麻痺をきらして、一応ペトロポリスに引き上げて其解決を待つことゝなった。打ち合せにホテルに立ち寄ったドクトル・ベント・ブエノ氏の前に私は呼び出された。

『君はね、チビリサの農場に働く様になったからね。』

水野さんは私を顧みて、こんなことをいつてすぐ三浦さんに、

『鈴木の一身上に関しては私は一切責任を負うから、其辺をどうぞドクトル・ベント氏へ話して下さい』

　　といって丈の高いベント氏を見上げた。三浦さんは、しきりにベラベラ喋っていたが、ドクトル・ベント氏は不動の姿勢に立っている私を見て合点合点した其長い顔にはやわらかなやさしさがあふれていた。葡語を知らない私は、只だまって頭を下げた。

ラルゴ・ダ・セ

小夜更けし大都の広場街燈も

たたずむ人も狭霧こめたり

紙屑は風にも飛ばず白々と

広場の小夜は静かにくだつ

ブラサ・レプブリカ

ガスの灯の青き暗さの此柳

仇めき通る女こそあれ

トリアングロ

人の波電車自動車灯のともる

この一瞬の街のどよめき

珈琲園生活

一

水野さん達はとうとう私一人をホテルに残して公使館所在地へ出発してしまった。私は全くの独ぼっちになってしまった。予期したことではあったが、さて愈々一人になってしまうと、新らしい心細さが湧いて来る。言葉も解らない。懷中には大枚五ミルの札が只一枚あった。勿論私はこの身体以外に頼るべき何物も持っていない。

経験のない珈琲園労働！ それは私にもある程度の確信がないでもないが、日本移民の見本となつて働くということは只単に労働が出来るという丈ではすまない。伊太人がいる。スペイン人がいる伯国人もいる。この国際的労働者間にまじつて負けてはならないのだ。体力に於て日本人である私は確かに劣っている。況んや単なる一学生に過ぎなかった私はこの点に於て彼等と競争して勝ち得る何のプロバビリテイがない。私の進むべき道は只正直に影日向なく働くことである。今回巡視した結果を総合して見ると珈琲園労働はさほど力を要する仕事でないらしいのが何よりの頼りである。私の責任は重大だ。日本移民契約の能不能はこの小さな肩にかかっている訳だ。どうしても負けてはな

らない。私はやり遂げて見せる。

こうした小児らしい誇りと自負とは私に少なからず勇ましい念を起させた。

x

x

x

翌日未明ドクトル・ベント・ブエノ氏の遣わした若者は、グランデ・ホテルの私の室をノックした。

もう仕度の出来ていた私はすぐこの若者と一緒に馬車に乗ってルース停車場に向かった。

もう四月も末である。深い朝霧が細雨の降る様にこめていた。ぼーっと黄色にぼかされた街燈は夢見る様な光景を見せた。カチカチカチと馬の蹄が道路の敷石を打つ堅く冷たい音響がまだ眠っている静かな町の建物に反響して、何となし物談めいた感じを与へた。

切符を買ったり、車室に案内したり、若者は親切に世話をしてくれた。

発車、私は窓から顔を出して、

『ムイト・オブリガード！』

真実心からこう叫んだ。此の若者は私に取って只一人の肉身の様な気がして、じいっと飽く迄見入った。徐々としてではあるが汽車の走る速力と、午前五時という早暁の暗さとは、忽ちのうちに此若者を視界から没してしまった。

『おれはとうとう独りになってしまった！』

斯う叫んで窓から身体をひいた時に、気が抜けたような

心細さがあつた。

二

言語の通じない私にも、一度旅行した道であるから別に途迷う様なこともなかった。無事にチビリサ駅に着いたのは午後四時半頃であつたろう。夕日の満面にさしている駅前のレールの上には農場のトレンジンニョが着いていた。ワゴン（台車）の上に立って口やかましく指図していた支配人メネゴニ氏は私を見ると飛び下りて来た。

『ボーア・タルデ』

『ボーア・タルデ』

もつと何かいったが、私には只それだけしか分らなかつたので、私も簡単にオーム返しに挨拶して手を振り合つた。日雇人達は珍らしいものを見物する様に眺めていた。

身軽るな支配人はすぐ又台車の上に乗って、

『モンタ、モンタ』

それ位な言葉は私にも解つた。素早く支配人の後につづいた、私は日雇人が運んでくれた柳行李やカバンなどを整理して其上に坐つた。

つい二週間ばかり前に水野さん達と旅行した時は、公使館州政府の案内者などと一緒に、お客さん―東洋の珍客―として此の農場を訪問したのではあつた。簡素ではあつた

が客車も連結されていた。迎いに来た主人ヒルミヤノ・ピント氏の後からメネゴニ氏の如きは小さくなっていたのを、ありありと思い浮べることが出来る。然るに今や局面が一変して、私は一箇の日雇人として、此の農場に来たのである。メネゴニ氏は私を監督する人である。この人の云い付を守って珈琲園労働を体験しなければならないのが、私の運命である。

『運命！ 運命！ どんな運命でも来い！』

心ひそかにこう叫んだ、独りぼっちの私の眼にも顔にも無量な感慨が閃めいた。

『Su... Su... Ki... Su... Ki』

メネゴニ氏はこんな風に片言雜りにいって私の顔を見て笑った。

『Suzuki Suzuki』

姓をきくのであらうと思って私も、力強くはつきりとういった。これ以外何もいうことの出来ない啞の様な私の心は悲しかった。

チビリサのコロニアからは風もない夕空に幾筋となく淡青い煙が悠々と立ち登って、がたびしがたびしと動き出した薪を焚く機関車からはバラバラと火の粉が散った。

私に与えられた室はグレゴリオという伊太利出身の農場書記宅の一室であった。古びてはいたが鉄製の寝台もあった。

蜘蛛の網はすすけた天井を占領し、白く塗った壁は土埃の色に染まって赤くなっていた。床板の下から天井の上へ幾筋もの土の線を引いたものがあった。試みにその土線を払い落すと、そこから無数の小さな乳白色の虫がぞろぞろと這出してきた。つぶして見ると、一種いやな松脂くさい香が鼻をついてくる。話にだけ聞いていた白蟻というのはこれであろうか。好奇心をそそるものはないでもなかった。自分の住んでいる室にこういう虫が行列をなして往復しているということは寧ろ薄気味悪るい感じの方が勝っていた。私は今度は手の届く限り土線を払ひ落してしまった。蜂の巣の皮に似てそれよりも、もつともろい土線と一所に落ちた乳白色の虫の上に私は新聞紙をのせてマツチを擦った。

『火葬だ、火葬だ。』

こんなことをつぶやいて、淋しい心に活気をあほった。灯もない農場最初の夜は、こうした果敢ないエピソードを残して暮れて行った。

翌朝鐘の鳴った時は、もう眼がさめていた。聖市で買った安い木綿服を着ると、すぐ外へ出た。

朝はまだ暗かった。やゝ霜気を帯んだ寒さがひしひしと

薄着の身に応えた。暁けの明星が燦として寒天に光るのは丁度海上から見た燈明台の様に美しい親しみがあつた。

乾燥場 (Terreiro) には、もうちらちら人の影がして、皆或方向へ動いて行つた。私には只乾燥場で働けという以外、何の命令もなかつたので (其实命令しても理解出来なかつたろう。) 黙々として其後につづいた。他のする通りにすれば間違ひなからうという腹であつた。珈琲脱皮場 (Despolpador) に登る石段の前壁に木板が掛けてあつて、それに番号を附した円形の真鍮の札が釣つてあつた。日雇人 (Camarada) はそこを通る時各自の番号を受取つて行くのである。私がそこを通つてデスポルバドールの上の方に登つて行つた時はまだ十人と集つていなかった。其内の二三人は寒い、寒いなどといつて脱皮場を動かす機関の傍に立つて其の温まりを取つていた。刻々として人の数が増して来る。

第二の鐘は『労働始り』の合図である。それがカンカンと朝の空気の冷たさを震動して鳴りひびくと、移民小屋 (Colônia) の方からも、監督の吹くプーププツツという角笛を吹く様なラツパ (ホルネタ) の音がして来る。朝のほの明るさが、壮厳と歓喜とを暗示するものの如く拡ろがって来る。

デスポルバドールより一段高い所に軽便鉄道のレールが来ていて珈琲を満載した数台の台車があつた労働者の朝の

仕事始めは、先づ其珈琲を肩に担げてセメントで塗られたタンク（溜池）に投げ入れるのである。少数の或者は台車の上に登って他の大多数が肩に珈琲を担ぐ助勢をした。私は其多数の群に雑って珈琲を肩に載せて運んだ。十数歩の距離に過ぎなかったが、生れて始めての仕事、それは想像する様に容易なものでなかった。数台の台車が空になった頃は私は可成り疲労を感じた。燃ゆる様に咽喉の乾きを覚えてデスポルバドル構内にある水管に口をつけた時は呼吸もつかずに水を飲んだ、飲んだ、こんなにうまい水をほしいまゝに飲んだことを私は過去の記憶に持っていない。

四

乾燥期に於ける聖州の空は、真に所謂『天高くして秋清し』である。仰げども仰げども底の知れない碧瑠璃に晴れて片雲の動くを見ない。

朝も七時頃になると日本の桜時を思わせる様な快よい寒さである。美しい輝いた太陽の光が乾燥場に流れて露のしめりを拭い去ると日雇人達は鉄のロード（長さ一尺五寸、巾五、六寸位のものに長い木の柄を付けている）を取って珈琲をテレーロ（乾燥場）に撒き散らす、馬鹿力を入れずに柄を軽く振った調子でさっさと散らすという様な事は後で覚えたのであるが、私はこの最初の手ならしも不手際

ではあつたろうが、他の日雇人達に劣らないだけの仕事を遣つてのけた。

午前九時には朝飯の鐘が鳴る。何ともいへない、嬉しい音である。日雇人達は何も彼も投げ捨て、飯場へ向つてかけて行く。私はアントニオという鼻の赤い痩せた乾燥場監督の宅で飯を食う事になっていたので、皆から五六分遅れてアントニオに手招きされて一緒に行つた。

アントニオは伊太利人で年齢は二十六七歳位に見えた。マリアと呼ぶ妻君は美人という程ではないが如何にも伊太利の百姓の娘らしい顔立ちで赤い縞の着物を着ていた。アントニオより五つ位歳下らしく三人の子供の母であつた。監督の宅というと大そうに聞えるが、石灰を塗つた壁は赤くよごれて、天井は煙のために思う存分黒く煤けていた。取り柄は板敷を張っている位なもので、少しも移民小屋と変わりがなかった。

朝飯の御馳走に豚油で焚いた御飯 (Atrion corn gordura) 及び豆 (Feijao) を煮たもの、それに塩漬にした豚肉を炒る様に煮つけたのが少々あつた。伊太利のお上さんの料理は上品ではなかったが味の付け方がよかった。空腹にはまずいものなしという様な意味でなく、實際私は舌鼓を打って食つた。自分ながら余りに食うので、幾分控え目にしたがそれでもエスマルタードの皿に三度換えたのを平らげた時、アントニオがいった。

『コメ コメ ボンターデ。』

Come とはおあがりなさい。という事である、それは良く解ったが、後に続いた言某の意味は何んのことだか解らなかった。しかしこのときにいったアントニオの言葉は後になる迄私の耳に残って消えなかった『食う』ということ
は人間にとってそれ程重要なものであることは親の脛に噛り付いて労苦を知らなかった私に取って痛切な新らしい体験であつた。

五

朝飯後の仕事は木のロードをお臍の辺りに当てて、テレーロに撒布された珈琲の上を押して歩くのであつた。
よそ目にはのんき千万な遊び事のように見えるが、ジリジリと照りつける日光と、煉瓦の暖もりとは焼きつける様に暑かつた。

一区画の撒布された珈琲の上に各一人づつの労働者が、黙々としてロードを押している姿が見えて広大なテレーロは暫く何の音響もない沈黙の世界と化してしまう。只時として旋風がくると大空にものを巻き上げて行ったり、ぎらぎらと陽炎が立ったりして、この果てしもない様な淋しいモノトノを破った。

私は事務所の真下にある比較的小さな一区画の珈琲の上

を押して歩るいた。困ったのは靴をはいてはならないということであつた。堅い珈琲の粒が労働に馴れない柔らかな足の底に当るのが石のようで、やゝ厚い毛糸の靴足袋も何のたしにもならなかつた。

午後四時近くから、この撒布している珈琲を掻き集めて長い畦形の山を作ったり、丸い大きな山に積み重ねたりするので、乾燥場は再び活動の世界を現出する。

サンパウロ州も冬の日には短かい。暮れ方は日本の所謂つるべ落しである。太陽の温熱のある間は出来るだけ是れにさらして、日暮の冷氣を可及的防いで了うというのであるから、其のいそがしきは丁度洪水の様に一度にどっと押し寄せて来る。

監督アントニオの鼻が一層赤くなつてきて、苦い顔には如きへたゝみ出される。

『トツカ！ トツカ！』（やれやれという意味）

こう叫んでは鼠の様にあちこちと出没極まりない。日雇人達もこの日暮れ方は怠け様とするものがなかつた。及腰になつてロードを振つた手は勢いこんで珈琲を掻き集めてくると、珈琲のかほりを帯んだ土煙が立って鼻を打つ。後に散らばり残つた珈琲を手で掻き寄せて来る人が又一としきり埃を舞ひ上がらせる。

こうした間を干上つた珈琲をトロツコ車で掛声勇ましくTulha（珈琲貯蔵倉）に向つて走らして行くものもあれば、

竹籠や袋に入れたまま肩に載せて運んで行く者もある。

見よ珈琲貯蔵倉を中心として全テレーロに放射線を引いた活動の世界！ それは宛然戦場そのものであった。

夕陽はだんだん紅を潮してくると、いそがしさは一層の度を加えてくる、監督の調子がはげしくなり声高になってくる。何時しか支配人メネゴニの引きしまった短軀もあらわれて、乾燥場の空気がいやが上に充実してくる。

たそがれと冷氣とが盗人でも這入ってくる様に、こつそりと人知れず広がってくる。

出来上った珈琲の山にエンセラード（油布）を掛ける人。最後の珈琲を掻き集めにロードを鳴らす人、一しきり日雇人達の右往左往がはげしくなってくる。

珈琲採取場から小汽車は珈琲を満載して勢いよくテレーロの引込線に這入って来る。

『明日の朝も肩が痛い程あるわい。』

こうつぶやいてほの暗いなかにぼんやりして立った時、鐘の音がシュンボラズの盆地の隅々に迄しみ渡る様な音をふり立てた。

『ワ！ ワ！』

それは日雇人達が一日の労苦から解放された勇ましい凱歌の声であった。

X

X

X

へとへとに疲労（くた）びれた身体を着のみ着のまま

寝台に投げて今日一日のことを色々に思い浮べた。

『まあ、まあ、おれの初舞台は無難であつた！』

ふと壁を見ると白蟻の土線は元のままに修復されていた。あの土線のなかを乳白色の虫が昼夜の差別なく営々として住宅と生活との資料を運搬しているであろう。それは何の為めであろう。

『皆生きんがためだ。生きるという内に生物のミステリーな全目的が含まれている。』

こんなことがうつらうつら頭に浮んだかと思うと、いつの間にか深い眠りに落ちて行つた。

六

最初の間はできるだけ自ら進んで難儀な仕事を選んで働いたが、それは到底体力の許すところでなかった。私の疲労は一日々々と度を増して行つた。こんなにして一ヶ月もたつたらミイラになってしまう様な気がした。

実際困つた。因つても遣り遂げなければならぬのだ。労働が終つて自分の室に引き上げて寝台の上に腰を下ろすと、何時も泣きたい様な気分襲われた。私は英雄でも何んでもない。極めて尋常な平凡人である。決して自己の立場を小説的に粧飾しようとは思わない。訴うべき知人もなく、読むべき一枚の新聞もない。勿論言葉の単語を知つて

いるに過ぎない。こういう孤独なやる瀬ない立場にあっても尚大言壮語するー勇氣というよりはー寧ろ稚氣を持っていなかった。

監督のアントニオは私に就て何等特別の命令を受けてなかったと見えて少しの手心も用ひなかった。雨の日など監督の口一つでテレーロに残って雨水で流された珈琲を掃き集めたりする様な遊び半分の仕事はいくらもあったが、私は何時も大勢と一緒にあって、軽鉄の沿線や珈琲園などの除草にやらされた。リーマ（鑪）もかけていないエンシード（鋤）は徒らに力ばかり入って割合に成績が上らなかった。力そのものの様なバイヤ生れの黒人などは乱暴に勢こんで鋤を引きながら

『オー・ジャポン、オー・ジャボン』

などと呼んで、後れがちな私を顧みては、其真赤な唇を開けて笑った。

『糞！ あいつなどに負けているもんか』

私は日本語で、こんなことをいってあせったが、どうしても彼等を抜くことができなかった。温かい汗が額をだらだらと流れて眼に這入った、それを土まみれの手で拭きながら、

『忌々しいなあ』

エンシヤードを杖に棒立ちになって頑健な彼等の勇ましい姿勢を眺めた。

しかし『馴れる』ということは恐ろしいものだ。私は段々境遇に適応して行くことをさとしてきた。徒らに困難な労働に猪の如く突進するばかりが能ではない。怠けないで絶えず努力する事がプリンスプル（主要）でなければならぬのだ。乾燥場の労働も一様ではない。さほど力を用ひない注意と根気とを必要とする仕事も少なくない。仕事の成績も重大には相違ないが、私の全能力―つまりベストを尽すということは、もっと必要なことである。体質に依り、境遇に従って人は各々興った天分を持っていることは否めない。

『力で負けたら根気で勝て』

負け惜しみであつたかも知れないが、私はこう考へから何時も人目につき安い場所を選んで働いた。『おれは怠けてはおらんぞ』ということは何人にもすぐ認めることが出来る様にしたかつたからである多数の日雇人の内には随分ずるい怠け者があつた。縄煙草を小刀で削り取って唐黍の皮で巻いていたかと思うと『この男はいつも下痢しているのではあるまいか』と思う程大小便に姿をかくした。

支配人メネゴニは一日に一度はきつと私の傍に来て

『コモ・ヴァイ・エスタ・ボン？』（どうです、大丈夫ですか。）

簡単なこういう断片的の会話には、もう私も馴れてきた。

『エストウ・ベン・ムイト・オブリガード』（有難う、元氣です。）

出来るだけ感謝の意を示すために、彼等から見て不思議な東洋人の顔に微笑を湛えて挨拶した。ともすると、支配人の見えない時もあつたが、それは私に取って何ともいえない物淋しい日となつた。

七

労働上よりも一層重大な苦難が私を待ち受けていた。それは空腹と戦わなければならないということであつた。

乳飲児の時代と病気との場合を除く二十七年の母国生活に於て一日に三度の食事を欠かさなかつた幸福を今更に感謝する。

サンパウロ州の珈琲園地方の食事は、早朝カフェー、午前九時朝食、正午カフェー、午後三時夕食、労働終了後カフェーという様な習慣になっている。家庭を持っているものは珈琲の時、パンをとるから差支えないが、日雇生活者は二度の食事以外にはカフェーといっても、小さな珈琲茶碗か、ブリキ製のカネカで一杯飲むだけである。私は朝と夜の珈琲は飲みに行かなかつた。十二時のカフェーの時間には監督のお上さんが茶瓶（ブーレ）に入れて夫のアントニオに持って来るので、私もそれを飲んだ。

嘗て体験のない労働をして、一日に二度の食事、午後三時に食べてから翌朝の九時迄十八時間何物も口に入れられないということは実に容易ならざることであつた。私の食欲は異常な率をもつて亢進していった。私は食事の場合に余り食うので羞恥を感じずにいられた。アントニオはよく『コメ・マイス』（もつとお食り）

などといつてくれたが、お上さんは時々妙な眼付をした。それで私はお上さんが台所にたった折りを見て大皿から御飯を分け取る様な悪智恵を出す様なことをした。或は私の邪推であつたかも知れないが伊太利名物のマカロナーダを料理した時である。お上さんはナポリ生れであつたから特にマカロンの料理が上手であつた。私は自分にも驚くほど食つた――實際私はいくら食べても腹が一杯になつた様な気がしなかつた。流石のお上さんも大皿のお代りを取りに台所に立ちかけて一寸アントニオをふり返つたが、何か伊太利語でしゃべつた。人間には確に六感がある。この時にお上さんのいったのは、

『この男は何という大食であらう』

呆れているよりも寧ろ少々の賄代を貰つたのでは間に合わんという様な、小さい女心から出る気分らしかった。アントニオはそれを叱る様な鋭い声を出した、私は耳の根元迄顔を真赤にしてしまった。

こんな風で、食事は私に取つてこの上のない楽しみでも

あつたが、一種の厭やな時間となつていった。何とかして空腹を満たさねばならない。月夜の晩など仕事ですんでからよく四キロメートルスの距離にあるクラブニンヨスのいう町へバナナを買いに行つた。

或時、日雇仲間の黒人は町に行く私を見て、

『オッセ・ノンテン・メイド？』（お前は恐ろしくはないのか）

恐ろしいというよりも私の空腹が一層私を強迫して止まなかつた。バナナは一ダース三百レースに過ぎなかつたが、大枚五ミルレースの持金は見る見る減じて心細さは日に日に加わつていった。

『バナナが食へなくなつたら、どうなるだろう？』

これはうその様な現実であつた。

八

ドクトル・ベント・ブエノ氏は珈琲収穫期間だけ、自ら農場を監視する為、家族をつれてやって来たのはまもないことであつた。

丈の高いベント氏は長い顔に鼻と口との間の短いが目立つた。いつも丁寧なやさしい声でゆつくりと物を言う人で、支配人メネゴニの喧嘩するような荒々しい応対振りと比べて、誰れの心にも好感を与えた。

或日ベント氏は乾燥場にロードを押している私を呼んで、珈琲精選場（ベネフィーシオ・デ・カフェー）につれていった。二人の伊太利人が働いていたが、私にこれから茲で働くように命じた。

乾燥された珈琲の粒が、その貯蔵庫から巻き上げられて精選せられ、形の大小に応じて別々の管で排出せられて来る。それを六十キロづつの重量にして袋の口を縫う。縫った袋を一方の壁に添うて積み重ねる。この二つが珈琲精選場の仕事であつた、袋の口を縫うことは女子供にも出来る容易なことであつたが、六十キロの袋を二人で其一端を握って重ねて行くことは私にも六、七袋まで位はさほど困難でなかつたが、しかし七袋目となり九袋目となり、堆積が段々と高くなつてくるに従つて困難の度が増してきた。力よりも二人の調子がうまく揃つて、ふつと上に振り上げる一寸した拍子を会得すればよいのであるが、それがどうしてもできなかつた。

頑丈な二人の伊太利人は、私のこの如何にも力無げな様子を面白がつて、袋を縫うことは自分達でやって、堆積する場合のみは必らず、

『オ・ジャボン、オ・ジャボン』

と叫んで私を手招いた。私も何とかして笑われ度くないという意地から、すぐ立上つて袋を握った。馴れては行つたが時として袋が中途迄しか上らないと、

『オーリヤ、アキイ、ジャポン』（これ御らん、日本）

と二人の伊太利人は珈琲の袋を軽々と積重ねて笑った。

『糞！　これ位なことはおれにだって出来んということがあるか』

魂限り戦った。疲労の度は乾燥場の比ではなかった。絶間ないごとごとという器械の音響、珈琲のかほりをたゞよわす土埃の飛散、こうしたうす暗い工場の空気は私を半ばヒステリックにし、気管を傷めて、とうとう病臥するに至った。

九

二日間の病臥の後、起きて再び珈琲精選場に働いている私を見たベント氏は近く私を招いて

『お前は茲で働くことを好みませんか？』

『好みません』

私はきっぱりと答えた。ベント氏は、此度は私を珈琲脱皮場につれて行つて、蒸気機関手の助手として働くことを命じた。

ベント氏の意中は、移民の見本である私に色々な労働をさせて見ることは、日本人の労働者としての能力を試験する必要もあつたろうし、日本移民到着の場合に於て、珈琲園の労働に対する説明を私に依つてさせなければならぬ

というようなことでもあったらしい。

デスプロパドールの助手の仕事は私に取ってこの上ない望ましいものであった。私は全然筋肉労働から解放されてしまった様な気がした。

力を要するのは、軽鉄が積み下ろして行つた薪木を運ぶ位なものであった。主なる私の役目は蒸汽機関に火を焚くことで、暇を見て機関の清拭と、デスプロパドールの珈琲の吐口を見てやることであった。機関手という名をつけるのもおかしいが、つまり脱皮場全部の仕事を受持っている人は、少し黒い血を雜えたブラジル人であった。私にはなんでもよく教へてくれた。お蔭で私もデスプロパドールの仕事を知ることが出来、蒸汽機関の實際的方面の知識を与へられた。

運命というものは不思議なもので、二十年もたった後、この半黒に近い人のよい機関手がプロミツソンのシネマの前でお菓子を売っているのを見た。

『おれは、どっかで君を見たことがある？』

といって、つくぐくとこのお菓子屋の顔を見つめると『知っている、知っている、君はチビリサの会社でおれの助手であつた。おれはとうから茲にいる鈴木というのはあの人ではないかと疑つてたが、愈々君はあの鈴木であつた。』

彼の眼は、そうして二十年の長い流転の生活を談つた。

彼の不運と健康とは、もう昔の労働を許さなかった。私は固く手を担って、四辺の人々に『この人はおれのシェフェ（監督）であつた。』といつて紹介した。その頃の私は凋落の淵に落ちていたのでどうすることも出来なかったが、それでも彼の菓子を殆んど全部買い取つてやった。話は少し横へそれたが、これも移民地に於ける放浪生活の一断片として全く無用の挿話でもあるまい。

十

乾燥場は傾斜した地面を利用して築造しているので、大體に於て平坦な二大区画に分れていた。下方に位する乾燥場の面積は三分の一テルケールス位で、重にデスプロパドルを通過した珈琲の乾燥に使用されていた。上方のは二アルケールス余もあつて、其一部はまだ炉瓦が敷いてなかつた。仮りに珈琲一袋に対し二メートル平方が必要とすると、此農場の年平均産額が十六万アローバス前後であるうから一農期に於ける乾燥場の使用延メートル数二十四万以上に達すべく、この年の如き未曾有の豊年には少くとも四十万メートルス平方を必要とした訳である。

事務所―主人宅―の方から見れば下方のテレーロがやや低くなつていて、デスプロパドルを中心に上方のテレーロが展開されていた。珈琲園から運搬して来た珈琲の配置

に便する為め輕鉄の引込線が二本テレーロを貫いていた。機関工場と珈琲精選場とは最も低い所にあつて停車場へ出るレールがその前を通っていた。

組織的に、巧妙に配置された乾燥場の是れ等の諸機関を展望するに、デスプロパドールの位置が最も適していた。私は支配人のメネゴニがデスプロパドールの傍に立って、声高に怒鳴っているのを度々聞いた。監督のアントニオも上下に乾燥場を往復する度に、私の傍を通って、何かしな物をいった。

ドクトル・ベント氏も一日に二、三度は必らず茲を通つて脱皮された珈琲を検査したり、タンケにひたされている珈琲の醗酵した度合などを見て、機関手と話し合つた。私にも、

『コモ・ヴァイ・スズキ』

きつと言葉をかけた。油が着物にしみ、手や顔をよごすのは厭であつたが、勤勉なる火夫として心から働いた。茲では誰れも、

『オ・ジャポン』

等と、輕侮に似た言葉などで呼ぶものはなかった。労働が激烈でないので、私の空腹問題も五ミルの金がつきてバナナが食へなくなつても、左程苦痛でない様に習慣づけられて行つた。

窮すれば通ずるとはよくいったものである。幸福なる火

夫は暇さへあれば単語を聞き出して手帳に書きつけた。

十一

デスプロパドールの火夫となつてからの日曜ほど、私に取つて楽しいものはなかった。疲労のため身体の節々が痛む様なこともなく、洗濯物のすんだ後は自由に外に出て行つた。寝台に横になつて徒らに白蟻の労作を観察する憂鬱から解放された気分は恰も籠を出た小鳥の様な晴々としたものであつた。水野さんと約定した珈琲園の実情を出来るだけ詳細に知らなければならぬ私の義務も少しつつ遂げられていった。

私はよく乾燥場の日雇人達の合宿所を訪問した。合宿所といつても特別にそういうものが建築されている訳でもなく、物置小屋を仮りに使用しているのである。いつも五十人前後の日雇人達がいたが、彼等の寝台というのは棒を立てて枚をのせた上に唐黍殻をゾークの袋につめたものを敷き、薄っぺらな赤い毛布にくるまって寝るので、敷布など持っているものは只の一人も見当らなかった。

病氣だといつて、寝ているものも二、三人はきつといたが、其多くは合宿所の前に出て暖い日当たりを楽しんでいた。縄煙草を小刀で削りながら、がやがや話しているのもあつたが、なかにはビオラを弾いて、伯国の俗謡モデン

ニヤを数人で唄い合せているものもあつた。

日雇人の大部分は勿論ブラジル人でバイヤ州出のものが殆ど其九割を占めている。彼等の多くは黒人で、白いといつても多少黒い血を混じていないものはないといつてよい。所謂バイヤノとして聖州の珈琲園には無くてならない労働者でもあるが、喧嘩好きで血を流すことを意としない兇暴な性質は恐怖と嫌悪との念を以て迎えられた。彼等はサン・フランシスコ流域に近接したバイヤの内奥地の住民である。十人、二十人と一部落のものが団体を組んで、ジョアゼーロ、バーラ・デ・リオ・ブランコ、アリニヤニヤなどという港からサン・フランシスコ河を遡航して、ミナス州のピラポラに出て、そこから幾百里の道を徒歩で一カ月も或はそれ以上もかかって聖州へ来るのである。通過する道筋はミナスでも余り開拓されていない地方なので、彼等は幾日も幾日も野宿して袋に入れて来たタピオカで僅に露命をつながなければならぬ時も少なくないそうである。短いのは一乾燥期の終る九月頃には、また団体を作つて、その年のマンチメント（食糧）を収穫する少々の唐黍とマンジオカなどの植付に間に合う様に帰って行く、宛然渡り鳥の様である。其内にはもう少し金を貯蓄してからという様なことで、団体から後れて戻る様な者もあると、旅行の途上強盗のために一命を落す者も少なくなかった。当時にはバイアへ戻る日雇人達の懷中を目当てに徘徊する獰猛な強

盗団があつたということである。

十二

ペトロポリスの水野さんからは、しきりに手紙が来た。それは移民契約に関しドクトル・ペント・ブエノ氏から何の消息もないから、其点に付き聞きたゞしてくれということであつた。私にそんなむずかしいことが話し得る筈がない。

事務所の窓口からペント氏に向つて

『セニョール水野、ペーデ、レスポスタ、コントラット、イミグランテ、ジャボネース。』

苦心惨憺の後に、これだけの短語を漸くいい終つた時は折に汗がにじんでいた。ベント氏は一寸眉をひそめたが、『エスターポン、エウ・マンド、レスポースタ』（よろしい、私は返事を送ります）

すぐ姿を消してしまつた。呆然として立ちすくんだ私は、はつと思つた。それは『移民契約が都合よく進行してない』ということに気がついたからである。それから二、三日たった。一句浮びそうな空の澄みきつた碧さは心にくい程であつた。

午後三時の夕飯の鐘が鳴つた時にベント氏に召使われてゐる黒奴の小僧がデスプロパドルに来て、主人が私を呼

んでいるという。私は夕飯に行くのを中止して小僧と一所に駆けて行った。

ベント氏は事務所の下の道に立っていた、そこには鞍を置いた二頭の馬が繋いであった。走って来た私を見ると、ベント氏は、

『お前は馬に乗ることを知っているか？』

元来私の家は農家であるし、いつも二頭づつ馬を飼っていたが、子供の時分に裸馬に乗って振り落されてから、一種の恐気が付いて馬に乗ることをしないので全くの素人であった。

『ノン・サーベ』

セーなんという、そんな気のきいた言葉は持ち合わせていなかった。これを聞くとベント氏は自ら手綱を取って見せて、私を馬に乗せて、鐙の長さなど直してくれた。

ベント氏の馬を先頭に、私共はシュンボラズの移民部落から珈琲園の中へ這入って行った。道々ベント氏は何くれとなく説明してくれたが、其十分の七迄はのみ込めなかった。

『コンプレンデ？』

と聞かれる度に、恥かしい気がドキンと来た。余り解らないというのも気がとがめるのでたまには、

『解ります』

と答えて顔を赤くした。二頭の馬はとうとう珈琲園の最

高所に達した。

二百万本の珈琲樹海は限界に展開され、其奥には森林と原野とがはるぼると連続してそれがうすもやのなかに消えてしまう。ベント氏は私を顧みて

『ビスタ・アレグレ』（眺望絶佳）

とつぶやいて、感慨に堰へないものの如くやゝ暫く展望していたが、突然叫んだ。

『見える限りがおれのものだ！』

右から左へさつと指さして示して眼前の万象悉くが自分のものであるという意味を示した。これを開いた私の魂は自刃を浴びた様に躍った。何という壮快な一言であろう。『見える限りがおれのものだ』といったベント氏の相貌は実に英雄の如く見えた。

『見える限りがおれのものだ』

これは植民者にとって確かに無韻の詩である。この時ベント氏が私に与へた印象は一生に忘れられない深いものであった。私はもう一度繰返して叫んでみたい。

見える限りがおれのものだ！

十三

ベトロポリスから驚くべき傷ましい報知が来た。それは杉村公使が卒倒して遂に他界したということであつた。

杉村公使の一生は決して恵まれたものではなかった。公的生涯からいっても、最も活動した朝鮮時代は三浦公使の女房役をつとめ、蔭の人として社会は其存在さへも認めるに吝かであつた。伯国公使として日本移民契約に対する功労の第一人者は誰が何といつても杉村公使其人でなければならぬ。あの尨大な聖州珈琲園報告は邪氣のない彼自身の表象である。若しこの報告書が野田良治君辺りの筆と觀察とより生れたものであつたならば批難なしには止まないであろう。私は一種の植民文学的気韻の漂渺たるものを感じ銘して恍惚たらざるを得なかつた。この報告は確かに日本の官民にとつて或る驚異であつた。伯国という解かなければならない謎が移民会社と外務省との前に砂漠のオアシスの如く展開された、伯国日本移民最初のページに杉村氏の如き人が公使として駐在していたということは天祐に近い幸運であつた。公使の遺言に依つたのか、或は家族の希望より出でたものかは知らないが、其屍を母国に運び去る様なことはせず、潔よくリオ・デ・ジャネイロ市に埋葬したことは、賢明な手段といわなければならない。杉村公使は私共に『伯国の土となれ』という例を死という大きな事実 に依つて示したのである。彼は実に伯国日本移民の父である。而も在留同胞の何人か此の深刻な彼の死と伯国の土となつた意味とを了解し、よく是れを記念するものがあるだろうか。渡伯二十年記念に彼の名を想起する人さへなかつ

たでないか、勿論彼はこういう事を期待していなかったろうから、只黙々として巨木の如く、不幸な報いられない其一生を顧みて墓石の下に微苦笑をもらしているであろうが、彼の意志の如何に係らず、私共自身の義務を怠つてはならない。どうぞ将来私共で日本移民の記念すべき様なことがあつたならば、総代を選んで彼の墓参をさせたいものである。若し植民地に神社を建てる様な機会があつたならば先づ第一に

杉村神社

を建築したいものである。是れは公的に報いらるること、余りに貧しかった彼に対するせめてもの私共の志であらねばならない。

十四

杉村公使の私的生活は更に一層いたましいものがあつた。私がペトロポリス日本公使館の短い滞留中に与えられた色々な印象と観察とが、若し幸いにして誤謬であつたならば、それは杉村公使のために、この上のない喜びとする所である。

杉村公使の若い頃はジョベン・ジャポンが再誕の苦難と希望とに満ちあふれた時代であつた。彼は当時のモボの如く酔うては枕す美人の膝、醒めては握る天下の権と豪語し

た幸福な青年杉村であつた。しかし彼が人間として争うことの出来ない苦難に直面したのは家庭の人となつてからである。彼が公生涯の不幸は家庭人として胸深く秘めなければならなかつた傷ましい反影が、あの様に黙々たる冷たい性格を作つたのではあるまいか。

令夫人は親切な好い人であつた。脂肪質な肥え太つた体格はその自然的な体質上の影響をどうすることも出来なかつたらしい。

『日本公使館の人々』をよんだ人は、何か或一種の嫌悪すべき暗示を感じせずにはいられないであろう。杉村公使が卒倒するに至つた其原因は実に○○○○○○に起因するらしい。

三浦、水野両氏の書面を総合して、卒倒した当夜の光景を想像に描くことは決して難事でない。便所に起きた杉村公使が、あの旧式な二階の廊下へ重たい足取りで踏み出した。ペトロポリスの山溪は死んだ様な静けさに落ちて水の音らしい幽かな音は反って物淋しい世界に導いて行く。公使は漢詩のあらわした寂実な風物を頭に浮べて、ふと目を上げると○○○○○○黄色な灯がもれて○○○○○○るのを見てはつとした。見まい見まいとした○○○○○○見てしまった。何と云う○○○○○○あろう。こんな念が頭に浮んだ時は、もう冷たい板の上に公使は大きな音をたてて倒れていた。云うに忍びない而もどうすることも

出来ない人生の大事実に逢着して、公使は朝鮮の王妃を屠ることの如何に容易なりしかを感じざるを得なかったであろう。

公使は再びたたなかつた。彼の死は実に劇そのものである。伊藤公の死の如く、原敬の死の如く政治的に華美でないが、もつと人間味に富んだ凡人のドラマチカルの死である。人間の真実の深さは寧ろこう云う平凡人の平凡事の上にあることを忘れてはいけない。

杉村公使のこう云う私生涯を記す事は、彼の徳を傷つけるものであると云う人があるかも知れないがそれは頭の古い何でも彼でも死人を神聖化させなければ承知の出来ない人である。人間は生物である。生物としての種々相の展開にこそ人間としての尊い価値がある。

杉村公使の最後は誠に傷ましい事実には相違ないが、人間としての彼に一層の深さと色彩とを添うるものである。

杉村公使の死は水野さんの移民契約にも一頓挫を与えた。公使夫人が引き上げに当って、水野さんに女中お梅さんを鈴木がもらってくれまいかと云う様な話があつたが、うすうす彼女の不為体を聞いていた水野さんが

『鈴木は変人ですからね』

と笑ってしまったと云う様なエピソードを残して、水野さんも再来を期し、とうとう日本へ帰ってしまった。

私はデスポルバードルの機関に火を焚きながら、是等の

色々な出来事を走馬燈の如く頭に描きながら、切ないうたた寝の夢からさめた様に

『あゝあゝ』

と長い溜息をついては、太い薪を乱暴に機関の火中に投げ入れた。

『みんな、この薪の様に燃えてなくなるといゝがなあ！』

十五

珈琲の収穫が終りに近づいて来た。もう黒色に成熟すると、デスプロパドールにかけることが出来なくなるので、機関に火を焚く労働もお仕舞になった。私は再び乾燥場に働くより外なかった。又しても労働苦が始まった。しかし私の体はもう不思議な位頑健に鍛え上げられていた。難儀であつたが、最初に感じた様な苦痛を与えなかった。多くのカマラーダ並みに何んでも手にかけて見るのが一種の楽しみとさえなつて来た。

八月の花とあだ名されているイペ (Bigoniaces に属し Tecoma と呼ぶ) の花が珈琲園の小高い丘の上や、遠近の森林に美しいさつき色を見せて、強烈な太陽が照り輝いている九月始めの或日曜日の午後であつた。

私は何か新らしい単語でもきゝ出そうと思って、事務所に出かけて行つた。簿記掛のコエリヨ、書記グレゴリオ、

支配人メネゴニ、各部落監督等事務所前の日蔭に集まつてにぎやかに話していた。私は是等の人達の玩具の様になつて、色々な話題を持ち出された。とんちんかんな返答をしてどつと笑われたり、日本人はインテリヂエンテだなど、愛橋を振りまかれたりしている所へ、主人ベント氏があらわれた。

『鈴木、お前はもう町に行つて来たのか？』

私が今朝町へ郵便出しに行つて来ることを知っていたからである。

『ジャ・ヴァイ』

私の返事をきくとベント氏の顔は見る見る苦味走つてきた。そうして事務所の前の端れ迄歩いて見せて、

『ヴァイ』

それから又もとの所へ戻つて来ると、

『フォイ』

とこう叫んだ。顔を赤くしてベント氏の挙動を注視していた私は『はは解つた、ヴァイと云うことは行くと云うことで、フォイと云うのは、戻つて来たと云うことだな成程能くのみ込めた』

こう心につぶやきながら、

『ジャ・フォイ』

と云い直すと皆でハヽヽヽと笑つた。私は穴あらば這入りたい様な心で、首を縮めて小さくなった ベント氏は何

かしきりに喋ったが、面食つて狼狽加減の私には只しきりに『ノン・ノン』と云う声が鋭く耳を貫いた。要するに現在の状態では到底葡語を理解することが不可能であると云うにあるらしくしまいに、

『お前は明日から乾燥場の労働を止めて事務所に來て働くがよい、万事コエリヨさんが命令をする』

と云う事が解った。

『シ・セニョール』

こう答えた私の顔は一層赤くなつたが、しかしそれは恥かしさよりも嬉れしさの興奮が勝っていた。

十六

事務所の仕事は朝早く掃除をする。それは殆んどほのぼのと漸く明るさを感じる頃には、もうメニゴニ支配人は皮の鞭でポライナ（皮脚絆）を叩きながらあらわれる。私は能く支配人の灰色の眼の鋭い時と鈍い時で其機嫌をさとつた。間もなく書記のグレゴリオが赤い色の大きなハンカチで鼻をかみながら出てくる。この人は顔一面に髯が生えていたが、唇の可愛らしいどこか童顔の抜けきらない様な所があつた。暫て簿記掛のコエリヨは跛を引きながら出勤する、この人は鼻の大きい長顔であつたが、笑う時に鼻の膨みの所にあらわれる深い大きな刻みが目だった。リヨマチ

が長い持病なので、何時もうす黒い様に濁った色をしていた。私はきゝもらして判然した記憶を持っていないが、あの文学者のコエリヨ・ネットの兄弟であつた様に覺えている。主人のベント氏も見えて顔が揃うと諸方へのコレスボデスが出来る。私はそれを持って朝の汽車に間に合う様に馬を停車場に走らせる。随分さし迫つた時間になつてから遣られる時があつて、不得手な馬をどんなに叩きつけて急がしたことであらう。駅から戻るともう朝飯の時間であつた。

それから午後三時の夕飯迄、計算の手伝、デポジットから物品を交付すること、諸方への走り使などつまり事務所のボーイの仕事をさせられた。夕飯が終ると又馬に乗つて主人の食料品の買物と郵便受取りとの為に、クラブニンヨス町へ行つた。私の馬は白い年寄であつたがおとなしい辛棒強い馬であつた雨の降りかゝつた時など、氣をあせらして、このいゝ馬の耳などを打つた。こうした虐待の後に私は何時も限らない後悔の念に責められた。馬の首を軽くはたはたと叩きながら

『どうぞ忍耐えてくれ。』

私は人にものを云う様に謝まつた。しかし私はこうした美しい心を忘れて、幾度も幾度も人非人の行為をくり返えた。私はこのなつかしい白馬のことを思うと、今でも感謝と自責の念に涙ぐましくなつて来る。

町から戻って事務所のランプを灯すと、そろそろ各部落の監督達や、各工場長達が一日の報告を持って集まってくる。それが九時頃には済むのが例であったが、ともすると主人のベント氏とコエリヨ氏、メネゴニ氏、工場長の葡国出身のホルテ氏などの間に話がはずんで、十二時を過ぎす場合も少なくなかった。

訳の解らない会話を耳にしながら、じつと暗い所に立ったり坐ったりしている私の気苦勞は筋肉労働以上のものがあつた。こう云う時に限って室に戻って寢床についても長い間眠り就くことが出来なかった。そうして五時には再び起きて事務所の戸を開けねばならなかった。

十七

長い間の珈琲の下落は、珈琲園主を一日一日窮地に陥して行つた。この農場も可成り経済的に押しつまっていたと見えて、三ヶ月毎の支払規定が遅れて私が着いてから始めてメザーダの支払が行われた。

簿記掛の話によると私は月給八十ミルレースの様に聞えていたが、愈々支払を受けて見ると月五十ミルレースの割合であつた。五十ミルの内から三十ミルの食費が差引かれると二十ミルレース残る丈である。この二十ミルで洗濯シャボンを買つたり、たまには空腹をみたすバナナも買わ

ねばならない。ペトロポリスの日本公使館から電報などが来て、その返電を打たねばならなかった。これではどうすることも出来ない。私は全く落胆してしまった。少くとも普通の日雇人並の給料はもらえるものだと思っていた。私は幾日も々々鬱々として楽しまない日がつづいた。この遺瀨ない不平を簿記掛のコエリヨに散々あたり散らした。コエリヨは、何事にも我慢強い性質であつたが、特に私には肉身に等しい忍耐を見せた。何の罪もないコエリヨの迷惑はどんなであつたろう。私はこの人から種々言語に言い表すことの出来ない恩を受けたが、この人を苦しむる以外に何の報ゆる所がなかったことを思うと、今更慙愧の念に堪えないものがある。

コエリヨの話によると、私には相当の月給を支払う予定であつたが、主人ベント氏の考えでは私は日本政府から特別の高給を受けている珈琲国見学生と云う様な解釈から、そう云う僅少な手当を支払ったものであると云うことである。

成る程私は公使館の三浦さん達と一所に旅行している。ベント氏の紹介も水野さんの面前で三浦さんによってせられてる。加之領事館よりの電報や書面が来る。そういう風に取りられる形跡が多少無い訳ではないが、私に取って此上のない辛い誤解と云わなければならない。

私は迷った。杉村公使の報告書をよんで夢想した幻覚の

破滅は覚悟していたが、かほど迄傷ましい現実には逢着しようとは余りな意外であつた。食料なし五十ミルの月給では、いくら物価の安い当時でもどうすることも出来なかつた。

チビリサの駅長モラエスはメソヂスト教信者で親切な三十代の男であつた。私もプロテスタントであると言ふことから親しい交際をしていたが、私の月給が五十ミルレースだと云うことを聞くと親身のように憤慨した。そんな人を馬鹿にした取扱に満足してはいけない。停車場に來い、月給百ミルを支給しよう、食事はほんの実費で自分達の家族と一所に食べればよい。若し停車場の仕事が氣に入らないなら、この辺の農場なら何処へでも世話しようと殆んど毎日の様に勧めてくれた。私の心は可成り動いた。

一時はモラエス氏の勧誘に応じ様かとさえ思ったが、しかし私は考えなければならなかつた。

私は移民の見本である。利慾にのみ専念であつてはならない。この埋合せは移民会社にもあるだろう若しなれば無いでも私は一つ日本移民契約の犠牲となつたと思えば、それで満足である。一年位は夢とあきらめよう。五十ミルレースでも食つて行ける。辛棒、辛棒とこう決心がつくと心も自ら軽くなつた。駅長モラエスへは厚く好意を謝して断わつた。わだかまりのない私の顔を見ると、コエリヨも、

『ススキさん、ススキさん』

と呼んでにこにこした。コエリヨは何時も日本語で私をこう呼んでいたのである。

十八

私は朝の停車場行きと、夕のクラブニンヨス町通いとを利用して、ひそかに珈琲園の地図を作り始めた。それはこんな大きな農場でありながら、完全な珈琲の畠から見た地図のないと云うことが解ったのと、各部落の監督がコロノに渡しているタリヨンの珈琲樹数が各年度によってまちまちであると云うことを発見したからである。

私が珈琲園内に伐り残されている枯木や生木、農場内の大建築や煙突を目当てとして大体の方位を定め、珈琲のタリヨンは植付樹数の間隔十八パルマスから計算を立て、珈琲園内に散在しているコロニヤの距離は、馬の歩数を注意して数え、それから出して行つた。幸に停車場とクラブニンヨス町との位置が南北に違った方角にあつたから、シュンポラズの農場本部を中心として珈琲園のマップ（地図）が日に日に広がっていった。珈琲園を貫いている軽鉄の位置などは何枚目の畠の何本日から曲つて次の畠では何本目になっていると云う様な計算から記入して行つたので、少しも尺度を用いたものと変りがなかった。

段々興味が出て来て私は日曜なども、休まず乾燥場近く

のタリヨンの珈琲樹数を数えた。

地図としてやゝ輪郭が立つてくるのを待って私はそれを主人の前に出した。ベント氏は非常に驚いて

『お前はエンジニアイロ？』

『えゝ、そうじゃありません。』

『そんなら、どうしてこう云うことを知っているのか？』

『教育のある日本人なら誰でもこれ位なことは出来ます』
こういう意味の返答をしたつもりであるが、それが完全な葡語になつていなかったに相違ないが、ベント氏が私のいう意味を充分了解したに違いない。それからベント氏は私に向つて一寸した計算の題を課してやらしたが、私は何の苦もなくそれに答えてやった。主人は悉く感心してしまった。

『鈴木、お前は明日から朝飯と夕飯との間をこの珈琲の地図を作る為に働いて差支えない。馬は白ともう一頭ブーロ（騾馬）を代り々々使用するように、コシエーロに命令して置くから都合のいゝ様にしたがよい。』

是は異常の面目である。私は非常にうれしかった。一口に二百万本の珈琲園と云うと何んでもないが十八パルマスの距離に抱え付けたとして一千三百アルケルス（日本の約三千二百五十町歩）の面積が必要である。それにカレアドルやコロニヤを加えれば一千四百アルケールスになる。私はそれを半箇のインスツルメント（器械）なしに出

来る丈完全に珈琲樹数を基本とした地図を作ろうとするのである。

日に日に製図の方は順調に進行していった。来客がある度に主人ペント氏も、簿記掛のチリヨ氏も私のこの地図をきつと持ち出して話題の一とした。

十九

珈琲の収穫を終ったのは十月初旬であつたが、尚晴々とした天気がつづいた。

ベント氏は事務所前の乾燥場で収穫祝を挙げた。葡萄酒は余り多くなかつたが、ピングは大きな樽を据えて呑むに任せた。小さな紙製の万国旗と提灯を釣つた下でサンホーナ、ビオーラ等を主とした移民達のオーケストラが賑やかに合奏された。

コロノの若衆と娘達とは嬉々として躍つた。剽軽なスペイン生れの老爺が指でカスタニョーラの代りをさせて躍るかと思れば黒人は騒々しい原始的な蛮音をはりあげた。

豊年ぢや、万作ぢや！

隣の娘に婿が来て

おらが娘は子を生んだ。

ヅング、ヅング、ゾング

背戸の畑で

唐黍かいていたら

ヒョットコ面の猿が出た！

ヅング、ゾング、ゾング

椰子の葉風は

野づらをなでゝ

何と鳴いたかパパガイヨ！

ヅング、ゾング、ゾング

豊年ぢや、万作ぢや！

隣りの娘に婿が来て

おらが娘は子を生んだ

ヅング、ゾング、ゾング

板とブリキ罐とは珍妙な音をたてゝ、この踊りの調子を取った。

主人ベント夫婦を中心に支配人簿記掛書記各監督達の夫婦子供等がバンコ（腰掛）や椅子を並べて見物していたが、踊が一とくさり終る度に拍手喝采した。

最後に主人から懸賞として大きな美しいサンホーナ（手風琴）が持ち出された。それを若者達は代る代る主人夫婦

の面前に出て弾奏した、選に当った若者は幾度も群衆から拍手を以って其弾奏を強要された。踊の上手な娘達にも夫々懸賞があつた。

散会した頃は、もう黄昏の月がこんもりとしたマンガ樹の梢枝をあざやかに照らしていた。露のしめりはコールタを塗った広場（乾燥場）の煉瓦をつやつやと水を打った様に見せたが、酔払った黒人達はまだ手拍子を取って踊っていた。

O, sarve alma do trabaiio

O, sarve alma do trabaiio

Zing, Zing, Zing, ua

Cascavel pegou galinha

Galinha detrais do putero

Pae de Santo fez sorta

E, o mais veiol Alumia

この収穫祝の祭はコロニア奴隷時代の遺風で、なかなか盛大な地方色の濃厚なもので、黒奴がアフリカの郷土をしのぶ面白い踊りもあつたことは、記録に依って知ることが出来る。近代化した此頃の聖州珈琲園には再びああいふのんびりした気分を見る事が出来ないであらう。

一九〇六―七年の大豊作は堅州全体を通じて、千本平均の産出量八十八アローバスであつたから一九二七―八年に

比し樹数の関係から収穫総数が百六十万俵少いが千本平均から見れば二五アローバス多かった。一九二八年の最大量の産出を見た、ノロエステ線の千本百三十アローバスから推察しても一九〇六―七年のリベロン地方に於ける平均生産高が之により下ることはあり得ない。仮りに千本百三十アローバスの平均産出量とすると、チビリサ農場二百万本から二十六万アローバスの精選コーヒの生産を見た訳である。珈琲の価格は一アローバ三ミル五百前後であつたから農場主の収入は少なかつたが収穫手数料は一袋一ミル五百位であつたので、コロノの収入はなかなか多かつた為替相場からいっても一五ペンス以上にして現在に比し、約三倍の好調にあつた。こういう訳で懷中の暖くなつた伊国移民は総勘定が済むと、続々として帰国の途に証いた、農場から特に軽鉄の客車が提供され、花火が勇ましい音響を挙げ、碧落(ママ)の天に爆発した。

二十

収穫祭をすますと、まもなくベント・ブエノ氏は聖市へ引上げて行つた。主人なき後の大きな頑丈な邸宅の掃除役が私の仕事のひとつとなつたので、あの白蟻の巣窟であつた書記グレゴリオ氏の一室から主人邸宅の後園にある小屋の一室に引移つた。

そこには菜園と庭園とを受け持っているスペイン生れの若夫婦が住んでいた。この庭師の名はマノエルといって、髯のこい青ざめた男であつたが、妻マリアは白セキな長顔で、如何にも純なスペイン人らしい美しい女であつた。果実類をちぎることは、私の自由で、別に庭師の苦情を受くることはなかつたが、それでも朝飯時の一寸した体の時間に室に戻ったり、事務所を閉めて引き上げた時など、いつも、

『ウステ、グエスタ、ラ、バナナ』（バナナが大好きですか？）

『アキ、ティネ、ラ、バナナ』（バナナがあります）

こんな事をいって、マリアさんは一日でも欠かさず芭蕉実を持って来てくれた。ほの暗いカンテラの灯を囲んで、不可通な葡語で、アンダルシアの美しいカルメンの話や、勇ましい闘牛の話など私の貧しいスペインの知識を傾けた会談に夜更かすこともあつたが、この親切な若夫婦のむつまじい私語や、黍唐殻を入れた敷布団のがさがさという音響は独身者の神経に妙にむづかゆい感じを与へて寝られない夜などがあつた。

私はこんな時に限って、いつも辞書と首引きで、いくら読んでも解りそうもない不得手な葡語の勉強を始めた。板壁一重の若夫婦の寢息の音がききとれる程静かな周囲の夜はしんと更けて行つた。どこからとなしヒーヒーヒー

と長く余韻を引いた鳥の音がして来る。

窓外のマンガ樹の葉に晝近い西風が颯々と音を立てる頃、余儀なくもぐり込んだ寢床の上から愈々冴えた眼を、天井に放って考へるともなし、色々なことが、それからそれへと思ひ出された。

私の血管のうちには勇敢な開拓者の血が流れている筈だ。最上川の大洪水のために祖先に対する記録は総て流されて、何一つ残されていないが、出羽の先住民の一族であつたらしい。鈴木与右衛門を別家した曾祖父五助は豪快な人傑であつた。私は色々な逸話をよく老人達の口から聞かされたことを覚えている。

曾祖父の別家した頃は、本家も零落の絶頂にあつたので、何一つもらつたものはなかつたということである。生活の資金を得る為に二里ばかり離れた村の庄屋の若衆（下男のこと）となつたが、人一倍強健で大きな体格、男らしい相貌と勇氣とは、いつか庄屋の娘に思われて、人知れず相許すなかとなつてしまった。しかし零落して他家へ奉公しなければならぬ境遇にある次男坊と、庄屋の娘との結婚はそう容易に出来るべき筈がない。曾祖父は遂に辛棒しきれず娘をつれて逃走、郷家に戻った、これは申し分のない略奪結婚であつた曾祖父は何か利慾上のことからそうした暴挙をしたという様な中傷を快しとせず、産を起す迄長

い間娘の里とは出入しなかったということである。

二十一

多少の資本を得た曾祖父は、それを持って南部に牛買いに行つた。多くの牛の群を追うて名木沢という村端れ迄来た時は、丁度生々としたさみどりの苗代に朝露がしつとりとぬれ色を見せていた。と見る一匹の牛が群れを離れてこの苗代田に這入つて行つた。突然の闖入者に驚天した水を引いていた若者は立ち上つて呆然とした。それを見た曾祖父はつかつかと若者の傍に進んで、其手を握ると同時にそれを自分の咽喉に当て畦に倒れてしまった。そうして、

『助けてくれ！助けてくれ』

と大声で叫んだ。曾祖父は稀代の大力であつたので、抗争することの出来ない強引に逢つた若者は何のことやら訳が解らず無我無中で

『何をするんです？ 何をするんです？』

手を引き抜こうとしたが、どうすることも出来なかつた。その内村の人達がかけつけて来たが、曾祖父のトリックを理解するに由なく、

『何んだ、お前牛が一寸苗代田を荒らした位で、そんな乱暴をすることがあるか、馬鹿』

口々に罵つて若者の手を曾祖父の咽喉から引き離した。

曾祖父は如何にも大儀そうに起き上って

『いや大きに有難う御座いました。お蔭さまで生命拾いをしました』

といって立ち去ったということである。どう言う訳で曾祖父がこんなことをしたかというに私の地方では若し他村の牛馬が農作物を荒らした様な場合は、若衆達はその牛馬を引き捕へて離さない。是れを受取るためには損害の大小に依って、五升なり一斗なりの酒に、ニンシなどを酒の肴として送り、さんざんわびをしなければならなかった。つまり村の若衆達の慰み物となつて、散々油をしぼらなければならぬのである。

酒代はとにかくとして其の為に半日なり一日なり、事件を解決する迄、牛の群をとどめてそこに滞留しなければならぬのを、一寸した気転から一種の滑稽なトリックを思いついた曾祖父は鋭い頭の持主であつた。

曾祖父はそれから丹生川の沿岸に米田を開拓した。それがうまく当つてめきめきと産を起し半里以上離れた開墾地迄行く間に他人の田地を踏む必要がなくなり、他郷他郡に迄田地を所有するに至つた。

こうした曾祖父は一人として自分の氣に入る子を発見することは出来なかつた。嫁をもらつては氣に入らないといつて別家し、とうとう五人の子を皆別家してしまつた。一代の内に五軒の新家を建てるというのも異数であるが曾

祖父は遂に長男をさへ別家してしまった。若し浪人士などが来て何かゆすりがましいことをいうと大喝して追払ったということである。曾祖父の死後には祖父が別家から戻って家をついだが、曾祖母、祖母達の柔和な血が湿って一族の性格をどれ丈緩和されたか知れない。ひたすらに仏を念じて止まない真宗信者である白鳥村の仁藤家より嫁いで来た母の血は一層私共を和らげ、寧しろ臆病に近い小心者としてしまった。

私の一生を支配するに至った力―それは少年時代に感じた初恋であつた。故郷の海谷から一里たらず離れた大石町の高等小学校に通学し始めたのは十二歳位であつたと思う。

この町の郵便電信局長をしているN家は私の家とは血縁以上の近親な間柄であつたが、その長女春さん（仮名）に對して、私は私の全精神を一生打ちこんでも到底表現することの出来ない尊い純な恋を感じたのである。

十二才の恋！ そんな筈がないという人があるかも知れない。人間の言葉はまだ不完全で色々に恋愛の発展に対する過程をいいあらわす言葉を持っていない。恋ということが出来ないならば、見染めるといってもよい。ビアトリリスに恋をしたダンテは僅かに五歳であつたということを聞いた。ゲーテが、グレートヘンにほれ込んだのも、確か十四

歳の時であつたと思う。私の恋はゲーテの様なはつきりしたものでなかったにせよ、お春さんにそゝいだ心からの熱情は決してゲーテに劣らなかつた。寝ても覚めてもグレートヘンの姿がゲーテの胸を去らなかつた様にお春さんの姿は五十四歳になつた今日の私の胸に尚大きな力となつて生きている。どうぞ十二才の少年の貧しい恋物談を茲に許して下さい。

晩秋の空は晴れ輝いていた。何か買物にでも出て来た私の母は町の近親なN家を訪問したまま病臥してしまつた。私の母は子供を多く生んだため何処か弱々しい所があつたので、ともすると突然こういう風に寝てしまうことがあつた。

私は今でもありありと其光景を思い浮べることが出来る。小学校の昼休みの時間に私はN家の一室に寝ている母を見舞つたのであつた。どういう訳か私は座敷に上らないで日光のさした縁側の外の庭石の上に立っていた。母の枕元には看護のため長姉しな子が坐っていた。そこへN家の娘春さんが這入って来た。その手には大きな二つの柿を持っていたが、つかつかと縁側迄すすんで来てだまつてその一つを私にくれた。アダムとイヴは禁断の果物を盗んだために罪に落ちたというが、私の一生は実にこの柿の実一つのために定まつたといつてよい。

柿の実！ 柿の実！ 私はその柿の実が手に落ちると、

何が何んだか解らない一種名状することの出来ない感情に襲われて顔が―恐らく全身がその柿の実の様に真赤になってしまった。火の様な燃ゆる眼でそつと見上げた少女の顔―高い鼻と紅みを潮した頬―特にふさふさと耳の辺りに下っていた柔らかな髪の毛は私を盲目的に引きつけてしまった。私がお春さんを見たのは決して始めてではなかったが、一生にあんな強烈な不思議な力を感じたことがない。私は全然少女の虜となつてしまった。

元来はにかみ屋ではあつたがそれ以来私はこの少女と物をいうことが出来なかった。冬になつて雪が降ると、少年の足で一里の道を踏破することが出来なくなるので、私はN家から通学する様になり、朝夕の食膳には何時もこの少女と向い合うのであるが、それは実になつかしいそうして恐ろしい不思議なものであつた。

高等小学を終つても、私の心は春さんの居る世界から絶對に外へ出ることを許さなかった。幸にも春さんの家は郵便電信局であり、その頃始めて電信部が置かれたばかりなので、私は、何の顧慮する所もなく電信技手となりました。教育！そんな問題は春さんを慕う私の前には何の価値もなかったのである私は潔よく総てのものを捨てて春さんの呼吸して居るスペースに膠着してしまつたのである。

しかし只それ丈であつた。私は春さんと話もしなければ、別に恋文をかくでもなかった。私は電信局へ通勤の往

来に何時も私の先祖によって建てられた鎮守の社に立ちよって、

『どうぞ春さんと一緒にして下さい』

と祈った。それが私のあらん限りの頼みであり方法でもあった。十二の歳から二十歳迄の間に春さんと私と物をいった数はどれ程あったろうか。数うるに足りない場面のうちに、今になっても忘るゝことの出来ない総てを茲にかいて見たい。それがせめてもの私の慰めである。一生をかけた私の恋はほんとうに貪しい記録に過ぎなかったが其反比例に、私の切ない情がどんなに熱烈なものであったか、それは神さま丈が知って居られるでしょう。

お春さんの父上が大病にかかつて山形県立病院に這入ったことがある。

それは春であつた。奥羽地方の春！桜も桃も梨も、すももも、菜の花も一度にぱつと咲きはこる美しさは体験しないものには想像もつかない光景である。この爛漫たる其只中に山形市に四月八日のお薬師様の祭があります。私はそれを見物に行くという口実で旅立ったが実は久しく見ないお春さんの顔が見たかったのである。病院の寢床に横臥わっているお春さんの父は案外上機嫌であつた。私の顔を見るとにこにこして、

『お春や、貞サに何かうまいものを御馳走して上げなさい。』

『妾何も出来ませんもの……』

お春さんはこんなことをいったが、それでもうれしそうに、いそいそと料理を始めました。

会席膳の上に並べられた心づくしの料理に向って坐ると、父上は『貞サは酒を呑まないが、そうそうお春あの葡萄酒を上げて見なさい。』

『私は駄目です。』

固くなって断わった。しかしお春さんはきゝ入れなかった。

『葡萄酒ですもの、一杯位飲んだってどうにもならないのよ、さあ！ お飲みなさい。』

盃の上になみなみとついでくれました。私の心は只うれしい波にゆらるる夢の世界の船酔人の如くであった。お春さんのついでくれたものなら私は毒だって飲むことを何んで躊躇しましょう。一杯又一杯私はとうとう三杯のみました。顔を真赤にして病室を出ると、お春さんは長い長い廊下を見送ってくれました。

誰も見て居ないなかを、何も物を云わなかったが二人きりで歩いた記憶、それは一生に於てまたとないなつかしいものであった。あの春の陽のさした廊下が何処迄行っても尽きないものであったなら、それはどんなにうれしいものであるうとさへ希ったことを今だに忘れることが出来ない。

私はそれから毎日病院の入口迄幾度となく往来しては、『妙に取られまいか知ら？』

こんな考えに襲われては、いつも悄然と立ち止まって悲しい眼に涙をためて見上げた。

『あの病院の窓に、ひよつとしたらお春さんの顔があらわれるかも知れない』

はかないこんな希望を抱いて十歩行ってはふり向き、二十歩歩いては立ち止った。遂にそれが空しい願いに過ぎないことが解ると、涙をぼろぼろとこぼして泣いた。私は根気よく一週間それをくり返へしたが只の一度でもお春さんの姿を見ることが出来なかった。

田舎町の明治二十八年頃のことですから郵便電信局は何かの都合で誰も人の居ない折りも少なくなかった。或日二階の電信部に私一人、下の郵便部には局長であるお春さんの兄も傭人も欠勤で、お春さんが手伝いに来てくれたことがあった。

春であつたか、夏であつたか、もう私の記憶には残って居ないが、森閑とした田舎町には只電信の打つ記号の音のみがかちかちと鳴って居た。私はお春さんと二人きりになるのが、名状することの出来ない恥かしさと、物恐ろしさがあつた。

私は電信機の前に腰かけて動かなかった。お春さんのみ

しりみしりと音をたてて二階に上って来る音がする。私はそれを見まいとして一心に何か楽書を始めた。

お春さんは私の左方、電信機の方によりかかる様にして、

『これはどういう働きをするの！』

無心なお春さんの顔は笑って居た。私はどもりながら漸く説明したが、胸の動悸はどつどつと打って顔は火の様に熱くなるのをどうすることも出来なかった。唇を固くからだまま首を垂れて楽書をつづけて居た。何をかいて居るのか、どうすればよいのか、解らなかった。

お春さんは尚私により添ったままで、立ち去ろうとしなかった。このままで居たら私の胸ははり裂けてしまう様な気がした。私はつと立ち上って下に降りて行った。そうして一番下の階子段の上に腰をかけると両手で頭をかかえて何かしらものを考え様とした。しかしそれは徒勞であった。子供は五分間丈の記憶力しかないということであるが、私は一分いや一秒過ぎたことが解らない様な気がした。高まる動悸、深い溜息、汗ばむ位な顔のほてり、私の身体はぶるぶるとふるへて居た。

お春さんは静かな足取りで下へ降りて来た。其瞬間私は何かものに襲われた様に、あわたしく二階に駆け上って行った。

更に更に深い溜息、私は私の髪をむしって机の上に打ち

臥して泣いた。

こうして機会は二人の間を空しく逃げ去ったのである。それからもう一つ、お春さんが結婚するということが決定されてからであつた。私の心にはまだ何かしら心頼みがある様な気がして進退を決し兼ねて居た。

夜になると、何時もN家からお湯の使があつた。私はそれを楽しみの一つにして居た。其日はもう秋の寒い晩であつた。電信局を出てN家の茶の間に上ると黄色を帯んだランプの下でお春さんは結婚後の衣物らしいものを縫つて居た。

『今晚は！』

兄さんである局長夫婦も、父さん達も皆挨拶をしたが、お春さん丈は頭も上げず、うつむいたまゝ衣物を縫いつゞけて、私をふり向こうともしなかつた。

私は煮える様につらかつた。そうして怒つた。波々とした湯壺のなかにひたりながら、泣いても泣いても止まらない涙を湯水にぬれた手拭でふいた。

『いくら結婚すると云つたつて、今晚は位は云つてくれないかろう。俺がお春さんと取り換す言某は只それ丈ぢやないか。どうしてあんなにつらくしてくれるのだろう。よし、今夜は俺も立つ時にはお春さんに一言だつて物を云わないぞ』

是が私の悲しい唯一の復讐であつた。私はお湯を出て、

お茶の御馳走になり乍ら、折り折りお春さんに眼をやったが、一度でも頭を上げなかった。私の心は益々暗く悲しくなつて行つた。

『よし、真実に挨拶なんかしないぞ』

私は夢中になつて立ち上つた。

意外！ 意外！ それは全く予期しなかつたうれしい驚きであつた。

お春さんはあわただしく縫物を押しやって、両手をつくと丁寧に頭を下げた。地味な田舎縞の羽織、銀杏返へしの赤いかんざし、姿勢のよいならかに打ち臥した態度がランプに照らし出されたのを見ると、なつかしい感情がこみ上つて、私の眼の瞳光は夢見る如くにぶつた。そうして我ながらおかしい程狼狽ふためきながら坐り直して挨拶をした。

『矢張りお春さんは俺を忘れて居たんじゃない。』

私の心は露にぬれた花の様な平和な甘い慰めを感じて外へ出た。お春さんはどう云うつもりで、あんなことをしたのであろう。或はほんの不用意に偶然にあゝ云うことになつたものか、今日も尚私の胸にまざまざと刻みつけられた解き難い謎である。

お春さんの結婚が愈々確定的のものになったことが解ると私は一日も――一時もと云つた方がもっと私の心持を適切にあらわして居る。――この田舎町にじつとして居るこ

とが出来なかった。

東京へ！ 東京へ！

運命は一廻転して、お春さんの結婚すべき人も、期日も聞くことをせずに、私は東都の学堂に地織木綿の袴をつけた田舎者丸出しの姿をあらわしていた。

二十二

春さんを慕う切ない私の思いは、春さんに何の感応も与へなかつたろうか？

人間が生命を賭けて念じた程の感激のほとばしりが、果して彼女に何の微動も起さするに足らなかつたろうか？
五十を越した今日になつても私はつくづくこうしたはかない愚かしい冥想にふけることがある。

よし、それは片恋に過ぎなかつたにせよ、春さんに取つてはほんの只淡い幼友達に過ぎなかつたにせよ、私はそこに何の後悔を持って居ない。

異性の肉体からのみ発する一種名状すべからざる複雑なにおり、それは確かに男子の意志を亡ぼすに足る魔力の潜在を否むことが出来ない。私の歳が二十を越え二十五に達するに従つて異性を求めて止まない私の血が極度に沸騰するのをどうすることも出来なかつた。

私は懊悩して、これを道德に依つて救わんとした。神に

念じて勝たんと試みた。

徒労、徒労、人一倍健康な私の肉体の醜惡な獸性は私を戦慄せしむるに充分であつた。私は只春さんを思うことに依つてのみ僅かな平和を得た。春さんに対して童貞を保たんとする私の念願は絶対的なものであつた。こうした私の態度は世間の誤解を招くに充分であつた。私は何所へ行つても、おとなしい青年であつた。甚だしいのは女嫌いな青年として通つた。成程私は女に対して笑うに価する程の憶病であつた。はにかみ屋であつた。私は確かに二十七才に達する迄女を知らなかつた。寧し知るところの機会を持たなかつたと云うことが適切であるかも知れない。

しかし私の心は其反比例に醜惡そのものであつた。異性！ 異性の肉！ 何と云う素晴らしい魅力であらう！

これが所謂おとなしい青年、真面目な青年、女嫌いな青年の真相であつた。

日本に『さよなら』をする時私の心に堪え難い傷ましさを起したのは決して肉身の父兄に離るゝと云うことでもなければ、親しい友達と決別すると云うことでもなかつた。

それは只一念

『二十七才になつて、男性として完成された肉体の所有者である私が、若し此の航海中難破する様なことがあれば、女を知らずに死んでしまふであらう？』

と云う児戯に等しい恐怖であつた。冬の大洋の波は荒れがちであつたし、明治三十八年頃の船旅の危険に對して、私は未だ化学や物理の万能を信ずることが出来なかつた。グレンファーク号がまさにヨコハマの埠頭を離れんとした時、海員の、

『荒れますぞ?』

大きな高声を開いて、私の胸はドキンとした。降り出した、小糠雨にけぶるヨコハマ港頭の墨絵の様な光景よりも、私は防波堤に衝突して、はね上る海波の白い泡沫を、何とも云えぬ悲しさを持って眺めた。

それは総て私の異性を知らない哀愁から来る不満であつた。はかない悲嘆であつた。

二十三

多数の人間のなかに生活しながら、感情も言語も全く隔離された独りぼちは只体験した人のみの了解し得る底知れぬ孤独のうら淋しさである。

しとしとと降りつゞく雨、聖州の雨季のこうした夜が海底を思わすような重々とした物悲しい世界に人の心を導いて行く。何所からともなし聞えて来る虫の音は夜明けの近づいた事を知らせる。

隣りに住むスペイン人園丁の室からゴドンゴドンと云う

音がしてきて、まもなく、

『マリア、マリア、もう珈琲が出来たよ！』

これは嬉孝行な園丁の声である。ねむたげな返事をしたマリアは、それでも起き上る気配さへない。

私の異性―女に対するはかない追想と懊悩とは愈々深まって、七〇センチメートルの狭いベットのの上に名状し難い混乱した重たい頭は上げる事さえ出来なかった。そこに沈鬱な厭世観が新しい力を持って迫って来る。

×

X

X

十月二十日頃であつたろうと思う。どんよりと曇った空には時々太陽の光線が明るい青空を見せて居た。事務所の前にはメネゴニ支配人と二、三の監督が立話をして居た。突如、

『スズキ、スズキ』

けたゝましい支配人の声がしたので、私は外へ走り出た。

『見ろ、見ろ！』

指さした空を見ると、そこには、うすぐらい点々とした何者かが動揺していた。

不思議？　不思議？

私は、只

『何んです？　あれは、ふむ、あれあれ真黒な者が動いて来ます。』

呆然として見つめた。

それは丁度、私の地方で冬の初めの頃に降り出す綿のちぎった様な大きな断片―ぼた雪と云っている―が降っている光景に彷彿たるものがある。無数の黒点が密集団を作つて、とかく曇りがちな空をバックとして徐々と進展して来る。雲ではない、氷雨でもない、勿論セミトロピカル^①の聖州に雪の降る訳はない。

『何んです？』

私が再びこう叫びつゝ奇怪に堪えない面持で不思議な集団の進行を注視した。

『ガッファニョート』

誰れやらが答えた。

『スズキ、お前はガッファニョートを知ってるかね』

支配人が云った。私はこの奇名なのついたものの何んであるかを想像することさえ出来なかった。

『知りません。ガッファニョートは鳥？ 虫？』

『アハ、、、』

支配人も監督も崩れる様に笑った。

『見たまえ、そら！ もう飛んで来たぞ。』

遠眼には鳥とも虫とも判断することの出来ない群の先駆者がバラバラと飛んで来た。それは蝗であつた。蝗の大集団であつた。

蝗の群れは農園内の植物―草となく、木となく―いやしくも緑色をしたものを見ると驀然に下りて来た。マンガ樹やミカンの樹に鈴成りに止った無数の蝗は樹全体を茶褐色に見せた。余りに密集した蝗の群の重さで遂に枝が裂け落ちたのもあった。

コーヒー園や作間地に落ちた蝗は、柔らかに生長した唐黍や、ささげ豆を片っ端しから食いつくして影もとめざるに至った。移民達はブリキ罐や板をたたいて蝗を追い払おうとしたが、何の効果もなかった人力を以てどうする事も出来ない事を見た移民達は、神にたよるより外なかった。クラブニンヨス町からカトリック僧を招いて、水に塩をふりまいたり、何か呪禁めいた御祈祷をしてもらった。蝗は皮肉にもカトリック僧の面前でほしいままに食わんとするものを食った。

雨晴の輝いた道を通ると、草のないキレイな赤土の上に蝗は円陣を作って産卵をしている。こう云う場合彼等は踏み殺されても逃げ様としない。卵は螺旋形をしておって長さ一乃至二半センチメートル、太さ半センチメートル位で、土中に深さ七八センチメートル位の穴を掘る。卵の数は五十から百迄の数であるが、六キロスの重量の卵は百万

箇あると云うから、あの無数な蝗群の産む卵の数は恐らく宇宙の広さを計る様な最大級数に達するであろう。

卵が孵化するのは二十五日から六十日を要し、生長するのに五十近くの日数がかかり、その間に六度脱皮すると云うことである。

州農務局は蝗群撲滅の対策として各農場主に溝渠の開鑿をなさしめ、これに跳躍する蝗群を追撃せしめた。蝗は数十メートルの高空を自由に飛んで一挙幾十キロメートルの遠きに達するカバシダーデを持っている。現にアルゼンチンの草原からブラジル国の南大河、パラナ両州を横断して聖州に入り、今やまさに其進路をミナス州に転ぜんとしつつある位で、少くとも一千哩を飛んでいる。この自由にして大きな能力を持ちながら、彼は一度着土して産卵を初めるや、恰も飛ぶことを忘れたものの様に只跳躍するに過ぎない。（勿論低所は飛ぶ）この習性を利用して深さ一米ートル以上に達する溝渠には一定の距離を置いて更に深さ半メートル内外の方形の穴を掘っている。人間に追われて逃避する蝗群は機械体操でもするようにパタリパタリと溝渠の中に飛び落ちて行く。まもなく蠢動する卵で一杯になった其方形の穴が埋められて、新らたな穴が掘られる。それが又埋められて更に開鑿が始められる。幾度もこう云う労作が繰返へされる。宛然これ一種の塹壕戦である。

うその様な事実は蝗群のために汽車の進行が停止したと

云うことである。勿論それは鉄道のレールの上に止った蝗を引き殺ろした油のために、汽車の進行難に陥ったので、其大群が山をなしたためではない。州政府はこの対イナゴ戦の為に九人の検視官、三人の監督官を任命しし、イナゴ買収費として三十コントス、雑費として十コントスを計上している。確実なことは解らないが、州政府から蝗群撲滅費として支出した金高二百コントスに及んだと云うことである。

二十五

蝗が飛び去ってから急に農園は閑散になって来た。毎日毎日雨が降りつゞいて、珈琲樹の若々しい新芽が黒味がついた古い下葉の上に、礼装者の美しい冠のごとく繁り合つて来た。コロノ達は新らしい希望をかけて、再びささげや唐黍の種子蒔きに、大きな木綿張りの洋傘をさして出て行った。

流石にいそがし屋の支配人メネゴニ氏も折り折り事務所の戸口に立っているのを見受ける様になった。各部落の監督達も蝗退治の頃迄は毎日顔を出したが、この頃は土曜日に来る以外滅多にその姿を見せなかった。従って事務所の小使さんにも多少の骨休めをする時間がでてきた。簿記係のコエリヨさんと、書記のグレゴリオさんは一緒になっ

て、

『ススキさん、ススキさん』

よく私を呼んで、アルミランテ・トーゴーとか、ボルト・アルツールとか日露戦争の話に花を咲かした。私も自分ながら吹き出す様な不完全な葡語で、これに応答した。

しかし事務所の小使さんには矢張り厭な仕事は絶えなかった。

大降雨、暴風などのあつた折りはよく事務所と停車場をつなぐ電話線が切断して不通となつた。私は馬に乗つて濠々たる雨のなかをついて珈琲園内に建っている電柱を見廻つた、ブラジルの生活に新来者の私は雨に濡れることがよくないということは、誰も教へる者もなかつたので、何の考へもなしに、頭から顔へ、首筋から肌へ滝の様に流る雨水に濡鼠となつた。実際私の身体には何の異変を起さなかつし、こうして知らず知らずの間に頑健に鍛へ上げられていった。

その日は雨後の晴れ輝いた朝であつた。私は例の如く電話線切断を発見しようと、馬の上から一步一步注意の眼をはなさなかつた。電話線はシュンボラズの谷がチビリツサの低地へカーブを作る所に両断されていた。

馬を飛下りんとした私は、そこに異様の怪物の蠢動するのを発見して、思わずアツと叫んで棒立ちになった。

まばらな赤い針の様な毛のある如何にも強堅な甲羅―鎧

を着た様な小犬程な動物が、じゅつと地上に釘づけされた様に這っている。小さな首と可愛らしげな耳のあるのを見れば、此奴人間に食いついてくる程にも見えない。

『よし、生捕ってやろう。』

私は心のうちで、こう叫んで、さも死せるものの如く、だまり込んで注視の眼を放った。

奴さんそろそろ這い出して来たが、私が少しでも身動きをすると、すぐ逃足を見せる。なかなか油断がならない。

良く見ると、この動物から二メートルス位な所に五寸ばかりの穴がある。これが奴さんの巢窟らしい私と動物と穴とは丁度不等辺三角を描いているが、穴と動物との距離よりも遥かに近い。

『よし、あの穴に走って行こう。』

私は突として走った。果然奴さんも穴に退却したが、私の足と奴さんが穴にその首をのぞくのが殆ど同時であった。私は力強く思いきって甲羅を踏んだ。動物の根強くじりじりとした驚くべき力、負けてたまるものかという私の全身を集中した力、ともするこの奇怪なる動物が土穴のなかにめり込んで行くのではないかという様な感を起さした。さればといって、どういう防禦戦術があるかを知ることができないので、どうしても手をかける危険を冒すことができなかった。

幸に私は電話線修理用の針線を持っていた（この電話線

は至極細いものである）こう思いついた時には、私に余裕が出た時で、もう勝利は眼前にあった。

私は針金で、ぐるぐるとこの動物を縛り上げてしまった。而も何となし物恐しい気が先立って馬の鞍に釣り下げてからも尚不安な念を取り去ることができなかった。

二十六

『コエーリヨさん、是れを見て下さい。』

馬を下りると呼吸せきって石段を走り上った私は、こう叫んで、針金で縛った奇怪な動物を、折から事務所の窓に顔を出したコエリヨさんの前に突き出した。

『タツーだ、タツーだ。どうして生捕ったのかね。』

外へ走って来た。書記グレゴリオさんも続いて出て来た。三人は如何にも物珍らし気にタツーと称する動物を絞り巻いた。珈琲の乾かしてない乾燥場に遊んでいた数人の子供も集って来た。

『かわいそうに、タツーは人間を襲うことはありません。』

コエリヨさんは及腰になってその不自由なリュマチ質の手をのべるとタツーの尾を握った。

『こうして見ると何の力を見せないが、若しこの身体の半分でも穴の中に這入り込んだとしたまえ、仮令尾が切れても後へは引かんからね。』

『なかなか勇敢ですな。』

『蛇と同じですね』

『蛇処か君、タツ―はあの甲羅の断層をふくらして穴一杯になるんですからね。とても超人的な強力を持っています。』

コエリヨさんは書記を顧みて、

『グレゴリオさん、タツ―の針金を解いてやって下さい。足に糸でもくつつけて置いたら乾燥場を逃げ出す事は到底できません。』

こうつぶやいてタツ―を書記の前に投げた。タツ―は運命の命ずるままにその首さへ動かそうとはしなかった。

書記グレゴリオは伊太利人丈に未だタツ―の習性を知らないのです、何か恐ろしいものにでも障るようにしてぐるぐる縛っている針金を解いて乾燥場に放すと狼狽てて飛びのいた。子供達は小さな棒を持ってその甲羅を突きながら追いつ追わした。タツ―は何処か自分のかくれる穴がありそうなものだという様にテレーロを歩き廻ったが、敷きつめた坪瓦の上には、彼のとがった堅剛なその目をさし入れる小さな隙さへ発見することはできなかった。

私はタツ―は日本で何というかを知らない。辞書をくつて見ると『執余』とかいている。ブラジルに来ている同胞達は「陸亀」と呼んでいる。(注・アルマジロ)

乾燥場の縁に腰を下ろしたコエリヨさんは、その該博な

知識からタツーに関する話をぽつりぽつりと始めた。

タツーは *Dasypodideos* に属し四種に分類される。即ち

Prionodontes.

Xenerus.

Tatuais.

Dasypus.

である。是れ等の分け方は重に甲羅の断層の数に依って分類せられている。その内で最も興味を引くのはアルゼンチン産の *Tatu-phorus pillosus* というので、長さ僅かに一二乃至一五センチメートルに過ぎない。ブラジル産のは *Tatu-bola* (*Tolypeutis Tricinctue*) 又は *Tatu-apora* と呼ばれ敵に会うとその全身を曲折して手毬の様に丸く転ろがってしまう。伸縮自在な甲羅の断層が五段になっている。最も巨大なのは *Tatu canastra* 或は *Tatuacu* (*Prionodon giga* 又は *Dasypus gigas*) といつて身長実に一畧半に達する。甲羅の断層は十二から十三あり、歯の数が百の多数を算する。アマゾナス博物学者として有名なゴエルデ氏の記する所に依れば印度人ボロロ、バカイリス属の土人達はこのタツー・カナストラの爪を虎の歯などと巧みに組合せて、丁度文化人が宝石を連結して首飾となす様に彼等は珍重している。甲羅は小児の揺床としてパーム葺の小屋の内に、時としては自然樹の間に釣られる。私の取ったのは *Tatu gallinha* 又は *Tatu verdadeiro*

(*Desypus novemcinctus*)と称し、甲羅は九段に分れている。耳が極めて小さく殆んど頭に密着しており、普通のタツの足の指は五本あるがこれは四本に過ぎない。この肉は非常に美味で鶏肉に比しいということから名づけられたものである。

悪臭あるのは *Tatu Cabeludo* というので、まばらな赤毛が生へている。その大きさがタツ・ガリンニヤと酷似しているので、始めての人は是れを煮食してその悪臭に当てられてしまうことがある。

タツは蚊の幼虫、蛹、クウワツユ等を食うのは勿論、死獣の肉をも好んで求める。

白蟻や葉切蟻の巣窟をも襲うて片端から食いつくしてしまふ。特に *Tatu Cavallo* が最もこの習性を持っている。故にタツの住んでいる地方には、白蟻とサウバ（葉切蟻）は決して繁殖しない。原野などによく白蟻の高堂の林立しているのを見ることがあるが、あれはタツの殆んど住んでおらないことを証拠立てるものである。

しかし、ともするとこの剽軽者が夜間人家の近辺などを徘徊して雛鳥を襲撃する事がある。彼の堅実な甲羅は一寸ピストルの弾丸ではその急所を射止めることが困難である。この頃毎晩の様にコエリヨさん宅のバナナ林のなかに潜在する穴から這い出しては夜の寂漠たる世界に時ならぬ喧騒をかもす。身体の不自由なコエリヨさんがいくらピス

トルを乱発しても、彼は平然としてその穴から妙に光る眼を投げている。

タツーがこういう悪戯を止めて真剣にサウバ蟻の巣に穴を掘ることがある。一夜のうちに馬車の通行を妨害する様に土の山を路上に盛り立てゝいるのを発見することが少ない。聖州の農場主がタツーを保護しての彼特殊の妙技を利用する時代は遠くないであろう。

×

×

×

子供等のいたづらに逢って、タツーはやゝ弱り加減に見えた。私は子供等から奪うて、それを逃走することのできないセメントで塗った降雨式バニエーロ（浴室）に監禁して唐黍の実を与えた。しかし彼はこれを食うこともしなかった。人間の手から豊富に供給された食物よりも、努力して分捕った獲物を欲するのが彼の自然の欲求であった。彼は矢張り菓切蟻や白蟻の巣窟を突撃したり、深夜こっそり雛鳥を驚かす快よさを忘るることができなかつたらしい。

『自然に帰れ』

アルテヒシアルな生活はタツーに取っては牢獄よりも厭うべき世界であった。

三日目の朝、私がこっそり浴室の戸を開けて見ると、彼は鎧武者の倒れた様に、そのあわれな死骸を冷たいセメントボードの上に横たへていた。

鐘とラッパとでその日々々の労役が支配されて、まだ奴隷時代の面影を残している珈琲園生活も除草期に入ると、ラッパの音が聞かれなくなる。朝の起床鐘と夜の就寝鐘とが相変らず静かな空気をふるわして鳴り響いて来る。それは却って無聯な田園生活に何となく待ちこがえる様な新鮮な興味を与へる。

めまぐるしい収穫時から解放されて、コロノ達にもゆつたりした平和な気分が横溢して来る。慾をいへば雨がもう少し緩和されゝばよいと思うが、しかし雨は農作物の豊凶をトするバロメーターであるから、土に親しむ者にあつて雨を厭うのは反逆者の声である。

雨、雨、或時は急霰の様に、或時は深霧の様に降りどぎす日が多くなつて来る。私はこうした日曜日などにはよくコロニア（移民小屋）を訪問した。窓の小さい長屋建のほの暗いなかに焚火が真紅に燃え立っているのが、何時も私の心を惹いた。たまには煉瓦を敷いているのもあるが、多くは土間であつた汚れた壁、煤けた天井、それは板を張つていないので粗雑なカワラ屋根はとかく雨もりがちであつた。

風のはげしい横降りの場合などはガラス戸の無い窓には

無細工な板戸を鎖すので、室のなかをたそがれの如く見せた。

私の訪問する小屋の主人は伊太利人で、ヒオリと呼ばれていた。

彼は口癖の様に、

『おれはクラブレースではないよ。』

といった。南伊太利の酷暑と疲土とは、その住民の性格を狂暴にした。クラブリア人は丁度ブラジルのバイアノという様に、喧嘩好きな人間で一種軽蔑の代名詞の様になっている。

ヒオリはトスカ人で、それを誇りとしていた。独身時代にアルゼンチンに渡って牧場に働いた話が得意であった。見る限り限界のない大平野に、太陽は地平線の果てから出て果てに落ちて行つた。そこにはエンマの群れがはね廻っていた。

ヒオリは牛糞を燃やした火で、串にさした牛の肉をじりじりと焼いて食った。その例へ様もないうまさは忘れられないものの一つであった。若い娘のいる家に行つてマテ茶のまわし飲みの馳走になる興味は、五十に近い今日も彼の心をそそった。こういう話の終りにはきつと、

『アンナ、アンナ、珈琲だよ』

こう呼んで、自分の十七才になるバラ色の美しい娘にいつけた。やがて黒いコーヒーが、純白なエズマルタード

のカネカ（瀬戸掛茶碗）に波々とつがれて、机の上に匿かれると、夢見る様にアンナの顔を見上げて、

『アハアハ、、、』

と崩れる様に笑った。ヒオリは余り学問はなかったが、その血管には南欧のロマンチックな血が流れていた。

彼はアルゼンチンから小金を懐中して伊太利へ戻った。村で評判の高かった美人ローザと外国戻りの青年との間にはオペラにある様なシーンがあつて、遂に彼等の恋が成立した。

『おいローザ、おれはよくお前の家の窓の下でこんな唄をうたつたもんだのー』

彼は眼を細くして自慢の唄をうたつた。私には唄の意味も解らないし、節回しの巧拙の聞き分けもできなかった。しかし如何にも感心した様に黙り込んでジーツと聞いてさへいればよかった。真実声だけは耳底にすき通るようなはがらかないゝ声であつた。

丈のすらりとした妻のローザは、

『ヒオリもあの頃はそんな禿頭じゃなかった筈ですね』

台所からその愛嬢のある顔をひょっこり見せてくれた。

『お前だつて額にそんな小皺なんか無かつたじゃないか』

『当り前よ、ネエ鈴木さん』

『しかし、おれの声丈は相変らず若いだろう』

ヒオリの再び張り上ぐる声を聞くと、ローザは吹き出し

てしまった。娘のアンナも何処やらでくすくす笑う声がする。

降り止まぬ雨の夕幕は一層暗くなって、犬の往来や時として豚公の闖入の為に、移民小屋の土間はじめじめと濡れて来る。

台所からささげ豆の煮汁に豊かな豚油を入れたかおりが重い水分をふくんだ空気に漂うて来る。遊びに出ていたアントニオ、ジヨバンこの二人の少年（十五才と十三才）がどやどやと戻って来る。父のヒオリはまだ若い頃、その愛人ローザに聞かせた唄をうたっていた。

『さよなら、私のヒオリ』

こういつて立ち上った私に初めて気付いて

『まあいい、いい、伊太利名物のマカロンでも食べて行かんか。遠慮しなさんな』

ローザもアンナも出て来て私を止めた。しかし私は一度もその名物のマカロンの御馳走にならなかった。

二十八

たまたま晴渡った日曜日などに行くと、ヒオリは元気よく産後のシケロン（豚小屋）の豚に唐黍などをやっていた。垣根をめぐらした一畝に足らない菜園の芭蕉の下に、木製の腰掛（バンコ）を持ち出して私にすすめつつ、話好

きな彼は私の質問に答えた。

『私もね、アンナが生れてから苦勞しましたぜ。アントニオ、ジョバンニと続けさまに子供が生れたんでね。好きな私の唄がその頃から声が落ちたとローザもいうがね。私の渡伯した頃は物価も安かったし、珈琲の値も上々吉で景気がよかったが、子供ができる、景気が悪くなる、散々な日に遭いました。しかし神様は私共を見捨てませんでした』

ヒオリはこういつて空を見つめ加減に十字をきった。

『あれから珈琲は年々がら落ちて、取扱手数料も下ったが、幸に子供達が段々大きくなって来て手伝ってくれるのでね。子供は三人共自慢ではないが、御覽の通りおとなしい善い子でね、真実にいゝ子ですよ。ローザも私も運があつたというもんですな』

感慨深い眼をして私を見つめながら、

『なーに、メザーダ（月払額）などは知れたもんだがね。豚の収入が手伝ってくれるんで助かりますよ唐黍は五台ばかりしか採取らんから、外から少しづつ買って食わしています。二ヶ月に一頭づつは売れるからその収入と珈琲收穫高の半分は残りますかな』

『そうすると、どれ位残りますかね』

『さあ、こうと印刷した様な風にはいかないが、豚が一頭百ミルレース前後で約六百ミルレース、それに收穫手数料は多い年で六百ミルレース、少ない年で四百ミルレース、

平均したら五百ミルレース位なもんだろうが、その内でアンナももう嫁入り時に近づいてくるので、着物を買ってやらねばならずアントニオはサンホナ（手風琴）をほしいなんていったりして、彼は二百ミルレース近く減りますから一年都合よくいつて八、九百ミルレースという所でしょうな』

芭蕉の葉に風が吹いてばさばさと動くと、太陽の光がこぼれ落ちて、頑健なこのトスカノの赤ら顔を浮彫の様に見せた。

『しかしこれは計算さ、世の中は計算通りにはゆきませんからね。そら病氣なんていう不意打があるんでしよう』彼は色々な悲惨な例を語った。その中で面白いのは金を残して残らなかったという話である。

或る伊太利人は一年間働いて五百ミルレースの札を二枚残した。しかしこの男は何者も信ずることができなかつた。銀行に預ければ破産の恐れがある。（その頃よく破産した）農場主に托せばなかなか引出しに困難になる。他人に貸せば送金しない様なことがある。さればといって他の伊太利人の様に金貨にしてブリキ罐に入れて置くとドロボーに嗅ぎつけられることが無いともいえぬ。さあ心配だ、色々思案した揚句この男は皆寝静まるのを待つてコツコツと壁の煉瓦を一枚抜き取る工夫をした。恐らく彼はモンテクリスト以上の苦心をしたであろう。

漸く完全にこの労作は成功して、その奥に生命よりも大事な五首ミルレースの札二枚を押しこんで、またもとの様に煉瓦をはめて置いた。

彼は珈琲を収穫する時も除草する間も、嘗この煉瓦の奥にかくされた二枚の札を念頭から拭い去ることができなかった。

夕方珈琲園の仕事が終って自分の小屋に引き上げると先づ第一に人知れず、その煉瓦につけて置いた記号に何の異状がないかを見た。翌朝寢床から離れても、顔を洗わずにひそかに例の煉瓦を検査することを忘れなかった。やがて二年の農期が終って総勘定があると、彼は又五百ミルレースの札二枚を受取った。

彼は札のかくし場所をその妻にさへ秘密であつたので、どんなに誰も見ていない時を待ちこがれただろう。それは唯深夜より外なかつた。恰も暫らく離れていた恋人にでも逢う様な気分で二年間見たことのない無事な二枚の札を改めて更に二枚を加えるために、そろそろと煉瓦を引き抜き始めた。彼の手はぶるぶると震え戦っていた。

意外！ 意外！

煉瓦を抜き取った穴のなかには何物も見当らなかつた。彼は狂気の様になつて蠟燭の火をさし出して一本の針の落ちたのも見のがすまいとした。しかしそこには唯ぼろぼろになつた紙の断片のみがあつた彼はけたたましい大声をはり

上げて、

『マリア、マリア、マリア……』

つゞけさまに妻の名を呼んでその紙片をかき出した。

『おれのかくしたものはこんなもんじゃない』

あきらめ兼ねて彼の手は幾度も幾度も穴のなかに差し込まれた。

『泥棒だぞ?』

こう叫ぶのと妻のマリアの起きて来たのとは殆んど同時であつた。

『泥棒だ、お前は泥棒だ』

悪鬼の如くその妻に飛びかゝっていった。

『おれの紙幣を返せ』

というかと思うと、彼は突然妻をはなして又しても穴の前に走っていった。そうしてこぼれ落ちた紙片を土間から拾い上げた。とつさの間にこういう所作を幾度もくり返したが遂に、

『無い、無い、何も無い』

地団太踏んで棒立ちになったが、まもなく大声を挙げてあーあーと泣き出した。

あわれにも彼はもう正気でなかった。

二枚の札は決して泥棒に遭った訳ではなかった。煉瓦の奥はこの男の望んだ様に誰も彼以外見た者はなかった。唯一つ彼の予期しなかった侵入者があつた。それは油気の好

きな油虫であった。人間でない油虫はこの尊い五百ミルレースの二枚の札の価値を知ろう筈がなく、その好きな油氣――人間の手垢のついた部分から段々に食っていったに過ぎなかった。

後でそのぼろぼろになった札の断片が、哀れな妻に依つて農場主に持ち出されたが、それはもう神様の外どうすることもできなかった。

『どうです、金にはとかく油虫がつきたがるものでね』
ヒオリは謎の様なことをいってけろりとこした。

二十九

ヒオリの外にはもう一人私が訪問するコロノがいた。それはミゲル・サンシエスというスペイン人であった。

ヒオリは楽天的な運命論の帰依者で、小金も残していたらしいが、ミゲルは全然これに反対な性格を持っていた。ミゲルはワレンシアの生れで、バルセロナの工場生活をしてから渡伯したのであった。悲惨な労働と生活苦とは彼の心を暗くし、征服者に対する反抗は残忍の度を深くした。彼は社会主義などに対しても或る程度の理解を持っていた。

或る日私が彼を訪問すると
『君はこんな所に君の国人を働かせるつもりかね』

喧嘩でもする様に突つかゝつて来た。

『一個のカマラーダ（日給取）に過ぎない私にはどうすることもできません。只、私の眼で見たまゝをいってやるだけです』

申訳らしく私がいうと彼は

『よろしい、私の子供達を見たまへ』

雨晴れの湿った土の上には、六才位を頭に三人の子供が遊んでいた。汚れた着物は裂けていないというばかりであつた。彼は暗い顔をして

『私には外に十と十二才になる二人の子がある。朝の暗い内から夕の暗くなる迄、働いても働いてもポレンタ（唐黍粉をねったもの）も満足に食べられないじゃないか』

彼は五千本の珈琲を受持っていた。労働能率の上らない家族としては多過ぎる程である。三ヶ月毎の支払日に彼はこの手数料として百五十ミルレースづつ受取る筈だが、一ヶ月にすると五十ミルレースにしか当らない。いくら物価の安い時代でも五十ミルレースで五人の子供と夫婦が食つていくということは問題である。私は月給五十ミルレースであるといって不平を並べたが、このミゲル君の境遇に比べると比較にならない程よいといわねばならない。

『成程ね。ミゲル君、しかしメザーダ（月払額）以外に間作物とか豚とかいうようなものゝ収入はないのかね』

私は行詰つてこんなことをいってみた。ミゲルの返事は

矢継早であつた。

『それは君、コロノ仲間の金持階級のことよ、豚を飼う金を出す前に、私共は先づその飼養料である唐黍を売らねばならんからね。間作なんて名ばかりで知れたものよ。豚は漸く自家用の油をとる位が関の山さ』

彼は太い吐息をついた。

『そうかね』

私も感慨深い声を出した。

ミゲルの不平は単に食へないという問題ばかりではなかつた。彼の説く所に依ればサンパウロ州珈琲園の労働は全く奴隷の境遇である。エスクラボ（奴隷）解放令を布いても、農場主の対労働者の観念はアフリカの黒奴に対するのと五十歩百歩である。只違ふのは黒奴はその一生を買取つたのであるが、被等コロノは一ケ年間に限られているという「時間の差」に過ぎないというのである。

『君は事務所に働いているんだからよく知っているでしょう。私共が農場主又は支配人を訪問するには 先づ遠方から脱帽をして、戦々兢兢先方の許可を待たなければ近づくこともできないじゃないか。』

私のうなずくを見ると『古いアリストクラシア（貴族）の多いヨーロッパだって、今時そんな馬鹿氣た階級的行為は亡びてしまったよ。君、ブラジルは共和国じゃないか』

彼の声は急に鋭くなった。

『そんなことは先づよいとする。しかしどうしても我慢のできないのは、監督から私共は皮の鞭で追い廻わされることだ』

沈痛な面持で私をまともに見つめたミゲルの限には涙らしいものがあつた。

私はふと或一場の驚くべき光景を思い浮べずにはいられなかつた。それは――或日一人の半黒の労働者が、支配人メネゴニ氏と事務所前で何事か話をしていたが、段々声が荒々しくなつて来たので私は窓から顔をだした。途端にメネゴニ氏がその相手の半黒を十数段ある石段から突き落す所であつた。

怒号せるメネゴニ氏の手には乗馬用の皮の鞭が力強く握られていたのである。これはほんの偶然の出来事であつたに違いない。又誰だつて憤怒した場合にはそれ位なことは有り得ることであるが、私は、ミゲルの言葉を軽々しく聞き流すことができない様な気がした。然し私は、

『それはちと極端だね』

ミゲルの言葉を肯定しなかつた。

『事務所などに居つては珈琲園の真相は到底理解できるものではありません。農場もこゝなどは寛大な方さ。支配人は口やかましいが人がいゝんだからな』

ミゲルの顔にもやゝ平和な気分がほの見えてきた。

『ブラジルも一人のリンコルンが必要ですかね』 私はこう
いって立ち上った。夕暮の日ざしは開け放たれた隣室の窓
一杯にさして、敷布を掛けた寝台が真っ白に見えた。不幸
な貧しいミゲルも、その国の習慣に従って、如何にも寝心
地よさそうに寝台を飾ることを忘れなかった。

三十

私は伊太利人と西班牙人との珈琲園に対する相反する生
活を見た。私はヒオリの考へにもミゲルの意見にも真理の
存在を否むことができなかった。二人の見方が殆んど相容
るゝことのできない程離れているが、それは何れも珈琲園
の実相で、丁度ものゝ裏表の様なものであった。もつと解
り安くいうと珈琲園労働者にはヒオリの様なものもある
が、ミゲルの如きものも少なくないということである。私
は自分の半年そこそこの農園生活の体験に依って、無謀な
是非の批評を下すことの危険を望まなかった。私ほ成るべ
く多くのコロノに接し、その实际生活にふれることにつと
めた。

農園内の労働者は伊太利人が六割、スペイン、ポルトガ
ル、アウストリア人等が三割位を占めて居たが、残りの一
割がブラジル人であった。その多くは黒人で、さもなくば
多少黒人の血を混じた所謂ムラト（半黒）であった。

彼等は珈琲園の労働よりも、カロセーロ（馬車引）か、厩に働いて牛馬を取扱う様な労働を好んでいた。バイア州より出稼に来る黒人の内には狂暴なものも少なくなかったが、聖州生れの是等は極めて従順な、お人好しが多かった。

その内にシーロ (Francisco を略したもの) と呼ばるゝ髯髭も頭毛も雪の如く純白になった八十を越えた老人が居た。

シーロはアフリカから買われて来た奴隷で、始めビスコンデ・ピニャール駅の伯爵農場に働いていたのである。頗る伯爵一家のお気に入りで、コーヒ園内の労働よりも伯爵家の家庭内に使傭されていた。

老シーロの静かに落付いた話に依れば、ピニャール家の息子達は殆んど彼の黒い手を煩わさないものはなかったとのことである。就中長男のドクトル・カルロス・ボテリヨ氏（当時の州農務長官にして日本移民の契約者）の負けず嫌いな、我まゝな幼年時代の逸話を語って聞かした。

老シーロはピニャール伯爵がこのチビリサ農場を開拓し始めると同時に移転して来たのである。帝国主義者でドン・ペードロ帝二世の忠臣であつたピニャール伯爵が、共和政府を転覆せんと謀り、軍資金を托した彼の使者は、その信頼を裏切つて、リオ、サンパウロ間に於いて姿をかくしてしまつた。

勿論この事件は穩便裡に葬られたが、伯爵はそれ以来懊々として樂しまず、とかく病床に親しみがちであった。

現在の農園事務所になっている奥のあの大きな室に残っているジャカラ ندا（木の名）製の寢床に横たわって、伯爵はその鋭い特有な眼を見はって太い溜め息をついた。

伯爵は聖州に於ける十指に数へらるゝ都市サン・カルロスの草分けであった。リオ・クラロ市から奥地、即ちジャウ、アララクワラ、ジャボチカバル、ドイス・コルゴス駅方面への鉄道は、The Sao Paulo Rio Claro Railway の名の下に鉄道会社を起し、その資本は主にピニャール一家を以ってしたものであった。サンパウロ銀行も彼の創立する所であった。バンデランテとして珈琲園を開拓した点に於て、寧ろリンコン以北のモジー・グアスー流域に進入したマルチンニオ・プラド氏、リベロン・プレトの森林に斧を揮ったジュンケーラ一族よりも先鞭者であった。

伯爵は帝政の崩壊以来全く社会から遠ざかったが、孤独な淋しい生活は実に堪へ難いものがあつた。

伯爵は子供の様に駄々子となり、怒り易くなつて行つた。伯爵は其日は何時になく静かに見えたが、突然夢からさめた様に『ドン・ペードロ・セグンド』

幽かながら力ある声が、純白な口元のなかからもれたのが最後であつた。伯爵はきつと千八百八十六年にペードロ二世陛下が、サンパウロ州に行幸遊ばされた折、伯爵に賜

わった限りなき親愛の情を今更の様に思い浮べたのであるう。

それは実に悲しい情景であつた。雨季も漸く終らんとする一千九百一年三月十一日であつた。窓先を塞いで居るパインラも、ぽつりぽつり咲き始めた淡紅色の花を、つい夕方から降り始めた雨が、糸の様に垂れてしとしと身に食ひ入る様な音を立てゝ居た。

ドクトル・ファイルミヤノ・ピント（元サンパウロ市長）
ドクトル・ベント・ブエノ（元司法長官）クリスピニアノ
大佐の夫妻（何れも伯爵の女婿）を始め、多くの息子達が、
皆うす暗い地場の灯のまたゝく下で、声を挙げて泣いた。

シーコも床板の上に倒れて、十字を切りながら、

『オー・メウ・デウス！』（おゝ私の神様）

と叫びながら声を限りに泣いた。

シーコは奴隷解放以前既に自由を与へられて居たが、奴隷以上の忠実な召使であつた。

伯爵が亡くなつてから、チビリサの農場は子供達の合資組織となつてしまつた。大きな子爵の邸宅の一部は事務所になつて、只其の珈琲収穫時丈けドクトル・ベント氏か、ドクトル・ファイルミヤノ氏かの家族が来て数カ月を送る。一年間のその数ヶ月が老シーコに取つて忘れ難い伯爵時代が復活して来るのであつた。彼に与へられた農場内の家から出て、終日主人の邸宅内に何くれとなく働くのが、誰れ

の眼にも注意を引いた。

シーコはベント氏が引上げてからも、朝夕事務所前に来て、私に、

『ボン・ディア』

『ボーア・タルデ』

と挨拶して（竹籠）に唐黍を入れたのを肩にのせて通った。それは彼の唯一の仕事である豚に食料を供するのであった。彼は主人の命令で、働いても働かないでも食う丈は支給されて居たが、老シーコは八十才になっても農場に属する豚に主人の来た時に食料となるに唐黍を投げて、貪慾な動物共が競り合つてこれを争うのを、面白そうに眺めるのが何よりの楽しみらしく見えた。或朝、彼は何時もに似ずだまり込んで私の前を通つて行つた。私は彼の姿をジツと見送つた。老シーコの歩行振が何となし大儀らしく見えた。凡そ五十メートル位は歩いたろう、彼はパツタリと倒れてしまった。私は何か恐ろしい様な暗示を感じて

『コエリヨさん、大変です、シーコが倒れた』

と叫びながら走って行つた。コエリヨさんもグレゴリオさんも私の後から走つて来た。老シーコに手を掛けて引き起したが、もう呼吸は絶えて居た。

『ほんとうに死んだのかね』

コエリヨさんは老シーコをゆすぶつたが何の返事もなかった。彼が主人の次に愛する豚は、まだ数十歩を離れた

豚小屋のなかで、ウィ・ウィ・ウィと老シーコの来るのを待ちこがるゝ様に聞こえた。コエリヨさんも、グレゴリオさんも頭を垂れて十字をきった。私は眼に痛ましい涙のにじみ出るのをどうすることも出来なかった。

老シーコは死んだのだ。恰も枯木の倒れる様に、何の苦もなしに、而も何の予告もなしに死んで行つたのだ。これが奴隷であつた黒奴の最後であつた。

三十一

雨季には珍らしい晴れ輝いた或日曜日の朝であつた。シュンボラズの盆地から南風がざわわとそらの樹木をゆり動かして居た。

四五人の部落監督、工場長などはもう用件を終へて、皆事務所前のシメンタード（セメンで塗り固めたる）の前庭の橡に腰掛けて居た。

支配人メネゴニ氏も椅子を持ち出して腰掛けた。

蝗の被害も案外早く回復されて豆も唐黍も青々と生長して采たことは、監督達も何となし安らかな落付を見せて、一寸ニュースでも語り合ふと云う風に身構へて居た。

私は何時かは等の人達から各国民の珈琲園――労働者としてサンパウロ州にどう云う成功をおさめて居るかを聞いて見たかったので、こんなよい機会はあるまいと、

『ホルテさんどうです、ポルトガル人は金を儲けて居ますかね』

ホルテは肥え太ったあから顔の髭のこい、如何にも物語りの絵から抜け出して来た様なポルトガル人だった。

『駄目ですな。それあポルトガル人だつてサントス、リオなどの商人には大したものがあるがね。農業では成功者は余りありません。私の国の者は文盲ですからな。一つ面白い話を聞かせようかね』

ホルテは特有な大きな眼を光らして、カシンポ（煙管）の煙草をつめ替へた。

『ブラジルへ行けば金の成る木がある。何処へ行つても金儲けは朝飯前だと、こんな風に考へて私の国からサントスに上陸した一青年があつたのです。所がこれは又面白い運の廻り合せと云うものです。サントスの埠頭に第一歩の足を下ろすと、そこに一枚の英金貨が落ちて居たじゃないか。』

『おや！』

若者は玩具でもいぢる様に拾い上げてちつと見つめて居たが、

『何んだ。けちくせえ。もうブラジルの這入口にこんなに金貨が落ちて居るぞ、奥へ這入ったら一面に金貨がぶら下つて居るに違いない』

若者はこういふと、其の金貨を指でピンとはじき上げ

た。強烈な日光の反射を受けて、金貨は黄金色の閃光を見せながら海に落ちて行つたが、きゝ取れない程の音響がした。それが金貨の最後であつた。

若者はサンパウロ州の奥地へ這入つてあらゆる労働に従事したが、何処へ行つても一枚の白銅貨さへ見当らなかつた。

『こんな筈でなかつたが。』

若者は口癖の様にこうつぶやいて、あきらめきれない黄金の夢を見て居た。

『えゝ、ススキ：お前はどうかねハハハ、』

ホルテは笑つた。それは私を笑つてゐる様にも見えた。

『ポルトガル人は珈琲園には感心しないが、鉄道工夫は独り舞台ですね』

支配人は口をはさんだ。

『独逸人は？』

『独逸人も珈琲園労働には適当しません。彼等はのろのろして居て朝の暗い内から鐘やコルネタで叩き起こされる様なことをよろこびません。自由かつてに自分の仕事をやらせたら一生でもこつこつやつて居るがね』

『しかし、シュミットはコロノから珈琲王になつたんじゃないか？』

私は合点が行かないので、こんなことを云つた。

『シュミット？、あれはコロノで儲けたんじゃない。贋札

でもうけたのさ、シュミットは時勢の生んだ僥倖児だよ』
うそか真実かは知らない。シュミットは農場の支払に真偽の紙幣を絞りまぜて使用した。そうして贋札だと云って取換へに来る者には『そうか、そうか』と云って何の躊躇もなく真物と交換してやった。

そこでシュミットの贋札なら構わんと云う事になって、四方に拡がって行つた。

しかしシュミットは自分の手から直接払ったものでなければ決して取換へなかつた。

『人間は運と頭と両天秤で当るとすばらしいことになる。シュミットの札はリベロンプレト郡内から外へどれ丈け出で行つて、二度とシュミットの真物と交換する必要のなかつた高はどれ丈けあつたらう。何しろ時代が時代ですかな』

何故自分も贋札を使用わなかつたらう——と後悔する様にもきゝ取れた。

『然しシュミットは偉い。いゝ加減に見切りをつけて、二度とあゝ云う事をしなかつたからね』

簿記係のコエリヨが窓から顔を出して云つた。

『金を儲けた人の歴史には何か尋常でない暗黒面があるものですか』

『日本でも一代で百万長者になつた者に、矢張り贋札事件を持って居るものがあります』

私も合槌を打った。

『伊太利人はどうですか？』

『伊太利人？』

長い髭を引っぱる度に、其の角形の顔を左右に動かす、チビリサ部落の監督ミネゲチは私の顔を見守った。彼は伊太利生れである。

『伊太利人はブーロだからね、珈琲園労働には一番適当らしい。しかし金を少しためると町に出たがる。町に出ない者は本国に引き揚げてしまふ。シシリア、カラブリアなんて石塊だらけの自然的に恵まれない土地から来た者が多いから、辛棒はするが、話程金を残した者はない様です』

伊太利人である支配人メネゴニ氏も同感らしくうなづいた。

『マタラズは？』

『マタラズはサントス、サンパウロ間の鉄道工事には工夫達にバナナを売って居たそうだが、矢張りねマタラズにもシュミットのような話がちよいちよい外へもれますぞ』

皆何か思い当ると云う風に笑い合った。

『スペイン人はどうです』

『これは問題にならん。ストライキの張本人、怠け者、喧嘩好き、借金して逃げない者はこちらから追い出すより外ない始末に終えぬのはスペイン人でしょう』

『しかし例外もありますぞ』

『勿論です』

『ブラジル人はどうですか、シエンボラーズの監督さん』

黙りこんで居たブラジル生れの監督マシエルに言葉をかけた。

『ブラジル人の珈琲園労働者と云っても二種に分れます。即ちサンパウロ州生れと、他州から来たもの多くはバイヤノですな。サンパウロ州内生れの者は余り珈琲園労働は好みません。恥かしい話ですが食って生きてさへ居ればいゝんですからナ。一種の規律に束縛されることは苦痛なのです。彼等是一日働けば二日も三日も遊んで居ます。勤勉な者で馬車引、駁者などを好んで働きます』

こう云つて巻タバコに新らしく点火した。

『次はバイヤノですな。彼等は何百里と云う汽車の通じない所をタピオカ（マンジオカの澱粉より製造したる食物、日本に例へば飯粒を干した様なものなり）を背負つてサンパウロ州に来る実に慄悍な民族です。殆ど聖州コーヒ園の乾燥場の仕事は、彼等に依つて行われると云つても、異議をはさむ人はありますまい。

しかし彼等も一乾燥期を過ぎして、バイアに引き上げる者は別として、二年、三年とサンパウロ州内を渡り歩く者の八割位はもう見込がありません。

彼等は女を買う。ジョゴ（賭博）を覚える。何年たつても木綿のメリケン粉袋に一切の身代を入れて今日は東、明

日は南と渡り歩いて、終いにはピストルか刃物の錆となつてしまふのが落です。彼等は気早な喧嘩好きですからな』マシエルは監督中の物知りであつた。感慨に堪へない様な面持ちをして、

『コエリヨさん、ブラジル人は駄目ですな』

『ノン・プレスタ、ノンプレスタ』（駄目、駄目と云う意）

簿記係の声をきくと皆々立ち上つた。朝飯の鐘が軽い涼風に送られて、夏の清新な緑に埋まつたコーヒー園内の空気に快よい震動を起した。

三十二

支配人メネゴニ氏の私に対する信用は益々加わつて行つた。事務所に必要な金銭を受取る場合、何時も私はクラブニンヨ町へやられた。支払日の前など可成りの大金を町に行つて小銭と取換させられた。

私がそうした役目を務めることは誰れでも知つて居た。今日から考へると、余程私の身边が危険であつたことが解る。

或る日私は、例の如く十数枚の五百ミルレースの紙幣を小銭にして町から戻りつつあつた。無心な私は本街道を通らずに、近道を取つて悠々と馬を走らしていた。

クラブニンヨスの町をぬけると、サペ（茅の一種）が蕨

の延びたのと雑り繁って、両側から道を塞いでいた。やゝ陳斜した左側は放棄した珈琲園で茫々と雑草が生え、遠くの方に原始林がちょんぼりと丘陵の高まりに残っていた。一本のイペの樹が、季節でないから花は咲いていないが、ひよろひよろと高く聳え、その少し向うからシンポラヅ農場が展開されていた。私の乗っている白い馬が、もう一息でそのイペの樹の下に出るという所で、一人の黒人が立っていた。

『オー、ジャボネース』

私は何の気もなしに馬の手綱を引いた。

『何？』

『錢をおくれ』

私は、はっとして黒人の顔を見た。二十四、五才位に見える獰猛な顔、厚い唇、光るまなざし、私は内心これはしまったと思った。

『錢なんて持っておらんよ』

『いやある』

『無いよ』

『ある』

私は無中になって白い馬の尻を打った。何の拍子か馬は黒人の方へ蹄を挙げて立ち上った。私はその時どんな風に黒人が馬を避けたか、私の馬はどんな風に走ったかを知らない。私は只のめる様になって珈琲園の急勾配のカレア

ドールを一目散に走っていた。

私の耳の底には

「Tem, Tem」(あるよあるよということ)

と叫ぶ黒人の声がして時から迫って来る様な気がしてならなかった。

事務所に着いた私は呼吸せききっていた。

『何んだねススキ、お前はどうかしたのか?』

大きな机に向っていた支配人が声をかけた。

『今、私は黒人と逢ったのです』

『黒人! それがどうかしたのかね』

『金を出せといいました』

『ヂニエーロを呉れ、ふむ』

支配人はじいっと其灰色の眼で私を見まもった。

『ススキ、お前はどうかね、若し黒人がお前に金を出せといっでどうしても聞かない時は渡してやるかね?それをおれに聞かしてくれたまへ』

私は何の躊躇もしなかった。

『えゝ勿論私は渡します』

『なぜ?』

支配人は以っての外であるという顔をした。

『私にはどんな大金でも生命には換へられません』

『困るね、ススキ、日本人は柔術を知っている。露西亜に勝った勇敢な国民である。黒人の一人や二人何んでもない

じゃないか。えゝ、ススキ、お前はそういう場合真実に金を渡してしまうかね』

メネゴニ氏はそれはどうしても信ぜられないというよりは、寧ろ信じたくないという様に見えた。しかし私は偽る事が出来なかった。

『私は金を渡します』

断然いきってしまった

『困るね、ススキ、渡しちやいかんよ。ええ、お前は日本人ぢやないか』

『日本人にも色々あります。私は喧嘩ならば誰れよりも弱いのです』

他人の金で生命の遣り取りなど思いもよらぬことである。私はこういうより外ありませんでした。実際私はトルストイの無抵抗主義に心酔している時代であつたし、小児染みた偉らそうなことをいって、彼等をよろこぼすことは容易であるが、私の良心がこれを許さなかった。

日露戦争は日本人という者が戦争に強い国民である。個人としてもJuji-Tsuを以って手軽に相手を負かしてしまう、という風に簡単に考へさせたらしく見えた。

然るに此強い等の日本人は何事ぞ、黒人に強請せられたならば、何の抵抗もなしにその持金を易々と手渡してしまうという。これは実に奇怪千万な、解すべからざることであつた。

支配人メネゴニ氏は深い溜息をして、何か解き得ない謎でも判ずる様に顔をうつむけた。

三十三

雨季といっても朝から晩迄終日降りつゞくことは少ない。

午後三、四時頃激しい雷鳴があつて、滝の様な夕立が慌しく降り過ぎる日の方が多い。

リベロン・プレット地方に於ける雨季の状態を数字に現わすと、

月名	雨日	雨量	風向	最高温度
十二月	二二	二三四、七	北西	三三、八
一月	二一	二六〇、九	北東	三五、一
二月	二二	二六七、七	北西	三五、七
三月	八	二三〇、九	東	三二、八

北の方、世界で最も雨量の多いアマゾナス地方から、赤道の温熱を含んだ風が吹き出すと、雲の形が變つて来る。所謂入道雲が現出して、白い綿花の塊の様なものが幾重にも重り合つて時たまそれに太陽の光線が金色を帯びて輝く時がある。悪魔の洞窟の様な黒晴々たる色を見せて、宇宙の光明を塗りつぶす様な勢でぐんぐん広がって行く時がある。

雲の峰いくつ崩れて又いくつ立つ其峰に日の輝けり
夢の峰くずれて早き北風にとどろき渡る雷の音

こんな歌をよんだことを覚えている。

四月に入ると東風が吹き出して、乾燥期が始まったことを知らせる、

暁明、東天漸く紅に満ちる頃、颯々とゆるやかなうねりの小丘陵を吹き過ぎる東風は珈琲園地帯の忘れ難い快よさである。

夕立の過ぎ去った後の月明煌々たる光が、水分を含んだ深緑の革や木に流るる涼しさは、雨季の例へ様もない感銘ある。

私はいつも、こういう夜に限って事務所を閉めてから、きつと只一人裏園の芭蕉林のなかをそぞろ歩くのが癖であった。

二百メートル位の芭蕉のアベニード、広々とした葉がひらひらと翻ると月光がこぼれて暗い地上に明るい影を投げる。時として無風――恐くはサンパウロ州の夜の一特色であろ――の時は、月光を浴びた芭蕉林は不思議な夢の世界を展開する。

日本移民は果して契約せらるるであろうか？ 珈琲乾燥

場の労働も時間が長いという以外に、純然たる労働者に取っては、左程困難とも思われない。

『珈琲園の労働は何んでも体験しなければいけない』

ということで、事務室の小使をしながら私は時々鋤を取って、珈琲園労働に出て行った。

収穫後の畦崩し (Espalamar de Cisco) も、さ程とは思わなかった。珈琲の落葉の腐朽したのが土の香と雑つて鼻を打つのは何ともいい様のない懐かしさであつた。唐黍の成長したなかの草を取りつゝ若い娘のなまめかしい唄を聞くと、流るゝ様な汗も氣にならなかつた。

くたびれて、ほつと太い呼吸をしながらコロツテ（一種の水樽）に口つけて、とくとくとくと水を飲むうまさは、只土にしたしむもののみの知る味である。

しかし、しかし、私はいつも私に煩悶の矢を放って考へにふけた。

徳富健次郎氏の巡礼紀行をよむと、トルストイ翁の菜食主義や労働は一種彼の物好きで、彼の富あつて始めてできることであるという様に感ぜられて、不快の念を起したという様なことが書いてあつたと思つてゐる。社会主義者は現代の労働は苦痛であると批評している。

私の体験した珈琲園労働も一年とか、一年半とか至極短期な、限られた範囲に於てこそ、さほどに難儀なものでないに相違ないが、これを五年、十年或は一生働かなければ

ならないとしたなら、は、問題は新らしい別の意味を含んでくる。とにかく社会主義者のいう如く、珈琲園の労働は苦痛に相違ない。

私の珈琲園労働観は、私に依つてのみいわるる不具なものであるうか。純然たる労働者の眼から見たならば、彼のスペイン生れのコロノが感じた様に、奴隷に等しい屈辱ではあるまいか。

私は堪え難い重味が双肩の上に落ちてくるのを感じた。

『私は粗忽であつてはならない』

私の胸にひらめく何ものかゝあつた。

『然しブラジルに日本人を入れるという事は、単なる労働問題の上からのみ見る事ができない』

こう気がつくつと、身が軽々となつた様に晴れやかになつた。

コーログの音は淋しいながら、夜更の情調を一層こまやかな趣あるものとした。

三十四

十二月の大降雨季に入ると、珈琲園の雑草が驚くべきスピードで生長してくるが、監督達は収穫期とは比べものにならない程落付いた気分になる。一日に一回づゝどんな勤勉な監督でも、午前と午後の二回に、その受持つている区

域を見廻ればよいのである。支配人の如きは好晴を選んで、自分のいゝ馬の毛色の脂ぎった光彩と、正しい歩調とを楽しむといった風に、農場内をあちこちと巡視すればよいので、収穫時の如き緊張味がない。

勤勉そのものゝ様な支配人メネゴニ氏も、自分の大テールの前に坐つて、つくねんと降り止まぬ雨を眺めている日が多くなつた。

メネゴニ氏は何故かその妻女をサンパウロ市においていた。七ヶ月余に渡る私のコーヒー園生活中にも、メネゴニ氏の妻は一度も農園に顔を見せなかつた。子供を教育するためだという人もあれば、余り仲がよくないからだと言ふ声も聞いた。

がみがみとすぐ激怒して叱りとばす高声、灰色の鋭い眼光の睨み、表面からのみ見た支配人メネゴニは人情もない粗野な人の様にも取れるが、私は彼がしょんぼりと何処を見つめるともなく立っている姿を幾度も見ている。何かしら彼の心の底に、人に打ち明けられない様な秘密と寂寞とを持っているらしい。

少なくともメネゴニ氏は私に取っては、これ以上望み得られない人情味を見せていた。

『ススキ、今日は町に行こう』

好晴な日曜日など、座席の周囲を柳で組んだトロリ（馬車）に自ら皮鞭を取つて、クラビンニョス町へつれて行つ

た。私は伊太利人のいい家庭へは、支配人に依って何かしら日本政府の使命を帯びている労働者として紹介された。その内の或家庭――今どうしてもその名を私の記憶から呼び起すことはできない――を訪問した時である。

十段ばかりの石段を登った所にベランダがあつて、若い一人の娘さんが椅子にもたれていた。

黒い僧服を着たカトリック僧が、ゆらゆら動く動揺椅子に腰を下ろしていたが、何か面白い一とくさりの話がすんだという調子で、ハ、、、と笑い崩れている所であつた。その脂ぎった赤らんだ顔に何処か好色らしい影が閃めいた。

『日本人！珍しいね。御近ずきを願います』

眼鏡をはずして私をちらと睨んだ。それは実にあのカトリック僧の、腐敗を諷刺した絵に見る様な妙な瞳光であつた。

『お近ずきになることを喜びます』

こういう有閑階級に対する私の反感が伴って、自分ながら余りに無愛想過ぎはしまいかと思う程簡単な挨拶をしたのみで、だまりこんでしまった。バードレはそんなことは少しも屯着なく、日露戦争の話など我が物顔にしゃべり散らしてから、

『時に妙なことを聞きますがね、日本人は御飯をたべる時は両手に一本づゝの小木片（箸のことである）を持ってこういう風に……』

僧は食指を箸の様に見せながら、その口にかたみ代りに持っていて

『……物を食べるというが、真実かね』

『アハハハハハ』

私は訳もなく笑いこけた。ブラジル人はよく私に日本に鉄道はあるか、電車が走っているかなどということを聞く。甚だしいのになると日本婦人の〇〇〇は横にきれているというが真実かという様な、無智な質問を臆面もなく放つのを一再ならず聞かされている。

元来物知りであるべきカトリック僧迄が、こんな馬鹿々々しい質問を発して恥としないのは片腹痛い限りであるというので、私は一言も物をいおうとしなかった。

『おかしいね………』

バードレは半ば私の真意をさとった様にも見えた。

『……そういう話はうそかね？』

『日本人を皆そんな眼で見えています。一本の木片では、いくら器用な人間でも物を運ぶことは不可能じやありませんか』

私は又笑うより外なかった。

『だから聞くんですよ。マルコポーロで紹介された日本ならね、それ位なことは……かくさなくてもいゝんだよ君、一本づゝの小木片をこういう風にね、そら君………』

バードレは再び所謂日本人が物を食う真似を滑稽な身振

りでして見せた。

『ハ、ゝ、まるで道化役者の様ですね、日本人は神さまでは
ありません、奇蹟はできませんよ、お僧さま』

癖に障ったので私はむっとした。

『でもね君……』

僧はどうしてもそんな筈がないという様な顔をした。

いつの間にか娘さんは、椅子を離れてベランダの欄干に
身をもたせながら、そこに這い廻あっているバラの黄、淡
紅などの花片を無心にちぎり取っては、その掌に一杯ため
ていた。

『だってお僧さん、本人がそういうじゃないの、』

晴れやかな微笑をたゝへた顔が、稲妻の如く私の眼をそ
れてバードレに移った。

『そんなに人を疑ぐるもんじゃないわ』

娘さんはその事のバラを誰れに投げるともなく、空に
パツとうち上げた。三十五度に近い温度をふくんだ明るい
日光のあふれたベランダは、恰も無数の蝶々の飛び乱れる
様に花片がはらりはらりと私の頭の上にかゝり、メネゴニ
氏の膝の上に落ちた。

『御免なさい、ね。あたし失礼したわホ、』

娘はほがらかに笑った。まだ幾片のバラの花弁が白魚の
様な細い華奢な指に弄ばれていたが、つとそれを唇に持つ
ていった。

『あら！少し酔っぱいわ』

無心な娘の態度は総ての人を魅するに充分であつた。メネゴニ氏も、私も心から笑つた。

苦い顔をしていたバードレにさへ微笑がほのめいた。

『あたし、うれしいこと、皆笑つてよ。いゝでしょう。あたしも笑うわホ、』

娘の正しく揃つた歯が、桃の花の様な唇からもれた。それは実に再び見ることでできない、宝玉の閃きに打たれた様な感じであつた。

何という印象的な女性であろう。

私は夢ではないかと娘の顔から靴――白い靴をはいていた――そうして全体の姿をおじおじしながら貪ぼる様に注視した。

『いや、これはしたり、パウジンニョ（小木片）の話でつい遅くなったわい。ススキもう帰る時間が来たようですぞ』

メネゴニ氏は立ち上つた。私は惜しい夢をさまされた様にぼんやりメネゴニ氏の後に続いた。

『アテ・ローゴ』（後程迄という意）

『アテ・オートラ・ビースタ』（またお目にかゝる迄という意）

と順々に手を振っていつて、最後に娘さんの手を握つた時、私は私の手に強い圧力を感じてハットした。

青い灰色の澄んだ眼が私の心のドン底を見すかす様な鋭さで見つめていた。

純白な彼女の顔色が段々うす桃色に熱の持って来るのを見た。

私の手はまだ娘さんの手を固く握っていた。

不思議な衝動！

女性に対して限りない内気な私に取って、あり得ないものであった。私はハツとして魂のない人形のように頭を垂れた。それつきり再び彼の女を見つむる勇気を振り起すことができなかった。

『アテ・ローゴ』

もう一度低い声でさゝやくのが関の山であった。

私は走る様に石段を下りてトロリ上のに待っていたメネゴこの傍に腰を下した。

『解らない！解らない？』

生れながら心臓の不完全な私の胸の動悸は、いやが上に昂まり、その不整な高鳴りが早鐘の様に全身に流れた。

私は頭の髪の毛をかきむしった。

『ススキ、お前はパードレのいったことを気にしているのかね。あれは戯談だよ、馬鹿だな』

火の様に赤くなった私の顔を不思議そうにメネゴニは見つめた。

メネゴニは再び私を彼の家につれて行かなかった。

『何という素晴らしい美しさに輝いた謎の女であろう！』
一生に忘るゝことのできない感銘を、私の胸深く刻した
この女性を思う度に、私の魂は異常な興奮を波だゝしてく
る。

そうして短い人の一生にあゝしたシーンの甘味さに、よ
しそれはほんの一瞬間であつたにせよひたり得た幸福を感
謝する。

私は彼女から永遠に忘るゝことのできない解き難き夢を
与えられた。

それは日本女性には見られない魅力ある不思議なもので
あつた。

三十五

それから間もなくであつた。

メネゴニは聖市に別居している妻子を訪問することゝ
なつた。順序からいえば農場の重要な鍵はその次席者たる
簿記係コエリヨに渡して行くべきものであるが、メネゴニ
はそれを私の手に渡した。

『簿記係でも書記でも、彼奴等に鍵を渡すと、主人宅の戸
棚を開けていゝ葡萄酒など皆からにしてしまうからねえ。
二週間に一回全部戸や窓をあけて掃除をするんだぞ。主人
が来るという電報でもあつたら、いつもの通り気を付ける

ように……ススキ、そんなら行つて来るぞ』

メネゴニが私にこうした絶大な信用を持っていることを始めて知った。私の眼は涙にぬれていた。残り惜しい様な切々たる情に堪えなかった。

『ボーア・ヴィアー・ジエン』

メネゴニの後姿をいつ迄もいつ迄も見送った。

メネゴニが発してから事務所は閑散になった。人のよい簿記係のコエリヨはいつも事務所をあけて家にいた。書記のグレゴリオさへ飯時の休息の時間が長くなった。私は只一人で事務所の机に命ぜられた計算などをしていたが、あのやかまし屋の支配人のいないのが淋しくつてたまらなかった。

一週間たつても、二週間過ぎても支配人は戻つて来なかった。支配人は急性トラホームに罹っているのだという様な話もあった。家庭内の面白くない事情のためだという噂も伝えられた。

或る日突然主人のベント・ブエノ氏がやって来た。それは実に意外な悲しむべきことのためであった。簿記係コエリヨの話によると、ベント氏は支配人メネゴニの気短かな性質と怒号とを好まず再び農場に戻るに及ばないという意味の書面を送って解雇したということであった。

主人ベント氏の性質は実に柔和で、仮令どんな場合でも静かに落付いて話す人であるから、珈琲乾燥時の農場滞留

車にもしばしば支配人の挙動を見て、

『あれだからね』

と眉をひそめているのを見たことがある。私もメネゴニがコロノや黒人の日雇人などに対して暴虐に等しい態度をまざまざ見せられて嫌悪の情を起した体験を偽わろうとはせぬ。しかし支配人の内心には涙ぐましい情のひそんでいることを見たのも一度や二度ではない。

何れにせよ二百万本の珈琲樹を有する大農場の支配人が一片の解雇状を郵送されたのみで、それが少しも理解のある懇談のもとになされなかったことは、正しい遣り方ということができない。これには簿記係コエリヨなどの讒詐も少なからず手伝っていることは明白な事実である。私はあの人の好きそうなコエリヨをそれから何んだか一種の疑わしい眼で見る様になった。

『ススキさん』

コエリヨは晴れやかな顔で私をよんだ。その喜びに満ちた青黒い病人らしい顔の高い鼻が一層高くなった様に見えた。

『メネゴの後にジョゼ・シルバという支配人が二三日中に来るぜ』

『私はメネゴニ氏をあんなに軽々しく解雇する事は正しくないと思うがね』

私は不平らしくこういった。

『ススキさん、君は何もしらないんだよ。まあ知らなくて
もよいんだよ、メネゴニはあれは動物の様な人間さ』

『だってあんなによく働らく人は滅多にないよ』

『働いても、ベントさんはあんな高声でがみがみするのが
嫌いだから仕様がなないじゃないか。メネゴニはどうせ監督
からの成り上りもんだからね。てんで教育などはないんだ
よ』

私はこれ以上、メネゴニをくさすことを聞くに忍びな
かった。

『そうかね……それは別として一体メネゴニさんはどれ位
月給をもらっていたんですか？』

私はいつか聞いて見たいと思っていたことであつた。

『メネゴニは支配人になったのが茲が始めてだから大した
ことはないが、それでも六百ミルレース（当時日本金四百
円余）をもらっていたんだ』

『六百ミルレースとは余り少な過ぎるじゃないの』

『月給は六百ミルレースだが年度末の手当が純益の十分の
一であるから一年にすると、かれこれ二十コントス（日本
金換算一万三千三百三十三円余）になるからね。悪くは
ないよ。メネゴニはもう二度とこないゝ収入にありつけ
はしないよ』

『二十コントス！ えらいもんですなあ』

『グワタパラ、サン・マルチンニョ、ゾーモン辺りの大農場

の支配人なら、この辺の十万本位の農場主より収入が多い位だ。そういう農場に五、六年いるとどんな人でも財産をつくるね』

コエリヨはこういうことから色々な支配人の蓄財談を話してきかせた。

三十六

メネゴニに代る支配人ジョゼ・シルバは予定の日に、オスカル・アルダという青年監督を伴うてやって来た。

シルバは髪の毛の白い六十歳には間もあるまいと見える瘦形な、如何にも温厚らしい老人であつた。

若い時からピニャール一家に奉公し、今迄伯爵未亡人の農場を支配していたのを抜擢されたのである。

メネゴニは伊太利人であつたので、書記グレゴリオにせよ、部落の監督にせよイタリー系の人達は、あんなやかましい支配人であつたが、少なからず利得を蒙っていたが、シルバ氏はブラジル人なので、内国出身者は皆跳躍してよろこんだ。私はしばしば是等の人達が新支配人の前でメネゴニの遣り口をくさすのを聞いた。特に簿記係のコエリヨは人の好いシルバ氏を自由に動かして、最も得意らしく見えた。

新支配人は私に取ってはメネゴニ以上に親切であつた。

伊太利人である書記グレゴリオの仕事に向って私の受持ちが段々蚕食していった。

日一日と農場の裏面に通じて来ると、私はこのシユンボラーズ農場 (Companhia Agricola de Ribeirao Preto と称す) が甚だしい経営難に陥っていることが解つてきた。

私は事務室でベント氏がコエリヨ氏とサントス港の珈琲仲買人から来た書面を閲読しつゝ、『とてもいかん』

などとつぶやく声を聞いた。コエリヨの話であるが、農場は百万ミルレース (当時の日本貨約七十万円) の借金があり、容易ならざる経済上の難局に当面していることであつた。

メネゴニをシルバに代へたのは一面からいえば、農場のこうした悩みのあらわれということもできる。従つてシルバの運命は漸く二カ月つゞいた丈であつた。遂にシユンボラーズ農場はジョゼ・パウリノを主とするカンビーナス市の資本家の手に百二十万ミルレースで買収されてしまったのである。

一万アルケルス以上の面積に二百万本の珈琲を有し、二箇の珈琲精選機を据え、一台の珈琲脱皮機、一棟の工場、農園内を走る軽便鉄道、これがたった百二十万ミルレース、珈琲一本当り僅かに六百レースにしか当らないのである。

今日珈琲の夢遊病者は珈琲が下落したと云って青い息を吐いている。十アルケルスの面積に何の設備もなく一万本そこそこの珈琲を植え付けて、百コントスだ、八十コントスだと云って、本降り二ミルレース前後に下落した時価をブラジル始まって以来の大暴落の様に嘆声を挙げて悲観する。それは珈琲の歴史を知らない無智の暴露に過ぎない。千九百六年頃であつたら現在ノロエステ沿線にある同胞の十アルケルス一万二、三千本の農場ならば六コントスと云う所である。

珈琲は千八百九十年前後に異常な好況を現出した。即ち千八百九十三年二月から千八百九十四年一月間に於て、リオ七等級珈琲はニューヨーク市場に於て一ポンド一八セント八分の三であつたが、千八百九十五年に至つて同一級の珈琲が最高一〇セント四分の一、最低七セント四分の一に下落した。当時の下落の状態を表わして見ると

年 度	伯国輸出高	最高価格	最低価格
一八九八―一八九九年	一四、一五六	七	五・三四
一八九九―一九〇〇年	一四、七五四	八	五・七一六
一九〇〇―一九〇一年	一四、六九九	九	六・〇
一九〇一―一九〇二年	一九、〇一三	七	五・一四

【備考】袋数の単位は一、〇〇〇袋にして、価格は紐育の市場に於ける一ポンドに対する米金である。

ここに放て千九百二年、時の聖州統領ベルナルジノ・

デ・カンボスによりて新珈琲栽培禁止令が發布せられたが、その産出高は依然として増加し、千九百六年の大豊年を見るに至り、聖州の珈琲業者は異常の恐慌をひき起すに至った。千九百一年以来の世界に於ける珈琲生産概要の数字に求むれば

年次	生産超過	生産不足	ストック
一九〇一年	一一〇五	—	六八三五
一九〇二年	四四七〇	—	一一三〇五
一九〇三年	五七〇	—	一一八七五
一九〇四年	四〇〇	—	一二二七五
一九〇五年	—	一〇六〇	一一二二五
一九〇六年	—	一五一四	九七〇二
一九〇七年	六六七八	—	一六三八〇

【備考】単位一、〇〇〇袋、

更に同時代に於けるサンパウロ州のストックを見るに

一九〇一年	四、七四五、〇〇〇袋
一九〇二年	九、三八五、〇〇〇
一九〇三年	九、六八〇、〇〇〇
一九〇四年	九、五八五、〇〇〇
一九〇五年	八、七三〇、〇〇〇
一九〇六年	七、四九〇、〇〇〇
一九〇七年	一四、七五三、〇〇〇

即ち大豊年の後を受けた世界のストックは千六百三十八

万袋にしてサンパウロ州のみにて実に千四百七十五万袋を保有するに至った。サントス市場はこの年に於て所謂値無し (Sem Cotacao) と云う破天荒の時代を現出するに至った。サントス市場に於ける当時の珈琲の値段を見るに

年次	最高	最低	平均
一九〇七—八年	三七〇〇	二五五〇	三四三〇
一九〇八—九年	三九〇〇	三〇〇〇	三四〇〇
一九〇九—一〇年	四二〇〇	三四〇〇	三八〇〇
一九一〇—一一年	七二五〇	三九〇〇	三八三〇

【備考】 Typo. No. 7 キログラムの相場、単位レース

十キロスの価格僅かに三ミル四百レースに過ぎないから、六〇キロス入りの精選珈琲一袋はサントス市場に於て二〇ミル四百レースにしか当らない訳である。

今日珈琲がいくら下落したといえども、十キロス十数ミルレースを称しているではないか。(勿論輸出するとせば当時の為替は今日の比ではなかったが) 珈琲栽培をなす同胞諸君のために少しく余談に失するが参考の資料を提供して置く次第である。

三十七

農場の持主が変ると同時に新らしい支配人が来た。テオフィロと云うカンピナス出身の四十歳位に見える独身者で

あつた。

顔色の悪い、余り物数を云わない、何となし陰気臭い性格は人を圧し付ける様な淋しさがあつた。

新支配人は種々雇人の更新を行つたが、私の上にも新しい明るい運命が展開された。それは伊太利人である書記グレゴリオが解雇されて、其後任者に私が抜擢されたことである。月給も三十ミルレース増給されて八十ミルレースとなった。グレゴリオは月給百五十ミルレースであつたから、私は僅かに其半額を少し超過しているに過ぎない。これに反して私の勤務時間は非常に長かつた。私はいつも朝の暗い内に事務所の戸を開けて新支配人の起きるのを待ち、夜は一番近く迄残つて戸を閉めた。しかし事務所の掃除男から書記となつたうれしさは仮令どの様な苦労も不幸の念を起すに足らなかつた。私はせつせつと陰日向なく働いた。

新支配人テオフィロは決して褒める様なことはなかつたが、小言らしいことも云わなかつた。テオフィロは主人宅の一室を占有していたので、私は最も接触した訳であるが、彼は日露戦争に勝つた模倣好きな小さな国民に対して何の興味も持っていなかつた。私は彼からゲーシヤやムスメやフジヤマなどに対しても一回の質問を受けなかつた。彼は無言に自分のなすべきことをなし終ると、幽霊の消える様にいつとなし自分の室に影をかくした。

事務所の空気はメネゴニの時代は緊張し、シルバの時代は明るく、テオフイロに至って灰色の気分がみなぎっていた。

戎日私は簿記のコエリヨにこんなことをいった。

『コエリヨさん、こんどの支配人は妙な人ですね』

『どうして？』

『何んだか黙ってばかりいるが、それでよく察しのよい人柄の様に取れるが………』

『あの人はこれ迄の支配人のうち一番人がいいんだよ。あんなに沈鬱に見えるのは、あの人の過去に悲しい秘密があるからさ』

『へエ、それは聞きものですな。一体どんなことですか？』
コエリヨは私の好奇心に満ちた顔を見つめてだまり込んだ。

『話せない様な秘密？』

『いや』

コエリヨは探ぐり見る様に四辺を見廻した。

『誰れにも云ってはいかんよ』

こう念を押して話した所を摘記すれば、父の遺産をついだテオフイロはカンピネーロ鉄道線に於て十五万本許りの珈琲園主であった。彼は人に羨まれる程の若い美しい妻を持っていたが、とかく美しいものには魔がさしがちであった。隣り合った五十万本からの大農場主の淫蕩な次男

坊と彼の妻は道ならぬ関係を結ぶに至った。

テオファイロの憤激と悲痛とは只そう云う体験を持った者にのみ味われる最大限のものであった。彼は隣耕地に通ずるカレアドール（畦道）で例の次男坊を待ち合せてピストルを放った。二人は馬に乗っていた。余りに興奮していた。テオファイロの銃丸は的中を誤った。それに反して、逃げながら撃った次男坊の銃丸は不幸にして、彼の肩の辺を射貫いてしまった。若し次男坊に勇気があったならば彼の生命はこの時失われていた筈である。

『そう云う訳でテオファイロさんは法廷で判決された結果、妻と別居して了ったんだよ』

コエリヨは悲痛な面持をした。

『どうして離縁しないんですか。つまりテオファイロさんに未練があつたんですね』

『いやカトリック教を信奉するこのブラジルではDesquite（別居）は出来るがDivorcio（離縁）は許されません』
『おかしいですな』

『離婚が出来ませんから、従って其の別居した妻が死なない限り、夫は法律上の妻を新たに持つことが出来ません』
『そういう場合は別居した妻に対し、どういう義務がありますか？』

『夫婦間に条件の協定が平和的に出来ればよいが、若しそうでない場合は夫の全財産の半分を妻に分けてやらなければ』

ばなりません』

『愈々けしからん。少なくとも姦通の場合丈は離婚を認め、財産に関する権利を剥奪せねば道理に合わんと思う。つまりカトリック教は教義にとられ過ぎて、却ってそれ以上の罪惡を認める様な結果になりますね』

『カトリック教はそういう批難は許しません。一度神によつて合わされたものを引離す〓つまり離婚がいけないと云う一点に総てを集中しているんです』

『それは驚くべき存在です。つまり、別居した妻は夫から分配された財産で問男と涼しい顔をしながら淫らな生活を自由に展開し得る訳ですね』

『そうです。不幸にしてブラジルの民法は恐しい結果を来しつゝあります』

流石にコエリヨさんは暗い顔をした。そうしてブラジルではこういう不合理から、色々な恐ろしい事件が生ずるということであつた。

例えば姦夫、又は姦夫姦婦を殺害した場合には其九割迄被告は無罪の宣告を受ける。一方に於て姦婦に対し都合のよい点があるが、他面に於て法律では許されていないことではあるが、陪審官の同情は夫の加えた罰を正当と認めて、罪としないという様な一寸常識では理解出来ない存在があるのである。

そればかりでない。惨忍な夫になると、医師と結託して

姦婦が狂人であるという様な診断書を作製し其一生を牢獄に等しい精神病院の暗室のなかに投じ、實際狂死せしむる様なこともあるが、社会は多くの場合これを冷淡に見過してしまふ。勿論こういうことをなし得る人は極く少数の有力者のみに限られる例外の存在である。

若し強いて離婚をしようとすれば、夫婦間に完全な合意さえあれば、離婚を許す外国に行つて是を執行することが出来ないこともないが、それはほんの一部の金満家にのみ可能なことであつてブラジルに於ては九割九分まで離婚難の苦痛に悩んでおり、そこに大きな悲劇が絶えずかもされているといつて差支えない。

『そういう訳で、我々ブラジル人は恋愛という甘い夢Ⅱナモーラ（見染める）ノイバーダ（婚約）などのうれしいシーンが過ぎて、結婚という現実に向面すると、急に疑惑と嫉妬の念を以て妻に対さなければならなくなって来るのです。こうした不安は実に堪え難い忍苦です。』

『意外ですな。私は移民小屋の前などで、若い男女が切々の思いに堪えない様な光景を見せつけられて実は羨望に堪えなかつたのですが……』

『我々に取つてナモーラ（恋愛とも見染めるとも）の時代が一番幸福です。テロフィロさんの恋愛もナモーラで終れば悲劇がなかつたのです。彼は非常に朗らかな性質であつたということを聞きました』

コエリヨは沈思するものの如く眼をつぶった。

『そうですかね』

私も深い溜息をもらした。私はテオファイロのあのいつも物思はしげな憂鬱な態度がのみ込めた様な気がした。

三十八

二月に這入っても雨は容易に晴れなかった。其日は曇。ながらも時々くわっとした太陽の金光を見せていた。

何でもお昼近くであつた。一人のコロノが慌しく石段を登って来て事務所の前に立った。

『コエリヨさん、ああどう仕様、私のラファエルが蛇に咬まれました』

走って来たと見えて、はっはとせわみしい呼吸をしていた。

『何時？蛇は何んです』

『たった今、カスカベルです。ぶち殺して来ました。はい、どうぞ注射して下さい』(注・ガラガラ蛇)

『よし、おれはお前の馬で行くから、後からお前は歩いて来給え』

コエリヨさんは事務所に備え付けてあつた注射器と薬とをポケットに押し込むと、この人には似気ない足取りで走って行った。

コロノは額の汗を拭きながらスペイン特有の青白い顔に淋しく笑ったが、興奮した太い血管が眼の端にうねって、痛々しい彼の心痛を見せていた。

X

X

X

『ススキさん、ススキさん』

まもなくコエリヨの声が聞えて其手に妙にかさかさとするものをふりながらいった。

『知っている？』

『何んです？それは』

『カスカベルの鈴さ。十段になっているから十歳になる訳だが余り当にならない推算ですよ』

私も掌にのせてゆすぶって見た。干乾びきった濁音のするもので、色は淡白のセルロイド製といっても知らない人はうそとは思うまい。

響尾蛇はめったに人に喰いつかない。敵が近づくと其尻尾の鈴をかさかさと振り鳴らして警戒をする。喫み付かれる場合は蛇のいることを知らずに踏みつけるとか、手が其首近くに行つたとかに限られている。この農場には四百家族のコロノが居住しているが、一年に一度位が関の山で、二年も三年もそういう事件のないことが普通であるとのことである。

『コエリヨさん、蛇に喫まれた男は助かりますか』

『九割九分迄助かります。注射が早かったし、丈夫そう

な若者だから大したことはあるまい。晩迄腫れが引かなかったら、もう一度注射せねばなりません』

コエリヨはそれでも多少の興奮を其顔にあらわしていた。

『コエリヨさん、どうぞ今日は毒蛇に就て、あなたの知っていることを語って聞かしてくれませんか』

『そうですね。今日は暇な様であるし、なんだかこんな事があると気が落付かないから一つ話そうかな 然し毒蛇に關してくわしく説明することは後の機会にゆずり、今日は出来るだけ簡単に要領だけ述べることにしましょう』
ぽつりぽつりとコエリヨは如何にも物知りらしい態度で話して行った。

サンパウロ州に住んでいる毒蛇のうち最も美しいのは色蛇 (Cobra Coraes) で、これには有毒と無毒とがある。毒のないのを挙げると

1. Flapomorphus tricolor
2. Pseudobos rhombitera
3. Erythrolamprus aesculapii
4. Pseudoboa trigenina

の四種である。(1)は全部赤色であるからすぐ解る。(2)は黒と赤とが一線づつになっている。(3)は鼻面が円味を帯んでいて、赤色の体に二筋の黒い輪と黄色の輪が一本交代に裁断している。(4)が最も有毒の蛇と混同さ

れやすい。赤い胴体に、二本の黄と三本の黒の色輪が順々に巻かれている鼻面はまるく、頭か首よりも広い。眼が能く光って、尾は細長い。

有毒の色蛇は

1. *Micrurus coralinus*
2. • *frontalis*
3. • *lemniscatus*
4. • *fischeri*
5. • *decoratus*

有毒の色蛇の見分け方は、其赤い胴体に二本の黄と三本の黒の輪が交代に裁断されたものであると思えば間違いない。例外として *Pseudoboa trigemina* が有毒のものと同じ色輪を持っているが、無毒である。同時に無毒色蛇にまざれやすいのは (1) の *Micrurus coralinus* で一本の黒輪に二本の黄輪が連続しているから注意を要する。

カスカベール (*Crotalus terrificus*) が一番多い。次にイグアペの植民地边によく見るのは、ジャララクス (*Bothrops jararacus*) である。胴体に足形の斑点があつて、湿地や川のへりなどに住んでいるので、稲刈りなどの場合に咬みつかれる。乾燥した原野にはジャララカ (*Bothrops jararaca*) が住んでいる。

中央線マンチケラ山脈の周囲に住んでいるコチアラ (*Bothrops cotiara*) は胴の上辺にある二十三日頃の月

の様な形をした大なる斑点を中心にして長い円形の小斑点二箇づゝを左右に並べている。この外サンパウロ州にいる毒蛇を挙げれば

カイサカ

Bothrops Atrox)

ウルツー

コテアリソニヤ

ジャララカ・ピンターダ

等である。

序に書いて置きたいことは、ブラジルにこういう蛇がいることである。それはムスラナ (*Oxyhopus Claeilia*) というので、毒蛇に比して細長い。一見柔和らしく見えるが、カスカベルやジャララカと鎌首を挙げて戦うや極悪な眼が恐ろしい光を放つ。頭の方からじわりじわりと吞んで行くと二筋の胴体がうね合い、からみ合って、苦悶地獄をまざまざとあらわす。ヒステリックな女などには見せられないセンセイショナルな光景である。聖市ブータンタン毒蛇研究所では珍客の訪問を受けた場合にそれを実験に供することがある。

もう一つ四足獣で狸に似たゾリロ (学名 *Conepatas chilensis* 又は *C. Suffocans*) と称する毒蛇を食う動物がある。それは実に美しい純白な毛のうちの脊部に黒い二筋の線を引き、腹が其黒で一吋北米のスカンクに似たといえば想像がつくであろう。(一)の動物は *Cangamba* 又は

Jaritatacaとも称し後年ブータンタン毒蛇研究所員フアンシスコ・イグレシアス氏によって研究され、毒蛇撲滅の為保護せざるべからざる事を強調さるゝゾリロはムスラナと違って、毒蛇の胴体の所選はず咬み付いてしまう。然しムスラナが容易に見当らない如くゾリロ (Zorillo) も亦これを発見する事が困難である。

コエリヨさんは談り終って

『まあこんなものかな。沼地の雑草中に棲息する大蛇スクリ、乾燥した原野をぬたくり廻るジュボイヤなどには却って面白い挿話が沢山あるが、毒を持っていない蛇であるから、外の機会にゆずりたい。無暗なことを際限なく話すと、事情の解らない君は怖がるからね』

「オルガ」という巻煙草を口にしながら先程の蛇に喫まれた若者に依って刺戟された興奮から逃がれた様な軽い寛ぎを見せた。

『そんな沢山の種類がありますかね、私はよくコラール（色蛇）を見かけますが、まだ一度だって生きて動いている響尾蛇（カスカベール）を見たことはありません』

『それが真実です。そういう種類が住んでいるといっても、なかなかそう容易に見当るものではない。ブラジルという毒蛇がそこら中うようよのたくっている様に思って、事情の暗い外国人は恐怖するがブータンタンの毒蛇研究所に

でも行つて見なければブラジル人でも一生かかったって、カスカベールとジャララカとコラルの一、二種類を知る位で死んでしまう人が多いのです』

『そうでしょうか？』

『そうですとも。現に君は十カ月もブラジルにおつて、一度もカスカベールさへ見ないというじゃないか。それに毒蛇という横着で、ぶうぶうしいからね。こつちから踏みつけるか、鎌首の上に手でもやらない限りは滅多に喫みつかれるものではありません。ブータンタン毒蛇研究所の発表するところによると毒蛇に咬みつかれる局部に足が六割三分、腿部が二割二分、その他の部分が一割五分ということですから、まあ靴とポライナでも当てている人には、絶対に被害ないといっても万更うそではありません』

こういつてコエリヨリヨさんは響尾蛇の鈴をかかささと振つて耳の辺りへ持つて行つた。

三十九

マニソバの実がパチンパチンと潔よい音をたてて散る頃になると段々快晴の日が多くなつて来る。緑色の小オーム（ペリキート）は人家近くに群をなしてあらわれ。パパガイオ（オーム）がギャー、ギャーと五羽十羽、時として二十羽位、あわたゞしい調子の羽打をして飛ぶのが眼に立つ

様になった。

唐黍の広葉もちらほら枯葉が見えてきた。コロノ連はコロアソンといって珈琲樹下の土を綺麗にかき出して盛り土をなし、その収穫準備をする労作を始める前に、先づ間作地の収穫を始めるので、仕事の捗どった人達はもうちらほら盆地や、緩かな傾斜地に展開された畠地にその姿をあらわしているのが、事務所の高台から指摘される様になった。

九時の朝飯後の僅かな休息時を、コエリヨさんも折よく来合わせた監督ミネゲテと一緒に外に出て雑談にふけた。

『蝗の害を受けて今年の農作も大したことはないでしょうね』

私は機会を利用することを忘れなかった。

『さあ？ 唐黍はどうか平年作にはいくだろうが、雨季の豆は千本の珈琲に一俵もなかったろうが、今度のセツカ（乾燥）には五俵位あるだろうという人もあったね、ミネゲテさん』

『宅の近くの同国人は五千本に二筋植えた豆（フェジョン）から十八俵収穫したといていたが今年はそれ位なもんでしよう』

ミネゲテは嗅煙草の粉を鼻の穴になすりつけてクンクンとくさめらしい音をたてた。

『唐黍は千本の珈琲樹にどれ位とれますかね』

『一つら（ママ）植えてよくとれて二台。古くなった土地なら一台がむずかしいね』

『それは余り少ないじゃないの？』

『話は例外を取れば大きくも小さくもいえるがね。一アルケールの珈琲のない畠で牛車十台が精々で、七八台という所が普通ですから、二十年より若珈琲排樹のない、この地方の畠では千本の珈琲樹には一台以上に見つめることは危険ですね。……そら御らんなさい』

ミネゲテは今しも雲をもれた日光に明るく見える傾斜面の黍畠を示して

『あれ位な唐黍のでき具合で、まあ一アルケール八台の収穫ですな』

私はその畠の中央を貫く道を通ったことがある。唐黍の広葉は馬上の私の頭の上に垂れて、房々した髪の淡紅が、いかにも豊かな実りを見せていた。

『あんなに良くできてそんなものかね。存外少ないものですな』

私はふと日本でも一町歩十二石位の産出量しかないことを思い出して、サンパウロ州に於ける一アルケール八台は決して少ない方でないと思った。

聖州で栽培する唐黍の種類は学術的に区分したならば色々に分れるであろうが、先ずアマレロ（*Milho*。

amarellio) カテテ (Milha catete) カテチンニョ (Milho catetinho) ともアマレリンニョともいう種類とブランコ (Milho branco 又は cryatalinoともいう) の三種で、カテテ及びカテチンニョはブランコに比し収穫(粒小さきため) 少なきも、一俵の市価が一ミルレース前後高いのを普通とする。

『そこでコロノ一家族の唐黍の収入はどれ位になりますかね』

『年にも依るがね、先づ牛車一台が三十ミルレースから五十ミルレースですからね。コロノ一家族の収穫量は精々五台位なものでしょうから、百五十ミルから二百五十ミルレースとなる訳ですな。知れたものさ』

ミネゲテは監督だけに、こんなことには明るかった。

『しかし、コロノが唐黍をそのまま売る様では駄目さ。それを豚に食わせるとか、牛にやるとかして金にせんといけないんだよ』

コエリヨは弁解する様であつた。そこへモンテベーロの黒人監督オゾーリオがあわただしく石段を登って来て口をさし入れた。

『そうよ、コロノは唐黍をそういう方面に利用する様に、珈琲園の組織ができているのです。だから珈琲園労働者が同一耕地に長く居ると、その利用範囲が多くなる訳で、従つてその収入が益々増加する という結果になるので

す』

『そうです』

『勿論』

コエリヨもミネゲテも是には反対しなかった。私はコエリヨの命令でオゾーリオに馬車に塗るグラシヤ（脂肪）を渡すべく、貯蔵庫の鍵を持って立ち上った。

『ススキさん。君はなかなかよく研究するね。ナーニ心配はないよ。日本人のコロノを沢山入れる様にしまえ、おれはうんと日本人に金儲けをさせてやるぜ』

オゾーリオは私の背を軽るくぽんと叩いた。

X

X

X

私はこのオゾーリオに就いて少しく書いて見たい。彼は四十六七才位に見える頑丈な体格でよく肥満していた。そのてかてか光る黒色の肌が眼を引いた。

黒人や土人やその混成種などにタイプの上から二つの分け方がある。それは至極簡単で、髯のバラバラと疎らに生えているものと、くちやくちやと密生しているものである。彼は狂暴の性質者に多く、是れは温順をあらわしている。伯国の奥地に旅行をしたり農場を経営したりするものは、こういう点に注意して、何等か事件の発生した場合、自己の立場を決定する参考とするべきものである。

オゾーリオは丸い広やかな顔で、顎から、耳の根元へかけて極めて多い髭―それは黒人特有なくなるくと巻き上つ

た、絵にあるお釈迦さまの髪の毛の様な一種のエキゾチックな美しきを見せていた。オゾーリオは物を話し終るときつとカラカラと高笑いする癖があるがその時の彼の顔は一種の見物である。真紅な厚い唇が大きく開いて顔中が想像を裏切った様な皺くちやになってしまう。それが納まつてしまうと、さも荒れすさんだ細面がもとの静寂そのものに返った様にけろりとしてしまう。一体どこからあんなに沢山の皺があらわれるのだろうと何人でもオゾーリオに一度でも逢ったものは一種の興味を起させる。

オゾーリオは何所から見ても非難のうち様のない人のいい黒人であった。勿論彼は奴隷の子であった足を鎖につながれて朝の暗い時から、暗い夜の始まる迄監督の皮鞭の下に、父と一緒に働いた悲惨な生活は、未だにまざまざと彼の胸に生きていた。千八百八十八年奴隷解放令が發布された時、伯国の奴隷数七十二万三千四百十四人あり、その価格四億八千五百二十二万五千ミルレースと称せられたから、奴隷一人当りの価格六百七十ミルレースである。この値段は公称のものであるから実際はこれより遥かに少かった。

勿論温順でよく働く奴隷は千ミルレース以上の者もあったが、逃亡を企てたり、監督に怒鳴りかゝったりするものなどは馬一匹と交換された。

つまり人間一生の価がお女郎の三年位の働きにも及ばな

い訳で、粗衣粗食と労苦以外彼の前には何物もなかった。牛馬の如き下等動物が残虐を受けても理性を欠く為、それは只瞬間的のものに過ぎないが黒人の受けた侮蔑と虐待とは到底人間として堪え得らるるものでなかった。

オゾーリオの父は残忍な監督の不当な加罰に依って左足を折られ、奴隷解放令の発布せられた時は完全な不具者となって、バツタの様に肢をひいていた。冬が近づいて寒さが加ってくるとその傷ついた足はいくら厚い布を巻いても冷えて痛んだ。

『父が「痛い痛い」と叫んで泣くのが身を切る様にわしはつらかった。父はとうとう七月の二十二日霜の降った朝、その痛みに堪え得ずに死んでしまった。』

オゾーリオはいつもこういって、その柔らかな象の様な眼に涙を一杯ためた。

『それで、わしは他人に無理をさすのが大嫌いだ。わしの子が若しコロノの子供を打ったりなんかしたなら、だまっておりません。わしはきつと頬辺か、尻をうんという程どやしつけて、「やい、弱い者　をいぢめるない。」といって懲罰してやる。自分の子でも許すもんか』

オゾーリオのさとりは無智の偉大なるものであった。クリストの所謂「貧しき者は幸なり」を具現していた。

私はいつも「えらいな」と思って、オゾーリオと話すことを心からよろこんだ。

流石に降りつづいた雨も、四月に入ると空高く晴れて一ヶ月を通じて降雨日数は僅かに、五、六回位しかなくなってしまう。最高温度が却って真夏より高い位な日もないではないが、それはほんの僅かな時間であるのと、空気が乾燥してくるので、終日日本の小春日を思わせる様な快適な天候を現出する。

コロノ達はコーヒー収穫準備のため園内の山建てが始まって、いそがしい日がつづいてくる。鍬数（聖州地方では一人前の労働能力を鍬一丁という風に鍬で示す様になっている）の多い家族は一日も早くコロアソンを終って間作地の唐黍や稲畠などの収穫を始めようと努力するガファニョット（いなご）の害があつたけれども、雨廻りがよかつたので割合に唐黍の実入りがよかつた。

『アントニオの家では唐黍が五台あつたそうだ！』

『隣のマノエルは米を十俵収穫したといっていたよ！』

『うちの唐黍も三台は請合だ。米も六俵位はあろうか？』

こうした土にしたしむものにのみ与へられた限りないよろこびに満ちた会話が、毎日何度ともなく取り交わされる。仮令それはほんの笑う様に少ない数量に過ぎないものでも、収穫（Colheita）は農家に取って生命に等しい歓

喜である。

私はいつも事務所の前庭から深緑の珈琲園の畦の間に、牧場の果ての凹みの傾斜面に、色づいて来た唐黍の葉や、稲の穂先のうねりを眺めながら、心が波立ってじっとしていられなかった。私は矢張り百姓の子であった。

それはある土曜日の午後三時頃であった。特に支配人テオフィロ氏の許可を得て、例の伊太利人のフィオリをコロニア（移民部落）に訪問した。土曜日は半どんであるから、山建てのいそがしい人達は大方珈琲園の義務的労働が終つてから間作地へ働きに行くものが多いが、富裕なフィオリの家族は皆戻っていた。

『晴れ』を示す東風がそよそよと吹いて、日当りのよい家の入口にバンコ（腰掛）を持ち出して、アントニオとジョバンニの二人の少年はしきりに兄の指先に針をさし込んでいた。

『ボーア・タルデ・アントニオ。ビツシヨを掘っているんですね』

『ボーア・タルデ・セニョール・ススキ』

アントニオは如何にも健康らしいその赤ら顔をあげて私を且ながら、首を一寸うなづかして弟のジョバンニを見よという様な風を見せた。

『はゝゝゝ、ジョバンニのあの手つきを御らん。ビツシヨは段段なかに喰込んでしまうんだからね』

『馬鹿！アントニオの馬鹿！』

ジョバンニはもう泣面をしていた。

『アンナ早く来て頂戴ってば、ほら血が出て来て痛くって痛くって、もう我慢ができないからさ』

ホ、と笑う声がしたかと思うと、桃色のレンソ（日本の風台敷位の大きさの布）で頭を包んだ姉のアンナが走り出て来た。

『あら！ススキさん。ボーア・タルデ』

真白な美しい顔をちらと見せたかと思うとジョバンニの腰掛けた下に立膝をして針を握っていた。

『アンナはとてもビッショ堀りが上手なんだからねススキさん若しビッショがはいったら一度アンナに堀らして御らん。ちつとも痛くないんだからね』

アントニオはこういって、アンナの手つきを見つめていた。（注・本にはビッショとあるが、ビッショの誤植と思われる）

『いやだ、アントニオは何をいつてるの、ススキさん、真実にしちゃいけませんよ』

アンナの顔にはほんのりと赤い色がほの見えたが、素早いその指に握った針の先にビッショの丸い乳白色の小さな玉がさされていた。

『まあ！大きな袋ね』

掌にのせてその袋をつぶすと、十数個の小さな卵があらわれた。

『これ一つ丈？ジヨバンニ、早く壁から石灰を取ってなすりつけて置きなさい。ね、解って？』

そこへ、少なくとも十度位は洗濯したろうと思われる縞のシャツを着たフィオリが如何にも鷹揚な態度でのっそりと戸口にあらわれた。

『いやあ！ ススキさん、いい天気ですね、ほうお前達はまたピツショにやられたのか。はゝゝゝおやおやまだススキさんは立っているじゃないか、アンナ椅子を持っておいで』

フィオリの声より逸早く、アンナはもう唐黍殻 (Palha de milho) をなったもので腰掛ける所を組んだ粗雑とも稚致とも形容される骨組の木も頗る荒削りな椅子を持って私の後ろに立っていた。『お掛けなさい、ススキさん。さあ今日は一つ変った所、そのピツショの話でもしうかね』

フィオリはぽつりぽつり話し始めた。それを約記するとこうである。

ピツショ (Bicho do Pe) は小さな蚤の一種で、人や動物の柔らかな所をねらってはいる動物である。主に足の爪の間に極めて敏速にはいつてくるのであるが、始の中はそれがちつとも解らない。何でもピツショの牝が妊娠すると、これを生み落す場所が動物の暖い肉の間でなければいけないというのであるから、頗るけしからん厄介な動物

である。肉の間に喰い入ると産卵し始めるが、その卵が一種の堅い皮をかぶっていて一寸布袋様の様な恰好で、袋の前には頭が出て後ろにはお尻を出しているのが妙である。

卵の数は十四、五もあろう。それが孵化する様になってくると袋が段々大きくなってくるが、その日数は一週間もたつたゝないか位である。海外から始めて珈琲園に来た移民達が何も知らないでいるうちに、ピツショは三疋も四疋も好物の爪の間を探がし歩いて、銘々自分のお産所を開設してしまう。

始めの内は妙なかゆみ味を感じずるが、後にはちくちくと疼き出すから、これは変だと爪先きを注視する頃はもう手遅れである。

心持ち丸く腫れあがって、うす紫がかった様に変色した所に赤黒いものが見えて、少し水が流れ出ている。顕微鏡で見ると、ピツショが恐ろしく複雑した顔を出して呼吸をしているのである。経験のないものが掘り出すと、ピツショとその卵が外へ出ても、きつとそこに皮袋の一部を残してしまうから、なかなか全治しない。とうとう化膿性細菌が肥大して赤く腫れあがってしまう。甚だしい人になると淋巴腺の炎症を起して股にぐりぐりができる様なこともある。

『ハ、手遅れだの、淋巴腺の炎症などという大したことに聞えるがね。しかし何しろ小さな蚤のすることだ。心

配する様なことではない』

フィオリは笑いながら尚語りつづけた。

ピツシヨが新来者を面喰わすのも、ほんの最初の一個月位なもので、馴れて来るとピツシヨがはいると何ともいえぬ痒さを覚えるので、すぐ解ってくるので、それを取ってしまわない内は気にかゝる。ピツシヨを掘り出すにも針の様な細いのもなく、もつと太い鈍なもの、例へば余り鋭利でないカニベツテ（ナイフ）の先きか、にぶい錐などで掘った方がよい。

なれた上手な人に掘ってもらうと、少しの痛味を感じないばかりでなく、一種の快ささへ感ぜられる。掘った後にTintura de Iodo（ヨヂウムチンキ）をつければこの上ないが、コロノなどにはそんな贅沢をいっていられない事が多いから、移民小屋の壁に塗っている石灰をつけて置けばよい。

ピツシヨは乾燥季に繁殖するもので、特に誰も住んでいない家や場所の乾きゝった土の上を踏む時が要心第一である。故に新来移民が空屋などに容れられる時などは、よく清掃した上、何度も何度も繰返して打水をすることを忘れてはいけけない。地面を湿らしておけばピツシヨは何時の間にかおらなくなってしまうものである。

『ナアニねススキさん。コロニアの単調な生活をつづけてくると「ピツシヨを掘る」ということも一種の楽しみに

なってきましたよ。コーヒー園から戻って暗いカンテラの畑でピッショを堀ったり、こうした土曜に日向ぼっこをしながら、ピッショを探ぐるといことがなかったら、どんなに淋しいものでしょう……。やあ、俺の足も何んだか痒くなってきたぞ』

ファイオリはこういつて自分の足をいぢり廻わしたが、ピッショのはいつている風にも見なえかった。

『成程な。ピッショを、好いた若い娘さんに堀ってもらうなどということは艶な捨て難い移民情調ですね』

『ハ、貴方もなかなかうまいことをいうわい。全くピッショなどは問題じゃありません。しかしブラジルにも一寸厭やな虫が居りますよ。序にピッショ以外の肉体に喰い入る虫の話でもしましょう』

ファイオリはズボンから縄煙草を探り出して刻み始めた。

『いゝですな。是非御願いたたいものです』

私は勢いこんで椅子をファイオリの傍近く移した。

四十一

『どうせ俺の話すことだ。貴方の参考になるかどうか知らないがね。まあうそがないのが取柄さ。……君もよく犬や牛などにぶつぶつと潰傷の様なものがあるのを見かけましょう。あれですよ。あるはベルネといってね。人間にも

這入るんですよ』

『へエ、あの犬の尻などに膿の流れ出している、あれですか？』

私は一度犬が如何にも痛そうになめているから可哀相だと思つて、そこをひよいと押してやったら犬がキヤンとけたゝましい泣声をたてゝ立ち上る拍子に、凡そ五分位の長さの螺旋釘のような形をした蛆が飛び出したことを、まざまざ思い浮べずにいられなかった。

『たしかにそれです。あれは大きな蠅、それとも虻といった方が解り安いかも知れません。機会をねらつて動物の皮膚の上に卵を生みつけて行くのです。元来不潔な嗅覚に敏感であるから清潔にして置くに限りますが運が悪いとどんな玉のような肌を持った女性でもベルネにやられるのです』

フィオリが何か思い出したことがあるらしく、たまらないうという風な微笑をたゝへつゝ四辺を見廻わした。そこには娘のアンナは勿論、少年アントニオもジョバンニもいなかった。

『ススキさん、面白いことがあるんですよ。これは私がこの前におつた農場の実話ですがね。スペインから渡航してからまもない若夫婦があつたのです。珈琲園に亭主の弁当を持って来ると、きつと居眠りをしてしまうのが癖なんです。何か非常に疲労れた事があつて、その日もうとうとと

居眠りをやったのですが、運悪く猿股をしていなかったと見えます。何しろ君このスペイン生れの女は顔の綺麗なのに似合わず二十前の、まあその何んですね：投げやりなんですね。そら君、今も話した通りベルネの虻は妙な嗅いが好きだと申しましたろう。ハ、ハ、』

フィオリは改めて四辺を見廻わしたが、誰もいないので安心したという面持であったが、それでも急に声を落して唇を私の耳近く寄せた。

『ベルネの虻はその女の○部に卵を生んで行ったのです』
『そんな際どい所に？ どうして虻が這入り込んだものかね？』

『それは君、ふしだらだからさ。よく野づらを歩くと、想像もできないような春画に逢着することがあるじゃないかハ、ハ、』

フィオリは笑い崩れて、しばらくはものもいわなかった。

『所がね、君、ベルネの卵がすぐ蛆になってしまいうのです。私は学者でないから何時間かかるか、そんなことは知らないが、実際何んだか先刻の虻がおかしいぞと、肌を改めて見るともう細い針のような蛆の幼虫(Larva)がくねりくねりと肉へ食い入って居るのを発見するのです。すぐそれを抜き取ってしまえばよいのですが、若し手遅れになって蛆が肉体の中に這入ってしまったても一日位は気付かずにお

ります。二日目頃からこの蛆には螺旋形に毛が生えてるので、なかで運動をするから、チクチクと針でさゝれたような痛味を感じて、たまらなくなります。痛い所をよくよく注視すると少し腫れ上って小さな穴を見つけることができます。その穴へ煙草の粉末にしたものに洗濯石鹼(Sabao)を練り雑ぜたものを塗りつけて置くと、奴さんなかで呼吸ができなくなるからもがき出して入口の方へせり上って来ます。それをうんと力一杯に押して貫うと外へでてくるが、余り蛆の小さい内はなかなかできませんので、押し出すのがとても痛いものです。ベルネの出た後にはチンツーラ・デ・イオードでも塗って置けばこの上ないが、何もなければピンガでも消毒して置けば、訳もなくもと通りになるものです。

気をつけなければならぬのは子供の顔に這入った時です。よく眼脂の流れた所などに卵を生みつけるものです。女の子など顔に大きな傷を残さない様に毎日見てやる親切を忘れてはいけません。しかし、ベルネはビツシヨの様に人体に這入る機会が極めて少ないもので、ブラジルに二十年の長い間住んでもベルネの虻も知らないですむ人も多いのですから、精々ブラジルにはこういう面白いものがあるというに過ぎませんね。勿論畜牛などに対する被害は別です、ベルネは牛の皮を穴だらけにしますからね。』

『成程、ベルネの虻は私などもまだ見たことがあります

ん。』

『そうでしょうとも』

フィオリは自説が肯定せられたのをよろこぶものの様にきっぱりと力強くいった。

『それから、あのベルネにはいられたスペイン生れの美人はどうしましたかね』

私の声の終らぬ内にフィオリは

『ハ、、とんと失念した。ススキさんはまだ若いから美人のことは一步も逃がさんというんですねハ、、』

笑が爆笑した。何んだかくすぐったい様な心もちで私も笑った。

『スペインの若い美人はそれから日々妙な所がちくちく疼きだしてきます。夫にも打ち明けられない様な秘密の場所です。若しそれが恐るべ徴毒であつたらどんな疑を夫から受けるかも知れません。ふしだらな女ではあつたが、まだ結婚後久しくなつた間柄でもないので、泣く様な心持ちで色々内証で手をつくしたが、局部から濁った水が流れ出してくる様になり時としてとてもたまらない痒痛を覚えて、どうすることもできませんでした。

万策つきとうとう夫に打明けたが、夫も若かつたし愛妻のそんな大事な所を医者に見せるのもよくよくの事でなければ嫌であつたから、内密に二人はできるだけの事をして見たが、不思議にもこの妙な瘤の様な潰傷は段段悪化して

くるばかりです。そうして女は時々跳ね上る様に痛い痛い
と訴えます。

止むなく夫は恥かしがる妻を連れて医者の門をくぐった
のです。』

『さあ話は愈々大詰になりましたねハ、』

フィオリは、好きな縄煙草を吸って、今更の様に私の顔
を見ながら笑った。

『お医者様が火の様に顔を赤くした女の○部の腫れ上った縁
を一眼見てベルネだという事が解ったのですドクトルが一
寸つまむともう充分マズーラ（成熟）になっていたので、
ヒョイと五分位な蛆がとび出したので、それを見ていた男
の顔が真青になったというが、ドクトルは素早く局部に消
毒剤をつけ終って（ハ、もうこれでよい）と大笑いをし
たという事です。どうです。ススキさん私共も笑いましよ
うワツハ、』

『ワツハ、』

二人は訳もなく笑いこけてしまった。

四十三

『伯国にはビツショとベルネの外にもう一つ肉体にはいる
「ビシェーラ」という虫があります。貴方は牧場など歩い
ていると、馬糞の上などに、青い色を金色に塗りつぶした

美しい蠅をよく見受けることがあります』

『あの綺麗な日光を受けると金緑色に光る蠅のことですか？』

『じゃ貴方も見たことがありますね。あれがよく汚ないたぐれや、潰傷、傷跡等皮膚の破れている所に卵を生みつけて行くのです。それが実に信じられない様な急速度で孵化してしまうのです。而も無数の小さな蛆になるので。町から牛肉や豚肉などを買ってくると、うようよ蛆の湧いてるのを発見することがあります。あれが即ちビシェーラなのです』

フィオリは一寸考へた様な面持ちをして、

『アントニオ一寸おいで』

アントニオが走ってくると、フィオリはそれを私の傍にたたしてその耳を見せた。

『ごらんなさい、ススキさん。この子が小さい時耳がたぐれていたことがあったのです。そこにあの金蠅が卵を生みつけて行ったのです。私達はまだ貧乏で、とかく子供などを見ておられなかったのでねもう少しで中耳炎を起す所であつたが、神様の御かげで……』

フィオリは十字をきった。

『幸に鼓膜も破らずにすむにはすんだが、その耳の穴の所に一寸傷を残してしましよう』

恰も貧窮と労苦とに奮闘した若い時代を回想するものの

様にしばらく黙り込んだ。

『外の所ならかまいませんがな。耳とか鼻とかいう様な場所は素人には手がつけられません。応急手当てをしてどんな農家にも見当るクレオリーナを五倍位の水にまぜてつけることです。余り薄くつてはきゝめがありませんから遠慮なしに濃くして差支ありません。エーテル (Ether Sulfurico) を局部に流し込むか、脱脂綿にしみ込まして差し込んで置くのが一番よいのですが、エーテルは、そうたやすく農家にはありませんから、止むを得なければチンツーラ・デ・ヨード (ヨジウムチソキ) でも差支ありません。一寸した時間では死にませんから一時間位絶間なし濡して置く必要があります。とにかくこのビシェーラが小児に寄生した場合は理屈なしに一刻も早く医者に手当をしてもらうことが何よりです』

『ビシェーラはベルネがスペインの女にはいった様な場合もありますか？』

『ありますとも、只ビシェーラは負傷をしたとか、潰傷をしているとか、皮膚が破れて肉を露出していなければ、殆んど産卵をしない点が違っています。つまりベルネは老幼を問わずどんな皮膚の上にも寄生するが、ビシェーラは重に小児等の皮膚が極めて脆弱な者につく事です』

『いや、面白いことを聞かせてもらいました。ブラジルで人肉に食い入る虫というものは、それ位のものですか？』

『ブラジルというと何か、恐ろしい人間を害する奇態な動物でも住んでいる様に言うものがあるが、十数年のコーヒー園生活で私はピツショ、ベルネ、ビシェーラの三つより外知りません。これとても気をつけてさへおれば何んでもないもので、小児にはいるビシェーラを除けば寧ろ農園生活の退屈しのぎになる位です』

『御尤もです。人間はとかく大袈裟なことをいいたがるもので、空想を現実化して喜ぶものですからね』

私はフィオリの偽らない有のままの話を喜んだ。

『やや、話に身がいつて知らずにいた。もう太陽が落ちかかったぞ。真赤な色が明日の天気を予報しているわい』

コロニアの前に立っているたった一本のパイネラの大木には、もう花が咲いて透明な視眼鏡を見る様なたそがれのうすら青い空気のたゞよう地面の上を間作畠から戻る人々が

『ボーア・タルデ！』

『ヴェナス・タルデス！』

『ヴェナ・セーラ！』

などと口々に挨拶して通って行った。

四十三

『ススキさん、まあおはいり、四月もパイネラの花が咲い

てくると、たそがれはうすら寒くなりますからね』

『そうですね。摂氏の十五度位の温度でしうかしら？』

フィオリにつづいて、私はいつも遊びにきて坐り馴れた室の頑丈な不細工ともいふべきペローバでできた机に向つて腰を下ろした。

『やあ、アンナお前はまだススキさんにカフェーもあげないんじゃないか』

『フィオリ、今日はね、アンナが是非ススキさんに食べてもらいたいといつてマカロンの手打を念入りにやっているんですよ。だから今日は辛棒してもらうんですの』

愛橋のよい妻のローザの声の後から、アンナの朗らかな笑声が聞えてきた。

『そうか、それはよい。ススキさんは一度だつて宅のマカロナーダを食べてくれないんだからね。アンナは上手ですぜ』

フィオリは娘のアンナをほめるのが癖であつた。

『それではそういうことにして、ススキさん、何か貴方の移民研究の質問にでも答へるとしうかね』

『今日は支配人から暇をもらつてきたのですから、ゆつくりさせてもらいます。フィオリさん今しがた私達の前を鋤を肩にして走る様に通つたフェルナンデスですがね』

『ああ、あのフェルナンデスですか？』

『あの男がちよいちよい事務所に顔を出してよく支配人か

ら何かいわれているのを見受けますし帳簿をくって見ると借金ばかり増えてゆく様ですがね。一体どういう訳でしよう』

『ススキさんも、なかなかうまい所に気がつく様になりましたね。フェルナンデスはスペインでも相当富裕な家に生れたらしいが、商業上の手違いから零落し、何とかして家業の回復を計りたいというのでブラジルに渡航したらしい。そこで彼は教育の点からいっても、一日も早く金を得たいと熱望して努力することから見ても他の同国人に見られない点があります。しかし、あの人は気の毒にも珈琲園の組織を知っておりません。これは私なども始めには大まごつきにまごついた苦い経験であります。

ススキさん・私は貴方に新らしく来る日本移民のために、是非知っておかねばならないことを話しておきたいと思います』

フィオリの話す所によれば、珈琲園のコロノの労働というものは初年には儲からないようになっていくということですよ。即ちコロノというものは唐黍、フエイジョン、南瓜、薩摩芋等の間作物を収穫し養豚、養鶏などによって副収入を得ることにより、一年一年生活が充実し、剰余金ができてる様になってくるのである。たとえどんなよい家族であっても、初年度には生活費を得れば上々吉の方で、八割位までの移民は幾分借金を残すのが習慣である。

フェルナンデスは珈琲園のこうした組織を理解しないで、始めから金を残そうとして能力以上の珈琲樹数を取扱っているのである。働いた経験のない若夫婦と弟との三人では、四千本位がいい所で、最大限五千本を越えてはならん筈であるのに、七千本も取扱っているのです。一回除草も廻りきれない内に後から生へた草は丈を没する位になります。日雇を農場から入れられてはならないと働いても働いても追いつきません。近頃は妻が病気で寝ているということです。それでもフェルナンデスは青い顔をしながら吐息ばかりついて、土曜日にもあんなに遅くまで働いているのです。人間の力には限りがあります。今にフェルナンデスは倒れて終います。仮りに家族の能率に適応した珈琲樹を取扱うのと、フェルナンデスの様な無謀な遣り方、能力を無視した取扱いをするのとの利害関係を数字にあらわすとこんなことになる。

能率以内の取扱

収 入

四、〇〇〇本取扱

千本百五十ミルレースの割合 六〇〇ミルレース

能率以上の取扱

収 入

七、〇〇〇本取扱

同上

一、〇五〇ミルレース

支出

毎回三千本づつ日雇を入れられるものとして、一回千本除草賃五〇ミルレースとし、年五回除草山崩しをなすものと仮定し 七五〇ミルレース

差引収入 三〇〇ミルレース

四千本を取扱うものが、完全に全取扱手数料六百ミルレースの収入を得るに反し、七千本を取扱った場合はその大部分を日雇賃に差引かれて、懷中にはいる所は四千本を取扱いたるものゝ半額に過ぎない

而も彼は悠々気楽に自己の義務を果し得べきも、是れは惨憺たる労苦の限りを尽して尚且つ自己の責任をつくす能わざるは大いに考慮を払わなければならない点である。

『どうです、ススキさん、珈琲園労働は気永にやるに限ります。一年でやろうと思うことを三年位にのばしてのん気にやるに限ります。日本移民が来たら、農場主などの「金が残る」なんかという宣伝を当にせず、残らないものとしてぽつりぽつりやらせるんですね。ハ、ハ、解りましたかハ、ハ、』

フィオリは如何にも得意らしい面持ちで笑った。

『何んですね。この人は自分ばかり何かべらべら喋べってさ。さあさあ机の上を片づけるんですよ。アンナのマカロンができましたからね。』

妻のローザがこういって、白い布をかける間もあらず、アンナはマカロンを山盛にした大皿 (Travessa) を私の前に近く置いた。

所謂チキン・マカロニなので、牛肉の様な脂肪はないが、如何にもうまそうなトマトの赤い色が見えてケージョ (チーズ) の細粉が雪の降った様にかぶっているのが、見るからに食欲をそゝった。

『いよ！アンナ大出来大出来、さあススキさんアンナの御馳走を沢山たべて下さい』

フィオリーはうれしくってたまらないという風に眼を細くしてよろこんだ。

四十四

『ススキさん、お掛けなさい』

と自分はフィオリーの隣に腰を下ろしながら

『アンナ、お前もそこにお掛け』

母親が娘のアンナに私の隣りに坐れというのである。アンナは、

『御めんなさい』

何の躊躇もしなかった。

アンナはもう十八才であった。かつて若い女性と、こんなに接近して坐ったことのない私の胸は、呼吸づまる様な

鼓動を起した。

私はぬすみ見る様にアンナを見つめた。

すらりとした姿、ごつごつとした木綿の裾もアンナの美しい肉体の線をかくすことができなかった。描いた様な眉と、つぶらな大きな眼、一本一本数へらるる様な正しい睫毛、之がアンナの顔の美しさの中心をなしていた。少し薄過ぎる様な唇と短かく見える顎も笑う度にあらわれる二つのえくぼと整然と並んだ純白な歯並とにかくれて、誰れもそれに気付くものもあるまい。頭を包んだ縁のレンソからはみ出ている金茶色のふさふさした髪の毛は、どんな鈍感な人にも接吻を強要する様な魅力を持っていた。

フィオリの一家はこの頃私が訪問すると、いつもアンナと私とのナモーラ（恋愛）を黙認するとも認められないこともなかった。

日本人から見ると、親達が若い男女の関係を助勢するという様なことは、何か裏面に利害関係の伏在する以外には殆どあり得ない。即ち悪い意味を含んでいることを否むことができないが、白人の間にあつては極めて平凡な事であつた。理解のある家庭にあつては冷静な両親の認識によつて、娘の恋の相手の撰択をかげながら補正して誤りに陥らない様にするものも少くない。フィオリは教育という程のものを持ち合せなかったが、生れながらにして朗らかなその性格と、やさしいローザの愛によつて、コロノなど

には珍らしい立派な家庭をつくっていた。日本人である私には始めから親切にしてくれたし、娘のアンナに対して執着しているらしい私の微妙な心の動きをさっとしても、何のかかわりもなく、アンナを私の前に近づけて、寧ろ私とアンナとの間が初対面の時と余り変りのないのを不思議がつている様にも見えた。

実際私は内気であつた。臆病であつた。心の底でアンナをしたわしく思へば思う程、引込思案がはげしくなった。低い鼻、出張つた頬、細い眼、こうした外貌上の醜悪を度外視して突進すべく、私は盲目になり得なかつた。寧ろ黄色人種に生れた私自身を呪咀した。大胆に、率直にアンナの様な美しい女の前に立つて

『私はあなたを愛します！』

といつて、ほしいまゝに抱擁することのできない不幸を嘆じた。

私が今日までにアンナになし得たことは、只女持ちのレンソ（ハンカチーフ）をプレゼントに贈った位のものである。而も私はアンナの手に直接渡す勇気がなく、母のローザにそれとなく差し出したに過ぎなかつた。そうして後でレンソは「切れる」ということを意味し、余り縁起のよい贈物でないということを聞いて喫驚したのが関の山であつた。

『いゝ月ですね』

私はアンナにというよりは母のローザに向いてこんなことをいった。

『日本にもこんなに月夜は綺麗！』

わだかまりのないアンナは母の答を待たなかった。

『日本の月は秋ですね。それはとても美しいですよ。一度清冷な水のなかゝら生れでた女王の様な感じがします』
『そう、いゝのね、妾日本へ行つて見たいわ』

私は、はつとしてアンナの顔を見た。満面に月光を浴びたアンナの顔はマドンナのマリアの様に気高く美しかった。

四十五

珍らしく北風が吹きだして、気温が二三度高まつたらしい。露天の夜は限りなき快よさである。

若い男女の群れが夜の挨拶をしながら、しきりに私達の前を通つて行つた。なかにはビオーラを弾きながら、高らかにモデンニヤを唄いながら行き過ぎものもあつた。少年アントニオとジョバンニもいつの間にか姿を消して彼等の群れに投じて行つた。

一町ばかり先のグループ（長屋）から、特に明るい灯が戸外の月光のなかに橙色に流れてサンフォーナ（手風琴）の音が手に取る様に聞えて来る。舞踏会が催されてい

るのである。

舞踏会などというと大業に聞えるが、日本ならば盆踊りの、もう一層簡単なものに過ぎない。しかし白人の社会には階級の如何に拘らず、バイレは無くってはならない社会生活の重大機関でもあり、享樂でもある。お祭、結婚式などの夜は勿論、一寸した出来事にもバイレはつきもので、こうしたコロニアも土曜日の夜は何処かでバイレの催しをするのが常例である。

男女の媒介をなすこと盆踊りもバイレも変りはないが、或限界を厳肅に保つ点に於いて、白人には日本人の追従を許さない美点をもっている。

ナモーラ（見染める）からノイバード（許婚）迄こぎつけることは、白人社会の若い男性にとつては容易なことではない。

先づ男は窓の下に立って、ロメオとジェレットの絵を見る様な態度で二月も三月も我慢して毎日毎日女と会話をづける。それがやゝ進展してくると女は門の所迄出て来る。男は矢張り門外に立って夜の九時、十時までも談つて倦むことを知らない。

寒い霜夜も、霧の深い晩も何を話すものか知らないが、忍耐の限りをつくして女の御機嫌を取らなければならぬ。しかしもう茲までこぎつけければ誰れも見ている人があるじゃなし、ぎゅっと手を握り合ったり、女の心一つで接

吻を許るされる様なことがないでもない。順調にゆけば、それから家内にはいることが許され、許婚時代となつて女を自由につれ出すことになるのである。

しかし女によつては門前の所迄こぎつけて、それからトンと突つ放される者が少なくない。これは私が後年或ポルトガル生れの後家さんから聞いたことであるが、この後家さんが娘時代にはよく誰れにでもナモーラの申込に応じて会話をするが、いつもそれ以上深入りしないで別れてしまふのが癖であつたその母は

『妙な娘ね。きつとお前の心はブロンゼ（青銅）なんだよ』
といった。後家さんも

『若い娘時代の妾の心は真実にブロンゼだったのよ』
といつて笑つた。

何故に白人の娘は処女性を失うことを欲しないかという
と、それは勿論カトリック教の影響であるが法律の上に於ても結婚の初夜に於てもし処女でなかった場合は、離婚を詐されているからである。

処女に対する強烈な誘惑も、溶けるような陶醉もなく、索然たる結婚の初夜を送らねばならない日本人は不幸である。純潔な処女のまゝで一生を愛する夫に捧げるという思想は美しいと思う。夫を持つてからさへ浮気をしなければよいという様な日本の習慣は身震いせざるを得ない。

舞踏会と一口にいつても、あの悪魔化した贅沢な社交上

の娯楽機関となり、淫蕩な男女が痴態を演ずる媒介を作る様なものは斥けたい、しかしこうした純朴な田舎に於て行なわれるバイレに集まるものは、殆んど若い未婚者のみに限られ、結婚への楽しい道程である上から見て、そうして若い男女が断然或限界から脱線しないとしたならば、有益な意義ある機関であるといわなければならない。

『アンナさん、あなたは踊りが嫌いですか？』

『えゝ好きですわ。でもねパパイ……』

アンナは父フィオリの顔を見つめてだまり込んでしまった。

『それはね、ススキさん、実は私もローザもアンナに茲四、五月バイレに行かん様にすゝめているんですよ。なあにね、アンナにかゝわったことじゃないんです。貴方も事務所にいるのだから、とつくに聞いていましょう。ねえ、ローザ、先月の初めだったね。そら、ブラジル人の日雇のペードロが伊太利生れのマリアを連れ出した一件がありましたらう』

『あゝ、あの警察で結婚した一件ですか？』

『そうです、よく貴方も覚えていらっしゃる』　こういつてフィオリの語る所によれば、ブラジルでは（伊太利も同然）男が一度女の処女性を奪ってしまった上は、如何にその父兄が二人の結婚を妨げようとしても駄目である。彼等は親の同意を得られない場合は、警察に於いて結婚してし

まうのである。女は両親の遺産に対する権利を放棄しきへすればよいのである。

女を犯した男が結婚に対する責任を果たすことができなかった場合は、数年の禁錮に処刑せらるゝ様になっている。勿論女性の方から結婚を放棄する場合は、男の義務が解放せられてしまう。

『こんな訳でね、段々珈琲収穫期が近づいて来るので各国の日雇が入り込んで来ましよう、バイヤーノの様な兇暴性を持ったものから、取り返へしのつかない様な間違いが引き起こされてもならないし、アンナはまだ若いからね』
『いやなお父さん、妾がそんなに見えて？』

アンナはちらりと私を見て顔を火の様にした。

『なあにね。お前にそんなことがあつてたまるもんか。ありはしないよ、ないよ、断然！　しかしねアンナ、お前にはまだ男を見る冷静な判断はないよ』

フィオリは若い昔でも思いだす様に眼をつぶった。

『アンナ！　真実に気を悪くしちゃいけないよ。父さんがアルゼンチンから戻って来たのは二十六の時よ、あたしだって二十を越したばかりではあったが母さん……お前の祖母さんは、やかましい、しかしゝ人であったの。フィオリが半年も通って来るし妾の心もしっかりフィオリのものになってしまつても、未だお母さんは早い、早い、男を選ぶ時はあせつてはいけないといつてなかなか許してくれ

なかつたんですよ』

ローザはしみじみこういつてフィオリをなつかしそうに
柔和な眼で見た。

『ハ、、ススキさん、ローザの奴とんだ若い時のお惚氣を
いいおるわい。……ローザ、罰金だぞ、濃いカフェーでも
早く湧かしておいで。俺にはピングだ、ピングだ』

バイレの裏庭で掲げたものらしい、音響ばかり馬鹿に高
い花火が、轟然の月明の空に火の粉を散らした。

四十六

いつもならば、もうそろそろ珈琲収穫が始まる頃であつ
たが、蝗の害でコロノ達は間作物の蒔付けを二度も三度も
繰返したので、農場内の仕事は概して一ヶ月前後手後れと
なつていった。

大豊年の後を受けて、珈琲の結実量少なかったことが
反つて成熟を早めたらしく、大分紅みになってきたのが誰
の眼にもついた。

温厚な支配人も毎日報告に来る監督達を待ちこがれて、
なにかと指図した。

山建ての一番早くすんだのがトツカ部落であつた。監督
はジュリオといつてメネゴニ支配人時代から最も信用ある
人であつた。農場内の最端にあるので、小規模な乾燥場も

あり、珈琲精選工場も完備し、恰も是れ一箇の独立した小農場であつた。

ジュリオは他の監督の様に毎日事務所に顔を見せるといふ様なことはなかつた。何か仕事の代り目とか、特別な用件でもない限りは一ヶ月に一回位しか来ないことも少なくなかつた。

ジュリオが山建ての終つた報告に来た時は支配人テオフィロも何時になく、上機嫌であつた。

『ジュリオ、今年は千本にどれ位ある見込かね？』

『そうですね、コッコ（実）で三十五依、ベネフィシアード（精選）で五十アローバス位なものでしょうか』

『五十アローバスあるうか。私は農場全体から平均千本四〇アローバスをやつと越える位ではないかと思うがね』
『トツカ丈は断然五十アローバスはきれません』

こんな風に二人の会話は珈琲の作柄に就いて色々取り交わされたが、珈琲というものは豊年の次には必らず不作がくる。大きな豊年が来るには十数年或はそれ以上の長い準備が必要である。即ち十二月から二月の終り迄一大降雨があり、開花時に於ける寒冷な南風のないことが絶対条件である。昨千九百六年の豊年は実にカフェーがブラジルに移植されて以来のレコードであるが、決して天然及人事の共同準備が五年や六年の短日月の後に達成されたものでないとのことである。

千本に対するカフェーの結実量は、時として二百アローバス以上に達することもあるが、それは只ほんの一部の話で平均して豊年で百アローバス、凶作で四十アローバスという両端を往来しているのが実際に近い収穫量である。『なかなか珈琲園経営も思う様にうまく行かないものですね』

支配人は心持ち暗い顔をした。

X

X

X

ジュリオは支配人テオフィロとの話がすむと日雇人の使用記帳や、会計上のことを報告するために、簿記係の窓口に来た。

ジュリオが私の顔を見ると

『ススキ・ヴオツセ・エスタ・ボン』（お前は達者かねということ）

こういつて不揃な一本の歯をちらりと見せながら笑った。

『有難う。時にジュリオさん、私は貴方にきいて見たいと思うことがあるんだがね』

『馬鹿に改まってるね。さあさあ私の知ってることであつたら……』

『それは山建のことなんです』

コロアソンに或者はモンテ（山）を盛り、或者はコルドン（長畦）をつくっている、か、どうする方がよいのである。

るかを知りたいのであった。

『その得失は人の見方によつて違ふがね。私の考へはこうなんです』

ジュリオの説く所によれば、傾斜面は大雨などのあつた場合に珈琲の実が流失する恐れがあるので帯の様に長く土を盛り立てる方がよく、平坦な土地はモンテ（山）にしてもコルドンにしても差支ないとのことである。

元来こういう地勢上から割り出して起つた仕方であるから、監督はよくその辺を考慮して適宜の方式に依るべきである。

山崩しは珈琲樹の下へできる丈け肥料分のありそうなもの、例へば枯草珈琲の落葉などをかき寄せてうまく土を被ぶせるべきである。つまりエスパラマソンは珈琲園の新らしく生長する細根を培うことを目標とすべきものである。『ススキ、日本移民が来たら、又ゆつくり伝授することでしょう。コエリョさんさあ一つカマラーダの勘定をしてもらいましょう』

彼はこういつて肩にかけた木棉の袋から帳面を出した。

四十七

水野竜氏が愈々ブラジル移民契約のために再び渡航したという報知をペトロポリスから受取った。それにはサンバ

ウロ市へ着くとすぐ知らせてやるから出て来る様にと書いてあった。

約一年間に亘る農場生活に於て、私は時々浅薄な報告めいたものを水野竜氏に送ってはいたが、さてどれ丈けの知識を得たであろう。理論的に日本移民が果して有望であるや否やを説明するには、私の体験はまだまだ不充分であった。公平に、率直にいうならば珈琲園に於ける私の労苦などは、ほんの茶番狂言の様なものであるという事が最も当っているであろうと思う。

私は水野竜氏来伯を心からよろこんだが、私自身の努力に対し不満であった。一年ぶりで日本語、そうだなつかしい母国語をこの唇から語り出すことのうれしさほどんなであらう。殆んど日本の書物からさへ遠ざかっていた私は、果してどんな声で、どんな調子で、どんな風に水野氏と応対するであらう。第三者になってその光景を想像すると、それ実にたまらない程滑稽なものであったので、私はとうとう独りで吹きだしてしまった。

『ススキさん、何がそんなに面白いことがあるんですか？ あゝ解った昨日フィオリの家でアンナにもてたんですな！ オ、ススキ！ススキ！』

簿記係のコエリヨは半ばからかう様な調子であった。

『いゝや、大違い。実はねコエリヨさん、竜・水野がペトロポリスに着いたという知らせを受取ったんです』

『リオ・ミズノ、そうかね、おゝあの頭の禿げた人のよい爺さんでしたね。私はあの人からもらった絹のレンソをまだ大事にして持っているよ』

ブラジル人は、こういう場合きつとその人からもらったものゝことを話す。それはまたもらいたいという一種の謎ときき取れないこともなかった。

『そうよ、あの禿げた爺さんですよ。今度移民契約が出来ればいゝがね』

『勿論出来るとも、サンパウロ州珈琲園主は伊太移民が来ないので困っているんだからね。日本移民が来るとこの農場へも最小限五十家族は入れるだろうから、君はインテルプレテ兼監督となるんですね』

『さあ』

私にはそれがうれしい期待でもあったが、恐ろしい不安でもあった。

『一体リオ・ミズノは何時頃此農場へ来るんでせう？・』

『解りませんな。サンパウロ市に着くと電報を打つといって来てますが、私は逢いに行かねばなりません』

『やあ、何か大そう面白そうだね』

思いがけなく支配人が窓の外かと声をかけた。何処か馬で一回りして来たらしく、皮鞭を手に握っていた。

『ススキがね、リオ・ミズノが日本から着いたといっているんですよ、貴方は御存じないかも知れませんが、リオ・

ミズノは日本の移民会社長で、昨年ススキと一緒に、公使館の人などところへも立ち寄った人でんです』

『成程、それでススキがはしゃいでいるんですね』

『ススキは、もうサンパウロに行き度いといって騒いでいるんです』

『ハ、気早い男だね』

朝飯を知らせる工場の九時の汽笛が、けたまわしい音をたてゝ鳴りひびいた。

四十八

それから一週間もたないうちに水野さんから『サンパウロ市に着いたから、すぐ出聖せよ』という電報を受取った。

支配人テオフィロは私の十日間の休暇をすぐ許してくれ、簿記係のコエリヨは『水野さんによろしく』などとよろこんでくれた。

秋なれば、その日も晴れ輝いていた。私は車窓のガラスに顔を押しつけて、むさぼる様にゆれ動く光景を眺めた。

『おゝパイネラ！パイネラ！』

私は至る所の野に、山に咲いている淡紅ゐの美しい花を見て叫んだ。

前年三浦通訳官、水野竜氏等と始めて珈琲園を巡視した

時も、この花が咲いていた。日本のさくらが夢見る様なおぼろおぼろの感じを与へるのと違って、パイネーラの花は透明な紺碧な空に鮮明な彩りを見せて、朗らかな情懷を起させる。パイネーラはブラジルの秋をシンボルしたものである。

パイネーラは十数種あるが、普通に見るのは羊毛の樹 (Arvore de lã) 絹糸の樹 (Paineira de Seda) などと呼ばれているもので (Bambaceas) に属し、学名 (Chorisia speciosa) と称されるものである。ヌーボー式にぬつと宛然摺木を立てた様に太々と生長した樹に刺のあるのと無いのがある。花の咲く時に落葉をしているのも少なくない。よく点検すれば花卉の長さは二寸前後で、その色はあざやかな桃色に緑と褐色の斑点を有し、中心に白い所のある配合がたまらない程美しく見える。小さな十数個の種子を包むに絹糸の様に光沢のある棉を以ってし、実の大きさは五寸位である。ヌーボー式な大木にこういう実がぶらりぶらりと限りなく附着しているのも変った眺めである。この棉は布団や枕などに入れるとふわふわとしていつ迄も堅くならない特色を持っている。種子を搾取すれば、染料を得る事ができ、髪の手を染めるにも適している。土人は墮胎などに利用すると聞いている。グアラナやビールなどの偽造にも使用される事は余り人に知られていない。アマゾナス地帯にある最大の樹スマウメーラも所変

れば品変るでこのパイネーラの別名に過ぎぬ。

私はこんなことを考へながら、豊沃なサン・シ・モンの丘陵地帯をぬけて、カーザ・ブランカの広々とした平野を走る汽車のなかゝらサンパウロ、ミナス両州境に起伏している山脈のうねりを見て、始めて山らしいものに逢着した事をよろこんだ。特にカスカベール駅からポツソ・デ・カルダの火山系に近い隆起を展望して、日本のある地方を旅する様な感情にひたることを得たのは意外であつた。

モジアナ線を通ることはこれで三回目であるが、二回とも言葉も解らず、只夢の様にぼんやりしていたのであつたが、今回はよし片言混りに過ぎないにせよ多少の会話もでき、風俗人情にもしたしみを持つてくると、今日迄気付かなかつた色々な新らしいことが、それからそれと眼についてくる。

満々と水をたゝへて流れるモジー・グワスー川も珍らしかつた。それは実に一年ぶりで見ると大きな水流であつた。突立つた小丘を川向に眺めて、芭蕉や密柑樹の多い、川の名と同じ町には、寺の鐘が鳴りひゞいていた。この辺から地勢は再び波状をなして起伏し、黒味を帯びた赤土が日盛りの日光にさらされていた。枯枝の多いのが眼についたが、それでも至る所に成熟しかけた珈琲園が展開されて、爽やかな緑の波が地平線の彼方へ遠く遠くうねっているのが見えた。

ジャグアリ駅は何となく旅らしい感じの豊かな所である。石の多いジャグアリ河の岸には椰子やマンガ樹の繁った農場があつて、如何にも熱帯らしい眺望をほしいまゝにしていた。名も知らない種々な果物が、淡紅色のバナナ、黄金色のネーブルオレンジなどに雑じつて陳列された商人の机が並んでいた。ペローバ、カプリウーバ、ジャカランダ、イペ等の名木で製造された杖、日本の温泉や名所などによく見かけるロクロ細工の玩具めいた所謂お土産品を売っている人達もいた。

カンビーナス市迄の線路は山溪を通過しているので曲折がはげしかった。汽車のガラス窓が傾きかゝった太陽の反射を受けてぎらぎらと光った。冷たい様な妙な暖かさが車内の人々の顔をあからめさした。

ピリツーバで電気の高圧線が眼に入つた時に、大きな都会に近ずいたことを知つて、胸がどつどつとどろくのをどうすることもできなかった。チエテ河の鉄橋、電燈の海、その光をうつした雲影、人口三十万のサンパウロの騒音が耳にひびいた時、私は一種名状することのできない狼狽を覚えた。

グランデ・ホテルの水野さんの室は、階上の昨年と同じ室であつた。ノックしてあらわれた私を見ると、例の重々しいゆつたりした口調で、こういうといつもの癖である心持一寸口を尖がらして私を迎えた。

『お久しゅう御座います。別にお変りもありませんでしたか？』

私の口は妙にこんがらかつて物をいうことができなかった。それは決して感激のためではなかった。長いといつてもたった一年間に過ぎなかったが、日本の文字をよまず、日本語を話さなかったことは、私をして自由に物をいうことを洩らしめたのである。如何にもわざとらしく取られるのがいやさに、あせればあせる程吃ってきて、我ながらおかしい程であつた。

『ハ、、鈴木は日本語もろくに喋べらなければ、ブラジル語も末だ駄目だというから、これは愈々不具者になつてしまつたねハ、、』

こういつて水野さんは笑つた。私も仕方なしに顔を赤くしながら笑うより外なかった。

『戯談はとにかく、一つの君の体験に依る珈琲園に対する感想を忌憚なく話してくれたまへ』

水野さんはぼつりぼつりとこつこついいながら、禿げた額から、短く刈つた白髪頭を撫で上げつつ私の顔を柔和な眼付で見守つた。水野さんのこうした態度には誰でもほれさせ

る様な慕わしいものがあつた。

『さあ？』

私は一寸何と返事をしてよいか解らなかつた。一年位の体験――それも言語さへろくろく通じない者の珈琲園調査に、何の權威を認め得よう。悪るくいえば観光旅行者の知つたか振りと五十歩百歩に過ぎない。

これ迄私の感じた事はその時々水野さんに送っている。そうしてそれは水野さんの新著「ブラジル移民」や當時博文館から発行されていた雑誌「太平洋」などに載せられている筈である。数カ月たってからそれをよみ返へすと冷汗の出る様な考へ違いや錯誤を見出すことが少なくなかつた。杉村公使のサン・パウロ州珈琲園巡視報告書中に、サツマ芋をジャガ芋と取り違へて書いている様な滑稽に近い誤りがあつても、わざとらしい誇大な徒らに煽動する様な無責任なことは絶対に斥けたい。

私は従来の報告書にもれたことや、誤まりをたゞし、最近に実見したコロノの間作物による収入に対してできるだけくわしい話をしてから、珈琲園労働に対する日本移民問題に対しては、私は自分の経験よりも、外国移民の成績を見る方が、もつとたしかな結論であると思うということを切論した。

『ね水野さん、私の体験などは貧弱でいうに足りませんがね、伊太利人を御らんない。裸一貫で来た人達が、五年、

十年、二十年と経過する内に、立派に成功している人が市街地にうようよしているじゃないか。事実ほど尊いものはありません。ブラジル移民は調査したり、考慮したりするよりも実行することが第一であると思う。珈琲園労働に日本人が耐え得るかというようなことや、衛生状態については、労働に何の経験もなかったこの私が合格しているし、短かいといゝながら一ヶ年の間にたった二日間風邪で寝た以外、一服の薬さへのんだことのない私の健康な顔を御覧なされば、千百の非難を打消す何よりの証拠であると思う』

実際私は自分の貧弱な体験よりも、南欧移民の実状を知ることによって、珈琲園に対する日本移民の可能性に誰よりも樂觀的な確信を持っていたことを断言するにはぐからないものである。

『そうだろう、俺も同感だ。君には苦勞をかけたね』

水野さんは幾度も軽るくうなずいた。そこへノックする音がして一人の男がはいってきた。煙草好きな人に特有な浅黒い色をした角張った顔に、剃ってから四五日たったらしい真黒な荒い髯がばらばらと鼻下にも顎にも生えていた。

『伊藤君、紹介しましょう、これがいつも話していた鈴木だよ。今着いた所でね。伊藤君はこの度俺と一緒に来てくれた通訳さんです』

私は立ち上った。

『私は鈴木です』

『お名前は水野さんから聞いてよく知っております』

握り合った伊藤さんの手は何となしがさがさと脂肪氣のない様な感じのする人であった。

五十

水野さんに対する大体の報告が終ったので、翌くる日から私は自由を得た。恰も籠を出た鳥の様な氣持もしたが、一年間の農場生活から余りに突然な解放は何とはなし間が抜けた様で反ってまごついた。先づ、農場から書面の往復をしていた、藤崎商店の後藤武夫君を訪問する事とし、グランド・ホテルを出てサン・ベント街を下って行った。アントニオ・プランド広場から右側の三軒目に『O Japao em Sao Paulo』というのがそれであった。朱や金色をこてこてと塗っている瀬戸物、扇子、日傘など、一寸日本では想像もつかない所謂海外向の品物が並んでいた。私は恐る恐る店のなかへはいって行った。

二、三の客が絹ハンカチや玩具などを弄っていたが、朝が早かったので店内はまだ静かであった。丈の小さい髯の濃い人は支店長の野間貞次郎君だとは解ったが、その外の三人の青年の何れが私と文通をしている後藤君であるか判

断がつかなかった。

『私は鈴木です、後藤君？』

私が三人の青年をぢつと見守った。

『鈴木君ですか、私が後藤です』

黄味のかった丸顔の、眼鏡の奥から時々鋭い眼光を投げる如何にも抜目のなさそうな青年であつた。

『これは佐久間重吉君、こちらは田中良作君』

集まつて来た二人の青年に私は日本人らしく頭を下げて初対面の挨拶をした。

佐久間君は丈はないが肩巾の張った頑丈な体格で、顔の広い、今にもにやにや冷笑を洩しそうに見えた。田中君は瘦形で如何にも総明らしい色の白い氣の置けなさそうな感じを与へた。

私はしばらく店内の椅子に腰かけて農場の話をした。後藤君達はお客をあしらひながら、代る代る渡伯途上のことや、開店当時のことや現にサンパウロ市に在留する日本人のことなど私の質問に応じてくれた。

X

X

X

千九百六年明治三十九年は日本人の渡伯者に恵まれた年であつた。氣運というものは一箇の不思議な謎である。

日露戦争後の民族的自覚は

『海外へ！海外へ！』

世界の偶々へあふれんとした。杉村公使によってつくら

れた気運はブラジルにもその余沫を飛ばさず 先づ京都の人三宅栄次郎君が私に遅れること五ヶ月、即ち明治三十九年四月七日神戸出帆の備後丸で渡伯の途についている。この人は徳富澄花のトルストイ訪問と同船したのである。巡礼紀行中の『方舟の鳩の如く』の項に

『余の船房は備後丸の左舷、下甲板、四田軍の室、六節の床を凹字形に二重に設く、……南米 ブラジルに行く人一名、ミラン博覧会に行く人二名……これ余が同室の友なり』

南米ブラジルに行く人一名とあるが即ち三宅君のことである。日本郵船欧州航路復旧後の第一船で日本を飛びだすという所に当時の日本国民のはつらつたる精神を見ることが出来る。時代の子である。

三宅君はのんびりした如何にも京都人らしい人であった。富裕な銭湯屋の長男だということで、労働に経験がなかったため、思う様に行かなかったらしい。在伯十七八年遂に空しく京都の生家に戻った。

藤崎商店を開く目的を持って野間貞次郎氏は三人の青年を同伴し、神戸を出帆したのは千九百六年（明治三十九年）五月五日、日本郵船の欧州航路復活第二回、河内丸であった。マルセーユ経由サンパウロ市に恙なく旅装を解いたのは七月十七日であった。

関税の関係、店の位置の選択等に意外の暇がかゝって、サ

ンベント街に開店したのは九月二十四日であつた。

開店前に新聞社員などの招宴を催したので人気をあほり、来るは来るは、日本着物——それもほんの木綿の平常着であつたが、

『おゝ君はO Japao em Sao Pauloを見たかね。正真正味のジャポン・キモノを着ているぜ』

一箇のニュースとしてサンパウロ市のあらゆる噂話となつた。従つて店内は文字通り全く立錐の余地なしで、同じ場所に立つたまま身動きが取れず、売上金は着物の袖に投げ込むという有様であつた。

こうした混雑にありがちのスリにやられたものがあらわれて、一日目からは警察から巡査を派遣して警戒せしむるという騒ぎであつた。

売り上げ金を銀行に持つてゆくと、その内に二枚の贋札があつたのを、新聞では早速『日本人は贋札を知らない』という風なことを書き立てたのが意外な人気をあおつて、真実贋札を持つて来るものなどが現われ、開店二ヶ月位というものは、ろくに昼飯にもありつけない程のいそがしきであつた。

これが日本人が始めて、ブラジルに店を開いた最初の記録である。

藤崎三郎助氏は東北人に似合わず、鋭敏な頭の持主であつたことも一原因には相違ないが、利害を度外視して日

本商品の新販路を拡張しようとする犠牲的精神に富んでいたということも見のがしてはいけない。そうして藤崎氏をして、こういう決心をなさしめた裏面に彼の友人堀口九万一氏の力説にあずかって力ありしことを忘れてはならない。

五十一

藤崎商店員が神戸を出帆してから一ヶ月たって、カゴシマから隈部三郎、本田竹治の二家族に長瀬、鳥居、九玉、安田良一等の青年を打って一団とした渡伯者が神戸に着いた。驚くべし其処で出雲から出て来た明穂梅吉、太田、中井夫妻の同一目的を有する一行と落ち合ったのである。偶然にも日向（カゴシマ）と出雲と二つの代表的日本文化発祥地からブラジルに向って新日本の創造を企て、時を同じうして会合し得たということに対し、私は奇蹟以上の興味を覚ゆるものである。

明穂氏等は仏国マルセイユに下船一路渡伯したるに反し、隅部氏はどうしてもカゴシマへ戻らなければならない事情があった。安田良一氏等の青年は明穂氏等と別れてロンドンに行ったが、茲でも意外な不幸がこの一行を待ち受けていた。それは本田竹治一家が空しく本国に引き上げなければならぬ事情を生じたことである。

こういう訳で明穂氏等の着伯は八月であつたが、安田氏等は一ヶ月遅れて九月になつて漸くサンパウロ市の土を踏んだのであつた。

一旦帰国した隈部氏は更に有川新吉、松下正彦氏等を伴うて着伯したが十月になつてからであつた。

落伍者はあつた。しかし二十七年前の日本には海外渡航に今日の人の考へられない難関のあつたことを思つたならば、一年間にこれ丈の日本人が渡伯し得たということは、寧ろ意外な好成绩であつたといわなければならない。

是等の人達は皆当時サンパウロ市第一のホテルであつたロツチセリー・スボルトマンの料理場の助手をしていた。月給は食料付六、七十ミルレースであつた。今、貴然としてすましこんでいる堂々たる体格の持主、現聖市海興支店の明穂梅吉君は麦桿帽子工場の職工であつた。

その内の松下正彦君などは多少の資本を作ると商才満々たる人であるから、メリケン粉をこねてお団子にまるめ、フェジョン（一種のささげ豆）をこして餡を製し、日本人の口に入れてさへもすこぶる珍妙なるおしるこをこしらへ、『ジャポン・シヨコラーテ、ジャポン・シヨコラーテ（日本製チョコレートという意）』

天秤棒に担げて、松下君のことだ、有りつたけの大声でふれ歩いた。露西亜に勝つた小人国日本のチョコレートと一体どんなものだろうと忽ち黒山の如く人が集まつて来

る。物好きな人達が

『一杯そのジャポン・シヨコラーテをおくれ』

松下君がうやうやしく茶碗について出すのを恐る恐る口づけたかと思うと、忽ちパツと吐き出してしまふ。

『なんだ、フエジョンの様な味がする。これが、ジャポン・チヨコラーテ？』

他の一人が『俺にも』といって試めしてこれも案の如く吐き出す。一杯貰うとそこら中の人で一口づつ試食して二杯とは売れない。又二度と買ってくれない。なかには

『日本人は丈が小さい筈だ。お前はそんな大きな体格をしているから偽物だろう。お前は支那人だな。なんだこんなジャポン・シヨコラーテなんて人を馬鹿にしている。インチキをやると承知しないぞ支那人奴』

などと怒鳴り出すのもある。流石の松下君の名案ジャポン・チヨコレートも散々な失敗で再びホテルのジャガ芋の皮むきになるより外なかった。

ホテル・ロツチセリーは最初に渡伯した同胞のパイオニア達に取って、砂漠のオアシスの様なものであった。少し金がたまると、直ぐ野心を起して何事かを企てた。それは判を押した様に失敗したが、何時ももとの古巣へ舞い戻って芋の皮むきを始めた。昇進の見込もなかったが、支配人はぶつぶつ小言をいいながらも、日本人の為に料理場の仕事を与へてくれた。この支配人の名はどうしても思い浮べ

ることができないが、日本人のサンパウロ発展史にもらふことのできない人である。

五十二

十人余の在留同胞のうち、家庭を持っておるのは只隈部三郎氏のみであつた。

独身者達の間借しているのは、リベロ・バダロ街の突き当りから右へ折れたサン・フランシスコ坂街であつたが、隈部氏の借りている所は二、三町離れたアスゾルバル・ナッシメント街の端れであつた。一家の人達は隈部氏夫妻と十七才になる光子さんを頭に四人の娘達と一人の男子を合して七人の賑かな大家族であつた。

『娘さんが居る！』

只それだけの言葉を聞いただけでも当時の在留同胞青年達に取って大きな慰めであつた。

隈部さんの一家は紙巻煙草の請負をしていたが、ホテルの仕事から戻った青年達は我も我もと狭い隈部氏の一間に集まって煙草巻きの手伝をした。それは丁度花の蜜を探つて集まる蜂の様なものであつた。

『後藤君、一つ隈部さんの宅を訪問して見ようではないか』臆病ではにかみ屋の私でさへ『娘さんが居る』ということに百パーセントの興味と好奇心を持っていた。

『よかろう。しかし娘さんはもう他人のものらしいぞハ、』

後藤君は笑った。

『いや、妙な風に取っては困る。私は隈部さんに敬意を表して置きたいのさ』

私は心にもないことをいった。その実十七になる娘さんを見たかったのである。

『ハ、戯談さ君。もう店を閉める時間だ。さあ君の所謂敬意を表しに行こう』

『いやに皮肉るね』

二人は連れ立って、ブリガデイロ・ルイス・アントニオ街を左に折れて行った。うす青いガス燈の光りは街路樹のプラターノを吹く秋らしい風に淋しくまゝ、いていた。

伊太人の一間を通り抜けて、セメントの階段を下りると隈部さんの借間であつた。

パライゾの方から展開されている溪谷に望んだ室で、ジョン・メンデス広場から、リベルダーデ街へかけての高台に建て連らなっている不規則な家並は、ナポリの裏通りをかけた絵を見る様な情調があふれていた。

ぼつと黄ばんだランプの灯ーーガスでも電気でもないが一層興味を引いたーーを中心に隈部夫人、娘さん、お手伝いの青年達など皆一心に煙草を巻いていた。

不意の闖入者に隈部さんは驚きと、喜びとをごっちゃにして私共を迎えてくれた。

お茶が出たので、お手伝の青年達も一時仕事を止めて二三の話を取交わしたが、又せつせと煙草を巻き始めた。

油煙さへ少し立ちのぼって、ランプの灯は段々暗くなつてゆく様な感じがした。娘さん達のつゝましやかに煙草を巻いている横顔だけがほの明るく浮き出されていた。

お茶を出してくれた隈部夫人も、まもなく煙草を巻くグループのなかに雑じって働き出した。余り綺麗でないこの一室には、只勤労の気分のみが満ちあふれていた。

私共は長く邪魔をするに忍びなかった。隈部さんが止めるのも聞かずに外に出ると、私はだまっておれなかった。

『感心なものだね』

後藤君を顧みた私の眼には涙があった。

『皆であゝして巻き上げた煙草を隈部さんはサンベントの店へ届けて、また新しく材料をもらってくるんだ。まあ家族が職工で隈部さんは小使という所ですね』

後藤君も感慨に堪えないものゝ如くであった。

隅部氏は弁護士をしていた人で、当時のインテリゲンチヤである。夫人は英語が夫君よりもうまいというキリスト教を奉ずるモガであった。現今から二十七年前に相当な社会的地位を占めておった人が、断然これを擲つて一万哩外の天地に新しい運命を開拓せんとする壮志は感激なしに見ることができない日本人をブラジルに植え付けるには斯の如くせよと身自ら範を示しているものである。

あの暗いランプの下には、人間の顔さへろくに見えなかったが、神聖な尊いものが電光の閃めくが如く動いていた。私はこの眼と心で明らかにそれを見たのである。

『そうかね』

私は長太息をした。しかしそれは嘆き、悲しむのではなく、却って隈部氏を礼讃する心の激動より生れたものであった。隈部氏の心境は只労働を体験したものによつてのみ洞察せらるものである。

神聖広場のカテドラルの上に月があつたが霧のためにぼんやりしていた。後藤君と別れて私は只一人、ヂレイタ街を歩いて行つた、私は一人になって考へたかつたのである。

X

X

X

これは茲にかくべきことではない。しかし私に是非隈部氏について一言を費さしてもらいたい。

隈部氏は経済的には成功しなかった。しかしそれが却つて隈部氏を尊くするものである。金など貯めては却つていけないのである。隈部氏の本領は、その辺にごろごろ転がっている移民を喰物にして生活する人達とは違う。二十年前以前にブラジルの土となる考へで来て、その通りブラジルの土となつた。一人でも隈部さんの家族でブラジルの土とならない者はあるまい。ブラジルで結婚しブラジルで子を生みつつある。

生めよ、あふれよ。誰が認めようと認めまいと隈部さんのやった大きな事実を、何人も抹消することができない。移民契約者やその代理人をブラジル移民の功労者の様に表彰する社会を弾劾する反対に、私は隈部さんの如くブラジル移民の礎となって、人知れず死んでいった人達に対し、無限の尊敬を払うものである。

五十二

三浦通訳官と水野さんと、もう一人モンテイロという水野さんの代理者たるべき資格を持つ小男と三人で、毎日の様に州農務局に出かけて行つた。

移民契約は大した難関に逢着せず、少しずつ進行しているらしかった。

私は農場に帰らなければならぬ日も一兩日の間に追つてきたので、その情報を得たいと思つて三浦さんの室をノックした。

『エントレ！』

おはいりなさいというスペイン語調の三浦さんの声がした。

『鈴木君か？』

三浦さんは余り多くもない鼻下髭をひねりながら私の顔を見上げた。

『私はもう明日あたりチビリサへ帰ろうと思つてね。移民契約の方がどんな風になっているか気になるもんですから……』

『鈴木君覚悟せんといかんぞ。移民の来る様にするには私達の努力だが、移民が着いてからは君の番だからね』

大象の様な小さな眼はじっと私を睨んだ。

私は何んだか堪えきれない様な重味が加わってくる様に感じた。

『それでは移民契約は成立しそうですか？』

『契約の可能性は安心してよかろう。私の心配するのは日本移民が珈琲園に這入ってからどうなるかという問題だ。私には殆んど見当がつかんというのが、偽らない告白だ。どうしたって私達はいゝ所ばかり見せられているので、余程割引してかゝらないと実際とは余程かけはなれたことになるからね然し日本人は世界の何処かへ抜け道を見出さなければならぬ。杉村公使だって、私だって、そういう見地からブラジル移民というものを入れ様と決心したのだ。私はどんなことがあつても日本人をブラジルに入れて見たいと思つている』

『若し真実に労働に経験のある家族が来れば二ヶ年、二コントスの純利は間違いないと信じます……』

『所が君、移民会社なんかというものは濡手で粟の様な宣伝をするし、渡航希望者は大工でも鍛冶屋でも商人だつ

て、怠け者だつて送つてよこすから、そこに大きな欠陥がどうしたつて出来てくるのさ。そうして困るのは何も知らない君達さ、余程覚悟せんければいけないぜ』

『そうですかね……しかし……』

私は何もいうべき術を知らなかった。日本移民の来ることを心から望んで止まなかった私の心にも、一抹の暗雲が浮動してきた。

『びつくりしてはいけないよ。そんなことは移民会社に取つては罪のない方さ。君はまだ純だね。こういうと語弊があるかも知れないが、もう少し人間が悪くならなければ、移民事業に携わることは無理さハ、、しかし君にはなれそうもないね』

三浦さんの口辺にはそれとなき微笑の影がひらめいた。私はだまつて考へにふけた。

『心配せんでもいゝよ。時に君、今度の契約には通訳に向つて州政府から旅費として五十ポンドを支給することになつてゐるが、それは君にも適用する様にしてやるからね。珈琲園で犠牲になつた報酬は別に移民会社から当然君にするだろうから、これは私の好意だと思つてくれたまへ』

『有難う、いつも貴方からは御世話になり通しです』

私は心の内でその五十ポンドがとれたなら、どうしようかと考えた。

三浦さんは州政府を訪問する時間だといって立ち上ったので私もその後が続いて室を出た。

X

X

X

モンテロー氏が居り、三浦通訳官が仲介者として口をきくので州政府との交渉に、水野さんの連れて来た仏語通訳伊藤さんが、何となし疎外される様な風があった。多少そんな不平もあったものか、伊藤さんは何時も酒を呑んでいた様であつたし、夜になるとホテルを明けて日本人の所へ行った。

ブラジルに於ける日本移民史の上から見ると、この伊藤さんは、ほんの瞬間的存在に過ぎなかったが、只一つこの人の残したものがあつた。それは隈部光子嬢と同航海者の有川新吉氏との結婚媒介に成功したことである。ほんの身内だけの内祝言があつたということも伊藤さんの酒に酔つた口から聞いた。

同胞間に於けるたった一人の娘さんを奪われるということは、青年達に取つてこれ以上の淋しさはなかったろう。少しも親しみのなかった私などでさへ何んだかいつも見つけている空の星が見えなくなった様な感じがしてならなかった。

私はこんな和歌をよんだことを覚えてゐる。

唯ひと眼見しばかりなる娘なりしが

嫁ぐときけば淋しねたまし

かくて、三浦通訳官から『若し移民の契約成立の場合は移民収容所書記に任命されることになっているから、通告あり次第直ちに出席する様に』ということを知られ、水野さんからは『今度こそ移民を連れて来るから確乎頼むぞ』といわれ、何だか重たい荷を背負わされた様な心持を抱いてチビリツサへ戻って行った。

五十四

日本移民輸入契約の成立は最早争うことのできないものらしかった。私は三浦通訳官より通知を受け取り次第何時——或は明日にでもサンパウロ市に出て新来の同胞を迎うべく移民収容所の事務を習得しなければならないかも知れなかった。

そうだ。私は新しい生活に入る前に、できるだけ珈琲園の表裏と内奥地の人事、自然等に充分な理解を持たなければならなかった。私はこれ迄多くの場合一個の単なる労働者としてのみの体験と観察とに偏している事を否むことができなかった。私は一刻の閑暇も無駄に送ってはならないと思った。昼のうちは余り事務所と離れていない珈琲園のなかにはいつてゆき、夜にはコロニアに姿をあらわして

誰彼の差別なく色々な話題を提供して、しばしば夜の寝鐘の鳴った後迄も立ち去らないことがあった。

心も挙動も余りにあわただしい私を見て簿記係りのコエリヨは、

『ススキさん、ススキさん、どうしたんだね。まるで気狂の様にはね廻っているじゃないか』

『気狂？ 私は今身体がいくつあっても足りない様な気がするんです。私は珈琲園に対するこれ迄の私の見方を変更しなければならぬ気がします』

『なぜ？』

コエリヨは意外だという風で私を見つめた。

『なぜってコエリヨさん。日本移民がサンパウロ州の珈琲園に来るのは、その九十九パーセント迄は十年間位働いた上、金儲けをして本国へ引き上げ様とする人達です』

『それでいゝじゃありませんか。伊太利人のうちには五六年位で帰るのもあるし、現に君がこの農場に来てから、それから昨年の大勘定のあつた後イタリアへ戻ったコロノの内には三年位しか居なかったのもあつたことは君もよく知っている筈だ。伊太利人のうちにはアルゼンチンで麦の収穫を終ってから、ブラジルに渡ってコーヒー採取をなし、ほんの一年足らずで帰るのもあるんだから、日本移民が十年もブラジルににいるというならいゝじゃないか』

『それがいけないのです』

私はしはらく沈思せざるを得なかった。

『日本人と伊太人の家族構成が全然違っています。伊太利人は父母も、祖父母も、子供も総てを挙げて渡ってくるが、日本人は精々夫婦者にその弟妹が経って来る位が関の山です。甚しいのになると、いゝ位な寄り合せものが家族と称して来ることだろうと思う。だから伊太利人の様に一家族の労働能率が少ないから金儲けができないわけです。それに距離の遠いという問題が旅費の上に比較にならない差違を持っています。おまけに日本移民の内地に於ける社会的地位と生活とは、てんで伊太人の行詰った純然たる無産者とは話にならない程のへだたりがあります』

私は深い溜息をしてコエリヨが不審らしくひそめる眉を見守った。

『だってススキ、悲観し給うな。僅かに十年足らずで渡伯した独逸人シュミットは、二千万本の珈琲王国に君臨して King of Coffee (珈琲王) として知られ、サントスからアルト・ダ・セーラ間の鉄道工事に於ける単なる一労働者に過ぎなかったマタラズは今やサンパウロ州の工業界の支配権を把握せんとしていることは、移民の明るい将来を暗示しているものでないか。事実議論を超越する。えゝススキ、君は日本移民中に一人のマタラズも、シュミットも出ないと断言するのかね』

コエリヨは高い鼻のふくらみから深い刻みを両頬にあら

わして微笑した。それはこの人の得意な時に見せるいつもの癖である。

『違います。私の葡語の知識が真実の心を話し得ないので悲しくなります。私のいうのは珈琲園というよりは、寧ろサンパウロ州に於ける総ての労働組織は働く人には余りかんばんしくない様になっているつまり働くよりも働く人を使う人が、割合上非常によりよい仕組になっているから、日本人が珈琲園に働くということは、決して所期の収入を挙げる事はむずかしいから、一日も早く独立して人を使う地位を得なければならぬということです。そこで十年位で金儲をして帰国しようという日本移民に対し、私は何だか危やぶまれる様な気がしてきたのです』

『馬鹿に悲観するね。あのドメニコを御らん。君もたまにはあの因業らしい家に行ったことがあるだろう。あれは伊太利のクラブリア辺の典型的な人柄ですね。自分で客馬車も備えて結婚だ、葬式だという場合には金を取るし乳牛だって三頭も飼って一滴だって無駄にはしない。弟息子は農園の除草を除草機で請負って珈琲取扱以外の収入もはいつて来る。どうだあのずんぐりと丈のひくいドメニコと、樽の様に肥え太った高いフランチェスカ婆さんは、何一つこれという労働らしいこともせずに気楽にして好きなポレンタ（唐黍の粉でねったもの）鶏か牛肉の生でなければ食べないという贅沢をしながら、年々小金を残してゆく

じやないか。何も珈琲園だからって、君の様に始めから儲からないときめてかからなくともいゝじやないか。それはススキ、使われる人より使う主人のよいことは何処だつて変りはない筈だ。日本だつてそうだろう』

コエリヨはどうしても私の真意をのみこめないらしいかつた。

『私は例外の話をしているのではありません。例へば北米カリホルニアの如く主人の利得も勿論大きからうが、使用人にも相当な収入を得られるのと違って、サンパウロ州に於ける労働は、奴隷時代の影響とでもいうべきか、非常に使う人の側が割よくなっているから、日本人が成功しようと思うならば一目も早く使用人の境遇を脱して独立する必要があるである。サンパウロ州のうま味がそこにあるのですから、十年位で帰国するという念を捨てゝ永住の考へでやらねば成功率が甚だ覺束ないということです』

私はこういつて、私の真意をどうしてもコエリヨに呑みこませることのできないことを悲んだ。『ハ、、、ススキ、どっちでもいいじやないか。日本人がどしどし来さへすればよいんだ。解決はそれからのことだ。日本移民がはいつて来ると、ドメニコも出来ようし、君の好きなアンナの父フィオリも居ようし、さしずめ君はメネゴニ支配人格という所だね。アハ、下らない心配はよせよ』

コエリヨは大いに笑つた。

私のつかみ所はコエリヨのいう所とは全然違っているのであるが、しかしコエリヨの所謂『来ることが第一』だという説には大いなる真理がある。日本人にはとかく実行を後にして調査とか研究とかに捉われ過ぎる点を否むこな出来ない。

『そうかね』

私は腕をくんで考へにふけた。

五十五

サンバウロ市から戻って二週間日の日曜日であつた。珈琲の収穫はこの一週間以内に始められるということ、事務所の朝は監督達の打ち合せや報告で何時にない忙しさであつた。

『今度の収穫を見られるか知ら？　いくら忙しいといつても、恐らく之が最後の日曜日だろう』

こんなことを考へると感慨は後から後からと新らしく湧いてきた。支配人テオフィロも簿記係のコエリヨも工場長のフォルテも朝飯の鐘を聞くと重荷を下ろした様に行つてしまった。つい先程迄がやがやと音をたてゝ居た監督達の影も見えなくなつてしまった。

と見るつぶらな真紅の実をつらねて成熟している珈琲園の濃緑の波がさらさらと流れて、何時でも乾燥に差支ない

様に掃き清められたテレーロに透明な太陽の光が一杯にあふれていた。聖州の最も美しい季節である。

『いゝなあ』

つくづく見とれて居る私の耳元に突然

『ススキさん、約束通り俺は来たぜ』

こう呼びかけたのは、いう迄もなくフィオリの長男アントニオであった。瓢箪な面持をした血色のいゝ少年が、所謂テーラ・ロッシャのどす赤い色によごれた中折帽子を被って、上衣なしの赤縞の木綿のシャツの上に猟銃を担って立って居た。

『いよう来たな！』

私はアントニオの背を叩いてよろこんだ。フィオリ一家はもう疾くと珈琲園の山建ても終っており、間作物の収穫もすんで、唐黍小屋の修理や養豚所の杭の建て直しなどをやっておったが、大方それも一段落したのであろう。アントニオは歳に似合わず猟が上手なので、一度機会があったならば同行しようと云った私の希望を果たす為めなのである。

私は元来臆病なので血を見ることが大嫌いであった。従って遊猟などに対しては別にそれ程興味を持っていないのであるが、秋晴れの輝いた大空を笠に野や森に行く快しさは、たまらない程好きであった況んやアンナの弟に恰も自分の肉身の様なしたしみを見せ得るチャンスを有するこ

とは、願ってもない私の満足であつた。

二人はシュンボラヅの低盆地から小流れを渡ってチビリサの端の方へ出て行つた。群青色に咲いた露草、淡い桃色の花をつけた昼顔に似た蔓草などの這い廻っている道々には、しきりにコーログが鳴いていた、一年中鳴き通している此国も秋にはしみじみと身にしむ淋しさがこもつていた。

鉄道線路に出ると、もう珈琲園もつきて、そこには短小な灌木のまばらに生えた原野が展開されていた。

ばら、はらと飛んで来る十四五羽の小鳥、

『ジュリテイだ！ ジュリテイだ！』

アントニオは低い声でさゝやいた。ジュリテイは鳩の一種で極めて小さいが、なかなか味のよい鳥である。アントニオは何故かそれを打とうとしなかった。

野は南へ傾斜して、朱と、黄と、紫と、濃厚な色彩をもつた色々な花が咲き乱れていたが、白や桃色などのはっきりしたものはいくら探しても見当らなかった。

遠くの方から、如何にも涼しそうなひやうひやうと云う声が流れて来る。アントニオの眉がきつとなった。

『ススキさん、エンニヤンブーの声だだよ。それ！ また鳴いた。あれのソツパは飛びきりうまいね』

こうつぶやいて木の株のかげに身をひそめた。私もその後の男女郎花に似た草花の蔭にちっとかくれた。鳥の声は

あちらこちらと如何にも素早い足取りで段々近よつて来た。

刻……一刻……、銃の音がすると私はアントニオが飛ぶ様に走って行くのを見た。私もつづいた。

『打ったよ、そらエンニャンブにしては大きいだろう』

血ににじんだ鳥はまだびくびくしていた。エンニャンブーはブラジルに棲んでいる三種の鶉のうち最も小さなものである。

『ベルデーセスが出るといゝなあ』

アントニオはこう云つて私を顧みたが、

『でも、ベルデゲロー（犬）がいないからなア』

低い声で独言の様にさゝやいた。

森の方から山鳩の声がしたので、二人の足は段々野の高まつた方へ歩いて行つた。

森はセラードのやゝ鬱々たるもので、クルツーラではなかったが、イペや、ペローバなどの大木もあつて、水の上を渡つて来る様な涼しい風が吹いて来るのが何よ。うれしかった。森には道とも知れぬ道があつて、所々掃き取つた様に落葉をかきのけた所があつた。

『チビリサの子供達が、きつとアラブカを掛けているんだぜ』

『アラブカって？』

『餌を蒔いた上に木の枝で籠の様に組んだものを仕掛けて

置くのです。鳥が来て餌をあさるとばったりと其龍が鳥の上に落ちて逃げられなくなってしまふのです。よくローリンニヤだの、エニャンブーなどが捕れるし、たまにはウルーなども這入るんですぜ。両白いや、シユンボラヅにはこんな森がないからねえ』

アントニオは嘆じた。不意にがさがさと音がして兎の大きなもの位な動物がちよこちよこと如何にも可愛らしく走り出した。

『兎？』

『いゝや、コチアだよ、逃がしてたまるか』

アントニオの打った銃丸はすばらしい音をたてゝ森に反響したが、コチアの死体はいくら探しても何処にも見当らなかった。

『惜しいなあ、ススキさん、あのコチアはね、猟する動物のうち一番味がいゝんだぜ、丸焼きにしてトマトをどっさり入れて料理すると、舌がぬける程うまいんだぜ。しまつたナ』

地団太を踏んでくやしがつたが、どう云うめぐり合せか、それから小鳥一羽も見当らなかった。

森は段々しげりを重ねて、しづけさは愈々深まって行つた。大きな馬の糞に似た動物の糞を見つけると、アントニオも私も何んだか気味悪くなってきた。

『戻ろう』

誰れ云うとなく、二人はもと来た方へ引き返へて行つた。

森を離れた時ばさばさと大きな羽打つ音がした。アントニオが身構へする間もあらせず、鶏位な大きさの鳥が木の枝をすれすれに日光を浴びながら飛び去った。余り遠くへとんだ様子でもなかったが、それと見当がつかなかった。何と云う鳥の名であろうか、アントニオはそれを父フィオリに聞いて見るとのことであつた。

X

X

X

モンテ・ベーンロに近い間作地に出た時、太陽はもう三時近い傾きを見せていた。

二人は刈り取った米作地を前にし、からからに枯れつくした唐黍畑を後ろにして腰を下ろした。アントニオはたった一羽のエンニャンブーを如何にも情なさそうに草の上に投げた。私は汗ばんだ額を拭いもせず、そこらを見廻わした。

パパガイヨ（オーム）の群れが頭の上をけたゝましい鳴声を投げて飛んで行つた。

『アントニオ、お前はパパガイヨの巣を見つけたことがあるかい』

『あるとも、あれはね、よく太い樹の高い所にある穴洞に巣を作るんだぜ、ほら御らん』

アントニオは近く展開している牧場の枯れながら立って

いる一本の大木を指さした。

『あれはね、カネロンの焼け残ったんだよ、あの頂辺にそれはそれは大きなほら穴が二つあるぜ。春が来ると、年々きつとパパガイオが巣を作るんだがね。まだ誰も捕ったものがないんだ。俺は今年こそ きつとものにして見せるつもりだ』

『そんな君達の悪戯をパパガイオの親鳥はおとなしくして見ているかね』

『それはとても勇敢だぜ、あの鋭い喋で猛然と頭に向って来るがね。こつちも一生懸命だからパパガイオなどに負けてたまるもんかい。』

少年アントニオの眼はよろこびと勇氣に輝いてきた。

『ススキさんは隣家のラファエルのパパガイオを知っているだろう。あれは去年の春珈琲園の枯木から捕ったんだぜ。俺は毎日のようにあのパパガイオに話しかけるが、この頃は確乎覚えこんでしまつて

俺を見つけると「アントニオ、アントニオ」なんて妙な声を出すんだよ』

うれしそうにアントニオは笑いこけた。私はふと小学読本にかいてあるパパガイオの話を思い出した

『アントニオ、お前はブラジルの読本をよんだことがあるかい』

『僕は知りません。お父さんは僕を学校にやることができ

なかったんだもの、それでも伊太利の本なら少しよめるぜ』

アントニオの眼は悲しそうに私の顔を見つめた。

『よし、そんならオームについて一つ面白い話をしよう』

私はこういつて話した。

X

X

X

アントニオの様なオームの好きな子供の隣家に、それはよく物を話すオームを飼っている人が住んでおった。このパパガイオは、

『何処に居ます？』

ときくと

『私は茲に居ます』

と答へるのがおはこであつた。子供は毎日訪問して、こういう会話をパパガイオと取り交わすのがこの上のない楽しみであつた。

或る日子供は何時もの通り隣家を尋ねたが、折り悪しく主人が留守であつた。少年はオームに声をかけた。

『ア・オンデ・エ・ケ・エユスター？』

『エウ・エストウ・アキイ』

例の如くすぐ判然とこう答へた。子供はこのかあいらしいパパガイオがほしくってほしくってたまらなくなった。若し誰れも見えていない内に、あのパパガイオを懐中に入れてしまえばきつと自分のものになるだろうと考へた。子

供はすぐオームを捕らえへて、あわただしくボルソに入れた瞬間、何という運命の悪戯であろう主人が戻って来た。

人のよい主人は子供がパパガイオと話すことが好きであるということを知って、例の如くオームに呼びかけた。

『私のオームよ、お前は何処にいるかね？』

所が、意外、意外、オームは

『私は茲におります！』

声高に子供のボルソのなかで答へたということである。

X

X

X

『どうです、アントニオ、解ったかね』

私はからからと笑った。アントニオは童話にふくまれた「盗すんではならない」という意味よりも、子供の冒険が失敗に終わったことの方が何よりも口惜しい様に見えた。

『さあ戻ろう』

『バーモス』

いい合わしたように立ち上った。サクラの声が、Koki Koki... と如何にも高らかに朗らかにまぢかの湿地から聞えてきた。足の長い身体の真丸い水鳥である。この鳥は実に歩くくに速い鳥で余り鳴くと雨が近いといわれている。

アントニオは唄をうたいはじめた。

Oh passarinho que cantas

Nesse verde limoeiro,

Canta a tua liberdade,

Que eu choro o meu captivo.

フィオリに似て実にいゝ巾のある声である。

サラクラは、尚しきりにKoki Kokiと鳴いている。

五十六

『ススキさん、ススキさん』

獵から戻った私共の声をきくと、フィオリは裏畑でしきりに私を呼んだ。

『またフィオリの物好きが始まったよ。ホ、』

ローザの笑声を後にして、私は直ぐフィオリの居る所へ急ぎ足に歩いて行つた。

『まあ見たまへ、ススキさん、そら葱も、人参も、あんなにうまそうに成長したアルファッセ（チサ）も一晩のうちに、サウバ（葉切蟻）の奴が持っていてしまったんだからね』

成程廿坪ばかりのフィオリが丹誠して、いつも自慢話の種であつた野菜畠は見る影もなく荒らされていた。

『たった一と晩のうちにかね？』

『そうよ、俺は腹が立って今日はピンガを飲んでいたんだが、どうしても癪だからね、今出て来て滅茶苦茶に、このサウバの通路を叩きつぶしている所なんだよ』

フィオリは又しても鋤をふり上げて、その頭の方で二三次地上を叩きつけた。

『しかし、そんなことをしたって駄目でしょう』

『駄目さ、駄目でも腹が立って泣きたい位なんだ。ススキさん、一つこのサウバの巢を探がして見ましょう』

フィオリは勢いこんで野菜畠の柵をとび越えた。私もその後につづいた。

蟻の道は恰も人間が掃除でもしたように綺麗に細いうねうねした線を描きながら、赤土の上を何処迄も何処迄もつづいていた。時として繁った雑草のなかにかくれても、それを分けて見ると判然とその下に跡を刻みつけていた。二百メートルも行った所で蟻の道は牧場のなかへ這入って、そこに大きな赤い土を盛り上げていた。

『やあ！茲だぞ』

フィオリはじつと自分の敵にでも逢ったような憎悪の眼を以てにらんだ。

高さ三メートル位もあろう。六七メートル四方位な広さが拡ろがって、上へ上へと新らしい土の色をしたのが盛りあがっていた。この驚くべき蟻のピラミッドの上は勿論四辺には縦横に蟻の道路が四通八達していた。牛馬に喰われて短くなった牧草のなかに深さ三分位堀り下げられた巾六七分の街路が、あるものは一直線に、あるものはカーブを画いて放射している光景は恰も大市街のセンターに集中し

て来る道路と少しも変りがなかった。気をつけて見るとその道路の連絡している方面が違っているとみえて運搬して来るものが同一でないのも面白かった。即ち一方からは蜜柑の葉を運んで来ると見れば、他方からはしきりに唐黍の葉を担いで来た。そうしてその道路には運搬のために往復しているものと、これを監視する梢大きな蟻が行ったり来たりしているのが眼に立った。

『実によく統制がとれていますね。世界で最も訓練された独乙兵にも劣らない立派さですな』

『そうですとも。木の葉を伐り取るものは伐り取るもの、それを運ぶものは運ぶもの、又巢窟の通路を監視するものがあつて若し土塊でも落下しようものなら丹念に是れを運搬し出している。そうしてススキさん、まあごらんない。そら少し大きな蟻がおつて、何もせずにはぶらぶらしているのがあるでしょう。あれは何処でも労働蟻の働いている所にはきつとあゝしておつて何もしないのです。まあ軍隊ならば士官という役割でしょうね』

フィオリは、こういつて蟻の道路を一寸かき乱して土塊を投げた。彼等は行手を塞がれて、そこに一大停屯を起し、後から後からと荷を負うて来る蟻群に混乱を来したが、見ている間にその土塊が少しづつ除けられて、忽ちもとの様になった。その間の行動を注視していると、矢張り何もしない蟻がおつて何事か指図するが如く見えた。

『素晴らしいものですな。サウバは何んでも伐ってしまおうんですか』

『蜜柑、バラ、エウカリプトなどの妙な香のする葉が好きですな。これを発見しようものなら、どうしても伐り取ってしまわない内は承知しないです。それからフェジョン豆でも唐黍でも米でも実のまゝどしどし運んで行きます。一つづつ持って行くのだが、何しろ何万とも知れない蟻が一瞬も休まず運んで行くのだから、ちと大袈裟のようだが一俵位やられるには、そう長くかゝるもんぢやありません』

こういって、フィオリは自分の唐黍小屋がサウバ蟻につかれて困った時のうその様な話を語ってきかせた。

『蟻は毒薬で巣窟を爆発するより外、方法ありませんか？』

『それがね、ススキさん、タツ、タマンドア、バンデーラなんていう獣物がいるんだよ。特にタツがサウバ蟻の巣に穴を掘り始めたら皆平らげてしまいますね。流石のサウバも食われないものは、何処かへ逃げてしまいう外ありません。しかしそのタツは仮令保護獣になって居っても、私共始め見つけ次第、すぐ殺ろして料理することばかり考へますからね。実際タツ・ガリンニヤはうまいですからな』

フィオリはこうつぶやいて立ち上った。

『一つ蟻巣を掘り返へして見よう』

二鍬三鍬さくりさくりとフィオリは蟻の巢の頂辺の土を掘り返へした。

何という無数の蟻であろう。それは何万、いや何億といった方がもっと適切である。うようよと湧き返える様な狼狽の限りを見せた。

『あッ、痛い痛い』

突然フィオリはこう叫んで飛び上った。そうしてあたふたと脛の辺を探ぐり廻わしたが、そこには一匹の大きなサウバが喰い付いていた。

『畜生！』

うんと引つ張ると首が抜けて胴体だけが頑丈なフィオリの手に残った。

『これだもの、執念深い奴だな』

今度は憎く憎くしげに首をもぎはなすと、そこにはありありと血がにじみ出ていた。

フィオリも、私も蟻の巢から飛びのいて、遠くの方からその混乱する光景を見守った。

X

X

X

私の知ってる限りに於てこのサウバ (Sauva) について記述して見ると、サンパウロ州に散在する葉切蟻は学名 *Atta sexdens* L. というものである。

詳細に研究したならば、形態の上からも、もう一層進ん

だ分類の仕方も見えられないこともあるまいが、普通サウバ蟻は左の如く三分類することになっている。

(一) 雌蟻——女王で *Tanajuras* 又は *Icas* とも呼ばれている。羽があつて遠くへ飛んで行って新らしいサウバ女王国を建設する。無数の卵を生み落とすことを使命としている。

(二) 雄蟻——形は女王より少しく小さく、数は略女王と同一である。 *Bitus* 又は *Iscobitus* とも呼ばれ、女王と交尾を終ると直ぐ死んでしまう。

(三) 労働蟻——大きさは前二者に及ばない。尚この労働蟻もその形態によつて *Grande* (大) *Medias* (中) *Pequena* (小) の三階級に分かれている。

雨期にはいつて、そろそろ気温が高まつてアラボングの鳴声が近くの森に聞える頃になるとサウバ蟻の巣窟に活動が開始される。雨晴れの日等には盛り上った土の上に長さ一寸以上もあるイサ(雌)とビツ(雄)の羽根の生えたのが、そこら一面に這い廻わっているのを発見する。

恐らくこの蟻の女王ほど、恋愛から新婚までの享樂をほしいまゝにするものはあるまい。イサは強健な傍牙を有し、暗い蟻の穴から外界へ出ると、まもなくその羽根をゆり動かして、如何にも勇壮らしくぶんぶんと音をたてゝ飛び立ってしまう。これに反し雄蟻は恰も神経衰弱の青年の如く弱々として音もなく大空へ舞い上ってしまう。

亜熱帯の夏の上空は湿気の多い日本では想像もされない紺碧に晴れ輝いている。イサはその栗色の羽根をひらめかして、怯懦なビツを誘惑する。ピツは弱いが本能には勝たれない。ダイヤの様にきらきらするイサの羽根に眩惑を感じながらも、総ての力を傾けてイサに近づいて行く。人間は初夜の誘惑などといって限りない楽しみを、秘密の間に結びつけているが、これは又余りにも公然たる恋の遊戯である。イサは尚ビツを誘うて飛翔する。そうしてピツの興奮が絶頂に達した頃を見計らって、ビツに取っては最初であり、最後である交尾をするのである。現代の若人の眼から見ればビツの運命ほど幸福なものはあるまい。大磯心中の八重子は処女のはかなさで恋の世界を天国に求めて死んだが、ビツはその本能から喚起される動物の最大幸福を仮令瞬間であつたにせよ、飽満して瞑目してしまうのである。ビツのふらふらとした死骸が風に吹かれて落ちるのも、こういう意味からいうと無意義ではない。

これとは反対に女王イサは慾望を満たした歓喜の情にあふれてその勢力が益々旺盛になってくる。そうして雑草も高く繁茂しておらず、湿気も余り多くない恰好な地点を見出すと、そこに飛び下りて彼女の使命とする新しい女王国建設に努力するのである。

イサは先づ後足で羽根を取り除いてから、土を穿ち、居室を作るために働く、六時間から十時間かゝって約五百回

小さな土塊（彼女に取っては大きな）を運搬する。十五乃至二十センチメートルスの深さに達し、そこに楕円形の洞穴を設けて、翌日から直ちに卵を産みつける。次にイサはもう一つの重要な義務である古い巣窟を飛び出る時に自分の口の下に凹所に円形の小塊として持ち運んだ菌（Cogumelo 又は Fungo という）の種子を蒔きつける。これは彼等の食料として一日も欠くべからざるものである。サウバ蟻は木の葉や草の実を運んで行って決してそのまゝ食う様なことはしない。彼等は工業化、即ち楕円形の洞穴のなかに集積して菌を養成するのである。サウバ蟻の巣を破壊したものは何人も注意の眼を光らすのはその巣穴のなかに一杯になった柔らかな草や木の葉が暗緑色に変化して、白い粉をふりかけた様になっていることである。Moeller 氏はこの菌を *Rhizites gongylophora* と名づけている。

蒔きつけてから二週間すると、イサの労作が報いられて菌が生長し、食うことができる様になる。

卵が孵化するのは一ヶ月位後である。これは労働蟻で生れて十日目位から自己の天職である仕事に営々として終日働いて休止する事がない。その一部は穴を下へ下へと掘って行って新らしい蔵―室を開穿する。他の一部は外へ出て木の葉や草の葉をきって運んでくる。こういう風にして幾年か経ってしまうと、一段に十箇或は二十箇を算する蟻の

洞窟が四段にも五段にも穿たれ、地下四メートルスにも達するものがあつて。恰もこれニューヨーク市のグラン・セントラル停車場の地下にはいった様な観がある彼等の巧妙なる建築術は外界との交通路に対し、驚くべき意匠を示している。先づ第一の穴道は生命線又は空気線(Mestres, respiradouras)と名づけられ、巣窟の中心に直線に貫かれ、それから各段の洞穴に向つて、ゆるやかなカーブのトンネルで連絡されている。第二の防禦線(Defesa)は生命線を中心として八方に放射した通路のことである。故に防禦線は決して巣窟と通ずる様なことはなく、一度は必らず生命線を通過せざるを得ないことになっている。第三労働線(de Trabalho)も起点を生命線に発して表土に近く、どこ迄も労働蟻の仕事に便利な地点迄延長されている。労働線の最も長いの一キロメートルの遠方に達するものも少なくない。

こういう風に巧緻をつくしたサウバ蟻の巣窟を退治することはなかなか容易でない。そうして彼等の根気強いことは推理の外である。爆弾三勇士の如く、死に対して何の恐怖も持っていない。されば毒薬を装置しても忽ちこれを突破して出て来る。

ブラジルでサウバ蟻を絶滅することの困難な理由は共同戦線をはることができないということである。純粹なブラジル人には妙な癖がある。いやだといったなら、利害の如

何に係らず承知しない。俺は俺で俺の天地に呼吸している。他人のかゝわり知る所でないというような点がある。

或果樹園があった。自己の地積内のサウバは完全に撲滅したので、果樹が非常な勢いで生長していった。所が何時か隣接の牧場からサウバが襲入して片っ端から果樹を坊主にしていく。どうすることもできないので、隣りの牧場主に辞を低うして

『どうぞ、あなたの牧場のサウバの巣窟を爆発してもらいたい』

と嘆願したが、彼は冷然として

『サウバは牛を食べんからね』

と答へたということである。成程いくらサウバが繁殖しても牛を殺す様なことはあるまいが、困ったのは果樹園主である。

こういう訳で或殺蟻剤の広告に

『ブラジルがサウバを殺すか、サウバがブラジルを殺すか』

という文句を以ってしているのがある。必らずしも誇張の虚言ということができない。

ジョバンニが夕飯ができたといつて呼びに来たので、フィオリはしきりに私を夕飯に誘ってくれた。辞退すべきものであるとは思ったが、私の六感はこの農場にいるのも茲数日をいでない様な気がする若しそれが実現したとし

たならば朴訥で、暖かいフィオリの家庭に接するの、これが最後であるかも知れない。あの優さしいアンナとは何の交渉もないが、このまゝ別れてしまうことは何という淋しさであろう。私は心の底から涙がこみ上げてくるのをどうすることもできなかった。私は遂にフィオリに伴われていった。

家のなかにはもうほの暗くなっていた。黄色のかったランプの光りは朦朧と机の上を照らしてナポリ辺りの裏家をかいた絵にある様な情調が流れていた。

純イタリア式のポレンタに、脂肪ぎった牛肉のごてごてした濃い汁をつけて食う味はまたとなきものであった。腹一杯になったフィオリは暫らく物もいわずに縄管に縄煙草をふかしていた。

ローザは縞のレンズを被ったまゝ、息子達のシャツの練を縫っていた。アントニオとジョバンニは腰掛の上に横になって、何かこそそ話し合っていた。

台所の方から折り折り水の音が聞えてくるのはアンナが皿や鍋を洗っているのであろう。室内はしばらくの間、平和な一種の寛ぎの情が満ちあふれた。

『ススキさん、あなたは真実に行ってしまうのかね？』

フィオリはものうさそうな目をちらと私に向けた。カシンボから上る煙はこの人の柔和な顔を半分夢の様に見せた。

『お別れしなければなりません』

私の声は低くかった。母のローザはびっくりした様な眼を私に向けた。

『何時？ そんなに早くススキさん。うそだろう』

『さあ、もう二三日たったら、私は茲にいないだろうと思う』

私は心のうちで、そんなことがうそであってほしいという様な気がしてならなかった。

『しかし、またお出ででしょう。日本人が来たら、沢山つれて茲に御出でなさいよ』

『さあ』

私はこれ以上、どういつてよいかわからなかった。それが私の心を一層なやましいものにした

『さあなんて、いいっこなしよ、ススキさん』

『ローザ、ススキさんは何百人というお国人の世話をしなければならなんだからね。自分の思う様にはならないのが当たり前だ。しかしね、ススキさん、茲に来ようと、来まいと、私達を忘れないで下さいよ』

フィオリは何時になく元気がなかった。ローザは独りぎきにして、

『だってフィオリ、ススキさんは、どっかの農場に移民をつれてはいるんだろう。同じことなら、こうして一年も居って、馴染の多い所に来る方がいゝじゃないか、ねえス

ススキさん』

『勿論さ、しかしお前明日のことを知ってるのは神さまだけだ。俺はどうもあなたが茲に二度と来ない様な気がしてならない』

『何をいうんだよ、フィオリ、こんなにお前、アントニオだって、アンナだって、まるで弟妹の様にしたしくして居るんじゃないか。そんなお前のいう様なことがあつてたまるもんか。ススキさんはきつと私達と一所にシュンボラズに来るんだよ、そうでしょう、ススキさん』

ローザは縫物を止めて、正面に私を見つめた。私は何んだかフィオリの予言が真実らしい様な気がしてならなかった。

『私はあなた方と別れるのがいやです。しかしそれが私の運命であつたら……』

私の胸が塞さがった。重荷を負うた様な疲労が全身をぐったりさした。

『私は帰らしてもらいます。さよなら母さん』

私がローザを母さんといったのは、これが始めてであった。感傷的な私の心は訳もなく、そういつて見たかったのである。私は帽子を取って立ち上った。

『ススキさん、あなたはこゝを出発前、もう一度来るということを約束して下さい』

ローザの眼には慈愛に満ちた顔がこもっていた。

『きつと来ます』

バンコの上に横になったまゝ眠っている少年アントニオとジョバミの無心な寝顔が羨ましかった。

石段が危ぶないといって、ローザはランプを出口に出してくれた。真暗な戸外に縞になって放射する黄色なにぶい光明を見ながら、私はフィオリの家から遠ざかっていった。

『あア、あア』

私は重い吐息をして立ち止まった。それはパイネーラの樹の下にある共同水管から落つる水の音が聞えてきたので、急に咽喉が乾いて水を飲みたい様な心を起したからである。

『おや？』

私はそこに、一人の女の立っているのを見た。私は近づいて行つた。私の胸は或予感で波立っていた

『アンナじゃないの？』

アンナであつた。水桶に一杯水をたゝへて立って居た。まだ悉く散り尽くさないパイネーラのこんもりした繁りは、星の光さへももらさなかつた。アンナは一言もものを云わなかつた。

私はだまってアンナを見つめていた。

一分…二分…三分と刻々に長い人間の一生が地下へ沈み落ちて行く様な気がした。

私は余りの淋しさにたまらなくなつた。

『アンナ！』

私の声は私自身にさへ聞き取れない位な小さなものであつた。アンナは死せる如く身動きもしなかった。私の眼は顔にぬれてくるのを覚えた。

『アンナ！』

私の声は慄いを帯びていた。アンナはそれでも口を動かさなかつた。

『アンナ！』

私の声は泣いていた

アンナは不意に身を翻した。あつと思う私の首にしなやかなその両手がかゝつた。

アンナも泣いていた。ポロポロと顔のこぼれ出る眼を大きく開いて私を見つめた。私はその顔をなめてやりたい様な妙な感じを起した瞬間であつた。私の唇に焼つく様な甘い接唇！それは実に悪魔的な眩惑であつた。

『あたしの、たった一つのプレゼントよ』

卒倒する様な気分で呆然とした私をアンナは飛鳥の如く離れた。

『アンナ！』

私の切ない叫びにも耳をかさず、アンナは水桶を下げて急ぎ足に、コロニアの暗黒に消えていった。

三浦通訳官から、とうとう予期してゐた書面が届いた。それには簡単に『移民契約が成立し愈々茲一ヶ年以内に日本人の渡航を見ることになったから、君は直ちに上聖して移民収容所にはいり、種々移民輸入に関する事務を習得しなければならぬ』ということを書いて、州農務長官カルロス・ボテリヨ氏に対する紹介状を同封してあつた。

私の心は波立つた。たつた一人の日本人として人事―自然―何もかも未知の世界であつたこの農園は危惧の念を抱きながら、幾多の労苦に限りない好奇心とをつき雜ぜた、ホンノ一年余りの年月を送つたに過ぎなかつたが、それは色々な意味に於て、私の生れ落ちてから二十七年間の、恵まれた母国生活に比して見ることでできない印象深いものであつた。

故郷の山水には仮令それはほんの一断片に過ぎないものでも、忘れ難い思出と、なつかしさが含まれているが、またチビリサ農園に於てもその一木一草にさへ何かしら捨て難い歴史があつた。

然し私はどうしても別れなければならない時がきたのである。人間は何処迄行つても運命の子である自分一箇の立場からいえば勿論私はこの農場にこのまゝ居つた方が幸福である。月給は漸く百ミルレースに過ぎなかつたが、（八

十ミルからすぐその翌月百ミルになった。まもなく百五十ミルレースに増加するという話をきいた。支配人テオフィロからは殆んど絶対的に信用され、簿記係のコエリヨからは親身に等しいしたしみを受け、監督達からも

『ススキ、ススキ』

と逢う度に、先づ私に呼びかける位な好意を以って遇されていた。

せつせと一年余の苦闘で乾燥場の日雇から機関の火夫、事務所のボーイ、それから現在の書記にまでこぎつけた地位を捨てゝ、前途の見極めのつかない移民収容所入りは、決してほめた遣り方ではない筈だ。然し私には私の自由にならない使命がある。「日本移民が来るのだ。」そこに総てのものがいい尽されている。私は決して大きなことをいつて自己吹聴をするのではないが、当時の私はブラジルに於て日本移民の為に無くてはならない存在であつたのである。

私は三浦さんの書面を手にして折りよく事務所の机に向っていた支配人の前に立った。

『愈々御暇を戴かなければなりません』

ものをいうことの嫌いな支配人テオフィロは私のいったことが聞えなかったのではないかと思わるゝ位しばらくだまっていた。

『何時？』

『貴方の御都合さへよろしければ、明後日でも……』

『うむ……』

机についた両手を顔に当て、眼をつぶった。

『日本移民渡航のためというから止めることはできないがね。ススキ……』

私の顔をつくぐくと見守った。

『……日本移民が着いたら、又茲に来てくれるだろうナ』
『事情の許す限り、私からもそう願いたいと思っております』

私は心から云った。

『よし、君のいう通りにしたまへ』

テオフィロは革鞭を机の上から取り上げて、農場を巡視すべく例の落付のある態度で外へ出て行った私はその後影が事務所の前庭から石段を下りて見えなくなると、急に泣きたい様な淋しさに襲われた

『おれは皆と別れるんだ？』

農場からは私のために特に客車を出してくれた。支配人テオフィロは軽鉄の乗車場迄来てくれた。簿記係のコエリヨは停車場迄見送るといって杖を手にしながら私と並んで腰を下した。工場長フォルテは工場の前の線路にその大きな身体を出して、煙管をくわへながら、しきりに手をふっていた。

昨夜十時過ぎ迄かゝって、親しくしていたコロノ達にも

皆別れをしてきた。ミゲールとファイオリは見送りがついていたが、監督の許可を得なければならないので、私はそれを差し止めて来た。

もうこれでシュンボラヅともさようならだ。発車の時はせまってきた。薪を焚く機関車はしきりに煙を吐き出した。

呼吸せききって馳けて来たものがある。それはアンナとアントニオであつた。汗ばんだ二人の顔は真赤になつていた。

『どうぞ私達を乗せて下さい』

『やあ！ 来たぞ！』

コエリヨはアンナの手を私はアントニオの手を取って板壁をはっていない客車のなかへ引き上げた。その瞬間、軽鉄はあわたゞしく走り出した。コエリヨは独り興がつて絶え間なしに何か喋べっては笑つた。

『アンナ、ススキさんはもうシュンボラヅには来ないといっているよハ、』

うつ向きがちに坐っていたアンナは愈々頭を下げた。珈琲園からさらさらと流れてくる爽快な朝の日光が客車を明るくしたが、アンナはレンソ（一種の風呂敷様のもの、山形県地方ではシハンと称し、冬がくると矢張り女達が被る習慣がある）で眉深に包んでいるので、その顔が――頬の辺りが少ししか見えなかった。それがたまらない程私の心

を引きつけた。若し数日前の私であつたならばこうしたアンの態度に何の注意も払わなかつたのであらう。しかし今は……私は焼きつく様な眼でアンナの微動だ見のがすまいとした。そうして時々物をもみ消す様な恐ろしい強い力でアントニオの手をぎゅっと握りしめてびっくりさせた。

まもなくトレンジンニョ（軽鉄）はチビリサ駅に着いた。駅長モラエスは信教上の友達であるが、此処を出発する私のためにお菓子などを用意していた。

応接間とも食堂ともいうべき停車場内の駅長の住んでゐる住宅の一室には私よりも先きに先づコエリョが坐つた。

『いよ！ うまいお菓子があるぜ』

大きな高い鼻をふくふくとふくらます様にしてよろこんだ。

アンナとアントニオとはいくらすゝめてもはいって来なかつた。

汽車の着くまでに寛いで色々と、私が始めてチビリサ農場に來た頃の滑稽な話を語り出して笑つた。私はこうした話に耳を傾けるよりもフィオリの二人の子供に氣を取られて、絶えず眼をプラットホームの方へやつた。

アンナは一つ所にじつとして立停つたまゝ動かなかつた。アントニオはそつちに往つたり、こつちに來たり一時も動かずにはおられなかつたが、時折何かアンナとさゝやき合うこともあつた。

ふとアンナが軽鉄の着く停車場の表口の方に歩いて行く様な足取りで影を消した。稲妻の閃く様に或考へが私の心に起った。機会は今である。たつた二人で逢うこ上は最早やあり得ない。珈琲園の真只中に建てられた淋しい一軒の建物に過ぎない此の停車場には今日の上り列車の乗客は私より外ないのである。アンナの居るべく想像せらるゝ方向にはシュンボラズから私共を載せて来た汽車が留まっているだけで誰れも居らない筈だ。一分間でもよい、アンナと二人で居たい、こう思うと居ても立つても居られない様な焦慮で胸が一杯であつた。臆病な私にも似気なくつと立ち上つて。

『何とでも思うがよい』

心の奥底にはこんな捨鉢な考へさへ沸いていた。

『一寸小便所に……』

心にもないうそをいって私は転ぶ様に外へ出た。

『アンナは何処に居るのだろうか？』

それと思う停車場の表口にはアンナの影が見当らなかつた。横手に走って行つて見た。そこにもアンナは佇んで居なかつた。

『アンナ』

アンナにだけ聞えてくれ、外の誰れの耳にもはいらないでくれ、私はこんな自分勝手なことを念じて小さいが力のこもつた声で呼んだ。実際それは私の耳にも達しない様な

幽かな声であつた。ひよつとしたら神様さへも聞きもらしたかもしれない。アンナは何の応答もしなかった。私は殆んど絶望に等しい悲しい眼で四辺を見廻した。

居る！居る！ジャスミンの淡黄に咲いた垣根の向うに、牧草カチンゲーロのうす紫の穂が風にさらさらと流れて、余り高くないアンナの姿を蔽いかくしていた。群青色に塗られた海のように深く晴れた空は総てのものを神秘に見せた。私は近づき得ない様な敬虔に似た躊躇を感じた。

何という不幸な運命であろう。クラビンニョスを発車した汽車の音が轟々と乾ききった空気をふるわして間近に走って来る音がひびいてきた。

『ススキ、ススキ』

駅長の声である。

『ススキさん、汽車が来たよ、ススキさん』

コエリヨの半ば道化染みた叫び声がする。私は大急ぎでプラットホームに引き返へさなければならなかった。私の眼はくらんだ様な眩惑を覚えて倒れそうな気分であつた。

汽車は徐々として停車した。

『さよなら。アデウス』

私は一人一人手を握っていった。アントニオは少年の力一杯に私の四本の指が痛い程握り緊めて

『ススキさん、貴方はきつと又シユンボラズに来て下さいね。ネ、ネ、いゝでしょう』

こういつて離さなかった。そうして幾度も、
『きつとですよ、きつとですよ。』

くり返してこういった少年の眼にも涙があった。私もつい釣りこまれて

『きつと来ます！』

こういつて最後にアンナの前に立った。

『アンナ！』

私の胸はわくわくしてこれ以上いうことができなかった。アンナも一言もおうとしなかった。しかし二人の眼と眼とは千万言を費すよりも、もつと複雑な意味がこめられていた。私は狂気のような心に襲われた。それは颱風のような突発的なものがあつた。私は両手を広げてアンナとアントニオとをぐつと抱きしめた。三人の違った火が溶鉱炉のなかで、どろどろに熔け合つた様な幸福にひたつた瞬間、それは真実に人間の感じ得る最大限の瞬間であつた。

私はもう汽車に乗らなければならなかった。

『コエリオさん、駅長さん、どうぞ御達者でね。アントニオ、お父さんにもお母さんにもよろしくいつて下さい』

『ボーア・ヴィアージェン』（いゝ旅でという意）

『アデウス！ススキ』

『アデウス！アデウス』

汽車は動き出した。私は手を挙げて指を動かした。コエリオは白いレンソ（ハンケチ）をふつて居った。オシの様

にだまって立っていたアンナは急に大きな声をたてて泣きだした。それは誰の前にもはぐからない大胆な態度であった。

私はどうしてもそれを見ていることができなかった。顔を蔽うと涙がポロポロと指をぬらした。汽車の速力が徐々に加わっていった。

『あ、あ、何という力の弱い男だろう。俺は恋を夢見る男だったんだ。そうだ恋のルンペンだったのだ』

こうつぶやいて、アンナの事を色々と思い浮べた。アンナは男性的な力のない私を恨んでいるに違いない。二人の接近を両親さへも望んでいた筈である。何故アンナをこの胸に、この腕であの豊麗なバラの様な肉体をじつとじつと消えてなくなる迄の力強さでかき抱くことができなかったのだ。こんなに熱情が燃え立って殆んど全生命が恋に賭けられた様なこの私のどっかに冷たい所があるのだ。私自身が第三者になって冷やかに眺めながら、その臆病をにやりになりと面白半分に笑っている様な悪魔的な冷たさがひそんでいるのだ。私はこう思うと急に泣きたくなってきた。熱い涙が止めどもなく流れてくる。

『俺は初恋には打明けるときへできなかつた。第二の恋には……』

私は泣きはらしたやる瀬ない眼を人眼を避けながら、ガラス窓の外にやった。

モンテ・ベローの方からクラブニンヨスの町の背面に達し、そこから湾曲してサント・アントニオの方へうねって行く長いエスピゴン（峰）はチビリサ農場の脊髄である。珈琲樹海は輝いた日光に接吻する様なしたしみをさせて地平線を限っていた。この大きなパノ라마の左端に鶏卵色に塗った停車場は浮彫りを見る様な軽明な存在であつた。アンナもアントニオも最早あそこにはいないのだ。アンナはどんな思を抱いてコロアに戻つたろう？ 総ては過去という解き難い謎のなかに葬られてしまったのだ。私はサンパウロ市に出て、又しても新らしく賽の河原に石を積み重ねてゆくのである。

『そうだ。俺は幾度でも石を積み重ねて見よう。それが運命なんだ』

こう思うと何んとなく心が軽るくなってゆく様な気がした。

汽車は警笛を吹きならしつゝ、大きなカーブを描いて森のなかに突進していった。丁度私の運命の様に……

満身に日を浴びつゝ、限りなき

大地の果てに目を放つかも

吾れ日の子土の子黒ろく日に

焼けて土によごれてあれば苦もない

畑打つこの細腕に重々と

大地の音のひびけるかも

移民収容所時代

一

サンパウロ市に着いた翌日、私は先づ第一に州農商務局 (Secretaria da Agricultura Comercio e Industria do Estado de Sao Paulo) に出頭した。それは三浦通訳官の添書を差し出して州農商務局長に面会を求め、自分の働くべき仕事について命令を受くる為であつた。

あの馬鹿に大きな州農商務局の待合室の壁に添うた椅子に腰を下ろすと、自分は如何にも小さくなつた様な気がした。

高い天井、金色に塗った色彩、壁には歴代州農務局長の油絵がかけられていた。

私と同じ様に局長に面会を求むる六七人の人達は何れも死んだ人の様にだまりこくっているのが目立った。なかに

は中央の机の上に置いてある雑誌などを持って来て読んでいるものもあったが、音を立てることが罪惡でゝもあるかの様に静肅の態度を保っていた。

長官に面会したなら、どんな風に挨拶したものであるう。三浦通訳官の書面のうちには私が何も多く喋べらないですむ様に要件を書いているに違いないが、若し長官が色々質問を發したならば、それに応答しなければならぬ。未熟でそうしてブロークンな私の葡語の経験と知識とを以つては甚だ怪しいものである。長く交際している人達の間にあつてこそ、解らないなりに、想像が半分伴うて、始めて会話の意味をお互に了解し合う程度が飾りのない告白である。

私は退屈の余り、色々こんな風に思い悩んだ。凡そ一時間、或は二時間位もたったろうか、突然長官室の重い扉が開いて、如何にも勇敢な足取りで一箇の巨漢が私の前に進んで来た。

『ススキというのはお前か？』

私は直覺的に長官カルロス・ボテリヨであるということ をさとった。オルグリョーズ（傲慢）な人を喰った様な態度である。星亨は丈が小さくって丸顔であつたが『面倒くさいことは嫌やだ、えゝやつてしまへ』とひた押しに押しきつてしまう様な性格がよく似ていると思う。カルロス・ボテリヨは聖州の星亨だという批評はこの上ない適切な

表現である。私は只一言、

『そうです。私はススキです』

シン・セニョール（君、貴方などという意）といった。ヴ
オツサ・エツセレンシア（閣下）などという言葉は全く知ら
ない訳でもなかったが、百姓はそんなどえらい応対には馴
れておらなかったのである。長官カルロス・ボテリヨはこ
の泥百姓奴、礼節を知らないなという風に眉をびくりと動
かして、

『お前は何しに來たのか？』

じろじろと臆面もなく、飽迄人を喰った様な態度で真向
から私を見つめた。否睨らめつけたという方が適してい
る。

これはおかしい。私の要件は三浦通訳官の書面のうちに
かゝれてある筈だ。ヴオセ（お前）などと呼び捨てるのも
人を輕蔑した話である。現在の私は単なる一箇の日本人に
過ぎない、農商務長官が何んだ一人の同胞もいないブラジ
ルへ单身渡航して來た男だ。必ずしも移民収容所に働かな
ければならない訳がない。嫌やならさっさと又チビリツサ
農場に引き返して行く迄だ。そこにはアンナが待ってい
る。私はこういう心の激動をどうする事もできなかった。
『貴方は私よりもそれを御存じの筈です』

きっぱりこういゝ放って長官の顔を穴のあく程じろじろ
と見つめてやった。私の顔は自らぼーっと熱して來るのを

感じた。余程真赤になったと見える。

『ハ、ハ、、そうか、そうか』

思わず長官は顔を崩して笑った。

『一寸待って居たまへ』

いい終らぬうちにさっさと引返して行ってしまった。宛然狐につまゝれた様である。センナ（活劇）は暴風の様に通り返してしまった。或意味で一寸禅問答に似たあんな応対はブラジル人の間には見られないことである。長官カ
ルロス・ボテリヨはブラジル人の変り者に相違ないが、私の取った卒直なぐんと突き当ってゆく様な態度の善悪は自分にも解らなかった。

人間の一生は何もかも試練である。徒らに興奮すべきものではない。総てのものゝ下僕となることの幸福を説いたキリストの言は真理であるが、人間はとかく動物としての人間になり易いものである。私は農務長官に対し、もう少し譲るべきであつたかも知れないなどと思ひなやんでいる時に、再び長官室の扉が開いたが、こんどは如何にもブラジル人らしい若い男が現われた。

『君はススキですか？』

『ススキです』

『はあ、そうですか、それではこの公信を持って君は移民収容所に行つて下さい。』

大きな状袋を手渡すと、如何にも服装を気にする風に両

手で上衣のへりを軽く握りながら、柔和な眼付で私の頭の上から靴の先き迄見下ろした。

私の靴は汚れてはいないが光っておらなかった。三浦通訳官から外国に来てはいつも靴を光らしておらねばならないといい聞かされたことを覚えているが、粗略な私の性質は余りそういう方面にこだわらなかった。成程この役人の靴は漆を塗った様な光沢を見せている。そうか私もこれからあんな風にするんだなどと思って私は呆然していた。

『君はコーヒー園に働いていたそうですね』

『そうです。一ヶ年と少しばかり』

『君はたった一人の日本人ですから何も彼も覚えなければならぬんですね。これから移民収容所に行つて大いに働いてくれたまへ』

この役人なかなかうまいことをいう。

『有難う。それでは私はこれから移民収容所へ参ります』
立ち上った私の手を力強く握つて、

『私は秘書官です。用があつたら何時でも遠慮なしに来たまへ』

『オブリガード！ オブリガード！』

長官と打つて変つたこの秘書官の態度に、私は只有難う有難うとくり返すより外なかった。何んだか不思議な謎をたゞきつけられた様な気分で、州農商務局の建物から外へ出ると、秋の日はいやが上に照り輝いて、私の眼は物を識

別することができない様な眩惑を覚えた。

二

私は名ばかりの広場テゾーロから「ブレッセル」行の電車に乗って、ピラチニンガ街がサンパウロ鉄路で横断されている所で下車した。

あの頃まだ此の鉄道線路を越える橋もなかったし、モツカの方から一直線に走って来る鉄道線路を挟んで、如何にも新開地らしいエキゾチックな、無秩序なうちに浚刺たる気分にあふれているのを見のがすことができなかった。

『この線路をサントス港に出ると太平洋の波が日本につづいている。奥地へ行くとアンナのいるチビリツサ駅につながっているんだ』

私はこんな馬鹿氣た考へをふと頭に浮べながら踏切を悠長な足取りで越えていった。

すぐ右側にごつごつした赤煉瓦を露出した高塀に囲まれた大きな建物がある。それが即ち移民収容所 (Hospedaria de imigrantes) である。

城門というよりは寧ろ監獄という感じの強い屋根のある門には重たそうな鉄の扉があった。勿論開け放されてはいたが、こうした厳めしい中世紀頃の欧羅巴の物語りにでも出てきそうな恰好をした門戸をくぐることは余りいゝ心持

はしないものである。しかし門衛は案外にやさしく私の来意を開いて事務室を指さしてくれた。

只広いだけを取り柄で何の装飾もない奥まった室であつた。設計が拙すいせいか表には一画にガラス戸がありながら、暗い陽ぎしは総てのものを灰色に見せた。所長はプラガといって四十年配の白哲などこか神経質らしい苦味走つた顔に眼鏡をかけていた。

私の差出した農商務局のオフィシオ（公文）を開封して、

『解りました。えゝと…君はは何時から出勤することができますかね』

『私は昨夕農園から出て来たばかりで、ホテルにいるのです。何処か通勤に便利な室を探すか、ペンソン（下宿）でも見付けたいと思っていますので、そういう準備のため明日一日体ましてもらいます』

『よろしい。君の仕事はビート君の助手をして先づ移民のパススを取る方の手続を見習つて下さい。それから段々色々な方面のことも覚えてもらわなければなりません。明後日出勤すれば、私がおらないでも、君の仕事のできる様に命令を与へて置きますから……』

所長は心安げにこういつて公文を又よみ始めた。

『は……君の名前はTe…ji…ro・Su…zu…kiというんですね。ハ、、日本人の名は我々にはどうも 読みにくい。

ポルトガル語などは、それから見ると容易ですな、何処の国の人でも一年もおったら、すぐ話せる様になる。君はブラジルに来てから何年になるかね』

『一年と少し……』

『一年？　それでそんなによくポルトガル語を話すんだね』
ブラジル人は、いつも他国人のことを感心して嘗める国民である。私は幾度こういうお世辞を聞かされたか解らない。実際私は語学が不得手で、貰められる様な進境に達していなかったのである。

『恐れ入ります。私はまだ何も解りません。自分の思うことの百分の一もいい現わすことができないのです』

私はほんとうに恥かしくなつて顔を赤くした。

『なアにそれ位なら充分だ。トルコ人やドイツ人なんか何時迄たつたつて妙な外国癖が抜けないからね地は外国人のエスポジソン（博覧会）見たいものだから、心掛一つでどんな外国語にも通達すること　ができるんだ。大いに勉強したまへ』

顔に似合わない親切なことをいう所長である。

『有難う、私のできるだけの力を尽して遣ります。それでは所長さん、私はこれで失礼します』

総てが予想外にやすやすと進行していった喜びに、私は肩が軽くなった様な気がした。

『シン・セニョール、アテ・デポイス・ダ・マニヤン！

ス…ス…キ、ス…ス…キ…』

くり返しくり返し、恰も漸く物を喋り出した小児の様に、片言雑りに私の名を呼んでいたが、突然大声で、

『ニッポン・バンザイ、ハ、』

もう二三歩あるき出した私の後から、浴びせかける様に朗らかに叫んで笑った。

三

藤崎商店の後藤武夫君と二人で方々探し廻った揚句、移民収容所には少し遠かったが、ルースの公園も近く、藤崎商店へも電車で行けば五分位で行けるし、タマンヅアティ河も近くにあつて、まだ空地がそこらに沢山あったから、空気もよからうという様なこので、サン・カエタノ街と、ルース兵営に添うたジョゼ・テオドロ街とをつないでいるアメリカ街の中程のポルトガル人の表の室を借りることにした寝室、敷布、洗面台と洗面器、簡単な机と椅子一脚等無くてならないこれ等の品々を買うのに、一ケ年間農場に働いて残した金では支払いきれなかった。不足分は後藤君の好意で立替へてもらったのも忘れられないエピソードである。

さあ、何も彼もひと通りは揃った。農園内のあの赤土によごれた壁、七十センチの狭い寝台、挨だらけの室に比べ

れば、これは当に金殿玉楼である。不足など云うのは罰が当る。若し足りないものがありとせばそれはこれからの努力である。

『一生懸命に働くんだね』

私は白い敷布で包んだ寝台の上に倒れて、天井を仰ぎながら、一種の幸福―満足感に打たれてこんなことをつぶやいた。

X

X

X

朝は八時出勤だと云うことであつたが、私は始めての日でもあるし、七時半頃には、もう移民収容所の門をくぐつていた。

『やあ、ススキさん！』

私はびっくりした。私の名を知っているものは所長の外まだ無い筈だ。誰であろうと声のする方を見るとそこにエルクラノ氏が立っていた。

一年前、三浦通訳官、水野竜氏等と始めてサンパウロ州の珈琲園地帯を巡視した折、州政府の命令で私共の案内役をつとめてくれた人である。意外な所で旧知に逢つて私は非常によるこんだ。聞けばエルクラノ氏は移民収容所の掃除監督になっているとのことである。私に取つてこんな力強いことはない。

『意外ですね』あれからずっとこちらで働いているのですか？』

『そうです。これからは君も私共の仲間ですよ』

二人は握手してから抱き合って、右手を背に延ばして、バタバタと叩いた。これはブラジルで最も親密な情を表示する敬礼の仕方である。

『ススキさん、余り人の来ないうちに、所内を少し案内しましょう』

エルクラノは先に立って順々に案内してくれた。

移民収容所は左記の建物を総合したものである。

A、植民、労働局

(Agencia oficial da Coloniza 釵 o e trabalho)

B、警察屯所

(Posto Policial)

C、郵便局及両替店

(Agencia do Correio e Casa de Cambio)

D、移民ホテル

(Hospedaria de imigrantes) への内に事務所

(Escritorio) 税関 (Alfandega) 等あり。

E、食堂 (Sala de Refei 釵 o)

F、便所 (Latrina)

C、病院 (Hospital) への内に診察所 (Consultorio de medico) と薬局 (Farmacia) 有り。

H、荷揚プラットフォーム (Plata-forma de bagagem)

I、浴室 (Banheiro)

これ丈のものが完備しておれば、海外から来た新らしい移民諸氏にとって、何一つ不足ないといつてよろしかろう。只一つ売店のないのは物足らない様な感じがないでもないが、移民収容所の方針として新来者が余り物を買って食うことは衛生上よろしくないという事が一つ、もう一つは無駄な費用を使はせまいという老婆心からである。故に是非必要なものであるパンだけは伊太人のパン屋が随時出張して売ることになっている。

移民収容所の中心は敷地の真中に凹字形を逆倒した二階建の大建築である。入口が中央になって階段を登って行くと、其左側前面は全部事務室と事務用品貯蔵室となっている。左側前面は二室あつて小さな方は事務室になっており、他の最も大きな一室は新来の移民を州移民法に依り種々の質問をなし、これを登記するために使用される。この室をSala de Chamada（点呼室とも登記室ともいうべきか）と称されている。

右側の階下は二区に分割されて前方は税関、後方は移民荷物置場と其輸送事務を取扱う所となっている。左方の階下と二階全部は移民諸氏の宿泊のために提供せられている。

サンパウロ移民収容所（注・在伯同胞活動写真帳より転載）



るあで式国外て總是容内 所容收民移ロウバンサ

食堂と寝室



るあも人々ボコといはな合に口おせ一はにんき民移新らかに式開外は事食の所容収ルジラフ



るあでのふ助を夢の夜一第國独に處此は建民移たくり人所容収

移民の寝室に対する設備は不完全で、且数も足りないらしく見えた。エルクラノの話によれば夫婦者だけが銅色に塗った鉄製寝台を供給され、やゝ厚い綿布を敷いて寝るが、独身者は蒲で編んだ蓆を敷いて板の上に寝ることになっている。勿論夫婦者の数が少ない場合は独身者も寝台を占有することは自由である。

凹字形の三方から廊下で結びついている食堂には少しばかりの大理石の机もあったが、大部分はペンキを塗った食卓であった。

私が合点の行かないのは便所の設備であった。コンク

リートで長い溝が出来ているが、其上に太い鉄棒を通して
いる。私はこういう便所を日本から始めて南米へ渡航する
時、乗船グレンファグ号に於いても発見したが、遂にどう
いう風にして便ずるものか解らなかった。便所の事などは
余り気のきいた話でないから、ついそのまゝになっていた
が、茲で再びこういう奇怪な設備に逢着するという事はよ
くよく縁あるものと見える。一体あの棒に機械体操でもす
る様に腰を下ろすものか、さもなくば位置の安定を得るた
めに一方の手で後向に握り占めてもするものか見当がつか
ない。こういうものゝ前に立つて研究しておられないから
閉口だ。第一戸がなくって開け放しなのが氣になる。日本
移民の来る前に何とかしたいものである。 移民諸氏が収
容所で、どういう順序で取扱われるかというに（最近の革
命後移民収容所は兵営となり移民はサントスより農園へ直
送されることになっているが、これは一時の変態で、憲法
政治が復活し、聖州人によつて聖州の政治が行わるゝ様
になれば早晚移民収容所が再開せらるゝことは解りきつたこ
とであるから、昔の移民収容所に於ける生活を理解するこ
とは、将来の渡伯者の参考ともなるだろうと思う）

サントス港に着いた移民数が少なければ、普通の列車で
移民収容所から一キロメートル弱の距離にあるブラス駅
(Blas)まで送られ、其処から徒歩で迎へに出ている役人
に案内せられて来るのであるが日本移民の如く一度に多数

ある場合は、何時もサントス埠頭から特別列車によって直ちに収容所専属のプラットフォーム、即ち（H）の建物に下車するのである。もしそれが夜であつたなら飯食券をもらつて食堂で食物を貰うのである。さもなければ先づ移民諸氏は（D）の建物の右側にある大室（Sala de Chamada）に女も子供も全部こゝに集合し登記を受けなければならぬ。

日本は何んでも特殊な取扱いを受けることの好きな国民で、茲でも世界の何処に行つてもない様な移民法の結果、移民会社というものがあつて、いゝことか、悪いことか知らないが万事先き廻りして世話を焼いてくれるので、時としては茲で登記がすんで始めて渡さるべき食券を、サントスの船の中で渡される様なことも少くない。

そういう特殊なことはとにかく、一般に移民が収容所に這入つて、一番厳粛でそうして最も大切なのは此の登記である。

先ず一段高い所には、移民収容所長、船会社又は移民会社代表人、登記事務を取扱う書記とが坐っている。そうして移民は一人一人移民会社又は船会社から提出した移民名簿によって呼び出され、左の条項に対し聞きたゞされる。

姓名 (Nome) 年齢 (Edade) 身分 (Estado Civil)
宗教 (Religio) 国籍 (Nacionalidade) 職業

(Profiao)

この外に文字を理解するや否や、所持金高、出生地、出発港名などが聞きたゞされる。これがすむと銘々に食券 (Cartao de Refeicao) 渡されるが。この食券には家族の年齢、即ち

一、十二歳以上

二、二、三歳より十二歳迄

三、三歳以下

の三欄に分つて其数が記入されている。これは移民收容所にいる間、一時もなくしてはならないものである。

食堂ではこれによつてパン、コーヒー其他の食料品が供給されるのであるし、もし外出せんとする場合はこの食券を門番に渡さなければならぬ。契約する時にもこの食券に其の行く先きや主人の名が記されるのであるから、是れを大事に保管して置く必要がある。

さて移民の登記がすんでこの食券が渡されたなら荷物を取受らなければならぬ。それは (D) の建物の右側階下である。荷物の多い時はプラットフォームから税関の方迄一面に荷が散在しているから自分のものを探し出して早く検査を受ける様にとめなければならない。

これがすめば移民は係の許可を待て外出する事が出来る。執務時間外であれば門番に食券さへ渡せば自由に市街地へ出て行つて差支へない。移民の收容所内に宿泊し得る

のは七日を限度とされているから其間に行先を決定せねばならない。

それなら、移民はどうして契約主を探がすかというところ。移民収容所内に公認周旋人 (Corrector officer) が居る。伊太利人には伊太利人、スペイン人にはスペイン人の周旋人が、何れも植民労働局に申込まれている農場主の契約条件のうつしを沢山持っておって、移民の希望する地方をきいた上、その方面から申込んだ農場を一々よんで聞かせる。条件も吟味し、解らない点には幾多の質問も發して、万事OKと云うことになる (A) の建物の中に行く事になる。そこで契約の内容を改めて詳しく読んで聞かせられる。この条件に対して州政府が保証してくれる。つまり移民の自由意志によって農場を撰定するということに対し、絶対に干渉しないことが州移民法の精神なのである。

契約がすめば、後は荷物の發送である。それは (D) の建物の右側後方の事務室に行つて、食券を示し、よくよく間違ひのない様に自分の荷物を一ヶ所に集めて、其の個数を改め、行先地に發送してもらうのである。

これで万事終了である。後は買物をするか市内の知人でも訪ねるか、もし自国の貨幣でも持っておれば (C) の建物のなかに行つて両替してもらへばよい。この両替店は余り割合のよい方でないが、決してインチキな事をやらないから、安心して貨幣の交換が出来るが取柄である。

人数が少い時は出発の時に規定のパンと牛肉の腸詰を渡されるが、日本移民の様に多数の場合は出発の前夜に供給される。出発は其鉄道の線路々々によって違うが、ソロカバナ沿線に配耕されるものは二キロメートルスの距離を朝の暗い内に歩かせられるのは一寸困ることであるが、サンパウロ市の（多くは賑やかでない通りを通過するのであるが）情調を味わう一端ともなり、移民気分にひたることくらいえば、却ってこの方が面白い。

x

x

x

『これで君は移民収容所を全部見学したことになりますね』
二人は丁度収容所員の出勤者が其の名簿に署名する事務室の入口に戻って来た時、エルクラノはこういつて私を顧みた。

『いや、どうも有難う。御蔭を以てよく解りました。然しまだ病院の方が残っている様ですね』

『そうそう、しかし病院といったって君、茲は十人位の収容力しかないのですね。それはホンの一週間位で全治の見込みたしかなものだけを入院させて、後はサンタ・カーザ（慈善病院）に送ってしまうのです。移民の病氣ある場合は毎朝ドクトルが出張して無料で診察をし、薬をくれる。この方が重なる病院の方の仕事ですね。何れ後で君をイミグラソンの担当医マリオ・グラコさんに紹介して上げますよ。ドクトルは政治好きな面白い人だから、君の質問には

よろこんで答えてくれるでしょう。時にもう時間です。出勤簿に署名したまえ』

エルクラノはそこに立っていた受付のビットリオという伊太利人と話し合つて、私の署名すべき線を指定してくれた。

『君に断わっておくがね。この出勤簿は八時五分後迄茲においてあるが、それから後は助役の所え持つて行かねばならないから、遅刻した場合は助役の承認がなければ署名が許されない、つまり欠勤者と見なされるということになります』

受付のビットリオはこういつて教えてくれた。そこえどやどやと三四人の事務員が出勤して来た。かんかんかん八時の勤務時間を報ずる鐘が大きな建物に反響を起して鳴り渡った。

（附記）最近の移民収容所は一九〇八年代と比すれば面目を一新し、門と建物との間には庭園的設備をなし、食堂の卓は全部大理石となり、天井にガラスを張つて採光に便し、ベッドは二段にして全収容者に供給するに差支えなく、便所の如きも改築して又昔日の面影がない。

更に後方病院の右側に一舎を新築し、これを病氣其の他の不幸なる事情のもとに帰国する移国民（Repatriacao）を収容することになっている。

四

私に与えられた勤務は、收容所内の中央廊下に画した一室で、移民にパツスを供給することであつた。

主任はビートといつて、五十を越した痩せこけた見るからに病身らしい人であつた。私は殆んど何をしてよいか解らなかつた。コーヒー園に這入った時は、只働きさえすればよいのであつたが、筋肉労働でない点は楽でも、当時の私位の語学の程度では殆んど手がつけられない様な氣がした。

親切なビートは色々と仕事を説明した後、

『なあアに、かまうことはない。二三日はだまつて見ていて下さい。必要な場合ほ私から君にこうしろあゝしろというからね。只、所長でも来た時は何かいそがしそうにしてゐるさ』

と、こういつて笑つた。

下らない計算などをしている内に、いつの間にか十一時の鐘が鳴つた。お昼休みである。

ビートは私にまだ飯を食う場所がきまっていないということを書いて、自分の行っているレストランに誘つてくれた。

それはコンコルディア街（現アラメダ・プラト街、第三

百三十五頁参照）の始まりの所で、ブラス第一の盛り場コンコルディア広場が二十歩を隔てず、北停車場の横手であつた。お得意は安月給取か鉄道に働いている人達で、食卓は一杯の人であつたが、料理は伊太利の田舎式で馬鹿に脂肪の多いもので、ソツパなどもトマテから出た赤い汁の上に油が玉になってぎらぎら浮いていた。

それでも珈琲園の豆と豚油御飯とには比べものにならないうまさであつた。第一パンが農場では甚しい時には焼いてから五六日もたった、まるで石の様に堅い、かむとぽくぽく物の味もしないようなものと違って、フランス式の焼立てのパンはうまかつた。皮が狐色になつた所をかりかりと齒で砕いて食う味は例へ様もなく舌をよろこばせた。

午後は一時からの出勤である。二時に珈琲がある。収容所の珈琲は却々馬鹿にされない善い味を持っていた。四時には又かんかん鐘がなつて、退所の時間を知らせるのである。午前中三時間、午後三時間合計たった六時間、それが移民収容所に於ける勤務時間の総計であつた。

私は呆氣にとられて移民収容所から外へ出た。何だか拍子抜けがした様である。余りに樂過ぎて反つて手がつかない様な氣がする。

珈琲園におつては朝は暗い中から夜の八時、甚だしい時には十時過ぎ迄事務所にいなければならぬことが二週間にはざつと二日位はあつた。法外な勤務に軀は綿の様に

なつて、一日でもよい朝からゆつくり休んで見たいと思つたこともあつたが、内心は常に緊張して、どつか心の底で負けてはならない、何処迄も遣り通すんだという様な声がして私を励げましていたが、移民収容所では一日にほんの六時間ばかり、それもぶらぶら遊んでいる様な仕事、私は勿体ない様な気がしてならなかった。そうしてこの習慣付けられた、一日中せつせと働く自身の軀を、持つて行く場所がないのが第一の苦痛であつた。

私はイミグラソン（移民収容所）の戻りには真直ぐにセンターにある藤崎商店の後藤君を訪問した。

『いや！今日はどうだったかね？』

案じていたという風であつた。

『さあ？』

何といつてよいか解らなかつた。

『イミグラソンの仕事は大したことはないでしょう？』

『仕事の方は問題じゃないがね。君、官吏なんて楽なものだなあ！』

『それがどうしたんだ？』

『どうもこうもない。俺はあんまり間暇で気が抜けたセルベージャ（ビール）の様な気がするんだ』

『いゝゝゝゝ、いゝゝじゃないか』

後藤君は笑つた。私はその笑顔をじつと見まもつて恨めしい様な、泣きたい様な何とも彼とも形容のできないむ

しやくしやした気分になって考へこんでしまった。

五

珈琲園で筋肉労働の困苦と戦うよりも、移民収容所の気楽な仕事に順応して行くことは、遙かに容易であつた。段々馴れてゆくに従つて、六時間の労働さへも長い様な気さへもして午後四時の鐘の鳴るのが待ち遠しくなつていった。

『おかしなものだなア、人間は結局何もせずに遊んでいても、不足なんだね。満足というものは死んだ時に得らるゝ位なものだろう』

私はいつもこう思つて「働けるだけ働くんだけ。苦痛と不平とは、つまり人間が生きているということなんだ」こんな悟道めいたことを頭に浮べて、六時間を有意義にすごすことに専念した。

こういう訳で、私は仕事のない時は自ら求めてこれを探した。

移民にパスを供給する手続や、その数を計算する仕事は私に取つて、余りに飽気ないものであつた私はモラエスの担任としている内国から入所する移民 (Immigrantes reentradas) の登記事務を練習した。これは私にとって非常に興味あるものであつた。

州内では重に中央線のタウバテ、カサパーバ、パライブナ等、所謂ブラジルのナイル河と称されているパライバ溪谷の州中最も早く開けた地方の、無知とも純朴ともいふべき黒人、混血児が一時的に内奥地へ出稼に行くのがはいつて来た。州外からはバイア、リオ両州の人が多く、たまにベルナンブーコやもつと北方から来たものどもあつた。

これ等北方の違つた発音のアクセントを持っている人達と会話することは語学の上に対するばかりでなくブラジルの未知の世界を知るために望んでも得られない機会であつた。私に早く、アマゾナスに対する憧憬心を植ゑ付けたのは、皆この原始的な空氣に生きている「赤裸々」な北方人との接触からきたのであつた。

外国人としては伊太利人、スペイン人たまに独逸、露西亜人などもあつた。伊、西人はどうにかこうにか遣つてのけたが、独逸、露人等に対して私は漸くに覚え込んだブロークンな単語で質問を發しては何が何んだか自分乍ら訳が解らなくなつてしまつてよく露西亜人の通訳を呼んで来た。若し傍で聞いている人があつたならば吹き出さずにはおられなかつたろう。これは私に取つてこの上ない苦痛でもあり恥辱でもあつたが、私はそれを意義あるものとして、寧ろよろこびを以つて堪へ忍んだ。

特に私の注意を引いたのは *Imigrante reentradas* この移民中には、内奥珈琲園地方で病氣になつて、サンパウ

ロ市慈善病院 (Santa Casa de Misericordia) に入院して全治した外国移民がはいって来ることであった。移民収容所は慈善病院の証明書さへあれば、これを収容して州内ならばどんな遠い所へでもパッスを与へた。

私はよくこれ等の病氣上りの人達に質問した。

『君は何処が悪かったのかね？』

『私はひどいトラホームでした。まだホントウではないんだが……帰らなければ口が干上りますからね？』

こんなことをいうのもあった。しかし大体において脳が悪いとか、胃腸がいけないとかいうもので特殊な地方病がないのは私の心を強くした。

しかし私は或日、血の氣が何処にひそんでいるのだろうかと思う様な青白い、痩せこけた一青年が病院の証明を持ってはいって来たのを登記した。

『君は何処が悪いのかね？』

『私はマレタです』

青年は悲しそうな限ばたきをした。マレタとはマレッタ（マラリア）のことである。

『君は何処の耕地にいるのか？』

『ソロカバナ線のシャバンテスで、主人はエンリケ・ダ・クシニャ・ブエノというのです』

『君のいる所は毎年マレタが流行しますか？』

『私のいる耕地は毎年という訳ではないが、サルト・グラ

ンデ方面に行ったら大変です。マレタで生命を取られる人が少なくありません。ちと大袈裟な話ですが何でも町は雨季にはいると住民の大部分が外へ逃げていなくなるなんていつています。ナーニ、私などはよせばよいのに魚釣りに行ってやられたのです』

こんなことをいつてうつむいた青年の顔にやゝ赤味がさしてきた。

『しかし、君はそんな風でもうよくなったのかね』

『全くというわけでもないが、もう慄へも止んだ、熱がしなくなっただけです。うちには老人だけだからこれ以上はキニーネのカップスでも飲んで気をつければよいと医者もいますから……』

『ふむ、そうかね』

私は何だか前途が暗くなった様な気がした。チビリサ農場ではそんな病気がなかった。最も普通なのはトラホーム、アメーバ赤痢位なもので、こういう病人を見たことがなかった。私はその事について、もう少し知って置く必要がある。私は食券をこの青年に渡してから、ビートを顧みて、

『ビートさん、貴方は私にマレタに就て知っているだけ話してくれませんか』

私の真剣な心配らしい態度がビートの心を動かした。しかしその淋しい口元には幽かな微笑がはのめいた。

『マレタ？……あれにかゝるのも、悪化させるのも、自ら好んでやるというのも惨酷だが、九分九厘まで当人が悪い場合が多い様ですね』

ビートはこう断定してから、ぽつりぽつりマレタについて談りだした。

『マラリアは新しく開ける所ならば、何処でもあるものだと思います。水が停滞って腐敗し安い所は危険です。森林中の湿地などに、水が青白くなつてじゅくじゅくしている所などを通るときは気をつけなければいけません。大きな川でも流れの急でない所があぶないのです。

マレタの蚊はアノフェレスといつて気をつけて見ると尻の方を上げて止るから、すぐ分ります。人間というものは四六時中注意しておれないから、マレタにかゝり度くないものは蚊の発生時に於て釣に出かけたり、滝を見に行ったりする様な事を絶対に避くべきです。余儀なく危険な川の傍に宿らなければならぬ時にはキニーナ (quinina) を〇・三ー〇・四或は〇・五を飲むことを忘れてはいけません。

砂質の土壤なれば、森林伐採後一兩年にして日光消毒に依つて不潔な溜水もなくなり、マレタ蚊の発生のお機会を無くするが、テーラ・ロッシャ地帯になると幾年を経過しても、マレタが絶滅しない所が多いから、一段の注意をなすことが必要である。

時節からいへば無論暑い時期であるが流水の増加する場合よりも減水時に多い。それは種々な汚物が水溜りに停滞してアノフェレス蚊の発生を助けるからである。

蚊が如何に繁殖力を持っているかということを数字であらわすと実に驚嘆に価するものがある。蚊の卵がボーフラ (Larva) になるには三日から八日かゝる。ボーフラから蛹 (Nimpha) と変化するには五日乃至十二日間を必要とし、蛹から蚊が生まれるまでには早いので一日遅くとも三日を費す。そこで超スピードで卵から蚊になる迄九日間かゝる。最も長くかかった場合でも二十三日を越えない。そこで平均二十日を要するものとして、一匹の雌蚊五回孵化した場合を数字であらわすと

第一回目産卵数(二十日目) 一五〇

その内の半数が雌蚊生まれるものとして仮定して、

第二回目産卵数(四十日目) 一一、二五〇

第三回目(六十日目) 八四三、七五〇

第四回目(八十日目) 六三、二八一、二五〇

第五回目(百日目) 四、七四六、〇九三、七五〇

驚くべし、只一匹の雌蚊が百日間に五回の生殖をくり返すことに依り、その数実に四十七億四千六百九万三千七百五十匹という途方もない数を示すことになる。こうなるとなかなか一匹の蚊でも見逃がしてはならない。

マレタにかゝると、身体がどことなしにだるくなって食欲を減じ、一寸黄疸病にでもかゝった様な気がする。時として脛から足にかけて妙に冷えたり、いやな寒気がして風邪にかゝったのではないかと疑う様な感じを与へる。人によつてこんな状態が二、三日あつて発熱する。私は若い時魚釣りに行つてマラリアにやられたことがあるが、熱が最も高くなつた時は四十度を越えた位であつた。こうした苦しい灼熱が二時間もつゞいて、医者が来た時はけろりと冷けて検温器は僅かに平熱を越ゆるくらいであつた。若し不馴れな医者であると、こういう場合に腎臓が悪いとか、胃腸に故障があるとかいったりすることも少なくない。甚だしいのになるとパラチフスの疑いなどと、とんでもない診察をする場合もあるから自分自身に注意が必要である。

マレタは早い内であれば、注射の五、六回もすれば大方治まつてしまうものです。只厄介なことに一年で根治することはむずかしいものであるから、翌年にも雨期が始まつたらキニーネを飲むとか、注射をすとかすればもう安全です。

それをむずかしくしてしまうのは、投げて置いて始めには二十四時―四十八時―七十二時とこういう風に規則正しく出る熱が、いつの間にかごっちゃになつて絶えず発熱してどうすることもできなくなつてから医者に見てもらふと

いう風であるから重くなってしまうのです。

サンパウロ州でマレタにかゝり易い所は、パウリスタ線でモヂ・グアスー川の下流地方、ソロカバナ線ではパラナバネマの沿岸にあるサルト・グランデ町方面、チエテ川の下流地帯等です。これ等の地方はまだまだ衛生化されておられませんから、増水の終り頃からは余程気をつけなければ遣られるものと思わなければなりません。

マレタのことはブラジルでは色々な名を以って呼ばれています。先ずマラリア (Malaria)、インパルヂズモ (Impaludismo)、パルヂゼモ (Paludismo)、フェブレ・インテルミテンテ (Febre intermitente)、フェブレ・パルストレ (Febre Palustre)、トレメデイラ (Tremedeira)、セズンエス (Sezoas) などいわれているが、皆このマレタ (Maleta) のことである。

千八百四十八年ノット (Notte) により、マラリアや高熱病が蚊に依って伝染されるということを唱導されてから、今日まで既に六十年になる。ブラジルでもオズワルド・クルースの如き人物が出て、リオ・デ・ジャネイロを衛生化し、更にアマゾナス地帯のサネアメント (衛生化) に突進せんとしつゝある時代である。

『私はこんな身体をしていてもマレタには平氣だったんですよ』

ピードは話の終りにこんなことをつけ加えた。

『ビートさん、勿論それは田舎の人達の不注意もあります
が、若し金がなかったらどうすればよいのです？』

『ハ、、妙な所を心配するね、ススキ君、病気が重くなつ
たら、今の青年の様に矢張りあゝしてサン　・パウロ市迄
出て来るじゃないか。それを思いきつてもっと早くすれば
いゝのです』

『それもそうだがね……』

私は尚同意するに躊躇した。

『なアに、マレタなんて毎日カンジャ（鶏に飯を入れた
ソツパ）でも食べてぶらぶらしておれアいゝんだ。うむ、
そうだ。マレタに一番いゝことを教へましょう。それは高
燥な健康地に転地するんですね　マレタなどは二三日で吹
きとんでしまうぜ』

ビートはこういつてマレタなどを気にする私の心が理解
できないという風であつた。

六

私は夕飯後にはよく移民収容所に遊びに行った。一つは
外国移民の状態を見たいためと、もう一つは未熟な葡語の
会話を実習したいのが目的であつた。夜番は二人居って何
れも伊太利人であつた。教育とてはないが面白い話に富ん
だ人達であつた。

私共が逢うと先づ、

『ケ・ア・デ・ノーボ』（ニュースがないか、という意）

『ア・ガリンニャ・ボトウ・ドイス・オーボス』（牝鶏が卵を二箇産み落した、ということ）

必ずこんなことをいつて笑いを爆発させた。

それはあるあつたかい夏の晩であつた。私はいつもの通りイミグラソンに行つた。

南欧移民が五百人、北欧移民が二百人ばかりはいつていたので、あの広い収容所も、茲に一団、かしこに一団、その国々の人々がかたまり合つて話し合うのが賑やかであつた。

独逸系の人のごつごつした厚っぱい如何にも寒い国から来たという風をして、多くはカシンポ（パイプ）をくわへながら、不器用な重々しい足取りで歩いている。

使大利人は鼻の赤い顔をして、がらがらと声高にユーモアな態度をして、少しも外国に来ていたという様な風が且えない。

スペイン人は丈が小さく、何か物を探ぐる様な限付をしている。服装も一番見すばらしく落付がない『ミ・カゴ・デウス』『カラホ』なんて、人の前で開くに堪えない言葉を遠慮なく喋べって騒がしい伊太利人の会話は元来声高く、喧嘩でもしている様だが、その実何んでもないのと違つて、スペイン人のは真剣で恐ろしい所がある。

この国際的プロレタリアの絵巻物を見る様な中を、私は夜番と一緒に長い廊下を歩いて行つた。突然に起る手風琴の音、それは人の心を憂鬱にするような韻律を持っていた。

『スペイン人の踊りが始まったんだね』

夜番は独言の様につぶやいた。

階子段の下の一寸とした広場に円陣をつくって踊っているのが、すぐ私共の前に展開していた。踊っている。踊っている。若い男と女とが抱き合つて踊っている。その端れの方に頭の禿げた小さな痩せた老爺が、妙なステップで踊っているもある。サンフォーナの一揚一抑が彼等の手と足を機械の如く動かせた。そこには国籍もなければ老若もないらしく見えた。

この人達は恐らく皆船で知り合つた人達であろう。生れ故郷の生活難からのがれて、新らしい世界へ新らしい幸福な夢を追うて来た人達である。或る意味からいうと何れも社会の劣敗者である。それがこうしてさも愉快らしく「明日」にも直面しなければならぬ農場の労苦をよそにして何のこだわりもなく締って居るのを見ると、南欧国民には、どうしても日本などの想像することのできないルンペン性がある。よくいへば青山至る所にありだ。何処に行つても日光が輝いている。その日々を朗らかに踊って暮らす。それがスペインだろうと、船の上だろうと、ブラジル

だろうと彼等の人生観には何の変りもない。日本人をあきらめのよい国民だというが、南欧人には違った意味で日本人などの及ばない一種こうした諦めから出発した妙な楽天性がある。

私がこんなことを考へていると、拍手の音が急〇（**印字不鮮明**）の様に起つて、サンフォーナは再びその沈滞な音色をほとばしり出した。

一人の若い娘―！それは実に真白な雪の様な色をした長顔の唇の赤い十八、九の娘であつた。スペイン式のバラの花の模様を散らしたマントに身体を包んで踊り出したのである。コトコトコトコト足音高くカスタニョーラを打鳴らしつゝ踊り出したのである。何かしら人間が絶望の時に沈吟する様な細い沈んだ声で唄をうたつては、ひらひらと右すると思へば又左につゝと進んで行つた。

私はキレイだ。美しいというよりも、この娘のあらわす踊にはやるせない憂鬱な恋がひそんでいると思つた。私はふとカルメンのことを思い浮べて、この娘の表情を見つめると、何かそこに似通つたものがある様に思へてならなくなつた。漆黒な髪に青い目、私はぞつとしてこの踊りの終るのを気味悪くさへ思つた。

収容所内を一巡して、門の所に戻ってから私共は長いこと話していた。

午後十時の寝鐘が鳴ると流石に今迄の騒々しい音が止ん

で、水を打った様に静まり返った。うす暗い電燈の灯った大きな建物が、星もない夜の暗黒に化物の様にくつきりと黒く塞いでいた。

そこへ崩るゝ様に笑いながら、夜番が戻って来た。

『ケー・アパンデガ！ セン・ヴェルゴンニャ、シン・セニョール、ハ、、、』

なかなか笑いが止まない。

『どうしたんだ。独りで笑ったって仕様がなないじゃないか』
『ナーニね、今風呂場の方へ廻って行ったんだがね、ハ、、、、それ先程踊ったスペインの女らしいのが、若い男と二人で居ったのさ。ハ、、、、嚇かしてやったら、すっかりうろたへていやがった。ひよっとすると、あれはたゞのものじゃないよ』

私の頭に電光の囲めく様なものがあつた。そうだ、あのスペインの女には何ものか人に語られない秘密があつたのだ。あの青ざめた人形の様な顔をありありと思い浮べて、私ははかり知れない人間の運命を悲しんだ。

七

伊太利、スペイン人等の南欧移民の数とは比べものにならなかったが、独乙、奥太利、露西亞人等の北欧人が五十人、百人と毎月船がサントス港に着く度にはいつて来た。

南欧人は殆んどその全部が珈琲園にはいるものであるが、北欧人は伊太利の国境に接した奥太利人を除く外、その九割までは植民地行くものであった。

南欧人のきたない着物、その手足の汚れなどの眼立つのに反し、独乙人はごつごつした不恰好な厚着をして、のそりのそり歩いているのが目立った。スペイン人などボロ屑迄つめこんだ数箇の箱を持って来るに過ぎないが、独乙人は羽根布団、ミシン器械、農具、家財道具等六疊敷の室に一杯つめても尚余りある程の荷物を持って来た。

あわただしく暴風の過ぎ去る様に南欧移民は珈琲園を指して去ってしまうが、北欧人は家族を移民收容所内に残して入植すべき植民地を決定する為に家長だけが内奥地へ旅立った。こういう風で少くとも十日間位は移民收容所を動かなかった。甚しいのになると一ヶ月も方々視察した上でなければ入植地を決定しないものさへあった。

段々労働、植民局内に備へ付けられている植民地地図のロット(地区)が入植者のために赤く染められて行くのを見て、私はサンパウロ州の土地がまもなく消えて無くなる様な気がした。どうかして、あの北欧人の様に、どしどし土地を買って植民地地図のロットに日本人の名を書き入れる時の一日も早からんことを望んだ。

サンパウロ州は植民地の設立されたのは千八百二十八年であるが、一大飛躍をなしたのは私の渡伯する前年即ち千

九百五年以来のことである。聖州における植民地発達の概況を表にして見る。

植民地名	設立の年	面積
目標殖民国籍		
リオ・ネグロ	一九二八年	
独		
サント・アマール	同	
パリケラーアス	一八六一年	六、四三二アル
ケールス	独、墺、露、伯	
カナネア	同	
サンタ・アンナ	一八七七年	五〇
伊、葡、		
サン・カエタノ	同	三九九
伊		
グローリア	同	
伊、葡、波葡、伯		
サン・ベルナルド	同	三、八〇七
カンナス	一八八五	四八
伊、葡、伯		
カスカリヨ	同	二七八
リベロン・ピーレス	一八八七	二八〇

伊、伯

アントニオ・プラード

同

五八七

伊

ロドリゴ・シルバ

同

五五五

伊、伯

バロン・デ・ジュンジアイ

同

二〇一

伊

サバリナ

同

二、二三九

伊、西、伯

キリン

一八九〇年

四六八

伊

ピグイ

一八九二年

四〇九

伊、喫、伯

カンボス・サーレス

一八九七年

一、四〇〇

伊、喫、独

ノーバ・オデッサ

一九〇五年

一、〇三一

露

ジョルジ・チビリサ

同

一、七八四

独

コンデ・ド・ピニャール

一九〇六年

八〇〇

伊

パラセーア

同

二、〇〇〇

ノーバ・ヨーロッパ

一九〇七年

二、五〇〇

露

ノーバ・パウリセーア

同 二、五〇〇

独、澳、

ガビオン・ベイシヨット

同 二、〇四四

ボーア・ヴィスタ

同 四四六

伊

ボン・スセツソ

同 一九二

伯

備考 独（独逸） 澳（澳太利） 露（霞西亜） 伊（伊太利）

葡（葡萄牙） 白（白耳義） 西（西班牙） 伯（ブラジル）

備考 植民国籍は主なる入植国名を指示したもので、必ずしも他の国籍を有するものを入植せしめないということではない。

この表によると一見南欧人である伊太利を目標とした植民地が沢山あることが注意を喚起するが、北欧人と異なる点を指摘すれば、伊太利人は一度珈琲園にはいつて働いた上句、金儲けをした後に土地をかうのであるのに反し、独、澳等の北欧系の人は着伯後直ちに植民地へ向って行くという違いがあるのである。スペイン人を目標としたものが只一箇サバリナ植民地あるだけな点を見ても、かつては南北米の覇者であつたこの傷ましき国家の凋落を察するに

難くない。

きたない点に於て露西亜人は北欧のスペイン人である。むしやむしやと髭の多い少し角張った丸い顔の凹んだ眼はトルストイを思わせる様なしたしみがあつた。所謂タワリツシで如何にも人の好きそうな何となし虐げられつゝも、それに反抗し得ないといった風な態度があつた。彼等を目標とした植民地「新オデッサ」には寧ろ独乙人の入植者が多い様であつた。海老茶色を一層暗くした様な色の服を着た女房達は皆頭に布を被っていた。南欧人の被るレンソは派手な美しい色をしているが、露西亜人のは地味な暗い色をしていた。

一航海に二三家族位しか来なかつた彼等が、ある日百数十人の一団が移民收容所にはいつて来た。そうして彼等はなつかしいその母国の名を冠した「ノーバ・オデッサ」にはいらないうで、海岸地帯にあるPariquera-assu（パリケラーアス）に行くものであるということは皆の眼を驚かした。

パリケラーアスはサンパウロ州で最も古い歴史を持つてゐる植民地である。千八百六十一年中央政府に依つて開設せられたのであるが、どうしても入植者が落付かない。それよりもずっと遅れて拓られた植民地が独立自治を許されておゐり、既に堂々たる市街地をさへ現出しておるものもあるのに、未だ微々としていうに足る発展を遂ぐることが

できないのである。

『どうして、あんな所にはいるのだろうか？』

私共は皆こんなことをいつて疑った。果せるかな、二ヶ月の時日がたゝない内に、殆んどその全部がパリケラーアスを引き上げて、再び移民収容所にはいつて来た。

通訳の話を聞くと、募集人にだまされたということである。露本国で聞いたのと全く違う。あんな所には居られないから、故郷へ送還されたいということである。露国領事なども来る。すったもんだの揚句、一ヶ月以上も移民収容所に居つて、とうとうその全部が露西亜に向つて出発して了った。独乙人であつたなら他の植民地を選定して入植するであろうし、南欧人であつたならそのまゝイグアペ、カナネア辺に新らしい労働を見付けてサンパウロ市に舞い戻るようなことはないであろう。約束が違うといつて何の未練気もなく、さつさと本国に――苦悩と迫害との世界に引き上げて行く所にタワリツシ露西亜人の面目がある。

サンパウロ州は広い。方面の如何によつて日本などでは到底想像もつかない差違を見せる。サンパウロ州は気温の上から二大別されている。海岸を去ると二十キロメートル内外の地点に突出して一千メートルの高さに隆起するセーラ・ド・マール（海岸山脈）迄の海岸地帯と、その以西に展開せる海拔四百米八百米より八百位米の波状に起伏せる高原地帯とである。

高度の低い海岸地帯は湿量が多く温度が高い。濠々たる大西洋の水蒸気が海岸山脈に衝突して茲に世界稀に見る多雨の地帯を現出する。その代表的のものを挙げると、サントス港を去ること三十一キロメートルの地点で、海岸山脈の頂点七九七メートルの高さに位するアルト・ダ・セーラ駅である。この駅は一年間の半数は雨で、その降雨量四、一六九を算する。従つてこの地帯に生育する蘭科植物の如きは世界の何れの地点にも見る能わざる多種多様なる壯觀を皇し、この駅の一端にある植物園は、他から一木一草も移植しないにも係わらず、その豊富なる植物の生育は何人の眼にも一大驚異である。総じて海岸地帯はカカオ、ココ椰子の栽培も可能でやわらかな新緑のバナハの広葉が風に翻へる光景そのものが、既に純然たる亜熱帯であることをさゝやいている。

これに反し、一度海岸山脈を越えると、天候が雨期と乾燥期とに分かれ、冬季には数回の降霜さへあり、十年位を周期として、零下三度位に降下することさへもある。夏には常に習々たる微風と涼雨とあり、冬には殆んど風なく日光の放射をほしいまゝならしめる等快適なる気候は世界稀れに見る天地を現出する。従つてこの地帯にはペロバ (*Aspidospermum polyneuron*) ジャトバ (*Hymenaea stilobocarpa*) グランタン (*Esebeckia leiocarpa*) 等乾燥したる土質を好む巨木生育し、その梢

頭には乾きたる気温と風通しよき蔭影を好む蘭
 (*Schomburgkia cresspa*) が長き花茎に美しき暗紫色の
 花を点じていることを発見する。

試みに海岸地帯と内奥地の代表的都市との気候を数字で
 あらわすと、

都 市	海 岸 地 帯			雨 量	雨天日数
	絶対最高温度	絶対最低温度	平均温度		
サントス	三七、七	九、九	二二、三	三、二四七	一五〇
イグアベ	三九、八	七、二	二二、六	二、〇六三	一七一
ジュキア	四一、四	八、〇	—	一、六四八	一三九
内 奥 地 帯					
サンパウロ	三五、五	三、〇	一八、六	一、二七四	一三二
イタベチニンガ	三七、〇	一、九	一九、九	一、一六五	九〇
アグードス	三八、五	三、五	二〇、七	一、一一〇	六九
ヴァール・デ・バルマ	三四、〇	五、二	—	一、二六〇	一〇五
リベロン・プレット	三七、五	三、七	二二、二	一、五一七	一二七
タウバテ	三五、六	三、五	二〇、七	一、三五〇	一二〇

備考 ヴァール・デ・バルマ駅はノロエステ線パウルの次駅である。

海岸地帯

都市	絶対最高温度	絶対最低温度	平均温度	雨量	雨天日数
サントス	三七、七	九、九	二二、三	三、二四七	一五〇
イグアペ	三九、八	七、二	二二、六	二、〇六三	一七一
ジュキア	四一、四	八、〇	一一	一、六四八	一三九

内奥地帯

サンパウロ	三五、五	三、〇	一八、六	一、二七四	一三二
イタベチニンガ三七、〇	一、九	一九、九	一、一六五	九〇	
アグードス	三八、五	三、五	二〇、七	一、一一〇	六九
ヴァール・デ・パルマ	三四、〇	五、二	一一	一、二六〇	一〇五
リベロン・プレット	三七、五	三、七	二二、二	一、五一七	一二七
タウパテ	三五、六	三、五	二〇、七	一、三五〇	一二〇

備考 ヴァール・デ・パルマ駅はノロエステ線バウルの次駅である。

海岸地帯に於けるサントスの雨量は世界最大の雨量ありと称せらるゝアマゾナス地方と大差なく、イグアペは殆んど一ヶ年の半数降雨下に曝されている。内奥地に於て最も雨量多きはリベロン・プレットなるも海岸地帯に於て最も少きジュキアより一二一少量である。降雨日数多き点に於いて名あるサンパウロ市を以てするも海岸地帯に於て異数とせらるゝジュキアより七日間少ない。若しそれ内奥地深

く入りてアグードス、イタペチニング等に至れば殆んど海岸地方の半ばにも達せず、日々好晴を楽しんでいる。一言にしていいつくせば海岸地帯の暑さは日本の夏の如くむし暑く、内奥地の暑さは日本の秋の如く乾燥した潔よい暑さである。

こういう事実に思い一度至る時、私は何時も深い考へにふけらざるを得なかった。日本人を入れるのはよい。しかし一体どこに入れるべきであろうか、あの露西亜人の様な運命は断じて望ましくない。独乙人の様に、せめては伊太利人の如くあつてほしい。

八

ブラジル行移民募集が日本でなかなか思う様にいかないらしく、三浦荒次郎通訳官は時々サンパウロ市にやって来た。

三浦さんは非常に開放的な人であつた。外務省に打った電報のうつしなども、少しもかくす所なく見せてくれた。それは何月何日迄に移民を送らなければ契約を破棄するというサンパウロ州政府の意向を伝へたものであつた。

『ホントウに予定通り移民が着かないと契約が無効になつてしまふんですか』

心配そうな私は真顔であつた。

『なーに掛引き。こういってやらないと日本で一生懸命にならないからね。サンパウロ州政府では、どうしても日本移民を入れて見たい腹だから、案じることはないんだ。しかしいくら家族移民輸送という日本に取って始めての試みで、こつちの思う様に運ばない位の事は解っておっても、茲で一寸こうおどかして置かないと解決がつかんからね。……こんな電報を打つ位は君ハハハ、……』

三浦さんはそんなことは何でもないことだという風に、からからと笑った。

『それを聞いて安心しました。日本移民が来ないとなると私も考へなければならぬからね。もう愈々来るものとしたら、三浦さん私に一つ伯国に日本移民を入れる様になった筋道について話してくれませんか、あなたは誰よりも一番よく知ってる筈ですからね。』

私もそれを知っている一人に相違ないが、三浦さんは当局者として、殆んど始めから終りまで関係した人であるから、私の知っていないことも沢山あるに違いない。

『さあ！』

三浦さんは余り多くもない髭をカイゼル式に上向きにくるツと巻き上げながら、暫らく遠いことでも考へ出す様にだまっていた。

『移民の最初の交渉は大越公使時代からの宿題であつたのだが、実際問題として考究せられたのは杉村公使からです

な。』

こういつて語りだした、三浦通訳官の話を要略すると、杉村公使が書記官時代に明治二十八年十月八日末明朝鮮の王妃を倒した、あの一大クーデターの責任者の一人として広島監獄に八十余日間三浦公使とつぶさに苦痛をなめつくした。

杉村公使の胸中に日本は亜細亞大陸に発展するだけではない。何処か新らしい世界に向って延びなければならぬ、ないという念の往来したのが実にこの牢獄のなかに閑散な日を送っていた時であった。

証拠不十分で監獄から出て来た杉村さんは外務省通商局長になり、明治三十二年公使に任ぜられ、ブラジル駐在を仰付けられた。杉村公使は外国語が解らないので、何人か対外折衝の補佐役を勤める人がなければならない。杉村公使は京城事件で三浦公使の歴史的ドラマに参加した仲のよい外国語を良くする堀口九万一領事官補を思い浮べたのである。彼は密かに当時の外務大臣青木周造にこれを要請して任にむいたのである。

賜暇帰朝で欧州から戻って、席の暖まる暇もなく堀口書記官は、明治三十三年二月十八日杉村公使の後を追うてリオ・デ・ジャネイロに上陸、ブラジル移民問題の解決に没頭した。諸種の準備成ってミナス州をふり出しに、サンパウロ州へ実情視察旅行をした。それは明治三十四年即ち千

九百一年であつた

ミナス州首府ベロ・オリゾンテでは異常な歓迎を受けた。到る所バイレ（舞踊会）が行われたが、やゝ紅みをさした堀口書記官のなめらかな顔と、欧羅巴仕込の典雅な態度とは、その巧妙なステップと相まって大評判であつた。日清戦争後であつたが、全く日本というものを知らなかつたミナス人にとって自由自在にフランス語と英語とを操る堀口書記官は驚異を通り越したフエノメナールな存在であつた。

踊りから疲れて椅子に腰を下ろした時、傍の一紳士が堀口書記官の耳元に小さな声で、

『怒つてはいけません。真実のことを白状すると私は日本人というものは、まああの軽業師の様に身体の軽い、不思議な芸をする人間ばかりだと思つていたのです。所が貴君のその自由なフランス語、軽快な踊、而も礼儀を乱さない態度、いや全く恐れ入りました。』

といったそうである。始終黙々として見物していた杉村公使は、こういう話を堀口書記官が説明して 聞かせると『そうか、軽業師は面白い。』

流石に赤銅で鑄造した様な顔に微笑をたゝへたということである。

ミナス政庁に農務局を訪問した時杉村公使は官私両有の

差別をあらわした地図を見せてもらいたいということを要求したが、

『ブラジルは新しい国であるから、未だそういう明細なことを書いたものはない。土地台帳ありません。』

と平然として答へて、何の躊躇する所もない有様であった。

『日本ならば君、自分の土地に二三寸入りこんだって黙っておらん、官有地も私有地も判然境が解らないというのは痛快ですな。流石はブラジルです。』

と杉村公使は感嘆の声をもらしたということである。サンパウロ州でもミナス州より勝るとも劣らない歓迎で、シMIT、ゾーモン、サン・マルチンニヨ等有名な四、五の珈琲園を巡視し、ある農場などには、四、五日間も滞留して、実情調査をした結果、日本移民輸入に関する意見書となり、外務省に提出したのが、あのサンパウロ州珈琲園調査報告書の名文章となったのである。これは漢学に通達した堀口書記官の筆力と、杉村公使の大所高所に着眼して小事に拘泥せざる透徹した心境との結成に依るものである。不幸にして日露戦争勃発し、切角の報告書も観られなかったが、堀口書記官は明治三十八年十二月帰朝、その後を襲うて三浦荒次郎通訳官がペトロポリスの日本公使館に来たのは私達が着伯する数ヶ月前であった。

杉村公使が三浦通訳官を得て、日本移民輸入のために努

力したことは本書を読むものには再説の必要を認めない。不幸にして明治三十九年五月十九日悲劇的の死を遂ぐるに至り、待望した日本移民輸入の実現を見なかったのは心残りであつたろうと思う。その後任となつたのは内田定槌公使である。内田さんはニューヨーク総領事時代に加州の日本移民問題を親しく体験し、日本は北米以外の地に於て移住地を得る外なしという結論に達し、帰朝後もこれを力説したが、小村外務大臣より『君の議論実現をするに好適の地』としてブラジル公使に赴任したのである。

内田公使が着任と同時に直ちに決行したことは、三浦通訳官と同道サンパウロ州珈琲園地帯の巡視であつた。私は『珈琲園生活』中の記述にこれをもらしたが、三浦通訳官から、ブラジルに於ける唯一人の珈琲園労働者として、公使が切に面会を求めているということを通じて来たので、私はチビリッサ駅から一行の臨時列車内に同乗、車内で珈琲園の実状に関し、具さに開陳したことは、今もなお記憶に新らたなる所である。

内田公使は北米加州に於ける日本移民の失敗の最大原因は単独者であつたということを知りブラジルに送るべき日本移民はどうしても、珈琲園主の要求する家族者でなければならぬという点に同感し、外務省の注意を喚起することを怠らなかつた。

茲に一言して置きたいことは、当時サンパウロ州に於け

る移民入国の状態である。千八百九十年の珈琲黄金狂時代は殆んど無限の海外労働者を要求して止まなかったため、州政府が旅費を負担するということとなり盛んなる伊、西、葡等の移民輸入となったのである。然るに伊太利政府が州政府に農場に於ける自国移民の賃銀支払の保証を要求して容れられなかったことから、断然契約移民の渡伯を厳禁するに至った。州政府は止むなく呼寄移民に渡航費を支給するという便法を設けたが、多数の伊国移民を誘致すること能わず、更に手を南欧以外の国民に延ばして見たが、これ又思わしい結果を得ることができなかった。これを表にすると、最も好く当時の状態を察知することができる。

年次	伊	西	葡	其他	合計
自一八八六―至一八九〇	一五三、一八二	九、五八・	二二、〇五二	五、一三六	一八九、九五・
自一八九一―至一八九五	二七四、六四・	五一、四三〇	三九、三七六	一五、九〇八	三八一、三五五
自一八九六―至一九〇〇	一四二、九七一	三二、七四四	四、三二五	〇、七六四	二〇〇、八〇四
自一九〇一―至一九〇六	一七、一七五	三八、九一五	二四、一五七	二四、〇八五	一〇四、三三二
一九〇七	一三、五五六	四、七〇九	六、九〇〇	三、七三五	二八、九〇〇
一九〇八	九、七〇四	九、八九一	一一、八五五	五、八二八	三七、二七八

備考 伊(伊太利) 西(スペイン) 葡(葡萄牙)

伊太利移民の輸入が漸次減少し、西班牙、葡萄牙其他の外国移民の増加していることを観取することができる。而も尚サンパウロ州農園の需給関係を調和する能わず、余儀なく伯国北部諸州の住民を誘致するに至った。(勿論これは北部諸州旱魃の影響も関係している。)即ち、

自一八六一―至一八九〇 四六三人

自一八九一―至一八九五 四八

自一八九六―至一九〇〇 四三

自一九〇一―至一九〇六 一一、〇二五

一九〇七 二、七八一

一九〇八 二、九七

こういう風で伊太利移民旺盛時代には、殆んどいうに足らない程の入州者に過ぎなかった北部諸州の住民が、年々二千三千と州政府の旅費支給によって増加してきたが、彼等の狂暴性とルンペン性とは農場経営を確実なる基礎の上に置く事が出来ない。若し伊太利政府と契約移民の輸入に關し諒解を得ることができなければ、どうしても他の外国人をつれて来るより外ないという風に聖州の傾向がなつていたということも、日本移民輸入を容易ならしめた一大原因であるということを忘れてはいけない。単に日本が好きだといって歓迎されたと思う如き、余りにも小児らしい考へを持つてはいけない。

かくして明治四十一年、愈々日本移民が渡伯することになったのである。

『まあ、ざっとこんなものですな。惜しいことには杉村公使を亡くしたことです。私などは外交官の渡り鳥みたいなもので、閥はなし、手引きはなし、漸くいゝ親分にしたいしんだと思ってよろこんでいたのに、あの通り杉村公使の急死に逢うなんて、まるで夢の様ですなア……』

感慨に堪えないものゝ如く、私を見つめた三浦さんの眼には涙があつた。

九

日本移民が何時来るといふ判然とした日は解らないが、四月だ、五月だと空しい期待と、到着後に於ける結果を案じらるゝ様な念ひとの内に日一日過ぎて行つた。

四月にはいつてから、水野竜氏から、三月中に五人の通訳をシベリア経由で先発させるという様な通信があつた。

五月一日に五人の通訳がベルナング州、レシフェ港から出した書面を受取つた。

『愈々来るぞ』

胸をとどろかして開封して見ると、それには実に吹きだす様なことが書いてあつた。

『前略……実は私共五人は英国から三等に乗って来てい

る。レシフェ港から今手にとる様に音楽の音がひびいてくる。多分私共を歓迎するものであらうと思う。

サントスに着くのは九日の予定であるが、どうぞ非公式に、こつそり君一人で迎いに来てもらいたい 云々」

というのである。いくらブラジルは新らしい国で、日本人を歓迎しているといっても、日本から到着する無名の五人の通訳などに何の関心ある訳がない。

九日の朝サントス港から電報が届いた。五人の通訳から、直ぐ来てくれというのである。私はこの電報を移民収容所長に示して、サントス迄の往復パスと時間とを与へてもらいたいといった。

意外にも所長の機嫌が甚だなぐめならずであつた。

『ススキ暇はやるよ。しかしね。この電報は君に来たプライベートのものだぜ。公のものであつたら勿論一等のパスをやるが、これに対しては気の毒だが二等切符を上げるより外ないね。』

私は不服であつた。しかし聞いて見れば所長のいうことに理屈がある。二等なら貰らうまでもないので、

『解りました。では暇だけ下さい。』

こういつてサントスへ行つた。楽隊で歓迎されることを恐れた、五人の通訳を迎いに行つた一人の私に、移民収容所長は一等のパスを支給することさへ拒むのである。私は心の内でおかしくつてならなかつた。

サントスの停車場は今もその頃と何の変りもない。私は五人の通訳が何処に宿って居るだろうと案じながらプラタホルマを歩いて行くと、居た、居た、何れも黒い背広を着て山高帽子を被っているのが一見エストランジェーロであることが解った。ブラジルに居る私共の眼にはたしかに振るった扮装である

『やあ！』

『いやあ！』

私は珍らしいものでも見る様に五人のエストランジェーロを見守った。

山椒のぴりつとした様な如何にも素早そうな小粒の男が、靴磨台の椅子の上に坐って靴を磨かしていた。加藤順之助君である。のっそりして、眼の細い大男は大野基尚である。右の方の肩のやゝ高目に身体をそらしているのが仁平崇君である。嶺晶は低い鼻柱に金縁の眼鏡をかけて、如何にも柔和な瞳光を見せていた。最も緊張した態度で小柄ではあるが、加藤君とは自ら違った純真な青年らしい頬の赤いのは平野運平君であった。

『君達はどうして電報を農商務局か移民收容所長宛に打たなかったのかね』

私はこんなことをいいながら停車場をぞろぞろ外へ出て行った。

五月でもサントスはむし暑かった。ホテルの名はもう忘

れてしまったが、何でもうすぎたない二階の室で、寝台には南京虫がうようよしていた。楽隊で歓迎さるべく期待してきた五人の通訳の寝顔をうす暗い電燈の光りですかし見た時、首の辺りに襲ってくる南京虫を追っ払いながら、私は誰にも語られない淋しい心をどうすることもできなかった

×

×

×

翌日サンパウロ市に着くと、五人の通訳は、靴を磨き、例の山高帽と黒い背広とをきちんと着て水野竜氏のアプレゼンタソン（紹介状）のはいった大きな状袋を持参して、州農商務局に出頭した。案内役を務むる私は何んだかドン・キホーテの物語りを実演する様な気がして、独りでくすくす笑っていた。

州農商務局ではこの堂々たる五人の通訳を応接間に迎へ入れようとせせず、ホールに立たせたまゝ私一人が土地課長に呼び入れられた。

『君五人の通訳をつれて行って移民收容所長にこの公文を上げてくれたまへ。』

と只それだけである。私はちと気の毒に思ったがどうすることもできなかった。

五人の通訳はサンパウロ州に於ける珈琲園のインテルプレテの地位を全然理解しないのである。通訳なんというものは精々フィスカル（監督）位の所で農場の書記にも及ば

ないのである。水野竜氏から、鈴木は州の通訳官でモーニングに高帽でも被って歩くくんだ。という風に煽動されてきたのである。純な青年の心はうれしいが、それを真に受けて、恰も外交官が信認状でも呈出する様な態度で――州農商務局に出頭した心持ちを思うと、私はいぢらしくなつて人知れず心で泣いた。そうして、

『この調子で日本内地で移民募集をされたなら、一体どうなるだろう。これは油断がならない』

誰にもいわなかったが、私は心ひそかに不安な念をどうすることもできなかった。

一〇

移民収容所に於ける五人の通訳の仕事は、私の手伝という頗る閑散なものであつた。五人の各々余りにも違った性格が目立った。加藤君は説明を半ば聞かない内に『うむ解った』と早合点するが、その実とんでもない間違いを平気でやってのけた。大野君はぼつりぼつり物事を呑み込んであせらないことは加藤君と正反対であつた。仁平君はどうでもよいという風であつたし、嶺君は解っても解らないでも、ぐずぐずしている癖があつた。平野君は物事をはつきりと掴む点に於て鋭い頭を持っていた。

二十日ばかり経ってから、通訳達は今日は二人明日は三人という様に交代に出勤することになった。二度目に借りた室はスペイン人の家庭でドローレスと呼ぶ美しい十七八の娘が居たので、彼等の退屈な生活の賑やかな話題となり、人知れぬ暗闘もあるらしかった。嶺君はこの道にかけては第一の通らしく、ドローレスとの交渉に優れた手腕を見せていた。ドローレスが手を握った。ドローレスが花をくれたと無いこと迄数え上げて馬鹿にされても、あの眼と口元とに妙な皺をよせてへへへ々と薄笑いして肯定した。当時サンパウロ市のエロの街区であつたりベロ・バダロー街（現日本総領事館所在地）の春を売る店に、聖市に着いたその翌夜早くも姿をあらわしたのも嶺君であつた。

加藤君は通訳の地位が日本で聞かされてきたこととは似ても似つかない程下級なので口癖せに移民会社を罵った。水野竜氏を悪魔のごとく痛撃した。いつこくでこうと心で思うと左右を顧みる余裕がないらしく、見様によっては、それ程純であつたともいい得るが、悪罵することに一種の興味を感じる風にも取れた。実際加藤君のこうした話ばかり聞いただけでも笑わずにおられない程痛快味があつた。現在の私であつたならば同感せずにおられなかつたらうが、当時の私は水野さんを徳とし、温情の人として崇敬しておつたので、加藤君の度々のこうした態度が私自身が侮辱された様な気がして黙っていることができなかった。

『加藤君、僕の前で水野さんの悪口することはお断りするぜ』

こういつて憤然としたことを、今日もありありと思い浮べることができる。

私と最も共鳴したのは平野君であつた。二人はよくペンニヤの方へ散歩したものである。キンタ・パラダの下に展開している原野の草の上に寝そべって、秋の夕日を浴びた都市を指さしながら、

『サンパウロは大きくなるぞ』

『この辺を少し買う金があつたらね。』

『何か一つ大きなことをやって見たいな』

『ブラジルは土地だ。土にしたしむことを忘れてはいけない。』

こんな話の終りに私は何時も四辺に咲いている名も知れない草花をちぎり取っては投げ、投げては又ちぎり取つた。平野君は限らない青春の夢を追うが如く、じいっと私を見つめてだまっていた。

カンタレーラの連山が青黒い色にくれて、ピラチニングの溪谷の所々に煉瓦焼工場の灯がちらちらする頃は二人は何か惜しい落とし物でもした様に楽しい空想をふり捨てゝ立ち上るのであつた。

五人の監督が着いた翌月、即ち明治四十一年六月十八日

愈々待ちに待った笠戸丸が、七百九十二人の移民を乗せてサントス港に着いたのである。大野、二平両君の夫人が乗船しているので港頭に出迎へたいといったが、移民収容所長は必要を認めないといって許さず、私一人サントスへ出張することになった。

その時出迎えに行った同勢は、公使館から三浦通訳官、皇国植民会社代表としてモンテロー、藤崎商店員後藤武夫、移民収容所から派遣された私と四人であつた。サントス港の岸壁に立った時は午後七時を過ぎていたので、真暗な江海の上に、幾十となき黄色な灯をうつしている船が二つ三つ、浮いていたが、どれが笠戸丸であるか解らなかつた。七月の祭時が近ずいたので、ドツンドツンという火花、ふわりふわりと登って行く灯した風船玉、静かな海の上にはこれ等の美しい光景がうつって夢の様に美しかった。私共を乗せた舢舨舟が笠戸丸に着いて梯子を登って行く税関の役人は上船を許さなかつた。

三浦さんは公使館員だという名刺を出し、私は州移民収容所長から、サントス移民収容所出張所に宛てた公信を示して、漸く船内に入ることを許るされた。モンテローと後藤君は三浦さんの斡旋で、まもなく上船したということを聞いた。

船内はごった返へしていた。夢見ていた珈琲黄金の国、移民会社の宣伝で十年間に幾万という金儲けのできる国、

五十幾日の航海をして、漸く着いた港、船の上から見るサントス港の壯観は、未だ築港設備の完成されていない日本の港から来た同胞諸君を驚かすには充分であつた。

一直線の長い長い繫船岸、そこには珈琲を積む外国汽船で一杯になっていた。余り高い建築物はないが、無数の灯が前面にちらちらとして、はつきりと掴むことのできないが、反つて彼等の懇情と憧憬のこゝろをそゝつた。

船内に同郷同窓の親友、高桑次平君が自由渡航者として乗っていた。それは私に取つて限らない喜びであつた。高桑君以外に自由渡航者として、

香山六郎

矢崎節夫

鞍谷半三郎夫妻

片岡夫妻

が乗っていた。皇国植民会社長水野竜氏、サンパウロ市代理人たるべき上塚周平君も同船していたことは勿論である。

上陸の手續は夜の内に無事終了し、翌朝港頭に連結された汽車で、移民諸君は嬉々としてサンパウロ市へ出発した。

移民収容所に於ける各県人の寢室割当てについては、例の日本式を發揮して苦情百発した。特に宮城県人目黒静君の如きはその旗頭であつた。

移民収容所は日本移民待遇については全能力を挙げて歓迎したといってよい。嘗て使用した事のない浴室に湯を湧かして「日本人はお湯が好きだから」と欧州式に一人一回で湯水を捨てて入浴せしめた。市街を見物させよというところで厭がる五人の通訳に案内させて外出させた。黒い喪服の様な西洋服を着た女が、赤い花をくっ付けた扁平な麦藁帽子を被って芸妓というオペラに出て来る女のちよくちよくして歩行振りについてくる一隊の同胞女人諸君には流石の通訳諸君も当惑して、僅かにブラス区を一巡して、茲はサンパウロ市だと称し、市のセンターである三角区（トリアングロ）に達したものはなかったというのも笑話の一つであつた。

配耕さるべき農場は各受持ちの通訳を、前以つて特派して視察させて置いたので、万事好都合に運んだが、困った問題は移民会社が神戸を出発する折りに、預った金を返へすことができないため、紛擾をかもしたことである。

内情を聞いて見ると、移民会社が移民出国について外務省に納入すべき保証金を作ることがどうしてもできない。そこで万策つきて、ブラジルに着いてから渡すという口実の下に八百人の持っている移民の金をかき集めて漸く義務を完了したが、二ヶ月の航海中に金策する様になっていた（現代議士土井権太氏等）のが、当てごとく何かは先方からはずれるといった諺の通り日本からの送金がないのである。

る。沖縄県人などは持参金の殆んど全部を預けていたので特にやかましく苦情を申し立てた。

その方をどうにかなだめすかして耕地入りを承諾させると今度は通訳諸君に苦情が起った。それは五人の通訳が日本を出発する折りには、ブラジルに行ったなら羅紗の服を着て懷手でもしておればよい、君等は通訳官だという様に煽動で上げられて来たが、さて耕地を視察して見るとなかなかそんな気楽なものではない。第一木綿服の必要であるが、これを買う金がない。その支度金を前借することができなければ農場にははいらんというのである。如何にも道理のある要求であるが、皇国移民会社長水野竜氏は大きなホテルには宿っているが、矢張り金がないのである。そこで止むなく水野さんは、私が州政府から受取るべき五〇ポンドの旅費を以って五人の通訳諸君に分配し、僅かに事なきを得た。こういう訳で私は当然私のものであるべきこの五〇ポンドを手にとつて見る事ができなかったがどうせ私には必要な金ではなし、日本移民発展のためになることなら、この上のないことであると、念頭にも置かなかった。

配耕された農場と通訳とを挙げる

農場名	駅名	通訳
ゾーモン	ゾモーン	加藤 順之助
カナン	カナン	嶺 晶

フロレスタ

イツー

大野 基尚

ソブラード

トレーゼ・デ・マイオ

仁平 崇

グワツタパラ

グワツタパラ

平野 運平

サン・マルチンニヨ

サン・マルチンニヨ

同

こういう風であつたが、平野運平氏一人で二農場を掛持ちすることは不可能だということになり、サン・マルチンニヨ農場へは配耕後二十日位の後、私が行かなければならないことになったのである。移民収容所を出ることについて私は可成りなやんた。どうせ再び農場にはいるならば、チビリツサに配耕させて、アンナの居るシュンボラズに行きたかつた。しかし日本移民発展のためだという犠牲の精神は私共のあらゆる不平をしずめる一大重石であつた。行け、行け、どうせ日本移民の下敷になるんだという心は、恐らく五人の通訳も皆同じであつたろうと確信する

―― 終 ――

あとがき

鈴木南樹翁の誕生九十年を記念して、彼の著書『伯国移民の草分』の再版が計画されたのは今年の三月である。

幸い、南樹翁と昵懇の人々をはじめ、十数名の有志が“発起人”となってその再版計画が実現されることになった。

特に本書の再版の目的とその意義をよく理解されて購入を予約された方々の好意は感謝にたえない。

『伯国移民の草分』はブラジルの日本移民の創世記』であるとともにブラジルのコーヒー産業の叙事詩でもある。またブラジルのコーヒー園の実情が具さに叙述されている点では本書が唯一といって過言でない。なぜかなれば、黄金期コーヒー園の状況に関するかぎり、これほど精細に記述された文献は他にないからである。

しかも著者鈴木南樹翁が齡九十にして健在であることは日系コロニアの誇りであり、感謝であらねばならない。本書の再版にあたって、あえて文体や文字を改めることなく、一九三三年に出版された原文のままであることをお伝えしたい。

この書の再版のために直接または間接にご協力下さった方々に対し厚くお礼を申上げるものである。

一九六七年十月

鈴木南樹 著書再版 発起人

昭和四二年十月廿日 印刷

昭和四二年十月三十日発行

再 版 非売品

日本移民の草分

著 者 鈴木貞次郎

サンパウロ市